

# 牧港貝塚・真久原遺跡

—県道153号線バイパス工事に伴なう発掘調査報告書—

1985

沖縄県教育委員会





卷頭グラビア 牧港貝塚・真久原遺跡周辺の航空写真 (A)・牧港貝塚 (B)・真久原遺跡  
(国土地理院撮影)





牧港貝塚近影（第Ⅰ地区）



卷頭グラビア 牧港貝塚出土遺物（第Ⅰ地区）（ゴホウラ製貝輪・磨製石鎌・弥生系土器）





真久原遺跡



巻頭グラビア

真久原遺跡出土遺物



## 序

本報告書は県道153号建設工事に伴う埋蔵文化財「牧港貝塚」、「真久原遺跡」緊急発掘調査の内容を記録したものであります。

近年の諸開発、とりわけ道路関係の工事は急速に増加してきており、これに伴い埋蔵文化財に関する協議、調整も多くなってきております。牧港貝塚、真久原遺跡は、国道330号（浦添バイパス）と国道58号とを結ぶ幹線として新しく計画された県道153号の建設計画の範囲内に入ることとなり、県土木建築部の分任により、県教育委員会（文化課）が発掘調査を実施したものです。

牧港貝塚は沖縄貝塚時代後期の岩蔭遺跡で、河川と海を前面にひかえたその立地もあわせて土器、石器、貝器等の出土品は、原始沖縄の社会と文化の様相をよく伝えております。また、同一水系の上流の丘の上に位置する真久原遺跡は、グスク時代の遺跡で、近くの浦添城や、伊祖城などとの関わりに関心がもたれております。

当委員会としても、このような文化遺産を可能な限り、歴史的環境のひとつとして現地に保存すべく検討したのでありますが、道路構造と地形の関係上その調整がきわめて困難であり、やむを得ず記録保存の措置をとることとなつた次第であります。

本報告書が多方面に活用され、学術研究および文化財愛護思想の高揚ならびに、近隣における諸開発計画の協議調整等に資することを期待いたします。

昭和60年3月

沖縄県教育委員会

教育長 米村幸政

## 例　　言

1. 本書は県道153号線伊祖一牧港地内の新設バイパス工事に伴なう牧港貝塚・真久原遺跡の調査成果記録である。
2. 本調査は県土木部からの分任予算を受けて県教育庁文化課が実施した。
3. 本書掲載の牧港小橋の絵図写真は沖縄県立博物館で所蔵している『日本風景版画』琉球之部より一部転載撮影の許可を得た。
4. 本書掲載の「牧港の橋と提道」の写真は『ペルリ提督日本遠征記』より一部複写による。撮影は県教育庁文化課主任専門員当真嗣一氏による。
5. 牧港貝塚・真久原遺跡の周辺遺跡分布図は浦添市教育委員会発行の1/10,000の文化財地図によった。
6. 砂鉄の化学分析は新日鉄八幡製鉄所の大澤正己氏にお願いした。合わせて大澤氏から化学分析結果とともに玉稿をいただいた。
7. 図版5中の砂鉄の顕微鏡撮影及びサンプリング資料の比較検討は、沖縄県工業試験場で行なった。
8. 1/5,000の国土基本図は国土地理院発行によった。
9. 1/10,000の地形図は1945年に米軍が作成した資料に基づいた。
10. 卷頭の航空写真は、沖縄きもと製作のOK-84-1×C10B-5によった。
11. 牧港貝塚・真久原遺跡の地形図は沖縄県中部土木事務所所有のものをもとに、その中にトレントを設定して記入した。但しトレントラインを明瞭にする為に、道路予定の作図や旧家屋施設等の一部については白ぬきにして修正してあることを御了承願いたい。
12. 本書の執筆・編集については、牧港貝塚を大城慧が、真久原遺跡を金城亀信が担当した。
13. 牧港貝塚の実測図、拓影図、トレイスは城間千栄子、比嘉優子・城間光子・知念千恵子・仲持政範・上地千賀子・盛本明子・高良三千代・島袋聖子・大城ますみの各氏の手を煩わした。また遺物の整理にあたっては当真須賀子・瑞慶覧尚美・渡慶次純子・平良利枝の各氏の協力を得た。また、真久原遺跡については後項に一括した。
14. 牧港貝塚・真久原遺跡で出土した石器等の石質鑑定は県立教育センターの大城逸朗氏による。

# 目 次

## 本文 目 次

(牧 港 貝 塚)

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯	2
第Ⅱ章 調査の経過	4
第Ⅲ章 遺跡の立地と自然的環境	6
第Ⅳ章 牧港川周辺の地質・地形	7
第Ⅴ章 歴史的環境と周辺遺跡の分布	8
第Ⅵ章 遺跡の概要	10
1 第Ⅰ地区の概要と層序	10
2 第Ⅱ地区の概要と層序	15
第Ⅶ章 出土遺物と遺構	20
遺構	20
第Ⅰ地区	23
出土遺物	23
①鉄釘・キセルの雁首・滑石	23
②土器	24
③石器	31
④貝製品	37
⑤砂鉄	49
⑥自然遺物	51
第Ⅱ地区	55
出土遺物	55
①土器	55
②船載陶磁器	58
③沖縄製陶器	65
④摺鉢	66
⑤陶製品	69
イ 陶製・土製キセルの雁首	69
ロ 円板状製品	69
⑥貝製品	70

⑦鉄 淚.....	72
⑧銭.....	73
⑨青銅製品.....	74
イ、キセル.....	74
ロ、カンザシ.....	74
⑩自然遺物.....	75
第Ⅳ章 調査の成果と課題.....	76

(真久原 遺跡)

第Ⅰ章 遺跡の位置と歴史的環境.....	129
第Ⅱ章 調査の経過.....	131
第Ⅲ章 遺跡の概要.....	133
1 層序.....	133
2 遺構と出土遺物.....	135
(イ) 土器.....	135
(ロ) 陶磁器.....	136
(ハ) 須恵器.....	139
(ニ) 瓦.....	141
(ホ) 石器.....	145
(ヘ) 鉄製品.....	148
(ト) 滑石製品.....	148
(ナ) 貝製品.....	149
(リ) 炭化物.....	149
(ヌ) 自然遺物.....	149
第Ⅳ章 おわりに.....	171
第Ⅴ章 真久原遺跡周辺に分布する古墓群の概要.....	173

付 編 「沖縄・牧港貝塚・渡口洞穴遺跡採取砂鉄および具志原貝塚出土赤鉄鉱の金属学的  
調査」 大澤正己

## 牧港貝塚編

### 挿 図 目 次

第1図	浦添市の位置図	1	第25図	有孔貝製品実測図（ハイガイ・メンガイ・サルボウ製品）	39
第2図	浦添市の境界図	2	第26図	有孔貝製品実測図（シャコガイ）	40
第3図	県道153号線予定位置図	3	第27図	有孔貝製品実測図（シャコガイ）	41
第4図	牧港貝塚グリット設定図	5	第28図	貝匙実測図	46
第5図	牧港貝塚の位置図	6	第29図	貝刃模式図	46
第6図	第I地区洞穴の横断面図	10	第30図	貝刃実測図	47
第7図	第I地区洞穴縦断面図	11	第31図	土器口縁部実測及び拓影図	56
第8図	第I地区層図	12	第32図	土器底部実測図	57
第9図	洞穴内及び前庭部の遺物出土状況平 図（折り込み）	13	第33図	磁器実測図（青磁・白磁）	59
第10図	第II地区壁面図（折り込み）	17	第34図	陶器実測図	60
第11図	第II地区の発掘平面図	19	第35図	染付実測図	62
第12図	石灰窓跡の平面図	20	第36図	染付実測図	63
第13図	第I地区前庭部の石積遺構平面図（折 り込み）	21	第37図	染付実測図（伊万里系）	64
第14図	鉄釘・陶製の雁首・滑石の実測図	23	第38図	沖縄製陶器実測図	65
第15図	土器口縁部実測及び拓影図	25	第39図	摺鉢口縁部実測及び拓影図	67
第16図	土器口縁部及び拓影図	27	第40図	摺鉢底部実測図及び拓影図	68
第17図	土器胴部実測図及び拓影図	28	第41図	陶製・土製キセル実測図	69
第18図	土器底部実測図	29	第42図	円板状製品実測図	70
第19図	磨製石鎌実測図	31	第43図	有孔貝製品実測図（スイジガイ製利 器・メンガイ・シャコガイ）	71
第20図	石斧実測図	32	第44図	鉄拓影図	73
第21図	磨石実測図	33	第45図	青銅製品実測図（キセル・カンザシ）	74
第22図	砥石・敲石実測図	34	第46図	牧港貝塚貝類組成図	75
第23図	石皿・用途不明石製品実測図	35			
第24図	貝製品実測図（貝輪・貝札・タカラガ イ製品）	38			

## 表 目 次

表 1 石器観察一覧	.....	36	表 7 自然遺物集計一覧	.....	52
表 2 二枚貝有孔貝製品一覧	.....	42	表 8 自然遺物集計一覧	.....	53
表 3 二枚貝有孔貝製品一覧	.....	43	表 9 自然遺物集計一覧	.....	54
表 4 二枚貝有孔貝製品一覧	.....	44	表 10 円板状製品一覧	.....	69
表 5 二枚貝有孔貝製品一覧	.....	45	表 11 銭一覧	.....	73
表 6 貝刀一覧	.....	48			

## 図 版 目 次

図版 1、牧港 小杉木醒筆 大正 7 年(『日本風景版画』 琉球之部より 沖縄県立博物館蔵) ..... 9		下段、左、土器口縁部(表)(第 I 地区) 右、同左(裏) ..... 83
図版 2、「牧港の橋と提道」『ペルリ提督日本遠征記』 より複写撮影 ..... 9		図版 14、上、土器口縁部(表)(第 I 地区) 下、同 上(裏) ..... 84
図版 3、砂鉄の外観写真 ..... 49		図版 15、上、土器口縁部(表)(第 I 地区) 下、同 上(裏) ..... 85
図版 4、磁石による砂鉄の吸引状況 ..... 49		図版 16、上、土器胴部(表)(第 I 地区) 下、同 上(裏) ..... 86
図版 5、顕微鏡撮影による砂鉄の粒子 ..... 50		図版 17、上、土器胴部(表)(第 I 地区) 下、同 上(裏) ..... 87
図版 6、鉄 淚 ..... 72		図版 18、上、土器(弥生系)(表)(第 I 地区) 下、同 上(裏) ..... 88
図版 7、遺跡の全景(北東側から望む、左側岩丘 I 地区、右側岩丘 II 地区) ..... 77		図版 19、上、土器底部(表)(第 I 地区) 下、同 上(裏) ..... 89
図版 8、上、遺跡の遠景(第 I 地区) 北東側から望 む		図版 20、石器(石斧)(第 I 地区) ..... 90
下、遺跡の近景(第 I 地区) 東側から望む 78		図版 21、石器(磨石・砥石・敲石)(第 I 地区) ..... 91
図版 9、上、発掘作業状況(第 I 地区)		図版 22、石器(石皿・用途不明石製品)(第 I 地区) ..... 92
下、発掘作業状況(第 I 地区) ..... 79		図版 23、上、貝製品(貝輪・貝札・タカラガイ製品) (第 I 地区)
図版 10、上、発掘作業状況(第 I 地区)		下、貝製品(貝 刀)(第 I 地区) ..... 93
下、発掘作業状況(第 I 地区) ..... 80		図版 24、上、有孔貝製品(表)(サルボウ・ハイガイ メンガイ)(第 I 地区)
図版 11、上、遺物の出土状況(第 I 地区)		下、同 上(裏) ..... 94
下、遺物の出土状況(第 I 地区) ..... 81		
図版 12、上、土器口縁部(表)(第 I 地区)		
下、同 上(裏)(第 I 地区) ..... 82		
図版 13、上段、左、土器口縁部(表)(第 I 地区)		
右、同左(裏) ..... 83		

図版25、上、有孔貝製品（表）（シャコガイ）（第Ⅰ地区）	95	図版40、上、染付（裏）（第Ⅱ地区）	
下、同 上（裏）		下、同 上（表）	110
図版26、上、有孔貝製品（表）（シャコガイ）（第Ⅰ地区）		図版41、上、染付（伊万里）（裏・表）（第Ⅱ地区）	
下、同 上（裏）	96	下、染付（伊万里）（第Ⅱ地区）	111
図版27、上、貝匙（表・裏）（第Ⅰ地区）		図版42、上、沖縄製陶器（裏）（第Ⅱ地区）	
下、滑石・陶製の雁首・鉄釘（第Ⅰ地区）	97	下、同 上（表）	112
図版28、上、遺跡の全景（北東側より）（第Ⅱ地区）		図版43、上、沖縄製陶器（裏）（第Ⅱ地区）	
下、遺跡の近景（東側より）（第Ⅱ地区）	98	下、同 上（表）	113
図版29、上、土器口縁部（表）（第Ⅱ地区）		図版44、上、摺鉢（裏）（第Ⅱ地区）	
下、同 上（裏）	99	下、同 上（表）	114
図版30、上、土器口縁部（表）（第Ⅱ地区）		図版45、上、摺鉢（裏）（第Ⅱ地区）	
下、同 上（裏）	100	下、同 上（表）	115
図版31、上、土器底部（表）（第Ⅱ地区）		図版46、上、摺鉢（裏）（第Ⅱ地区）	
下、同 上（裏）	101	下、同 上（表）	116
図版32、上、土器底部（表）（第Ⅱ地区）		図版47、上、摺鉢（裏）（第Ⅱ地区）	
下、土器底部（裏）（第Ⅱ地区）	102	下、同 上（表）	117
図版33、上、磁器口縁部（表）（第Ⅱ地区）		図版48、上、陶・土製キセルの雁首（第Ⅱ地区）	
下、同 上（裏）	103	下、円板状製品（第Ⅱ地区）	118
図版34、上、磁器（裏・表）（第Ⅱ地区）		図版49、上、スイジガイ製利器（表・裏）（第Ⅱ地区）	
下、磁器底部、（表・裏）（第Ⅱ地区）	104	下、有孔貝製品（シャコガイ・メンガイ、表裏）（第Ⅱ地区）	119
図版35、上、磁器皿、（裏）（第Ⅱ地区）		図版50、上、鉄（表・裏）（第Ⅱ地区）	
下、同 上（表）	105	下、左、青銅品（キセル・カンザシ）、右、鉄滓（第Ⅱ地区）	120
図版36、上、磁器（白磁）（裏）（第Ⅱ地区）		図版51、自然遺物（第Ⅰ・Ⅱ地区）	121
下、同 上（表）	106	図版52、自然遺物（第Ⅰ・Ⅱ地区）	122
図版37、上、陶器胸部（表）（第Ⅱ地区）		図版53、自然遺物（第Ⅰ・Ⅱ地区）	123
下、同 上（裏）	107	図版54、自然遺物（第Ⅰ・Ⅱ地区）	124
図版38、上、染付（裏）（第Ⅱ地区）		図版55、自然遺物（第Ⅰ・Ⅱ地区）	125
下、同 上（表）	108	図版56、自然遺物（第Ⅰ・Ⅱ地区）	126
図版39、上、染付（裏）（第Ⅱ地区）			
下、同 上（表）	109		

## 真久原遺跡編

### 挿 図 目 次

第1図 真久原遺跡周辺の遺跡分布図	128	第16図 須恵器実測図及び拓影図	160
第2図 真久原遺跡位置図	130	第17図 瓦実測図及び拓影図	162
第3図 真久原遺跡トレンチ設定図	132	第18図 瓦実測図及び拓影図	164
第4図 真久原遺跡の層序	134	第19図 石器	166
第5図 柱穴群検出状況	137	第20図 鉄製品	168
第6図 柱穴群平面図及び断面図	138	第21図 滑石製品	168
第7図 櫛列推定図	149	第22図 貝製品	168
第8図 炉址平面図及び断面図	141	第23図 真久原遺跡貝類組成	169
第9図 チャート片集中地区位置図	141	第24図 真久原遺跡櫛列推定図	172
第10図 チャート片及び青磁・土器片分布状況図	142	第25図 風葬址前庭部崖下採集の青磁碗	173
第11図 土器実測図及び拓影図	146	第26図 新設県道153号線に係る古墓群の分布図	174
第12図 土器実測図及び拓影図	149	第27図 破風墓（平面図・断面図）	175
第13図 土器実測図及び拓影図	152	第28図 破風墓（正面図・墓内平面図）	177
第14図 青磁実測図	156	第29図 第1群3号墓	178
第15図 青磁・白磁・天目茶碗・不明陶器・染付・陶器実測図	158	第30図 第1群5号墓	179
		第31図 1945年当時の地形図(牧港・伊祖周辺)	180

### 表 目 次

第1表 柱穴上場の長軸・短軸比較と下場の短軸 平均一覧表	135	第3表 石材片集計表	167
第2表 柱穴群のサイズ及び出土遺物一覧表	136	第4表 真久原遺跡貝類出土状況	170

### 図 版 目 次

図版1 炭化物	129	図版6 土器	186
図版2 真久原遺跡遠景(上段)・近景(下段)	182	図版7 土器底部	187
図版3 発掘調査状況(上段)・接合チャート片 (下段)	184	図版8 青磁	188
図版4 チャート片	184	図版9 青磁・白磁・天目茶碗・不明陶器・染 付・陶器	189
図版5 土器	185	図版10 須恵器(上段表)・(下段裏)	190

図版11 瓦	191
図版12 瓦	191
図版13 石器（上段）・鉄製品（中段左側）・貝 製品（中段右側）・滑石製品（下段）	193
図版14 古墓群（上段・中段左側・下段左側）・遺跡 遠景（中段右側・下段右側）	194
図版15 風葬址	196
図版16 風葬址・古墓・厨子甕	197
図版17 破風墓正面（上段）・側面（中段） 部（下段）	198
図版18 破風墓側面及び石積みの状況（上段・中 段上・下段）・検出された漆喰（中段 下）	199
図版19 風葬址前庭部崖下採集の青磁碗（上段左 側）・調査状況（上段右側）	200



牧 港 貝 塚 編





0 10 20km

第1図 浦添市の位置図

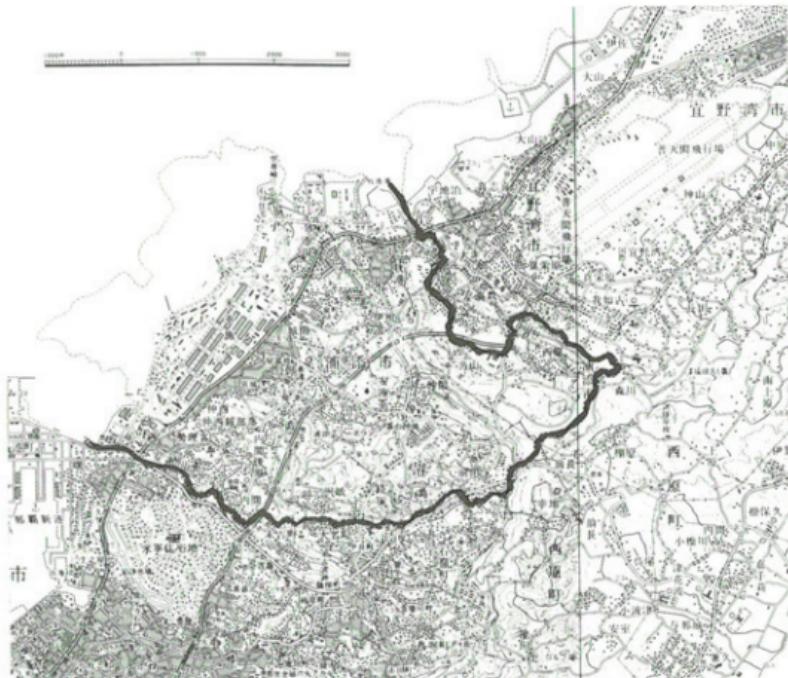
## 第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

急速に過密都市化した浦添市は、その位置する地形、地理的条件から好環境に恵まれた地域の一つとなっており、特に那覇市とは行政区画の線引きはあるものの交通路、家屋建築物の空白地帯が極端に減少している傾向にあり、相密接した距離にある。

南北部地域に抜ける為の通過ポイントにもなっており、交通量の激増した今は、この地域の混雑状況には著しいものがあり、その為に道路整備計画が早くから課題として残されている地域でもあるとされている。

現在、浦添市を通過していく道路網は国道58号線を始めとして、那覇市首里から宜野湾市真栄原方面に抜ける県道5号線、あるいは、浦添市のほぼ中央を南北に徒走しているバイパスの国道330号線等のルートからの道路網となっている。

このような現況の中に交通緩和、交通網体系の整備という観点から新たに国道330号線と国道58号線への連絡道として、浦添市伊祖地内から牧港地内へ県道153号線のバイパスの建設工事計画が打ち出された。



第2図 浦添市の境界図

ところがそのルート内には、1979年（昭和54年）に実施された浦添市内分布調査（浦添市教育委員会）によって、牧港貝塚と真久原遺跡の二ヶ所に埋蔵文化財が確認されており、道路計画と文化財保存の取り扱いが注目された。遺跡は道路計画の両端に完全に包括される形となり発掘調査の対象として県土木事務所からの話し合いが出されたが、工事計画の進捗状況がないままに調査についての具体的な予算措置のメドにおいても中途断ち切れの状況がつづいた。文化財サイドでも工事計画の実質的な状況がつかめず、それ以後この両遺跡については、調査の見通しが立てられないまま4年間空白の状態となった。



第3図 県道153号線予定位置図

しかしながら1982年（昭和57年）になって、再び具体的な工事着手計画が県土木事務所から打ち出された。その時点においても、両遺跡ともに重要遺跡の一つであり、遺跡の立地形態や採集される資料から浦添市内においても、貴重な遺跡として注目されていたことから、その保存方の話し合いで打ち出されたが、ルートの線形変更が困難であるという結果に終ってしまった。同時に両遺跡の調査費が計上され、発掘調査の準備が進められることとなった。

1983年（昭和58年）には両遺跡が消滅することをかんがみて、やむなく緊急調査に入らざるを得なくなった。

調査は県土木部からの分任予算により、1983年11月～1984年2月までの約4ヶ月間に亘る長期のものとなった。調査期間中に出土した資料は、厖大な数量にのぼり貴重な成果が得られた。

## 第Ⅱ章 調査の経過

### 調査の方法

調査区は1933年（昭和8年）に多和田真淳氏によって発見された洞穴部を中心に発掘調査を進める計画であったが、北側に残された岩蔭部分からも遺物が断片的に採集されたことから、岩蔭部分をも含めた形の調査となった。予想した以上に草木や蒿が岩丘、岩蔭とも覆っていた為草木伐採を進めながら遺物の広がる状況を確認していった。

洞穴部と岩蔭の部分は採集される遺物からも明らかに時期が異なる地点であることが確認され、調査の進行と合わせて、遺跡を取り扱う上で便宜的に洞穴部を第Ⅰ地区、岩蔭部を第Ⅱ地区として調査区の設定をした。すなわち洞穴部は沖縄貝塚時代後期の貝塚として形成されており、岩蔭部は沖縄グスク時代の遺跡が存在していた可能性を想定させうる状況であった。

トレンチの設定は道路計画のセンターラインNo.86～No.85を結ぶラインを軸として、東側の川辺りから、洞穴方向の西側へ順にA、B、C、D…とし、Ⅰ地区の岩丘南端から北側のⅡ地区的岩蔭方向へ1、2、3と番号を打った。西南隅をA-1、A-2として1グリット $2 \times 2$ mを1区画として方眼を組んでいた（第4図）。

洞穴部の調査は、冬場の調査であったことも手伝ってか、日照時間が短く昼間でも薄暗い状態であり、雨の場合などは極度に洞内の照度が落ちた。その結果、洞内への発電気の導入をはかり照明器具を使用しながらの調査となつた。

またⅡ地区においては、岩丘の後背部の表面踏査を並行しながら岩蔭下の発掘を進めていった。その結果は岩蔭下のみにとどまりすでに客土されている状態であった。

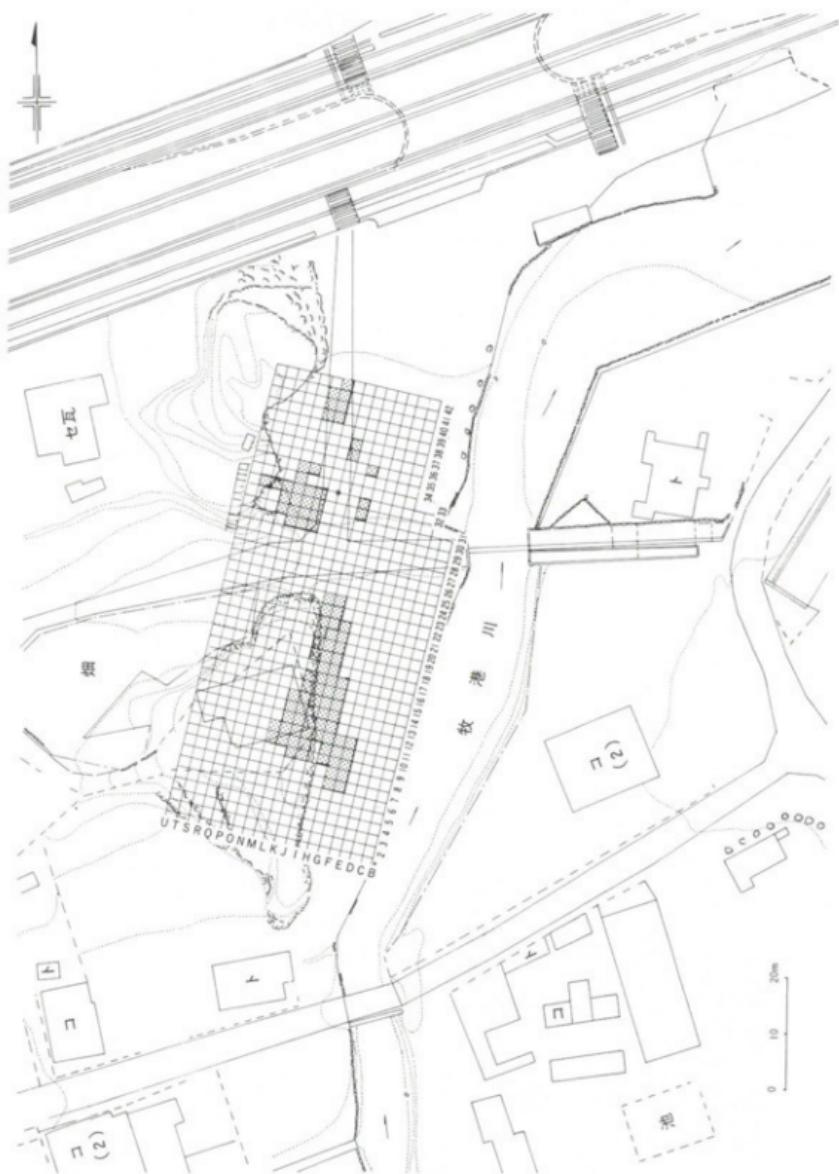
Ⅰ、Ⅱ地区ともに、旧河川べりが厚く客土されており、客土の厚さと川床の状況や旧川辺り沿いの状況を把握する為にユンボによる掘削法で洞穴の前庭部及び岩蔭部の試掘を行なった。Ⅱ地区は岩陰墓として利用された跡があり、工事計画が策定された時点から、墓地の移転作業の公告が出され、全てが移転撤出されたと思われたが、実質調査中にも人骨片が、かなりの量出土してきたことから発掘に入る前に一部人骨の集収まで行なうこととなつた。

### 発掘調査人員

発掘調査の作業員は、サトウキビの収穫時期にもかち合ったことから、地元からの雇用が最も多く、真久原遺跡で調査に参加した方々と宜野湾市の方からのメンバーで調査に入った。調査参加者は次のとおりである。（敬称略、順不同）。

銘苅裕幸、銘苅正仁、宮城盛吉、親富祖永仁、銘苅ヨシコ、銘苅ツル、親富祖昌子、奥屋トヨ、比嘉キヨ、奥屋信子、新屋初子、奥屋千代、奥屋文子、以上13名。

第4図 牧港貝塚グリット設定図



### 第Ⅲ章 遺跡の立地と自然的環境

牧港貝塚は1933年(昭和8年)に、当時、旧コザ市美東小学校の教職につかれておりました多和田真淳氏によって発見された貝塚である。沖縄県下で発見された貝塚の中においても、昭和初期の古くから発見された貝塚の一つとしてあげることが出来る。

「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」(『文化財要覧1956年版』)に中において貝塚の概要説明が加えられるとともに、以後、周知の遺跡として注目されることになる。

1933年当時、多和田真淳氏が発見の端緒を開いた時点での遺跡立地の状況及び環境からすれば、今日までおかれている状況は極端な変容ぶりと思われるが、幸いにして洞穴の前部においては、まだわずかに旧景の状態を保っているということであった。(多和田先生からの現場での説明から当時の発見状況を把握することが出来た。

しかしながら、牧港川は戦後大きく変貌し特に貝塚が立地する下流域周縁においては、河川の埋め立てが行なわれ、それに付随するかたちで、宅地の建設などが急増し旧来の自然環境も大きく変転したといえよう。

遺跡の立地するところは、河川の南西側縁辺部に沿ってほぼ南北に琉球石灰岩の丘陵の縁端部がわずかに残った状態で、海拔5~6m前後の岩丘が崖屏風を形づくっている。この岩丘の下端部に海蝕によって形成された半洞穴が残されており、貝塚の中心部をなしている。また河口部付近にかけてノッチの岩蔭が点在する。さらに河口部から外海へ出る途中には、珊瑚礁の形成や長年の海底砂泥の堆積物によって、波静かな良好な入江が形成されていたことも、からうじて残ったわずかな自然地形の環境からも読みとれる。



第5図 牧港貝塚の位置図

## 第Ⅳ章 牧港川周辺の地質・地形

牧港川は、浦添市の北東縁辺地域を凡そ東南から北東へ貫流する第2級河川である。河川の変化は上流域からの侵蝕や中流～下流への堆積作用によって著しい変遷をとげていると考えられる。沖縄県企画調整部から発行された地形分類図、那覇5万分の1（昭和50年3月）の調査成果にもとづいてみると、変化に富んだ地形を形成していることがわかる。

全体的に河川の幅は狭小ながら、距離が長く西原の幸地付近にまで延びて水源をもつ。

牧港周辺から伊祖、仲間あたりまでの地形をたどると、中流域においては古い海岸段丘が発達している。伊祖付近においてくると標高50m前後の石灰岩の台地が広がり、仲間、当山地域でさらに高い段丘が形成されている。この一帯は「傾斜角35°以上<sup>註1</sup>の急斜面地が続き谷あい地を作っている。逆に下流域では河川の冲積作用によって出来た平坦地である谷底平野が展開しており河口部までたどると「海岸平野と呼ばれ、海退現象<sup>註2</sup>によって陸化した平坦地」が出来ている状況であるとされている。

一方地質の方からは、牧港川は「シルト質の粘土質<sup>註3</sup>や石灰質」からの堆積物を含む地域となっている。河川の西側に隣接して現存する石灰岩を見ると、「黄褐色をもち極端に<sup>註4</sup>固質したものではなく、多孔質で透水性のある石灰質砂である」と報告されている。

洞穴の内部でも落盤石が見られたが、雨水からのクラックの入りやすい風化性のある石灰質であると考えられる。今調査の中でも洞穴の前庭部やあるいは岩陰部の上部に黄色で砂粒状の風化土壌の堆積が見られた。

加えて、今調査の中で、旧河辺の土壌の堆積状況を見るために掘削してみたが、一部黄砂層の堆積を確認したが、予想以上に産業廃棄物やヘドロ等の二次的堆積物が厚く、最下部までの状況がつかめなかった。但し下流域の一ヶ所においては、海浜砂泥の堆積層がヘドロ堆積層下に確認された。（排水管工事の立ち合いの際の見解、掘削抗約5m）。

しかしながら河口部の外側は、過密化した土地の新たな拡大や社会経済の要求に迫られて、海岸線への新たな埋立てによる人工地形が出来上がり、地形の変遷が急速化している現象も出ている。

註1. 2 「地形分類図（沖縄本島・主要離島）」沖縄県企画調整部 昭和50年3月

註3. 4 「沖縄県土地利用基本計画－沖縄の自然環境－」財團法人 政策科学研究所1973年3月31日

## 第V章 歴史的環境と周辺遺跡の分布

南島風土記によれば、牧港は『浦添・宜野湾の村境牧港川の川口南岸に在る小邑で、江を隔てて、宜野湾村の宇地泊と相望む、牧港川はヒヤー川・シリー川の汎稱で共に小流で、その注ぐ處を牧港と稱する。伝々』と記録されており、古く伝説の中にも「マチナト」の由来などの記事があり、沖縄の歴史の流れの中においても、しばしば歴史の舞台に登場してきた重要な地域の一つとして位置づけされていたことがわかる。

ある意味では牧港の河川の発達が生み出した良港の存在が、結果的に日本本土はもとより中国、南方諸国を含めた環シナ海の外海文化との接觸や、それぞれの国からの文化流入のインパクトを受け入れる玄関口としての役割をいち早く担なうとともに後世にまで長くその名をとどめてきたとも言えよう。

港湾の発達が文物を始めとする全ての外界からの情勢を知る情報口であったことは、今日の社会から推しても容易に理解出来ることである。その大きな役割を果たした時期が、中山<sup>那</sup>の首都が栄えた時代とされる。それは那覇・泊の2港が発達する以前の要港地として活気を呈していたと考慮されている。その一端を物語る中に『中山世鑑』の次の記録をあげることができる。

「當時牧那渡に、倭人商船數多參りけるが、過半は皆鐵をぞ積みたりける」の条があり、外商船の出入が、この牧港を中心に存在していたものと想定されている。

尚巴志による三山統一の開始前における、12世紀～14世紀までに浦添城が栄えた時期を中心として、海上交通路の拠点の一つとしても、牧港川は重要な位置に置かれていたと考えられる。それ以後においても、引き続きこの地域が何んらかの形で利用されていたと思われる。

ところで牧港川を取り込んだ周縁地域には、新旧の時代差を示しながら数多くの遺跡が点在している。遺跡の立地条件にもめぐまれた環境を保っている。河川の上流から下流の河口にかけて遺跡が立地していたことが確認されている。(浦添市の分布調査から)。

真久原遺跡編の牧港川の河口部には、標高5mの琉球石灰岩台地上に形成された牧港第二貝塚が位置し、上流域にかけて石灰岩丘陵台地の縁端部には真久原遺跡、その西側に標高50m～70mの岩丘陵上に伊祖城跡が位置している。その南側には、浦添貝塚が近接している。1969年に発掘調査が実施されている。現在、県指定の史跡となっている。県道330号線のバイパス越えて、さらに南東側に浦添城跡が位置している。この辺りは、浦添市内でも高所になるところで視野が大きく開らけるところもある。牧港貝塚一帯を眼下に一望することができる。

ところで、牧港貝塚の周縁は一方においては近世陸上交通の要路でもあったらしく首里街道や上泊街道が牧港橋へ結ばれていたようである。(『南島風土記－中頭郡－』 牧港橋の建設は時代不詳とされているが、度々、自然災害により橋が壊されたとされているが、尚敬王の1735

年には改修工事が行なわれている。

牧港橋は1853年にベルリ提督に随行した画家のヘーンが風景画の中に描いているが、風景情緒たかな中に当時の石橋の上の人の往来をしのぶことのできる一場面である。日本風景版画の中にも牧港橋が描かれており、風光明媚な場所であったことが想像される。



図版1 牧港小杉末醒筆 大正7年(『日本風景版画』琉球之部より) 沖縄県立博物館所蔵



図版2

「牧港の橋と提道」『ベルリ提督日本遠征記』より複写

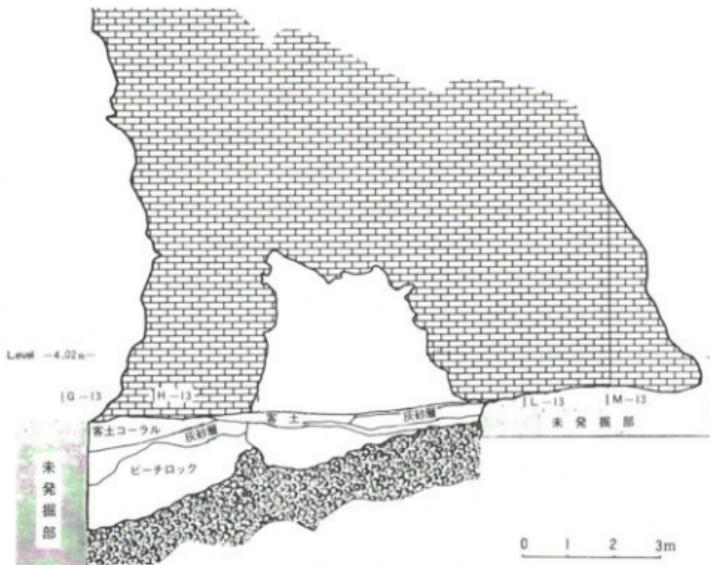
## 第VII章 遺跡の概要

### 1. 第I地区の概要と層序

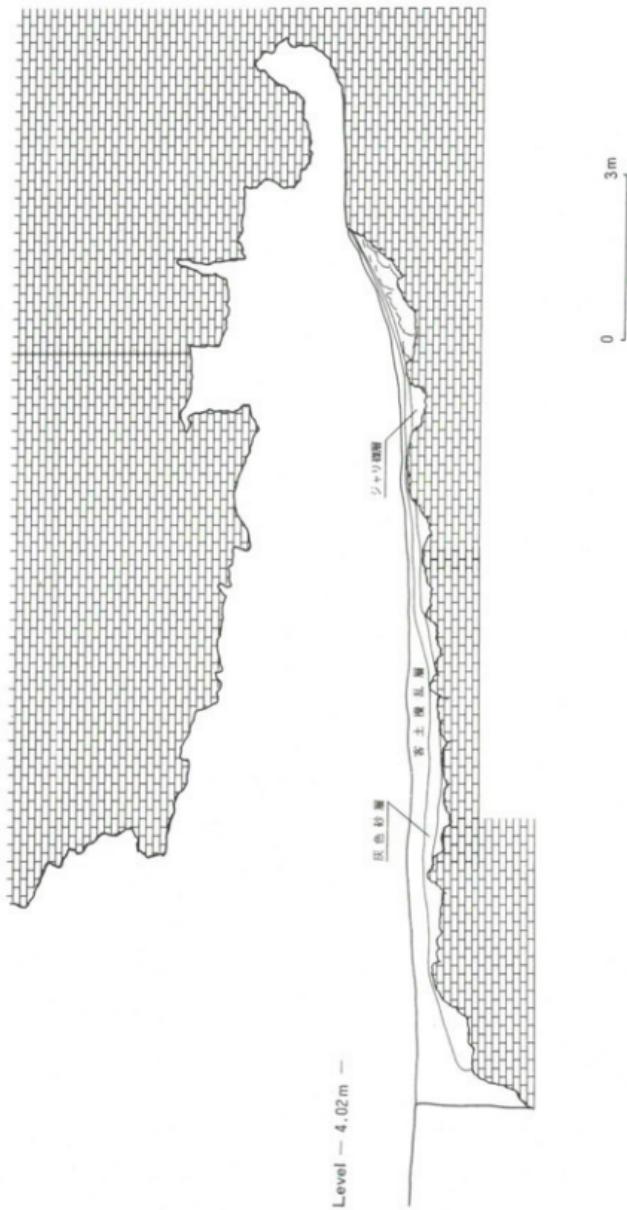
第I地区は、海蝕によって出来た半洞穴とその前庭部を中心として貝塚が形成されているヶ所である。出土した資料から沖縄貝塚時代後期の時期に最初の洞穴利用があったものと考える。貝塚の立地するところは海拔3~4m前後の低地となっている。

洞穴部は北東面に開口し、概南北の方向に平行する形である。開口部の大きさは11.60m、開口部の高さ5.0m（雨だれ線まで）、洞穴の天井高が中央部で4m、前庭部から洞穴最奥まで12mで、洞穴の広さは約290m<sup>2</sup>の小範囲である。天井部はほぼ平行に張り出している。洞奥には一部落盤石が残っておりわずかに奥の方をふさいだ形となっている。洞穴奥には香炉やブロック作りの新しい墓が立てられている。

洞内から前庭部までは砂利の堆積でサンゴを含む面が混在して確認され、ほぼフラットな面を形成していた。前庭部から河辺の方にかけて漸次傾斜していく。洞穴は砂利サンゴ疊の面上に板状や不ぞろいになった石灰岩の括がりが見られたが、人為的な敷き詰めによるものであるのか単なる自然堆積の状況下のものか明確な判断は下しえなかった。ただ疊の大きさは一定ではなく、かなり密に集石されていたとも考え難い様相であった。



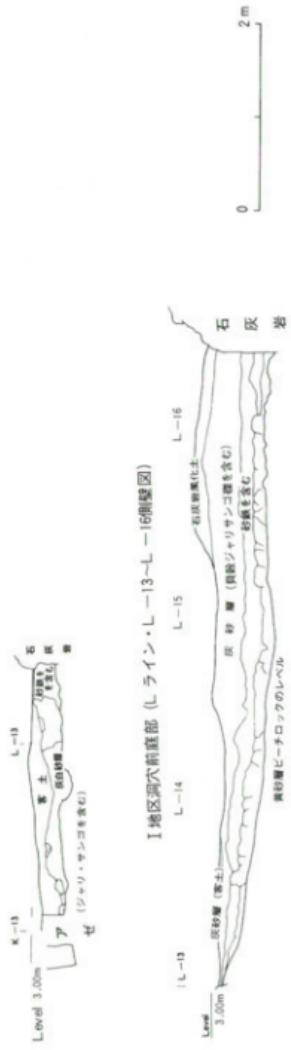
第6図 洞穴の横断面図



第7図 第1地区洞穴横断面図

第8図 I地区層図

I地区洞穴前部 (K-Lライン、K-13-L-13-L-13断面図)

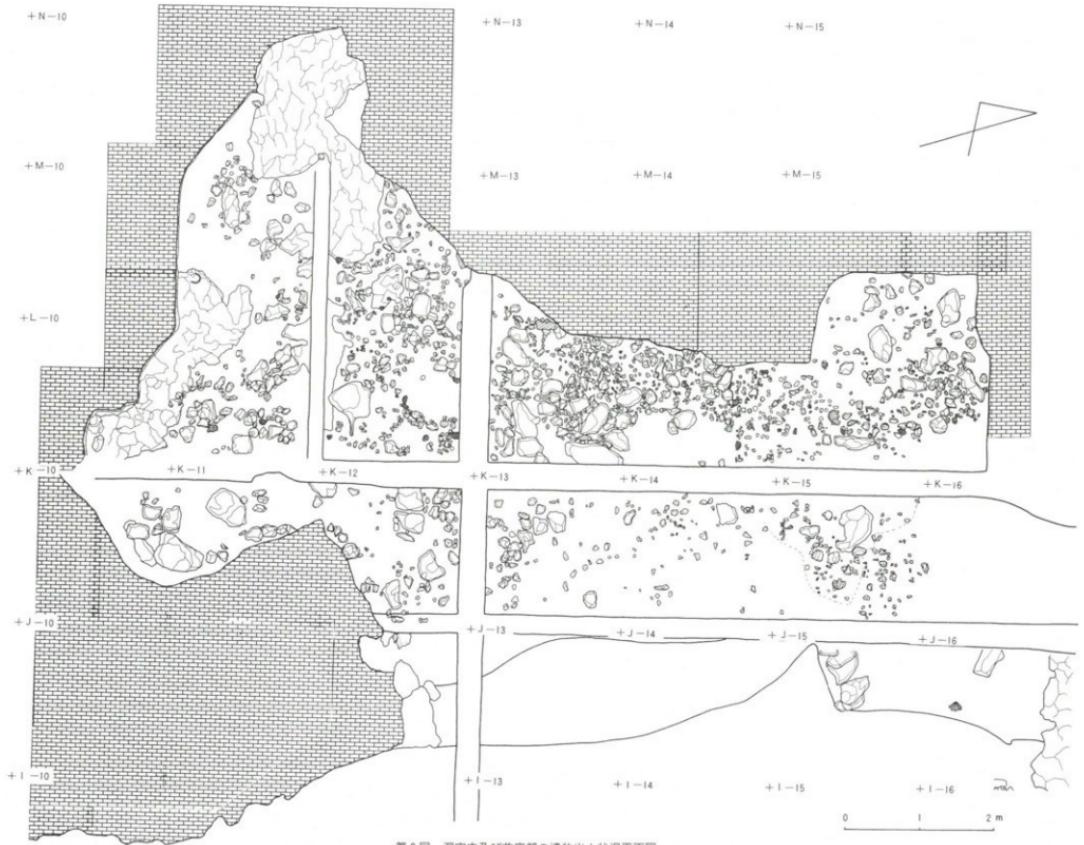


I地区洞穴前部 (Lライン・L-13-L-13-L-16断面図)



I地区 (西側壁) Kライン断面図 (K-11-K-16グリット)





第9図 洞穴内及び前庭部の遺物出土状況平面図

洞穴は、外部からの雨水の浸み込みによるものからか、石灰分の付着化が著しく固結した状態を保っていた。その結果、遺物の大半はサンゴ礫において固まった状態で出土し、貝殻等は灰白色を呈し石灰質の膜につつまれていた。特に土器において、この状況が顕著であった。

ジャリサンゴ礫を一面取り除いた下に、かなり水磨をうけたと思われるビーチロックが露出したが、遺物の出土は、このレベルにおいては見られず、わずかに岩の隙間や下部に流れ込んで付着残存しているにすぎなかった。

前庭部の一部から、さらに東側（H—Iライン）へは、後世のコーラル敷きの客土堆積があり、河川の方向に沿って深くなっていた。旧河川の川辺り一帯まで埋めたてられており、大半が攪乱を受けていた。

層序の状況は、基本的には第Ⅰ層から第Ⅲ層までで、最下部のビーチロックまでは、わずかに30~40cmの堆積であった。第Ⅰ層はコーラルを含む客土層で5~10cmの堆積であったが、この中からも後期の土器片が断片的に出土したが、後世の沖縄製陶器片等も混在してくることから、攪乱を受けた跡があった。過去の表面調査においても、土器片は表土面より採集されており、オリジナルな包含層も部分的には、すでに露出していたのではないかと判断された。

第Ⅱ層は灰黒砂（ジャリ礫を含む）で遺物包含層である。ところがⅡ層面の上部においても攪乱を受けたあとがあり、層の薄さとともに洞内が比較的新しい時期にまで何んらかに形で利用されていたことが確認された。第Ⅲ層は、黄白砂層（ジャリサンゴを含む）で、Ⅲ層中からの遺物は、比較的まとまった形での出土があった。

残された包含層中オリジナルな部分はⅡ層下部からⅢ層にまたがっての堆積であったと判断したが、全体を通しての堆積層が薄く、層序の把握に手間どった。

前庭部付近の層序は、さらに攪乱を受けており、攪乱部の除去後、その下には海浜の白砂面が一部露出した。前庭部のI-15において20cm前後の小礫の積み跡と思われるものが出土したが、状況はつかめなかった。前庭部から川辺りに移行していく傾斜面に残石していた。

前庭部の中央付近J-14において表土下30cmのところに石灰を焼いたと思われる跡があり、0.5cm~1.0cm前後の石灰のボールが30~40cmの厚みで、炭まざりとともに袋状に堆積していた。

## 2. 第Ⅱ地区の概要と層序

海蝕ノツチによって出来た琉球石灰岩下の半岩蔭が連続して形成されたところを第Ⅱ地区として地点を区別した。第Ⅰ地区よりも新しい時代でグスク時代の遺物が出土してくることから第Ⅰ地区との直接的な関連はないものと判断した。

岩蔭の周縁は草木で覆われており、草木の伐採と周辺からの分布調査を並行させながら、発掘調査に入った。岩蔭は北東から東方向に面しており、墓地として利用された跡が、ごく最近にまで残っていたようである。中央部の岩蔭の前面部において積石の崩落したあとがある。積石の内部は小範囲であるが、フラットに成形されており、その中に石灰岩の風化土壤中、厨子

甕の破片とともに骨片が残っているのが見られた。埋葬時は不詳。岩蔭を背部にもち、その前面をサンゴ石や石灰岩で積み上げていくチンマーサー墓の形態を残していたと思われる。また墓地への小石段であったと思われるが、7段の小道が作られており、一部は落盤石の上に残っていた。

明治の頃、一帯は墓地群で占められ、板葺の屋根をもつ墓地も作られていたという。墓地のすぐ下まで、入江が広がり、アオサノリを収穫したあとこの板葺の上に干してあった風景も見られたとされる。

Ⅱ地区の岩蔭下は全体的に石灰岩の風化土が覆っており、二次的な利用により擾乱されている状況であった。

この風化土を取り徐いたあとに黒色土層が堆積しており、わずかに貝層中に土器片が出土した。遺物包含層として認められるものであったが、予想に反して遺物の出土は少なかった。岩陰より北東面への前庭部では、岩陰の奥から流れ込んできたものであろうか、黒色土がさらに東側へ傾斜する状態で堆積していた。

グスク系の土器や貝殻片が出土してくるが、遺物の出土は黒色土の20cmレベルで終わり、その下に灰黒砂のジャリサンゴ礫の層が露出したが、土器片は極端に少なかった。このレベルの下には黄白砂の海浜砂層（ジャリサンゴ礫を含む）が続いていた。

前庭部よりさらに東側では約1.30m前後のレベルまで客土されており、厨子甕片や現代の瓦片、ガラス片（ガラス工場跡から）などが埋土され河川の中央部付近に厚く埋土されていた。

Ⅱ地区から出土した資料で、後世の遺物の他は、全てグスク時代のものであり、グスク時代の遺跡が存在していた可能性がある。

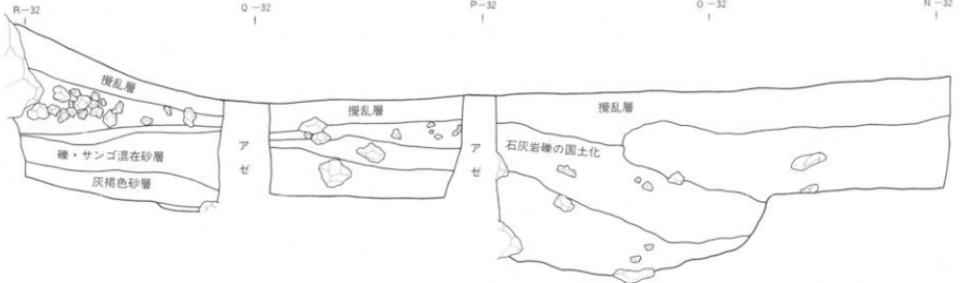
多和田先生の御記憶から、1933年に調査した時には、Ⅱ地区の岩丘が台地として南西側に延びており、その上担部に陶磁器が散見されたと指摘されておられた。そのことから推測すると、本来のグスクの主体部が、丘上に位置していたと考えられるが、現時点では、上部は大きく削りとられ、わずかに現況の岩蔭部だけが残った形となっている。岩丘上を削り取った際に遺物が河川の埋土中に混在した可能性がある。

L-33~34で河床の状況や客土の厚みを見るためにユンボで試掘したが、3mレベルまで客土されていた。しかし客土はまだ続いており、機械による掘削がこれ以上無理だということで3mまでの掘削で終った。

Ⅱ地区から出土した遺物はグスク土器、褐釉陶器、陶製、青銅製のキセルの雁首、磁器、染付、沖縄製陶器、青銅製のカンザシ、鉄釘、鉄滓、銭、砂鉄、自然遺物と多岐にわたっている。残念ながら、いずれも層序的に正確に把握できる資料ではなく、したがってこの地点の時期的な判定や考察の展開においては一等資料に恵まれず精細さを欠くこととなった。客土中ながら出土した遺物は、後世の資料も含めると、かなりの量にのぼっており、Ⅱ地区の状況を概略的に把握することが出来たと考えている。

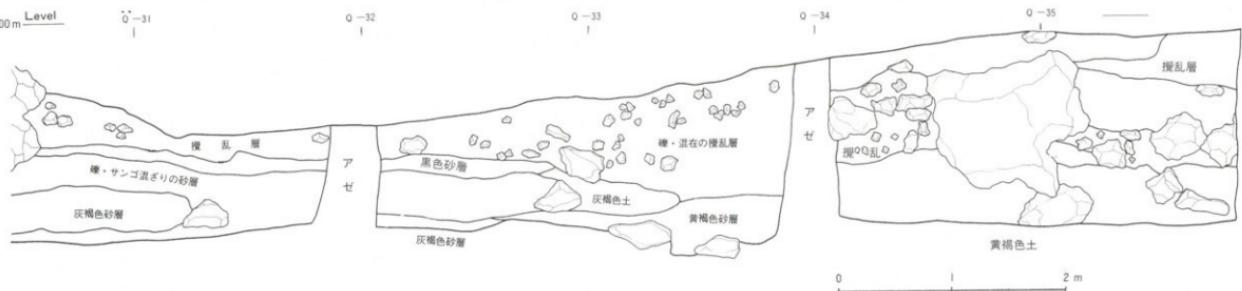
4.00m Level

北 肋 図



4.00m Level

西 肋 図



第10図 第II地区壁面図



第II図 第II地区の発掘平面図

## 第VII章 出土遺物と遺構

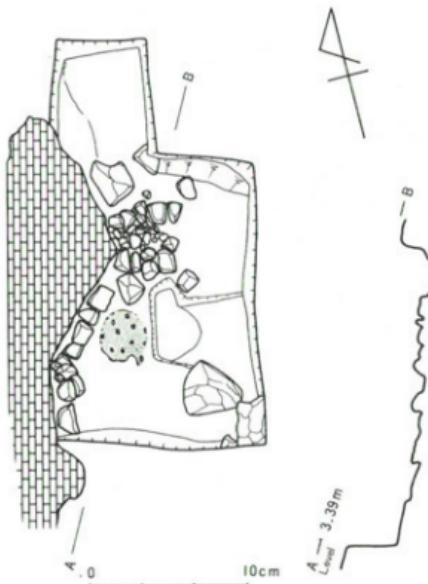
### 遺構

第Ⅰ地区、第Ⅱ地区ともに、遺跡が形成された時に付随する遺構は判然としなかった。Ⅰ地区の場合は、住居そのものとの関連で促えるならば、洞穴それ自体を住居地として考えることができる。ただ洞穴内においては、部分的な攪乱を受けていたことと、層が浅いという点から、炉跡や柱穴等の生活跡と思われる遺構がセットで検出されることはなく、遺物の拵がりだけであった。

第13図に図示したごとく、洞穴の前庭部I-15 I-16において、サンゴ礫や石灰岩を積んだ下部の石積みが露出した。石積みは内部に白砂面を取りまくようにやや円形状にカーブする形で積まれていたと思われるが、大方崩れ落ちて、旧川辺りと思われる斜面部に流れ溜まった状態を呈していた。石は20cm大のものがほとんどで自然礫であるが、中に面取りされたものがいくつか並んでいた。石積みの内外ともに遺物は少なく、後期土器と後世の遺物が混在していた。後世に墓地を作る時に積まれた墓石群の可能性もある。判然としなかった。

K-21では後背のノッチ部を利用し、下部の方に大小の面取りされた石灰岩が並列されていた。石は火を受けて赤く焼けており、何かの窯場として利用されていたものではなかったかと考えていたが、瓦の漆喰に使うモチを焼いたフェーヤチガマと呼ばれていたことがわかった。遺物の出土はなく単に第12図のように石が配列されているだけで、下部に赤く焼土が確認された。

第Ⅱ地区では、攪乱部の調査に終始したことから、全体の遺構の検出までには至らなかった。



第12図 石灰窯跡の平面図



第13図 前底部の石積造構平面図

## 第Ⅰ地区

### 出土遺物

#### ① 鉄釘、キセルの雁首、滑石（第14図）

第Ⅰ層から第Ⅱ層上部までは擾乱があり、遺物も壺屋焼きの陶器片とともに、鉄釘やキセルの雁首、滑石などが混在して出土した。沖縄貝塚時代後期の貝塚が形成された以後の上層面に後世の遺物が混入した形となっており、その中にグスク時代の遺物として從えられる下記の3点の資料が含まれていた。合わせて報告しておくことにする。

### 鉄釘

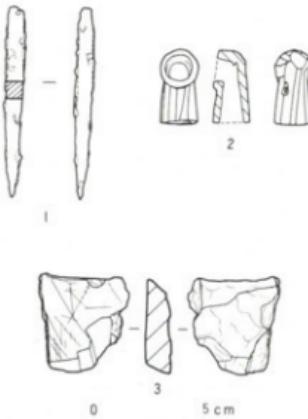
全体に鏽化が進行しており、表面が薄く板状に剝離しているが地金の部分は残っている。断面方形で、頭部は平たく先端部は鋭利に保たれている。角の部分から縦長にクラックが入っている。現存長8.1cm。

### キセルの雁首

陶製品でⅡ地区から出土した資料と同型態のものである。

火皿と煙管部接続面の内部は円形に作られている。火皿の径は1.1cm。煙管部の径1.0cm。

全体に薄い釉がかかり、面取り加工されている。火皿には煤の付着痕は見られない。



第14図 鉄釘・陶製の雁首・滑石の実測図

### 滑石

片面は平面に加工されているが、他面は製品の一部が剥がれたもののか割れ口の面を呈している。滑石は沖縄に産しない石材であることから九州地方からの移入品の可能性がある。滑石を使用しての製品は石鍋に代表されるが、これまでにグスクの遺跡において破片が出土している。グスク土器の中にテンパーの一つとして滑石を混在させたものがある。Ⅱ地区出土の土器の中にも滑石の粉粒が混入したものがあり、グスクの時期に利用されたことが確認されている。本資料は、Ⅰ、Ⅱ地区からわずかに1点のみで、小破片である為、製品の型態がつかめない。

## ②土 器

I 地区から出土した土器で、復元可能なものは1点もなく全て大小の破片であった。胸部の無文小破片は図化復元においても省略し、口縁部と底部については全て図化し、有文の胸部については拓影図の明瞭なものに限定して2~3点掲載した。

全体に器表面は褐色や赤褐色を呈し、中に媒の付着痕からか黒色を帯びているものがある。胎土は砂粒の混入や微細な鉱物、わずかに貝の粉粒が含まれているのがあった。成形は輪積みによるものであることから、輪積みの接続痕の周辺や口縁部近くでは指頭の圧痕が顕著に残っている。焼成は全体に良好である。ただ洞内での石灰分の付着が著しく固質化したものも含まれていた。

以下、口縁部、胸部、底部の各部位について特徴的なものについて記述しておく。

### 口縁部

#### 外反（第15図）

口縁部は外反、直口、内ワンの成形の差異によって分類した。①~⑩に図化したものが外反するグループで、器形は甕形と鉢形である。①は口縁部下2.0cmのところに1列の点刻文が施されている。口縁部はゆるく小さく外反し、頸部から胸部にかけてやや丸く張っていく。胎土は緻密で焼成は良好、器色は茶褐色、器厚は頸部で0.4cmをはかる。

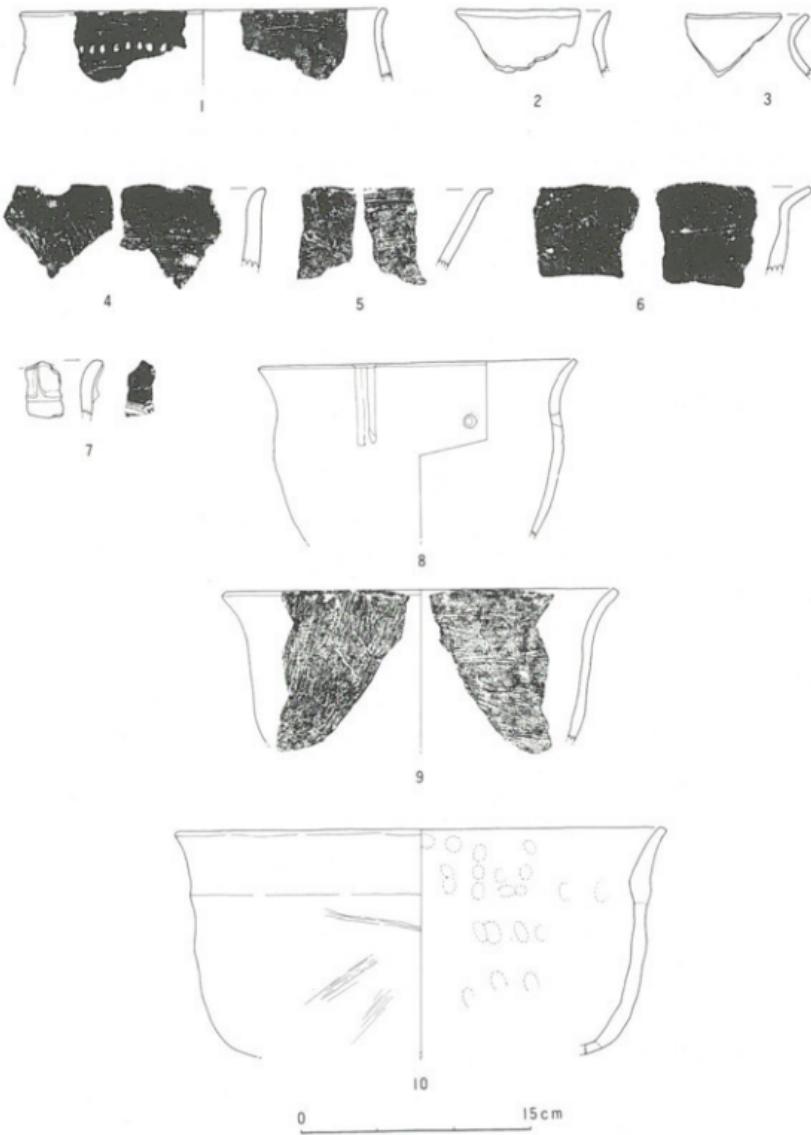
②は口唇が細くやや三角形をなす。口縁部が外側に開く、胎土中細石粒を混入してある。器面は表側に指痕が残されており内側にハケ目の調整痕がある。器色は淡茶褐色、器厚は頸部で0.4cm、③は口縁部がくの字状に強く外反する。器面に石灰分の付着が残っている。胎土は密で良好。器色は赤褐色で内面に箒削りの跡がわずかに残っている。器厚は頸部で0.4cm。

④は口縁部が小さく外反するが胸部へはほぼまっすぐになる。口唇は小さく丸味をもち胸部へ厚くなる。焼成は固質で良好。器色は褐色で器面に箒の調整痕がある。器厚胸部で1.2cm。⑤も口縁部が小さく外反し胸部から立ち上がりが外側へ大きく開いていく。口唇幅が0.9cmで、斜めに成形してある。胎土中微砂粒や赤色のやや荒目の粒子を混入してある。緻密で良好。器面は箒削りによる調整痕がある。器色は暗褐色、器厚は胸部で0.8cm。

⑥は口縁部をくの字状に成形し2.4cm幅で外側に外反させてある。口唇は指ナデからの積みあげによるものが波状になっている。器面はザラッとした手触りで指ナデと箒削による調整痕が残る。器面の表側には浅く明瞭ではないが、单箒による山形状の曲線文が見られる。胎土は緻密で焼成は良好。器色は褐色。器厚は胸部で1.0cmをはかる。

⑦は、波状の口縁部で口唇が丸味をなす。縦横に小さな凸凹が残っている。内面にハケ目痕が残っている。胎土は良好。焼成は緻密で器色は暗褐色。器厚0.7cm。

⑧は凸凹貼付と小孔をもつ鉢形の器形である。口唇面を外側に平たく成形してある。凸凹文は口縁部から長さは5.0~5.2cm。幅0.5~0.6cmで2本貼付されている。小孔は外径が1.0cm、



第15図 土器口縁部実測図及び拓影図

内径が0.5cmで表裏面から穿孔してある。内面にハケ目の調整痕が残る。器表面は脱石痕が見られる。やや粗雑な寛ナデ成形が残っているが、内面は緻密で焼成も良い。器色は表面に媒の付着があり、黒色を呈しているが、内面は淡茶褐色を呈している。器厚は胴部で0.6cmをはかる。

⑨も口唇部を外側に平面に成形してある。器面は寛ナデによる成形痕が残っている。胎土は細石粒を含み焼成は良好。器色は淡茶褐色、器厚は口縁部、胴部で0.5cmをはかる。

⑩は出土した資料中最も大形の破片で浅鉢形の器形である。口唇幅はナデによって、平面に仕上げられているが一部は継ぎ足し面が残っている。底部立ち上がり部近くから口縁部にかけて4段の輪積みの継ぎ目が残っており、継ぎ目の近くで指痕がよく残されておりそれが内面に顯著である。表面は寛によるナデ調整がある。胎土中に赤色の細粒子や石英粒が混入。器色は赤褐色、焼成は良好。器厚は胴部で2.0cm。口縁部で0.9cmとなっている。

#### 直 口（第16図）

第16図①～⑤に掲げたものである。①は口唇部が丸味をもち、胴部が内傾する。器表面に5本の斜行の沈線文が残っている。器色は淡褐色。器厚は頸部で0.8cm。

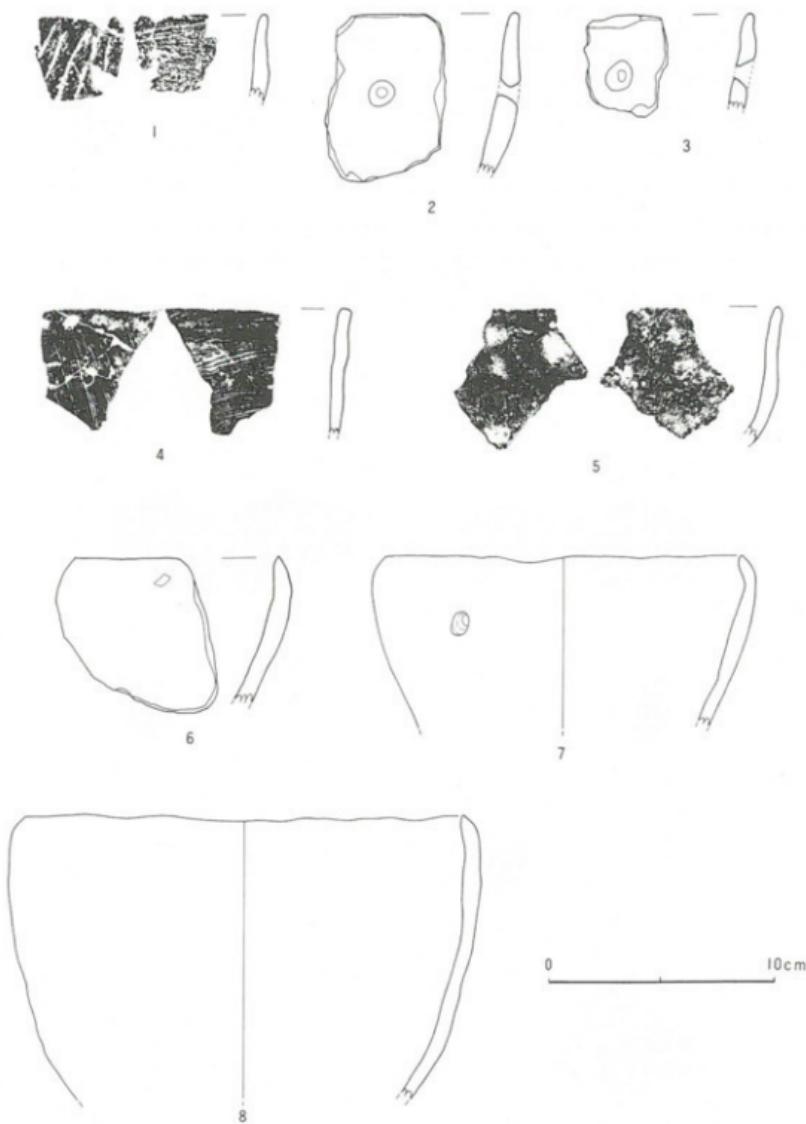
②は口唇部が丸く細まる。口縁部3.0cm下に外径1.0cm、内径0.4cm前後的小孔が穿たれている。穿孔は表裏からのものである。胎土中細石粒を含み焼成は良好。器面はナデにより成形してある。器色は茶褐色。器厚は口唇部で0.5cm、胴部で1.1cm。③は口縁部が一段細まり胴部へ内傾する。口縁部2.0cm下に外径1.2cm、内径0.5cmの小孔がある。胎土中細石粒と貝殻を粉粒して混入してある。器色は茶褐色。器厚は胴部で0.9cm。④は器面をハケ目で成形し、表面口唇部下に指痕がある。焼成は良好。器厚は口縁部、胴部とも0.5cmをはかる。⑤は石英や赤色のやや荒目の粒子を混入してある。器面はザラットしており、指痕がある。器色は暗褐色。器厚は胴部で0.9cm。

#### 内 弯（第16図）

第16図⑥～⑧の3点である。⑥は口唇幅が細くなっている。器面はザラットしており胎土に石英粒を含む。器色は褐色。器厚は胴部で0.8cm。⑦も口唇幅が細まり胴部が内傾する。胎土中に石英粒、細い鉱物が混入。器表面は寛ナデの成形で、内面に指痕が残っている。器色は暗褐色。器厚は胴部で1.0cm。⑧は指ナデや寛調整による器面で、胎土にやや荒い粒子を含む。継ぎ目痕が見られる。器色は茶褐色、焼成は良好。器厚は胴部で0.7cmである。

#### 胴 部（第17図）

第17図①～⑭に掲げた資料である。その内①～⑤は単寛による曲線文で、⑥～⑩は凸帯文、⑪～⑯が有孔となっている。⑯は後期系の土器から胎土、焼成において外される資料である。①はやや幅広で深みのある曲線文を描いてあるが、小破片である為、全体の文様の構成がわからぬ。器面は緻密で焼成も良好。器色は暗褐色。②は2条1組に曲線文になると思われる。



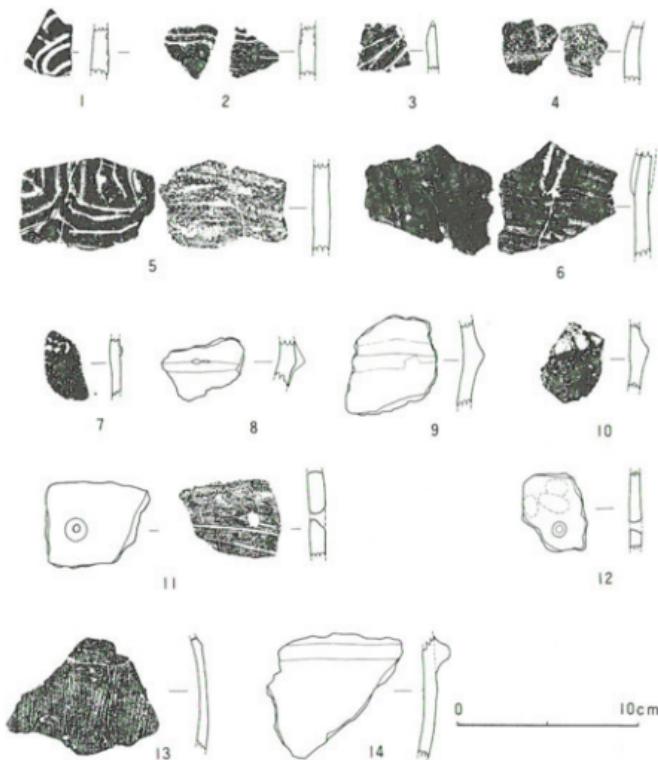
第16図 土器口縁部及び拓影図

表裏面に施文してある。③は3本の細沈線が施文されている。焼成は良好。

④は幅広の範による山形の曲線文と思われる。器面はハケ目のナデによる調整痕がある。胎土は緻密で焼成は良い。器色は淡褐色。

⑤は暗褐色の焼成で、器面はナデによる調整がある。曲線文を描いてあるが、左右に同一の文様が展開しているようにも見える。⑥は内面縁に凸帯貼付が作られているが、口縁部をはさみ込むように表面にもまたがって貼付してあったものと思われる。表面は凸帯が剥がれている。器面は躊躇による成形で、焼成は良好。器色は茶褐色。胎土中、微石粒を含む。

⑦は小片で全形がつかめないが小凸帯に刺突文が刻まれている。⑧～⑩は小さな凸帯を形成したものである。粘土帶の接続痕とも見られ、上下に指痕が見られる。焼成はやや荒く雑であ



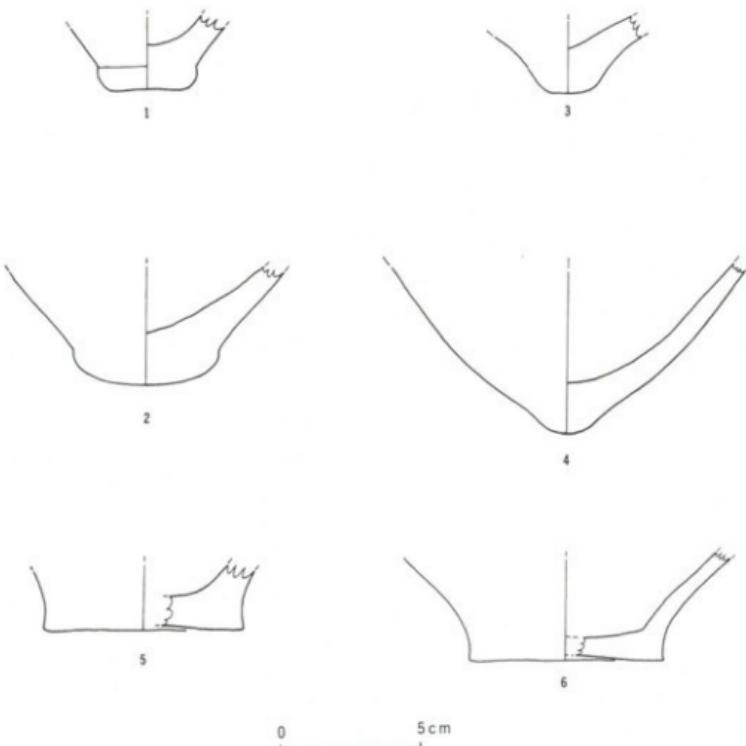
第17図 土器底部実測図及び拓影図

る。

⑪⑫は有孔土器である。2点ともにきれいに穿孔されており表面からの穿孔である。

⑬⑭の2点は沖縄後期土器とは異なるタイプで、胎土、焼成から弥生系の土器と思われる。

⑮は凸帯に刻みが入るものである。刻目はかなり磨滅しており明瞭でない。焼成はややザラツキがあり、やや荒くなっている。器表面は石灰分が付着した為か白っぽくなっているが、内面は灰黒色を呈している。器厚は0.8cm。⑯は器表面にハケ目の調整痕が見られ、小さな凸帯のくずれが見られる。器面は表面で黄褐色、内面は⑮と同様灰黒色となっている。内面は⑮⑯とともに粗悪な面となっている。器厚0.4cm、山ノロ式土器に近似する資料か。



第18図 土器底部実測図

## 底 部 (第18図)

第18図①～⑥に図化したもので尖底、乳房状尖底、くびれ平底、丸平底の4種に大別される。①②は底部成形時に、一度押しつぶした形で底面立ち上がりが丸味をもつ。①は若干上げ底気味にもなっており、②は丸味をなす。①②ともに丸底的な平底として分けられる。①は底器厚1.7cm。②は1.8cm。

③は尖底の中に入いるものであるが、底面は若干フラットに成形されている。底器厚1.5cm。④は乳房状の尖底土器である。底部資料中最も大きな破片である。胎土に赤色粒子や砂粒が入っている。焼成は良く横ナデの成形がほぼフラットになる。⑤は立ち上がりのくびれはゆるく胴部へ延びていく。⑥は底面角がシャープで、立ち上がり部から胴部へ開いていく。ナデ調整の跡がある。⑤の底器厚は1.2cm。⑥が0.8cmと薄手になっている。

## 小 結

今回出土した資料は後期土器で占められるが、前述したごとく2点だけ弥生系の土器が混入していた。後期土器の中では無文鉢形の器形を主として、数点有文が含まれた状態であった。口縁部、胴部（有文・無文も含む）底部のいずれにおいても、圧倒的な数量をもつ出土ではなかった。外観的にはナガラ原西貝塚やアカジャンガー貝塚、浜崎貝塚から報告されている資料中に照合出来るものがあるが、比較資料が少ないとから詳細な考察は控えたい。

底部資料中においても、わずかに6点と最小にとどまっており、本貝塚の時期的な設定の根拠としての資料がとぼしい。ただ6点の底部に限定して見るならば、後期前半の指標になる明瞭な尖底土器の出土がなく丸底的な平底、もしくは平底が混入している資料からすれば、後期の中葉から、後期後半にかけての時期が仮定として考えられそうである。

また弥生系の土器については、2点ともに中期の土器として考えられるが、一緒に出土している磨製の石鎌やゴホウラの貝輪とともに九州からの移入品として持ち込まれた可能性も考えられる。

参考文献 伊江村文化財調査報告書第8集 概報篇

『伊江島ナガラ原西貝塚』自然遺物篇 沖縄県伊江村教育委員会 1979年3月

『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚』発掘調査報告 沖縄県具志川市教育委員会 1980年3月

伊江村文化財調査報告書第9集

『浜崎貝塚』 沖縄県伊江村教育委員会 1980年3月

### ③ 石 器（第19～23図）

石器は磨製の石鎌1点を特異な資料として、他に石斧、敲石や磨石、砥石、石皿と多岐にわたっている。1点は用途の判別のつかないものが入っている。以下各形態別に記述した。

#### 石 鎌（第19図）

第19図は、洞穴の前庭部Ⅰ-14地点から出土した資料である。磨製の石鎌で縦長の三角形で無茎の柳葉状を作るタイプである。薄手で表裏面全体に研磨加工を施したものである。わずかに先端部と側縁部が欠損している。成形面は先端から中央部にかけ、1本の稜がありさらに基部の方で2本の稜が形成されている。

表面は5面の研磨面で仕上げられている。製作時によるものか研磨方向にそって、線状痕が観察される。

左右端部は表裏からの斜めに研磨を加えてある。石質は外觀する限りにおいて軟質で外部からの移入石材の可能性を残している。石質鑑定の結果は結晶片岩であるとされている。

現存長6.4cm、最大幅1.8cm、厚さ0.4cm、重量10g。

今調査中、1点だけの資料であるが、残念ながら出土した状態は第Ⅱ層の上部攪乱層中からであった。磨製の石鎌は野国貝塚B地点<sup>註</sup>からも出土報告があるが、本資料とはタイプが異なる。野国貝塚の資料は有茎で抉りが入り表面の中央部に鏽が残るものである。野国からの資料も攪乱部からの出土で時期は不詳となっている。

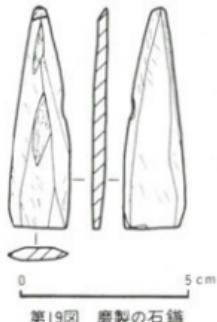
註 沖縄県文化財調査報告書第57集

「野国一野国貝塚群B地点発掘調査報告」 沖縄県教育委員会 1984年3月

#### 石 斧（第20図）

第20図①～⑦に図化した資料である。①は体部と頭部が欠損しており刃部のみの資料である。側面観からは刃部は両刃で側縁部を定角状に仕上げてある。刃縁は刃こぼれで丸く磨減している。表面は刃面が波状に残る。刃部幅4.4cm。

②は体部の一部と頭部が残り、逆に刃部が欠損している。片面には部分的に研磨面が残り、片面は自然面のままである。頭部は半弧状に研磨されている。側縁部は段状に小さく剥落している。③は表裏面全体に研磨を施し、側縁部を定角に仕上げてある。側面観から刃部は両刃で使用時の刃こぼれが見られる。平面観から刃縁は外側にゆるやかに半月状にカーブを作り、仕上げ



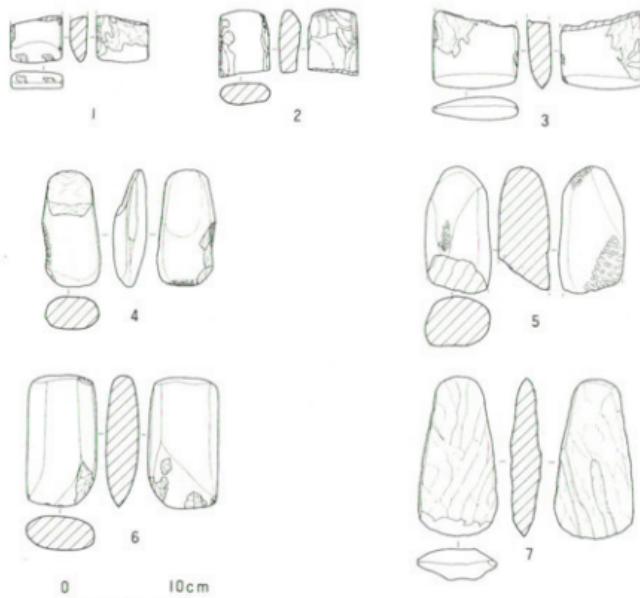
第19図 磨製の石鎌

はシャープである。刃部のみの資料であるが、全形は短柵型の全面磨製の石斧であったと思われる。刃部幅6.9cm。④は体部側縁の上部にわずかに研磨面が残っているが、全体に自然面のままである。刃部は鋭利な状態が欠損したあと叩打作用によるものか、小さな打痕が残っている。石斧からの転用として敲石的な二次的使用があったものか。

⑤は全面自然面が残り、刃部が欠損している。体部の表中央部と、裏面の頭部端と体部下半に小さな打痕が残るだけで他に加工痕は認められない。⑥も外形状は短柵状で全面磨製の完形品の石斧である。側面観から両刃の刃部となっている。表、平面観からは刃部の右角がかなり磨耗しており、刃縁の刃こぼれが目立つ。刃部の横方向には線状痕が残っている。刃部裏面は使用時の際のものか剝離痕が見られる。刃縁はやや直線的になる。

⑦は外形が撥形を作るもので、表、片面の刃部のみに研磨面が残る。裏面はまったく自然面のみで刃部においても研磨面は残していない。側面観からは両刃的片刃の刃部を作る。これで完形品であるのか、製作途中のもので研磨痕を加えるものなのか判然としない石斧である。

ただ、刃縁の刃こぼれが目立つとのと刃部側縁の一部に研磨面を残しているものからすれば、これで完形品とも考えられる。刃部の成形も片刃的製作の可能性が残る。

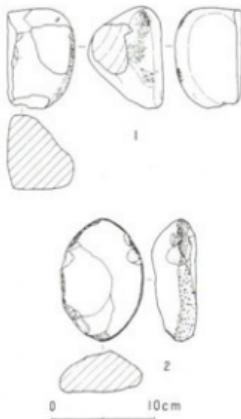


第20図 石斧実測図

### 磨 石 (第21図)

磨石として判断されたものは、わずかに2点だけであった。完形品ではないが、本体部分が残り周縁部が欠損している。

1は残存部分からは三角状に残った形で、3面に磨り面が残っている。欠損前の状態は台形状に成形されていたと思われる。磨り面はかなり磨耗している。2はやや楕円状で、片面に磨面が残る。片方の面は自然な剥落のままとなっている。周縁の一部に小さな敲打痕が残っており磨石と敲石の2面の使い分けがあったものか。



第21図 磨石実測図

### 砥 石・敲 石 (第22図)

砥石も破片だけで完形を残すものはなかった。総数3点の出土。1、2ともに片面のみに砥面があり、他は自然面のままである。3は片面全面を研面としているが、裏面はわずかな研面が見られるだけである。1は0.5cm幅に長さ3.5cmの小溝の研面が残っている。かなり細くて細かい道具を研磨加工したものではなかったかと思われる。2も研面の幅は1.0cmとやや広くなっているが、細かな道具の研磨利用が考えられる。砥面が細かく磨耗していることから、仕上げ用としての砥石の可能性もある。

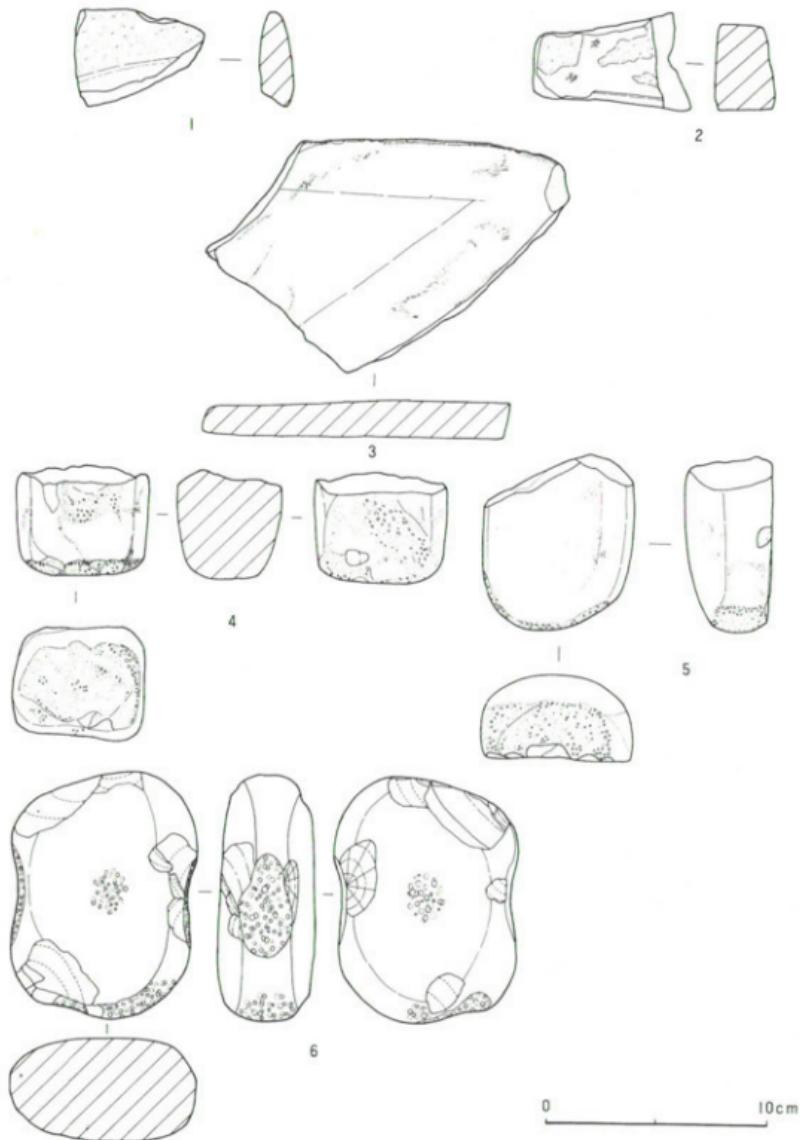
4～6は敲石で、いずれも周縁部に敲打痕が残っている。4は全体が自然面のままである。周縁部に敲打痕が残っている。5も全体が自然面で周縁下端部に敲打痕が残っている。6は左右の側縁部に敲打による、くびれが出来ている。上下端にも細かな打痕が見られる。表裏面ともほぼ中央部には、浅い小さな凹みが残っている。3点の中で最も形が整った資料である。

### 石 盆・用途不明石製品 (第23図)

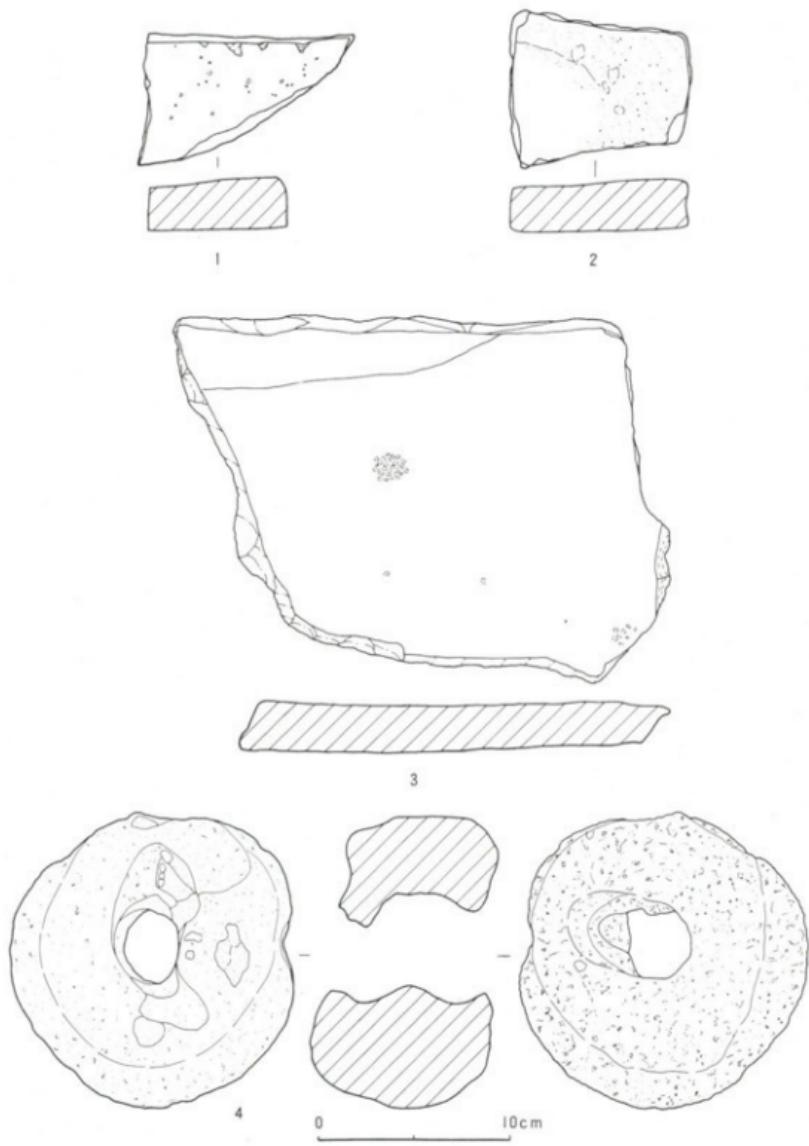
石盆は1～3にあげた資料であるが、小破片で磨り面の角度や磨耗度合いが判然としない。3点の資料とも、磨面が凹んでいく臼状のものではなく、平面形の中には中央部分の厚みが、外周に比らべて薄く磨耗した状態をもつ磨板式<sup>註</sup>の形態である。特に3の資料はその典型的なもので中央部、底面の厚みが極端に薄くなっている。擦痕の観察は出来ないが、磨耗光沢が若干見られる。4は中央部に2.3cmの貫通孔があり、周縁をほぼ円形状に成形したものである。荒面を残したままで、研磨面は見られない。表面はわずかに丸味があるが裏面は平面形である。

註 一上総国分寺台進路調査報告Ⅲ-

『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査団編 早稲田大学出版部



第22図 砥石・敲石実測図



第23図 石皿・用途不明石製品

表 I 石器観察一覧表

辨認番号	出土地点	分類	石質	形 状				備 考
				(cm) 現存部長	(cm) 現存部幅	(cm) 現存部厚	(g) 重量	
第19図1	I 地区 I-14	磨製石斧	結晶片岩	6.4	1.8	0.4	10	野因貝塚から1点有茎の磨製石斧が出土。
第20図1	I 地区 H-15	磨製石斧	輝綠岩	3.6	4.4	1.8	45	頭部欠損
第20図2	I 地区 I-16	磨製石斧	輝綠岩	5.0	4.1	1.7	71	刃部欠損
第20図3	I 地区 K-13	"	輝綠岩	5.4	7.0	1.9	146	体部上半から頭部にかけて欠損
第20図4	I 地区 K-15	石斧	輝綠岩	9.5	4.4	2.8	201	全体に自然面が残る。刃部磨滅
第20図5	I 地区 K-15	"	斑レイ岩	9.6	5.4	4.1	399	全体に自然面が残る。刃部欠損
第20図6	I 地区 M-11	全磨製石斧	輝綠岩	9.7	5.7	2.8	315	形のよく整った石斧である。
第20図7	I 地区 J-15	局部磨製石斧	玄武岩	12.1	4.9	2.4	304	全面に自然面が残り刃部のみの研磨
第21図1	I 地区 J-15	磨石	砂岩	—	—	—	620	—
第21図2	I 地区 L-12	"	砂岩	—	—	—	502	やや粗雑で、北部の墓陶層あたりで出土したもの。
第22図1	I 地区 K-14	砥石	細粒砂岩	5.0	2.9	—	51	—
第22図2	I 地区 K-14	"	砂岩	—	—	—	100	—
第22図3	I 地区 K-14	"	細粒砂岩	—	—	—	382	研面はなめらかである。
第22図4	I 地区 M-11	敲石	砂岩	—	—	—	249	砂岩は同一地点から採取した可能性が高い。
第22図5	I 地区 K-13	"	輝綠岩	—	—	—	409	—
第22図6	I 地区 K-13	"	砂岩	10.2	6.6	3.2	681	墓陶層あたりの可能性がある。
第23図1	I 地区 K-16	石皿	砂岩	—	—	—	286	—
第23図2	I 地区 K-14	"	細粒砂岩	—	—	—	357	—
第23図3	I 地区 K-13	"	黑色片岩	—	—	—	1,710	中央部で薄く磨滅
第23図4	I 地区 K-12	不明石製品	琉球石灰岩	—	—	—	2,600	—

※ 形状の中の現存部長、現存部幅、現存部厚は、現存した資料の中央部を計測した。

※ 単位は長さが(cm)、重量(g)で標示した。

※ 石質の鑑定については、沖縄県立教育センターの大城逸郎氏による。

#### ④ 貝 製 品（第24図）

##### 貝 輪（第24図 1～4）

ここにあげた資料は、他の遺跡からの類例資料との比較により明確に貝輪として考察されるものや、あるいは加工、成形の痕跡より貝輪の残片として判断出来るものに限定した。今回出土した中では、素材の違いから3種に分けられた。1点は巻貝でゴホウラを素材にした製品で、他は二枚貝のメンガイやシャコガイを素材に加工したものである。

1はゴホウラ製品で外輪の上下端部に0.6cmの小孔を表裏面から穿ち、さらに外側面には0.2cm幅の細い溝状が彫られている。細いヒモを通し、縛縛していく組合式の一方の半製品であったと思われる。螺塔側縁部を利用し、環の外縁は角形をつくる。全面研磨面を施し、原材からの外形のカッティングなど細緻な加工が施されており、特に鋭利な刃をもつ加工具の存在が検討される。

2はシャコガイ製品であるが、表裏面ともに研磨、磨滅していることから種名が判然としない。全体の半分の残りである。残部からは下端から折損している。外形の内外ともに研磨を加えてあるが、表面は方射助が平面に磨減する程、磨り面を残している。3、4はメンガイ製品で内外輪が研磨されている。4は石灰分の付着があり、全体に白色化している。

##### 貝 札（第24図 5）

イモガイの体層部を素材にした製品である。沖縄貝塚時代後期の貝塚から出土していく資料の一つである。（アカジャヤンガー貝塚<sup>註1</sup>、本部町兼久原貝塚<sup>註2</sup>、キガ浜貝塚<sup>註3</sup>）

これまでに各遺跡から出土した資料では、原材料から外形をカッティングしたあと全面に研磨仕上げをしてある。表面には鋭利な刃物でなければ細加工がむつかしいような、細い線彫りの文様を細工したものがあり、さらに左右対象の幾何学文様や対の小孔を穿った資料が出土している。手の器用さを要求した製品の一つで、モチーフの正確さに目を見はる。

これまでに出土した形態の中には、伊江島ナガラ原西貝塚<sup>註4</sup>で出土した例のように角形の外形に上下、左右に刻みをもち、蝶型の製品なども見られ、昆虫にモチーフを求めたような造形品もある。

ところが、本資料は外形をほぼ方形状にカットし、周縁を研磨仕上げをしてあるのみで、まだ体層部のワン曲部が明瞭である。しかも外表面には細かな研磨加工面が見られない。あるいは製作中途のものであったのか、形状、長さ6.5cm、最大幅3.7cm、厚さ0.5cm。

註1 『宇堅貝塚群・アカジャヤンガー貝塚発掘調査報告』 沖縄県具志川市教育委員会 1980年3月

2 本部町文化財報告者第1集

『兼久原貝塚発掘調査報告』 本部町教育委員会 1977年

3 沖縄県文化財調査報告書第17集

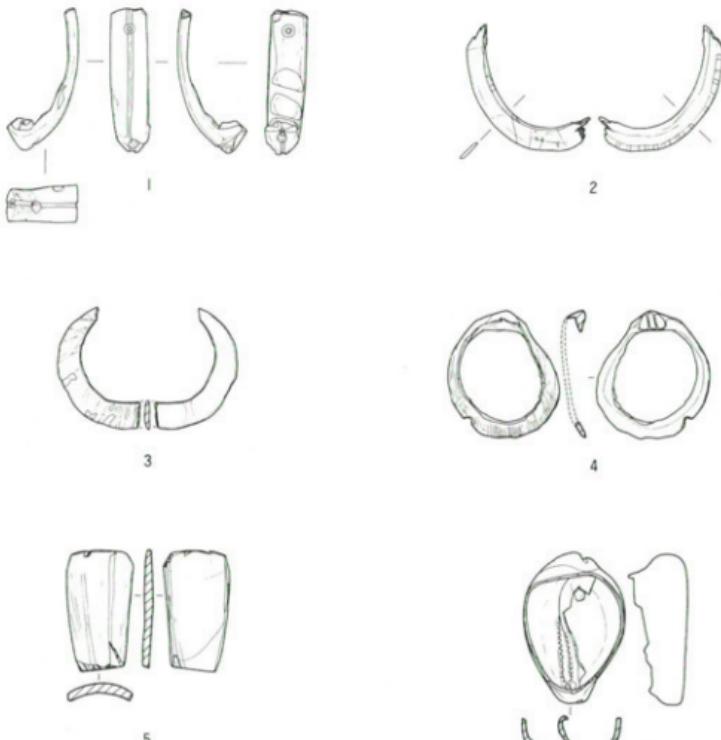
『津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書』 沖縄県教育委員会 1978年3月

4 伊江村文化財調査報告書第8集

『伊江島ナガラ原西貝塚－緊急発掘調査報告書－』 沖縄県伊江村教育委員会 1979年3月

タカラガイ製品（第24図6）

6はホシダカラの殻頂部をカットしたものである。殻頂部のみ何ヶ所からの側面より、荒欠きしてある。カッティングしたあととの研磨加工痕はない。本資料も、後期の貝塚からよく出土していくもので、タカラガイの中にも、ハナマルユキを素材にしたものがあり、カッティングした部の孔径の周縁部に磨り面を残しているものがある。用途については、現在までに残されている民俗事例を参照にその形状の類似から最も可能性のあるものとして漁網錐への効用があったものと推考されている。



第24図 貝製品（貝輪・貝札・タカラガイ製品）

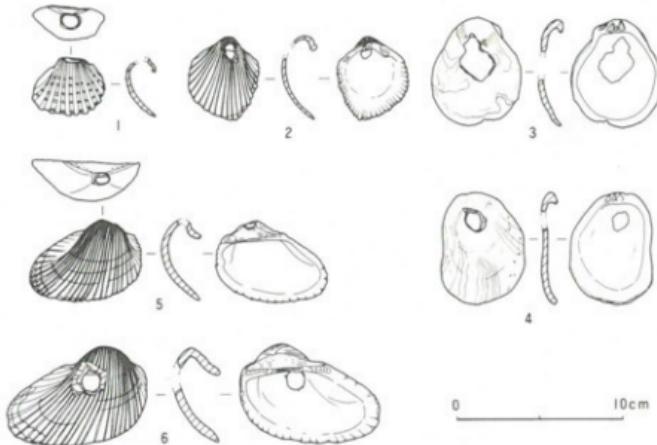
### 有孔貝製品（第25、26、27図）

25~27に図化した資料が二枚貝の有孔製品である。殻頂部をもしくはその近くを穿孔したものである。孔縁は粗雑で、出土した資料中のほとんどが二次的な加工痕が認められない。孔径の大きさは、ほぼ類似した数値を示しており、単純な殻頂部への打割孔のみではあるが、穿孔法に一定の規則性をもっているのである。内側からの叩打による穿孔法が考えられるが孔径の周縁が内側に鋭利な面を残し、外側に剥離面が出来ている。内側からの叩打衝撃によつた結果、表殻に剥離面が生じたものではないかと想定する。

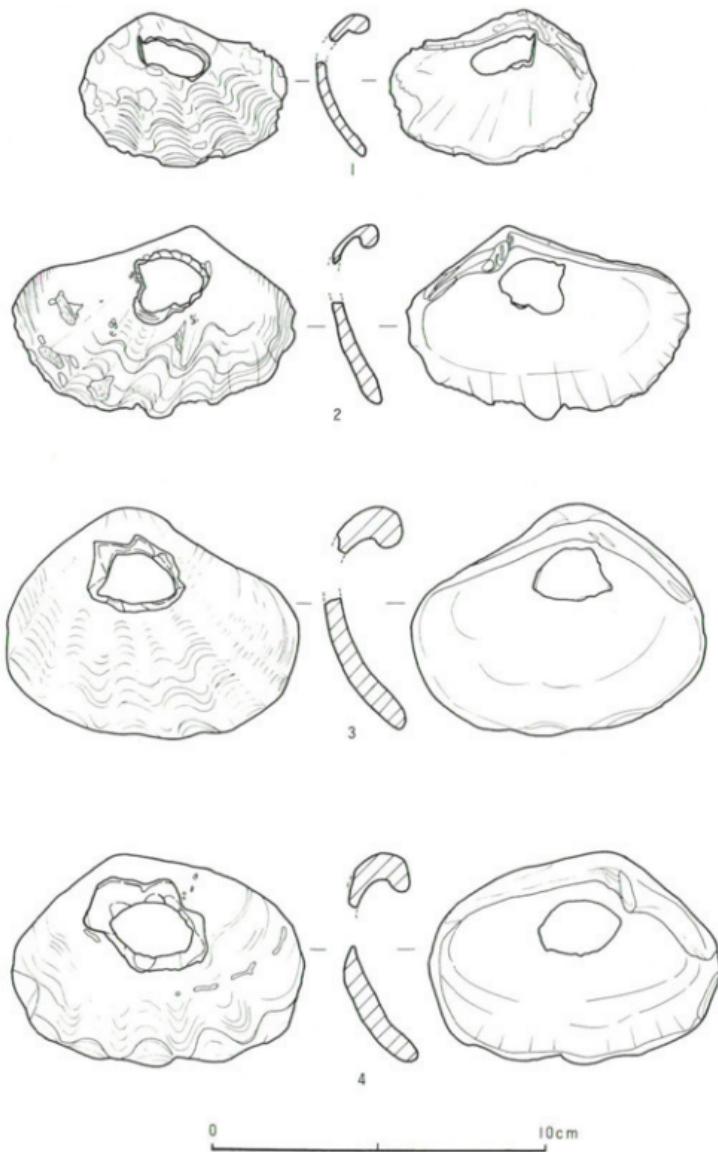
素材については、シャコガイやメンガイが際立っているが、中にサルボウやハイガイなどの利用もある。

先に記述したタカラガイ製品と同様、後期の貝塚において顕著に認められる資料の一つである。機能、用途についても、これまでに幾多の考察があるが、現時点での見解は漁網鍤としての使われ方があったものとされている。また2~3の遺跡においては、人骨に共伴した形での出土例が報告されており、多目的用途の可能性も残している。

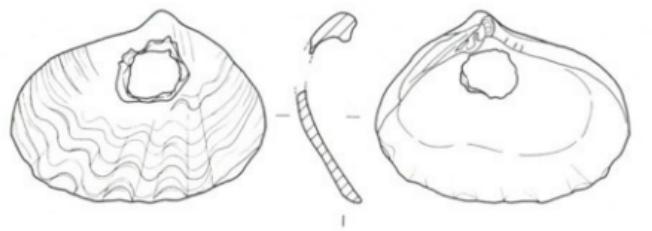
目下のところ、これらの製品が漁網鍤であるとする決定的資料が、遺跡の中において具体的に立証されてない部分があり、今後、さらに資料の蓄積をまたねばならない。具体的には、同時期における遺跡間での資料の出土形態であるが、出土する地点内の集合的な形での個数の出土や網の素材そのものである纖維の付着痕の確認などである。いずれにおいても困難さを伴う問題点であるが、今後出土する資料の中に最も望まれるポイントの一つである。



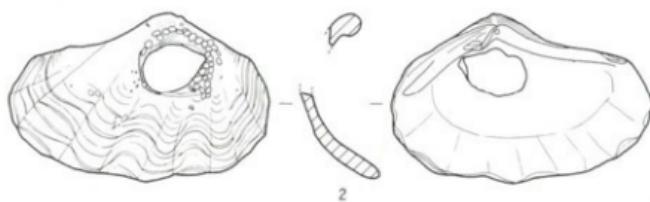
第25図 有孔貝製品実測図（ハイガイ・メンガイ・サルボウ）



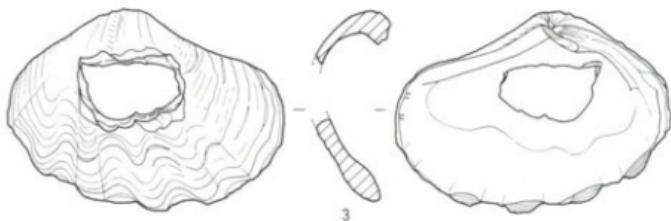
第26図 有孔貝製品 実測図 (シャコガイ)



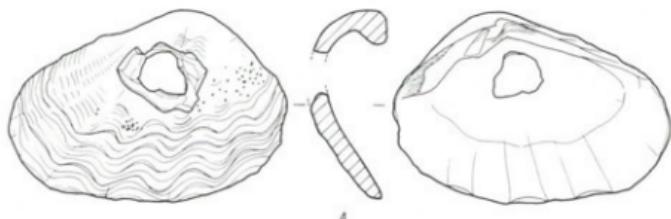
1



2



3



4

0 10cm

第27図 有孔貝製品（シャコガイ）実測図

表2 二枚貝有孔製品出土一覧

No	出 土 地			貝 樹	殻高	殻長	孔		重 量	左側 右側	縫縫	孔の状況			因 素 No	加 工 状 況	
	地区	グリッド	層				たて	よこ				形 状	位 置	穿 孔			
1	I		表探(洞内)	ウスイロハマグリ	45.0	48.5	9.4	13.6	10.0	R	×	円形	中・後	内	⑩	孔の打痕が明瞭である。	
2	I		表探	リュウキュウサルボウ	47.9	61.9	6.2	6.5	61.9	L	×	+	上・上	外	⑪	腹縫部には摩耗がみられる。	
3	I		表探	リュウキュウサルボウ	34.5	55.2	8.0	9.4	18.0	R	×	不定形	上・上	内	⑫		
4	I	H-15	表土	ヒ レ ジ タ コ	80.4	100.8	27.5	☆ 41.8	87.5	R	×	+	中・中	内	⑬	内側に若干破損あり、風化気味。	
5	I	H-15	表土	ヒ メ ジ タ コ	66.0	105.8	18.1	29.0	95.0	R	×	楕円形	上・後	内	⑭		
6	I	J-13	表土	リュウキュウサルボウ	☆ 22.3	☆ 26.3	5.2	5.0	4.0	L	×	不定形	上・上	外	⑮	腹縫部は破損、穿孔は微弱部にある。	
7	I	H-14	I	リュウキュウサルボウ	49.9	59.4			25.0	L	×	楕円形	上・上	外	⑯	穿孔は微弱部にある。	
8	I	H-14	I	リュウキュウサルボウ	31.2	40.8	7.0	10.3	10.0	L	×	不定形	上・上	外	⑰	自然?微弱部に穿孔。	
9	I	I-15	II	ヒ メ ジ タ コ	38.8	60.3	12.2	13.7	15.0	R	△	楕円形	上・上	内		全体によく整っている。	
10	I	I-15	II	リュウキュウサルボウ	32.0	52.0	15.7	14.2	12.0	R	×	+	上・上	内			
11	I	I-19	I	ハ マ ダ リ	52.8	62.1	13.3	15.6	30.0	L	×	円形	外	⑲			
12	I	J-10	I	リュウキュウサルボウ	32.9	59.7	10.1	7.6	16.0	L	×	不定形	上・上	外	⑳	微弱部に穿孔。	
13	I	J-10	I	メ ン ガ イ	58.2	61.7	29.0	29.0	21.0	L	×	円形	中・中	?	⑳		
14	I	J-12	I	シ レ ナ シ ジ ミ	49.7	61.6	7.4	9.6	25.0	R	×	不定形	上・中	内	⑳		
15	I	J-15	I	ヒ メ ジ タ コ	61.8	83.8	12.2	19.2	46.0	R	△ 中・後 後	円形	上・後	内	⑳		
16	I	J-19	I	リュウキュウサルボウ	36.8	60.5	9.4	13.2	16.0	R	×	+	上・上	外	⑳	腹縫部は摩耗。微弱部に穿孔(自然)?	
17	I	II	灰黒砂10/20	メ ン ガ イ	70.3	52.3	24.4	12.2	35.0	R	△	不定形	上・上	?	⑳	腹縫部は摩耗。孔は自然?	
18	I	II	灰黒砂10/20	ヒ メ ジ タ コ	41.8	66.7	9.0	14.7	26.0	R	△ 前・中 先端	+	上・後	内	⑳		
19	I	I-12	II	灰黒砂10/20	リュウキュウサルボウ	38.5	69.6	4.7	6.7	28.0	R	×	円形	上・上	外	⑳	微弱部に穿孔。
20	I	I-17	II	+ 20/30	メ ン ガ イ	60.5	53.6	25.9	19.6	15.0	L	×	不定形	上・中	?	⑳	孔は摩耗している。自然?
21	I	I-17	II	茶褐色土	メ ン ガ イ	59.0	52.9	11.0	12.5	21.0	L	×	円形	上・中	?	⑳	
22	I	I-18	II	+ 6/30	リュウキュウサルボウ	30.5	43.8	5.3	8.4	10.0	R	×	楕円形	上・上	外	⑳	孔は微弱部にあり、摩耗?
23	I	J-13	II	+ 6/10	ヒ メ ジ タ コ	39.3	☆ 48.2	9.8	☆ 8.5	15.0	L	△ 前・中 後	不定形	中・後	内	⑳	破損。
24	I	J-14	II	+ 10/20	リュウキュウサルボウ	34.2	44.8	8.0	8.8	10.0	L	×	楕円形	上・上	内	⑳	
25	I	J-14	II	30/49- 10/20	メ ン ガ イ	42.4	45.3	18.0	10.7	10.0	L	×	円形	中・中	外	⑳	孔は新しい。
26	I	K-11	II	灰白砂細下	カ キ	41.7	57.8	10.0	17.3	29.0	L	×	楕円形	上・上	内	⑳	
27	I	K-11	II	+ 10/20	シ レ ナ シ ジ ミ	53.2	63.2	12.5	16.4	29.0	R	×	縫長	中・後	内	⑳	
28	I	K-12	II	+ 10/20	カ ウ ラ ガ イ	30.9	33.6	7.2	10.9	5.0	L	△	不明	上・上	?	⑳	腹縫部は摩耗をうけている。
29	I	K-12	II	灰黒砂10/20	カ ウ ラ ガ イ	47.7	40.4	11.3	6.2	15.0	L	×	不定形	上・上	内	⑳	複孔。
30	I	K-12	II	+ 10/20	リュウキュウサルボウ	39.0	60.3	6.9	9.5	26.0	R	×	楕円形	上・上	外	⑳	微弱部に穿孔。
31	I	K-12	II	灰黒砂10/20	リュウキュウサルボウ	28.8	46.1	6.6	10.9	12.0	L	×	+	上・上	外	⑳	微弱部に穿孔。
32	I	K-12	II	+ 10/20	リュウキュウサルボウ	34.4	48.4	6.7	7.3	15.0	L	×	円形	上・上	内	⑳	
33	I	K-12	II	灰黒砂20/30	リュウキュウサルボウ	42.2	53.2	16.1	16.6	28.0	L	×	+	上・上	内	⑳	
34	I	K-14	II	灰黒砂10/20	ヒ メ ジ タ コ	58.4	83.5	14.5	19.3	54.0	L	×	不定形	上・中	内	⑳	
35	I	K-14	II	灰黒砂10/20	ヒ メ ジ タ コ	66.4	91.3	14.3	20.4	70.2	R	×	楕円形	上・後	内	⑳	腹縫部は若干摩耗する。

表3 二枚貝具製品一覧

No.	出 土 地			貝 種	組合	孔 たて よこ	重 量	名 称 若 母	形 線	孔の状況			固 体 No.	加 工 状 況								
	地区	グリッド	層							孔の状況												
										形 状	位 置	穿 孔										
36	I	K-14	II	灰黒砂10/20	ヒメジヤコ	70.2	93.5	14.4	18.0	80.0	L	×	楕円内 上・後 内	①								
37	I	K-15	II	* 10/20	シレナシジミ	57.0	66.0	22.1	9.9	25.0	R	×	不定形 中・後 内	②								
38	I	K-15	II	* 10/20	リュウキュウサルボウ	41.0	57.0	5.8	8.5	21.0	L	×	楕円内 上・上 外	③	最頂部に穿孔。							
39	I	K-16	II	* 10/20	リュウキュウサルボウ	36.8	51.7	16.0	13.7	20.0	L	×	不定形 上・上 内	④	最頂部に穿孔。							
40	I	K-16			ヒメジヤコ	69.2	112.4	18.5	28.9	105.0	R	×	楕円内 上・後 内	⑤								
41	I	K-16			ヒレジヤコ	78.8	120.9	17.2	25.5	114.0	L	×	= 上・後 内	⑥	複孔。							
42	I	L-12	II	灰黒砂10/20	ハイガイ	32.9	42.0	9.0	10.0	12.5	R	×	円形 上・中 内		この種は殻内ではじめて。							
43	I	L-12	II	灰黒砂10/20	ヒメジヤコ	45.1	61.6	9.8	19.4	16.0	L	×	楕円内 上・後 内	⑦	風化跡。							
44	I	L-13	II	黒砂 0/20	リュウキュウサルボウ	38.6	66.1	5.4	10.4	32.0	R	×	不定形 上・上 外	⑧	複孔。最頂部に穿孔。							
45	I	L-14	II	* 0/20	シラナミ	49.3	135.4	24.8	17.2	175.0	R	×	縫合 上・中 内	⑨	孔は若干後背縫より、貝殻に厚手である。							
46	I	L-14	II	黒砂 0/20	ヒメジヤコ	57.8	80.5	9.1	11.3	35.0	R	×	楕円内 上・後 内	⑩								
47	I	L-14	II	黒砂 0/20	リュウキュウサルボウ	44.9	66.4	5.8	8.3	35.0	R	×	= 上・上 外	⑪								
48	I	L-14	II	黒砂 0/20	リュウキュウサルボウ	35.2	52.2	3.5	5.7	20.0	L	×	= 上・上 外	⑫	最頂部に穿孔。							
49	I	L-14	II	黒砂 0/20	リュウキュウサルボウ	33.8	59.2	10.1	16.1	24.0	R	×	不定形 上・上 外	⑬	最頂部に穿孔。							
50	I	L-14	II	黒砂 0/20	リュウキュウサルボウ	33.3	44.4	5.4	7.7	10.0	L	×	楕円内 上・上 外	⑭	最頂部に穿孔。							
51	I	L-15	II	* 10/20	ヒメジヤコ	67.0	86.2	14.9	22.3	8.0	L	△	不定形 上・中 内	⑮	複孔が摩耗する。							
52	I	L-15	II	黒砂 0/20	リュウキュウサルボウ	41.0	62.2	6.0	8.9	35.0	L	×	楕円内 上・上 外	⑯	最頂部に穿孔。							
53	I	L-15	II	黒砂 0/20	リュウキュウサルボウ	41.0	55.7	9.2	11.9	17.0	L	×	= 上・上 外	⑰	最頂部に穿孔。							
54	I	M-12	II	灰黒砂	リュウキュウサルボウ	48.2	56.4	6.9	8.8	30.0	L	×	円形 上・上 外	⑱	最頂部に穿孔。							
55	I		II	灰黒砂 10/20	ヒメジヤコ	72.4	94.8	10.0	12.8	70.0	L	×	楕円内 上・後 両側	⑲								
56	I		II	灰黒砂 10/20	ヒメジヤコ	53.4	84.5	15.4	15.6	35.0	R	×	不定形 上・後 内 ?	⑳	貝殻全体が風化する。自然。							
57	I		II	* 0/10	メンガイ	68.4	60.9	31.4	29.0	40.0	L	△	× 上・中 ?	㉑	複孔部は全体的に摩耗。自然。							
58	I	F-8.9	III	黄白砂	リュウキュウマスオ	55.0	--	12.8	12.2	20.0	L	×	円形 上・中 内	㉒								
59	I	I-14	III	灰黒砂	メンガイ	49.2	46.3	25.3	23.2	12.0	L	×	不定形 中・中 ?	㉓								
60	I	I-16	III		リュウキュウサルボウ	53.4	85.7	11.9	11.1	45.0	R	×	円形 上・後 内	㉔	穿孔はていねい。							
61	I	I-16	III		ヒレジヤコ	64.4	93.4	23.2	25.4	75.0	R	△	不定形 上・後 内	㉕	複孔は摩耗している。							
62	I	J-16	III		ヒメジヤコ	41.3	66.2	6.1	6.9	16.0	R	×	円形 上・後 内	㉖								
63	I	J-16	III		リュウキュウサルボウ	38.7	52.0	10.3	9.0	18.0	L	×	不定形 上・上 内	㉗	穿孔はていねい。							
64	I	K-14	III	白砂 0/10	リュウキュウサルボウ	49.0	72.8	10.0	9.2	50.0	R	×	= 上・上 内	㉘								
65	I	K-15	III	* 0/10	ヒメジヤコ	76.0	101.8	32.2	40.1	87.5	R	×	= 中・後 内	㉙	孔が大きくなっている。							
66	I	K-15	III	* 0/10	ヒメジヤコ	63.6	86.6	16.2	24.4	20.0	L	△	楕円内 上・後 内	㉚	複孔。							
67	I	K-15	III	* 0/10	ヒメジヤコ	78.6	104.0	19.4	34.3	125.0	L	×	不定形 上・中 内	㉛	複孔。貝殻厚い。							
68	I	K-15	III	* 0/10	シラナミ	58.0	100.4	23.5	29.4	70.0	L	△	円形 中・後 内	㉜	複孔。貝殻厚い。							

注 ☆印は破損部の計測

表4 二枚貝具品一覧

No.	出 土 地			貝 種	殻高	殻長	孔 たて よこ	重 量	左 右 前 後	殻縫	孔の状況			固 体 No.	加 工 状 況		
	地区	グリッド	層								形 状	位 置	穿 孔				
49	I	K-15	Ⅲ	0/10	ヒメジヤコ	71.6	107.8	14.0	17.5	122.5	R	×	不定形	上・後	内	⑩	複孔。
70	I	K-15	Ⅲ	白砂 0/10	リュウキュウサルボウ	30.5	41.9	6.0	10.2	12.0	R	×	楕円	上・上	外	⑪	殻頂部に穿孔。 殻縫部は摩耗。
71	I	K-15	Ⅲ	白砂	リュウキュウサルボウ	30.1	28.9	5.0	4.6	4.0	L	×	円形	上・上	外	⑫	殻頂部に穿孔。 殻縫部は摩耗。
72	I	K-16	Ⅲ	白砂じやゆ屋 0/10	リュウキュウサルボウ	46.8	79.3	7.2	13.5	30.0	L	△	楕円	上・上	外	⑬	殻頂部に穿孔。 殻縫部は摩耗。
73	I	K-16	Ⅲ	+ 0/10	リュウキュウサルボウ	25.0	33.7	3.0	6.7	5.0	R	×	不定形	上・上	外	⑭	殻頂部に穿孔。自然 か？殻縫部は摩耗。
74	I	J-12	Ⅳ	+ 0/10	ハイガイ	46.0	49.5	5.1	9.3	35.0	R	×	楕円	上・上	外	⑮	
75	I	J-6	Ⅳ	黄白砂 0/20	ヒメジヤコ	90.0	120.0	21.0	25.0	182.0	L	×	不定形	上・後	内	⑯	
76	I	J-6	Ⅳ	+ 0/20	ヒメジヤコ	46.0	72.1	9.0	13.0	24.0	R	×	楕円	上・後	内	⑰	
77	I	J-15	Ⅳ	+ 0/20	メンガイ	41.9	50.7	11.1	9.9	30.0	R	△	+	上・上	内	⑱	殻縫部は摩耗。
78	I	J-15	Ⅳ	+ 0/20	リュウキュウサルボウ	30.2	21.3	4.1	3.4	5.0	R	×	円形	上・上	外	⑲	殻頂部に穿孔。後背縫部 から腹縫部にかけて破損。
79	I	J-16	Ⅳ	+ 0/20	ヒメジヤコ	49.1	76.6	11.0	11.0	35.0	L	×	不定形	上・後	内	⑳	
80	I	J-16	Ⅳ	黄白砂 0/20	ヒメジヤコ	45.4	44.4	18.2	19.9	56.0	R	×	+	上・後	内	㉑	殻縫部は摩耗。
81	I	J-16	Ⅳ	黄白砂 0/20	リュウキュウサルボウ	34.6	53.6	7.4	12.5	15.0	L	×	楕円	上・上	内	㉒	
82	I	J-17	Ⅳ	黄白砂	リュウキュウサルボウ	38.0	57.2	7.7	9.0	24.0	R	×	円形	上・上	内	㉓	
83	I	J-17	Ⅳ	黄白砂	リュウキュウサルボウ	58.5	67.7	9.2	15.9	50.0	R	△	楕円	上・上	外	㉔	殻頂部に穿孔。 殻縫部は摩耗。
84	I	J-17	Ⅳ	黄砂	リュウキュウサルボウ	36.1	52.0	10.7	16.9	52.0	L	×	+	上・上	外	㉕	殻頂部に穿孔。
85	I	J-17	Ⅳ	黄白砂	ヒメジヤコ	80.3	111.6	19.8	20.2	90.0	L	×	+	上・中	内	㉖	
86	I	H-14		暗褐色砂	ヒメジヤコ	73.8	98.3	17.2	21.0	75.0	R	×	円形	上・後	内	㉗	
87	I	I-15		暗褐色层理砂	ヒメジヤコ	57.0	85.8	15.8	23.0	45.0	L	×	楕円	中・後	内	㉘	
88	I	K-13 -L-13	アビ	ハイガイ	30.8	33.6	3.9	4.5	10.0	L	×	+	上・上	外	㉙	殻頂部に穿孔。	
89	I	J-17	Ⅲ	黒砂	リュウキュウサルボウ	37.9	72.3	☆	☆	50.0	L	×	?	上・上	内	㉚	殻頂部破損。
90	I	K-15	Ⅱ	0/20	リュウキュウサルボウ	51.5	69.2	5.7	6.9	62.0	R	△	円形	上・上	外	㉛	
91	II	P34-35	I		ヒレジヤコ	55.4	92.3	13.9	14.5	55.0	L	△	+	中・後	内	㉜	殻縫部は摩耗。
92	II	G32-33	Ⅱ	灰白砂	シラナミ	43.4	71.2	5.6	7.9	22.0	L	後	楕円	上・後	?	㉝	
93	II	G32-33	Ⅱ	灰白砂	カワラガイ	38.2	33.2	5.9	6.9	6.0	L	×	円形	上・上	外	㉞	殻頂部に穿孔。後背縫部 が一部破損。
94	II	G32-33	Ⅱ	0/30	リュウキュウサルボウ	32.2	43.8	2.7	4.7	10.0	L	×	不定形	上・上	外	㉟	殻頂部に穿孔。貝全殻が摩耗。
95	II	G32-33	Ⅱ	0/30	リュウキュウサルボウ	34.4	49.4	4.0	4.2	10.0	L	×	円形	上・上	外	㉟	殻頂部に穿孔。
96	II	G32-33	Ⅱ	灰白砂	リュウキュウサルボウ	27.0	32.0	3.0	4.0	6.0	L	△	+	上・上	外	㉟	殻頂部に穿孔。殻縫部 は摩耗。
97	II	G32-33	Ⅱ	灰白砂	リュウキュウサルボウ	30.6	☆ 28.7	4.4	5.5	4.0	L	×	+	上・上	外	㉟	殻頂部に穿孔。殻縫部 前背縫部が破損。
98	II	O-31	Ⅲ		ヒメジヤコ	44.5	58.7	5.5	7.1	15.0	L	×	楕円	中・後	外	㉟	孔に摩耗痕。
99	II	O-31-32	Ⅲ		シラナミ	64.5	92.1	23.0	25.2	49.0	R	×	不定形	上・後	内	㉟	殻縫部は摩耗。
100	II	O-37	Ⅲ	耕土	リュウキュウサルボウ	37.4	52.0	6.9	10.0	18.0	R	△	円形	上・上	外?	㉟	殻縫部は摩耗。
101	II	O-37	Ⅲ	耕土	ヌメメガイ	46.3	55.7	11.4	9.4	19.0	L	×	不定形	中・後	内	㉟	

表5 二枚具有孔製品一覧

No.	出 土 地			目 標	高さ	幅長	孔 たて よこ	重量	左 右 輪	腹縁 背縁	孔の状況 -			回数 No.	加 工 状 況			
	地区	グリッド	層								形狀	位置	穿孔					
102	II	P30-31	II	黒土	10/15	リュウキュウサルボウ	36.0	53.0	8.8	11.9	22.0	R	×	横楕円	上・上	外	◎	腹縁部に穿孔(自然?)、 腹縁部に穿孔。
103	II	P30-31	II	黒土	10/15	リュウキュウサルボウ	38.0	61.0	7.0	9.3	26.0	R	×	不定形	上・上	外	◎	腹縁部に穿孔(自然?)、 腹縁部に穿孔。
104	II	P30-31	II	黒土	10/15	リュウキュウサルボウ	31.6	47.0	8.0	10.4	10.0	R	×	△	上・上	外	◎	腹縁部の穿孔は自然。 腹縁部に穿孔。
105	II	P-31	II		0/20	ヒメジヤコ	68.6	97.2	14.0	15.8	58.0	R	前後	△	上・中	内	◎	
106	II	P-31	II		0/20	ヒメジヤコ	65.0	110.4	15.7	17.6	98.0	R	×	△	上・中	内	◎	
107	II	Q-34	II	褐色土	シラナ	I	85.4	135.2	23.5	31.7	330.6	R	後	横楕円	上・後	内	◎	
108	II	O-33	II	黄砂	0/10	ハイガイ	38.8	39.7	3.9	6.5	16.0	L	△	△	上・上	外	◎	腹縁部に穿孔。 其全体が穿孔。
109	II	P30-31	II			リュウキュウサルボウ	39.2	60.0	10.3	16.8	22.0	L	×	△	上・上	外	◎	腹縁部に穿孔。
110	II	P30-31	II			リュウキュウサルボウ	52.4	74.7	9.3	10.5	40.0	L	×	円形	上・上	外	◎	腹縁部に穿孔。 其全体が穿孔。
111	II	P30-31	II			シレナシジミ	52.9	62.0	10.1	10.0	15.0	L	×	不定形	上・後	内	◎	腹縁部に穿孔。
112	II	P30-31	II			シラナ	37.8	67.2	7.8	11.7	16.0	R	×	横楕円	中・中	外	◎	孔は専用あり。
113	II	Q-31	II			リュウキュウサルボウ	34.8	54.0	4.3	6.5	20.0	R	×	△	上・上	外	◎	腹縁部に穿孔。
114						リュウキュウサルボウ	48.1	81.5	7.0	11.1	52.0	R	×	不定形	上・上	外	◎	腹縁部に穿孔。 腹縁部に穿孔。
115						リュウキュウマヌオ	46.0	72.2	15.6	18.7	18.0	L	後	△	中・後	内	◎	
116						ハイガイ	42.4	51.7	5.0	7.1	26.0	R	×	横楕円	上・上	外	◎	腹縁部に穿孔。

(注) 1 左殻 (L)、右殻 (R) とする

2 「腹縁」の項→×→調整なし △若干の調整あり 前→前背縁側の

調整あり 後→後背縁側の調整あり 中央→中央部分の調整あり

3 「穿孔」の項内→内殻から外殻に穿孔、外→外殻から内殻に穿孔

4 「位置」の項→縦→上・中・下、横→前(前背縁)、中(中央)、後(後

背縁)、縦位→横位の順で記入

5 ☆印→残存部の計測 (No43以外は完形品である)

### 貝匙 (第28図)

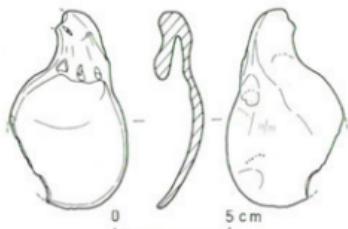
メンガイの二枚貝を素材にしたものである。殻頂部を残して、体唇部を縦にカッティングしてスプーン状に成形したものである。全体に磨滅しており、割れ口面は丸味を帯びている。本遺跡からは1点だけの出土であった。類似資料として、伊江島ナガラ原西貝塚<sup>註1</sup>や伊江島阿良貝塚<sup>註2</sup>からの出土例がある。

註1 伊江村文化財調査報告書第8集

『伊江島ナガラ原西貝塚』概報篇・自然遺物篇

沖縄県伊江村教育委員会 1977年3月

註2 『伊江島阿良貝塚発掘調査報告』沖縄県教育委員会 1983年3月



第28図 貝匙実測図

### 貝刀 (第29図)

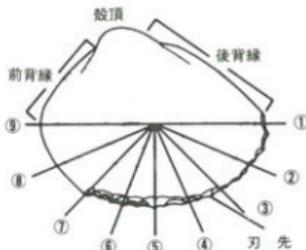
シレナシジミの腹縁部に押圧剝離によって細い刃部が付けられている。剝離の状態は前背縁の⑨から後背縁の近く①までの範囲に連続的に残されている。刃部以外には自然面のままで、中に水磨、磨耗したものも含まれている。剝離痕は外外面からのもので使用痕は明瞭でない。

加工形態は、腹縁部のみの剝離の成形のみであり刃部の機能だけを考えた貝具である。類例資料の比較検討が少ないとから、その機能用途においても判然としない。刃部の形成だけから考えると物の切断や削り用具に利用したものか。今後、本資料の刃部の詳細な比較検討が必要である。

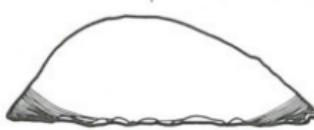
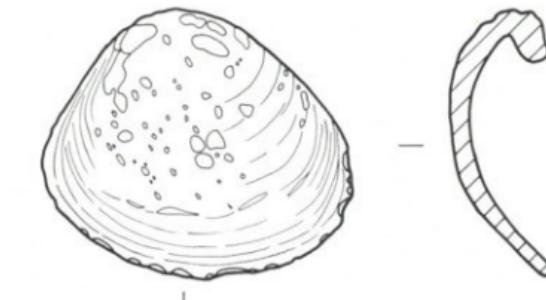
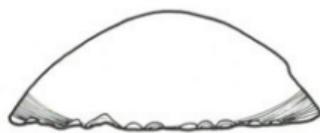
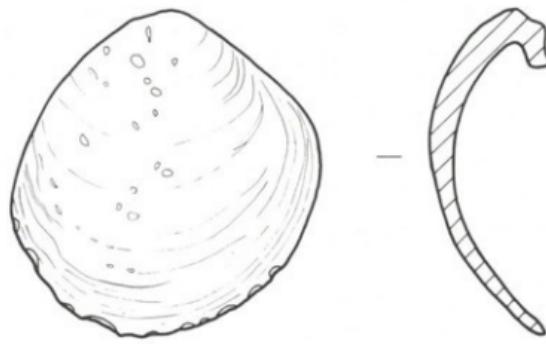
#### 参考資料

『仙台湾沿岸諸貝塚出土の貝刀』後藤勝彦

『東北歴史資料館研究紀要』第6巻 東北歴史資料館 昭和55年3月20日



第29図 貝刀模式図



0 5 cm

第30図 貝刃実測図

表6 貝刃一覧

No	出土地			貝種	左・右	殻長	殻高	刃先	附刃・範囲	備考	
	地区	グリッド	層								
1	I	K13-L-13	アゼ	シレナシジミ	左	61.3	55.0	細々	1~9		
2	+	K13-L-13	アゼ	*	左	66.7	60.2	細	1~8		
3	+	K13-L-13	アゼ	*	左	60.0	52.4	細	1~9		
4	+	J-11	I	*	右	70.6	59.7	荒	1~9		
5	+	J-16	I	*	左	69.0	59.9	細	1~8		
6	+	I-12	II	*	右	68.7	61.2	細	1~7~8~△	△	
7	+	I-13	II	*	左	50.6	45.4	荒・細	1~8		
8	+	I-15	II	*	左	56.7	51.0	細	2~8		
9	+	I-15	II	*	左	73.2	63.0	細	1~7	自然の感も受ける	
10	+	I-17	II	0/30	*	右	68.5	65	1~6	全体的に消耗	
11	+	J-11	II	0/20	*	左	63.8	55.6	細	1~8	
12	+	J-12	II	10/20	*	左	68.6	62.6	細	1~7	
13	+	J-12	II	10/20	*	左	52.2	46.6	細	1~9	
14	+	J-12	II	10/20	*	右	68.2	54.5	細	1~9	
15	+	J-17	II	0/20	*	左	65.5	57.6	細	1~9	
16	+	J-17	II	0/20	*	左	74.7	70.0	荒・やや細	1~9	
17	+	J-17	II	0/20	*	左	77.2	69.2	荒	1~8	
18	+	J-17	II	0/20	*	左	68.7	63.2	非常に荒	1~9	
19	+	J-17	II	0/20	*	左	62.2	60.8	荒	1~6	
20	+	J-17	II	0/20	*	右	62.5	51.8	荒・細	1~9	
21	+	J-17	II	0/20	*	右	60.6	53.0	荒・細	1~9	
22	+	K-12	II	10/20	*	左	62.5	53.8	細	1~9	
23	+	K-14	III	0/10	*	右	71.7	57	1~2~3~9	打削、明瞭である	
24	+	K-15	II	10/20	*	右	76.4	64.9	細	1~9	
25	+	L-14	II	0/20	*	右	56.4	46.7	細	1~7~9~△	△
26	+	L-14	II	0/20	*	左	65.0	57.6	細	1~9	
27	+	M-11	II	*	左	59.7	56.7	荒・細	1~9		
28	+	M-12	II	10/20	*	右	50.2	40.8	細	2~9	
29	+	M-12	II	10/20	*	右	52.8	46.9	荒・細	1~9	
30	+	M-12	II	10/20	*	右	57.8	46.2	荒	1~6	
31	+	M-12	II	10/20	*	右	46.4	49.9	1~7		
32	+	M-12	II	10/20	*	左	56.0	52.4	細	1~9	
33	+	K-15	IV	*	右	65.9	56.2	荒	1~9	△	
34	+	K-16	III	0/10	*	左	71.9	65.0	細	1~9	
35	+	I-12	IV	0/10	*	左	54.0	46.8	細	1~9	
36	+	J-17	IV	*	左	91.2	84.0	細	1~9	△	
37	II	II	0/10	*	左	67.1	54.9	荒	1~7		
38	+	G-32.33	II	*	右	74.2	65.5	細	1~9		
39	+	G-32.33	II	*	右	79.7	67.4	荒	1~6	貝全体に摩耗切味	
40	+	P-32	II	10/15	*	左	60.6	54.8	1~9		
41	+	Q-33	II	0/10	*	右	69.2	55.3	荒・細	1~9	
42	+	Q-34	II	*	右	75.3	64.2	荒	1~6		
43	+	P30-31	III	*	右	71.5	61.8	荒	1~9		
44	+	P30-31	III	*	右	60.4	47.2	細	1~9		
45	+	P32-33	III	*	左	78.5	72.6	細	1~9		
46	+	P32-33	III	*	左	76.1	68.2	荒	1~9		
47	+	Q-31	III	*	左	80.5	75.2	細	1~9		
48	+	Q-31	III	0/10	*	右	70.5	58.7	細	1~9	
49	+	Q-31	III	0/10	*	右	68.7	47.2	荒	1~9	
50	+	Q-31	III	0/10	*	左	67.7	59.1	1~8		
51	+	不明		*	右	77.2	64.8	3~6	内剥離	3ヶ所	

注 △印は破損の意。

## ⑤ 砂 鉄

砂鉄の出土は今調査において、まったく予期されぬ資料であった。これまでに沖縄県下で発掘調査された遺跡においても、砂鉄の出土報告ではなく、砂鉄そのものの用語が沖縄考古学研究の中においても意識的に取り上げられた例は数少ない。言わば、まったく新しい見地からの資料の操作、検討が必要になってきたと言える。

沖縄本島及びその周辺の離島、あるいは宮古・八重山の諸島に至っても、現時点においては砂鉄の存在が明確でない。特に石灰岩地帯で形成される地質からは、砂鉄が存在する可能性は、きわめて薄いとされている。それ故に今回採取された砂鉄は大変興味深い資料であるとともに、かなり重要な意義をもつことになる。特に砂中から、痕跡として確認されたものではなく、一ヵ所で集中的に多量に採取されたことに問題の焦点があると考える。

第Ⅰ地区では、洞穴の内部一面と前庭部までの間に集中的に拡がっており、第Ⅱ地区では岩蔭の周縁部において集中的に確認された。第Ⅰ地区では、第Ⅱ層の灰黒砂層中より見られ、第Ⅲ層中の砂利疊を含む層にかけて混在していた。さらに石灰分の付着とともにやや固着した状態をたもっていた。第Ⅱ地区では、第Ⅱ層の灰黒砂中より採取され、第Ⅲ層の砂利サンゴ層に拡がっていた。Ⅲ層では15~20cmの厚みをもち堆積しているのが見られた。

砂鉄採取の方法として小形の磁石を用いて吸引を試みた。



図版3 砂鉄の外観写真



図版4 磁石による砂鉄の吸引状況

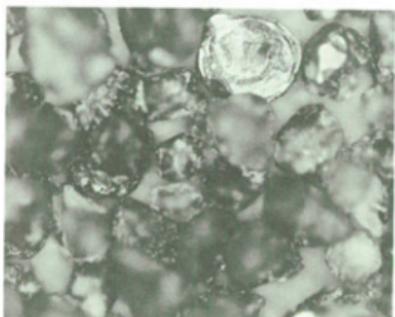
ところで、このように多量に堆積していた砂鉄の存在であるが、まず第一番目に人為的な外部からの持ち込みによるものか、あるいは、自然の堆積作用の結果によるものなのか、重大なポイントになるものと思われる。砂鉄の原産は中国地方や山陰地方において、古くから確認されており、沖縄に一番近いところでも、南限は種ヶ島、屋久島までとなっている。それ以南、奄美諸島の島々においても砂鉄の存在は判然としない。

砂鉄は鉄鉱石とともに、製鉄の際の素原料をなすものである。即断は許されないが、今回の牧港貝塚からの砂鉄の存在が、沖縄における製鉄技術の可能性も含めて考えて見たくなるが、問題は砂鉄のみではなく、製鉄に必要な道具やスラグの分析、燃料の確保などの物質的、技術的な資料の存在とその当時の社会的背景など、トータルな問題として解決されなければならぬと考える。

さらに今後の追加資料をまちたい。第2番目には、出土する時期的な問題があげられるが、今回の資料では、時期不詳としてとどめておきたい。

いずれにしても、この砂鉄出土の事実は、沖縄の鉄関係の問題や従来までに分析されたスラグから確認されている鍛冶技術の存在に大きく関与していくと思われる。

なお、付編の中に「沖縄・牧港貝塚・渡口洞穴遺跡採取砂鉄および具志原貝塚出土赤鉄鉱の金属学的調査」として、新日鉄、八幡製鉄所技術研究室の大澤正己氏の分析データの結果を合わせて掲載した。成分分析値を見てみると大変興味深い成果が報告されており、近似した数値が鹿児島、種ヶ島に求められると報告されている。



(牧港貝塚出土砂鉄)



(沖縄県工業試験場所有砂鉄サンプル)

図版 5 顕微鏡撮影による砂鉄の粒子

## ⑥ 自然遺物

自然遺物は、貝類で占められ、獸・魚骨は検出されなかった。貝種別に見てみると、イタボガキ科の1,521個が最も多く、全体の18.11%を示す。以下シレナシジミの931個、11.8%、スダレハマグリの724個、8.62%、イソハマグリの581個、6.91%、ヒメジャコの533個、6.3%となっている。次に棲息地別に見てみると、淡水河川泥底、浅海砂底、潮間帯下サンゴ礁に区分される。イタボガキの場合は、種類が多く種分けがむつかしく、科として一つに集約されており、したがって棲息地のデータが今回保留となっている。中でもシレナシジミやスダレハマグリが多いのは、牧港川の地形環境から首肯される。シレナシジミは淡水河川泥底を棲息地としており、牧港川の下流域において容易に採取された貝と判断され、スダレハマグリにおいても浅海砂底で、牧港の河口部あたりに棲息していたことが考えられる。ベスト5までにあげた貝種に限定して見れば、採取された貝は食糧の対象として促えることができる。今回集計された貝種は第7、8、9表に示すように158種にのぼっているが、その中で、特に上記の5種に集中して採取しているところを見ると、この5種に関して積極的な嗜好感覚を覚えていたものであろうか。以下各表を参照。

1. 棲息地の記号は下記のとおりである。（棲息地については主に、白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』を参考にして他から補充した。）

A. 潮間帯	E. 淡水・河川	a. 砂底	f. サンゴ礁
B. 潮間帯付近		b. 細砂底	g. 泥底
C. 潮間帯下		c. 砂礫底	
D. 浅海		d. 岩礫	

2. 最少個体数の算出は下記のようになつた。

- ① 二枚貝は左殻と右殻に分け多い方を最少個体数とした。
- ② 卷貝は殻頂を有するものを最少個体数とした。
- ③ 卷貝の中で、チョウセンザザエ、ヤコウガイ、カンギクについては殻と蓋に分け、多い方を最少個体数とした。

3. 貝種の同定は、当教育委員会報告の各遺跡のサンプルを比較しながら下記の図鑑を参考にした。

- ① 白井祥平著『原色沖縄海中動物生態図鑑』1977年新星図書
- ② 波部忠重・小管貞男共著 標準原色図鑑全集3『貝』 1977年保育社
- ③ 吉良哲明著 増補改訂版『原色日本貝類図鑑』1964年保育社
- ④ 波部忠重著『続原色日本貝類図鑑』1962年保育社

表7 自然遺物集計一覧

No	貝種	地区		I 地区					II 地区		不明	合計	標息地
		I層	II層	III層	IV層	その他	小計						
1	フタノハ科	オオベッコウガサガイ	1					1	1		2	f	
2	ユキノガサ科	リュウキュウウノアシ		1				1	3		4	f	
3		ウノアシ						1			1	f	
4	ニシキウズ科	サラサバティ	15	79	15	23	7	139	52	1	192	Bf	
5		ムラサキウズ	1	9			1	11	5		16	Cf	
6		ギンタカハマ	1					1	5		6	Cf	
7		ニシキウズ	3	2			2	7	5		12	Ce	
8		オキナワシダタミ	4		1			5			5	f	
9	リュウテン科	チョウセンサザエ	3	18	4		8	33	10		43	Cf	
10		チョウセンサザエのふた	6	30	5	6	7	54	2		56	Cf	
11		ヤコウガイ	2					2			2	Cf	
12		ヤコウガイのふた	3		1	1	5	1			6	Cf	
13		カシギク	10	95	11	1	20	137	56		193		
14	アマオブネ科	リュウキュウアマガイ	1					1			1	Ae	
15		アマオブネ	6	1			1	8	1		9	Ad	
16		イトマキアマガイ	1	1				2			2	Ae	
17		キバアマガイ					2	2			2	Ae	
18		アマガイ						1			1		
19		コシダカアマガイ		2				2			2		
20	ミミズガイ科	ミミズガイ							1		1		
21	ムカデガイ科	ムラサキヘビガイ							2		2	f	
22	ゴマフニナ科	コゲニナ	8	3			3	14	2		16	f	
23	ウミニナ科	マドモチウミニナ	12	64	7	5	24	112			112	Eg	
24		ウミニナ					2	2			2	Eg	
25		センニンガイ	1		2			2			3	Eg	
26		カワアイ	2	1			3	6			6	Eg	
27		イボウミニナ	1				1	2	3		5	Ag	
28	オニノフノガイ科	オニノツノガイ	8	26		2	8	44	38	1	83	Cd	
29		クワノミカニモリ	1	1				2	3		5	Cde	
30		ヨコワカニモリ						1	1		1	Da	
31		ウミニナカニモリ		1				1			1		
32	ゾデガイ科	クモガイ	26	130	19	13	24	212	56	3	271	Ca	
33		オハグロモドキ					1	1			1	a	
34		マガキガイ	75	234	30	16	65	420	119	2	541	a	
35		スイジガイ					1	1			1	Ca	
36		オハグロガイ		1				1			1		
37		ゾデガイ科不明					2	2	9		11		
38	タマガイ科	リスガイ	1				1	2	1		3	Ca	
39		ウコントミガイ					1	1			1	a	
40		タマガイ科不明							2		2		
41	タカラガイ科	ハナマルユキ	2	17	3	1	5	28	9		37	Cde	
42		ヤクジマダカラ	2	6	1		1	10	4	1	15	CF	
43		ナツメモドキ			1			1	2		2		
44		ハナビラダカラ	6	37	7	3	12	65	41		106	i	
45		オミナエシダカラ		1			1	2	1		3	C	
46		ホシキヌタ	1	6				7	1		8	Cf	
47		ホシダカラ		4	1			5	2		7	Ce	
48		クチムラサキダカラ			1			1			1	Ce	
49		ナシジダカラ			3			3	2		5	Ce	
50		ヒロクチダカラ	1		1			1	1		1	Cf	
51		キツコウダカラ						1			2	f	
52		スソムラサキダカラ							1		1		
53		ホソヤクジマダカラ							1		1		

表8 自然遺物集計一覧

No	員種	地 区		地 区				II 地区		不明	合計	棲息地	
		I層	II層	III層	IV層	その他	小計						
54	タカラガイ科不明	1	1	1	1	3	7	6		13			
55	フジガイ科	ミツカドボラ				1	1			1	Ce		
56	ホラガイ	1	1				2	1		3	Ce		
57	サツマボラ		1			1	2			2	Ce		
58	シオボラ	1	3				4	2		6	Ce		
59	オキニシ科	シロミオキニシ	1				1	4		5			
60	ヤツシロガイ科	スクミウズラ			1		1	1		2	Ca		
61	アフキガイ科	ガンゼキボラ			2	1	3	3		6	De		
62	アカイガレイシ	1					1		1	2	De		
63	シラクモガイ								1	1	De		
64	ツノレイシ	1	1	1			3	1		4	De		
65	カスリレイシ							1		1	De		
66	シロイガレイシ				2		2			2			
67	エヅバイ科	スジグロホラダマシ	1				1			1	De		
68	イトマキボラ科	イトマキボラ	3	4	2	2	2	13	9	22	Ce		
69	チトセボラ	2	1					3		3	De		
70	ヒメイトマキボラ	1					1	1		2	Ce		
71	リュウキュウツノマタ							1		1	De		
72	オニコブシ科	コオニコブシ	1			1		2		2	De		
73	マクラガイ科	サツマビナ	1				1			1	Ca		
74	マクラガイ科不明							1		1			
75	イモガイ科	アンボンクロザメ	3	15		3	4	25	4	29	Da		
76	イボシマイモ	1	2			1	4	1		5	Dae		
77	サラサミナシ	1	3	2			6			6	De		
78	クロフモドキ	1	7	2		1	11	1		12	Da		
79	クロミナシ					1	1	2		3	Da		
80	ヤナギシボリイモ	7	20	5	6	10	48	2		50	De		
81	キヌカツギ	1					1	1		2	De		
82	コマダライモ		4			1	2	7	12	19	Ce		
83	マダライモ						2	4		6	De		
84	サヤガタイモ		2				1	2		3	Da		
85	ナガサラサミニシ	1											
86	アラレイモ					1	1	2		3	De		
87	ヒラマキイモ	1					1			3	Da		
88	ミカドミナシ	1	1				2			2	Da		
89	オトメイモ	1					1			1	Da		
90	ニシキミナシ				1		1			1			
91	イトマキイモ		2				2			2			
92	ヤキイモ	1					1			1			
93	イモガイ不明	4	23	5	4	7	43	36		79			
94	タケノコガイ科	ベニダケ	1				1			1	Da		
95	ナツメガイ		1				1	1		2	De		
96	陸産貝	4	19	2	4	2	31	3		34			
97	フネガイ科	エガイ	23 27	E8 103	22 48	6 17	44 54	329	15 39	2	660	Bd	
98	リュウキュウサルボウ	25 15	72 67	21 21	21 10	12 11	151	192 167	2	345	Da		
99	オオタカノハ					1	1	2		3	f		
100	カリガネエガイ	1	6 5	1 1		2 2	10	3 5		15	De		
101	ハイガイ	3					3	2 3		6	Dg		
102	フネガイ科不明					1	1			1			
103	イガイ科	イガイ		1			1	1		1	Ae		
104	クジャクガイ			1		1 2	3		2	5	Ae		
105	イシワリマクラ		1				1	2		2			
106	ホソスジバリガイ							1 1	1	2			

表9 自然遺物集計一覧

No	貝種	地 区		I 地 区					II 地区		不明	合計	棲息地
		I層	II層	III層	IV層	その他	小計	地区					
107	スガタママクラ			1			1				1		
108	アラスジヒバリガイ									1	1		
109	リュウキュウヒバリガイ		2	1		1	4			1	1		
110	イガイ科 不明									1	1		
111	ウグイスガイ科 アコヤガイ	1 1	8 11	10 5	8 1	2 2	32	1			33	Aa	
112	ウグイスガイ科	1	9 16	9 1	1 1	4 2	31	1 1			32		
113	ハボウキガイ			1			1				1	a	
114	イタセガイ科 キンチャクガイ					1	1	1			2	Ad	
115	イタヤ科 不明								1		1		
116	ツキガイ科 カブラツキガイ		4 1		1		5	1			6	Eg	
117	ウラキツギガイ		1 1			1 1	2	5 3			7	Ca	
118	ウミギク科 メンガイ	15 34	140 367	43 34	20 37	25 19	306	28 403	1 1	710	Ce		
119	ミノガイ科 オオミノガイ								1 1		1	C	
120	キクザル科 キクザル	5 9	96 78	28 17	7 35	13 19	187	219 228	2	417	De		
121	シロザル	1	1				1	3			3	De	
122	カネツケザル						1	1			1	d	
123	シャコガイ科 シャコゴウ	5 2	9 17	1 5	4 2		31	1 12	2	45	Dac		
124	ヒレジヤコ	5 8	44 37	6 3	8 3	9 6	75	36 27	1 2	113	Cf		
125	ヒメジヤコ	56 67	24 22	95 53	61 65	50 64	533	26 29	6 5	758	Cf		
126	シラナミ	9 8	46 32	16 11	8 6	5 9	88	36 22	1 2	126	Cf		
127	シャコガイ 不明	1	7 3	1 2	1	1	11	10 11		22			
128	ザルガイ科 カワラガイ	1 1	12	5 1	3 3		21	27 14		48	Da		
129	リュウキュウザルガイ	4 4	41 27	13 8	2 10	10 10	78	18 92		215	Da		
130	マルスダレイガイ科 スダレイハマグリ	52 32	43 39	97 83	71 58	71 57	724	142 93		866	Da		
131	スノメガイ	3 5	23 10	6 4	7 4	4 5	46	64 80	4	130	Da		
132	チャイロサラサガイ	3 2	34 28	5 4	2	6 9	53	10 8		63	Da		
133	アラスジケマンガイ	21 24	13 18	20 16	18 21	29 27	232	64 52	1 1	297	Da		
134	ホソスジナミガイ	10 14	18 159	22 23	9 11	12 16	253	133 138	1	392	Da		
135	ユカカゲハマグリ		2			6 1	8	7 4		15	Da		
136	ヤエヤマスダレ		4	1	2 1	2	9			9	Da		
137	アサリ		2	2 1			4	2 5		9	Aa		
138	チョウセンハマグリ		1 1				1			1			
139	ウスイロハマグリ	13 17	152 203	44 50	13 18	31 36	324	42 35	1 7	373			
140	チャマダラカガミ							1		1			
141	オイノカガミガイ							1		1	Da		
142	チドリマスオ科 イソハマグリ	34 47	272 389	53 79	28 50	50 86	581	38 416	20 28	1,025	Aa		
143	バカガイ科 リュウキュウバカガイ	1 4		1	2	8	2			10	Da		
144	リュウキュウアリンガイ			2			2			2			
145	ナミコガイ科 シオザザナミ	2 1			1	3				3	CC		
146	リュウキュウナミコ							1 2		2	Da		
147	ナミコガイ科 マスオガイ	3 4		2		6	3 6			12	Eg		
148	リュウキュウマスオ	5	13 19	1 1	4 3	1	30	26 22	3 1	59	Da		
149	ニッコウガイ科 ニッコウガイ	1 3	30 24	5 10	8 7	6 2	57	17 16	1	75	Da		
150	リュウキュウシラトリ	1	16 14	2 7	5	2 4	33	32 28	4 3	69	Dd		
151	ヒメニッコウガイ		7 3	1		1	9			9	Da		
152	モチズキザラ							1		1	Da		
153	シジミガイ科 シレナシジミ	91 77	516 598	70 71	56 60	111 107	931	144 159	1	1,091	Eg		
154	イタボガキ科	84 54	701 356	320 172	61 16	355 138	1,521	182 218	8 2	1,747			
155	アサジガイ科 ドゲアサジ			2			2	1		3			
156	一枚貝 不明					1	1	4		5			
157	二枚貝 不明	2	14 13	6 8	8 3	3 3	35	14 9	2 1	51			
158	マキガイ 不明		5	5			10	9		19			
	合 計	751	4,640	1,149	648	1,209	8,397	3,599	92	12,088			

注 貝種については表番号と図版51~56の番号に一致する。

## 第II地区

### 出土遺物

#### ① 土器

ここに掲載した資料は、口縁部と底部のみである。完形を示す資料はなくすべて小破片であった。口縁部の形態から器形は壺形と鉢形に分類される。

#### 口縁部（第31図1～9）

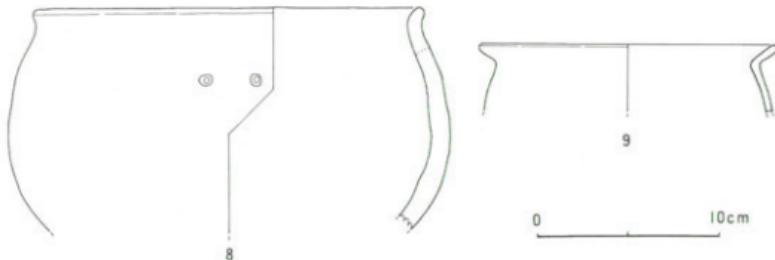
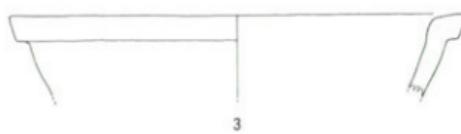
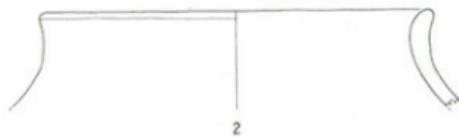
1、2が壺形の器形を作るもので、2点ともに頸部から口縁部までの長さ2.0cmを越え、口唇部が丸味をもつ。1は口縁部がほぼ直口し肩部が大きく張り出していくタイプである。2は口縁部が途中まで直口しながら、口縁部がわずかに外反する。1に比らべて肩部への張りが、ややゆるやかになる。胎土は1、2ともにザラッとした感じで細片された石英粒や貝殻を細粉して混入している。さらに鉄分を含み赤色粒子が混在している。焼成は良好で器色は淡褐色を呈している。窓ナデが表裏面に調整されている。器厚は1、2ともに口縁部で1.3cmをはかる。3～8は鉢形の器形をつくるものである。3は口縁部が外反し口縁内側が斜めに成形されている。器面はザラットしており、窓成形痕がある。胎土中細かな貝殻片やモミ殻を混入してある。モミ殻が際立っており、作意的に混在したと思われる。器色は淡褐色。器厚は口縁部で1.9cm。

4は薄手で口唇部をフラットに成形し横位に小さく張り出している。胎土中には貝殻や石英の細粉を混入してある。器面は窓ナデ成形されている。器色は褐色で器厚は口縁部で0.9cm。後期系の土器に入るのか、5も薄手の浅鉢形である。口縁部は直口するが、口唇が波状につまみあげてある。胎土中、石英粒、貝殻を混入してある。特に内側においてアバタ痕が明瞭に残っている。器色は淡褐色で器厚0.8cm。6は口縁部が内彎し、口唇幅を細く波状に作ってある。焼成は緻密であるが、窓ナデの際のものが細石粉の脱痕が見られる。胎土中、石英や石灰石を混入してある。器色は淡褐色。器厚は1.0cmとなっている。

7も口縁部が内彎し、口唇幅が細く波状を呈するものである。焼成は緻密で胎土中、石英、石灰石を混入してある。器表面はナデ成形してある。器色は茶褐色、器厚は口縁部で1.1cm。

8は今資料中、大形の破片である。口唇部が丸味をもち、口縁部が外反する。口縁部下3.5cmに外径0.9cmと0.6cmの小孔を2カ所に穿っている。胎土は緻密で焼成は良好、石英、滑石の混入があり、器表面に光沢が見られる。器色は褐色。器厚は頸部で1.0cm。

9は口縁部が「く」の字形に外反した壺形の薄手の土器である。1～8までの資料とは胎土、焼成が異なり、時期的には新しい古島から出土してくる陶質土器である。胎土は緻密で焼成もいい。器色は黄褐色。器厚は口縁部で0.4cmとなっている。



第31図 土器口縁部実測及び拓影図

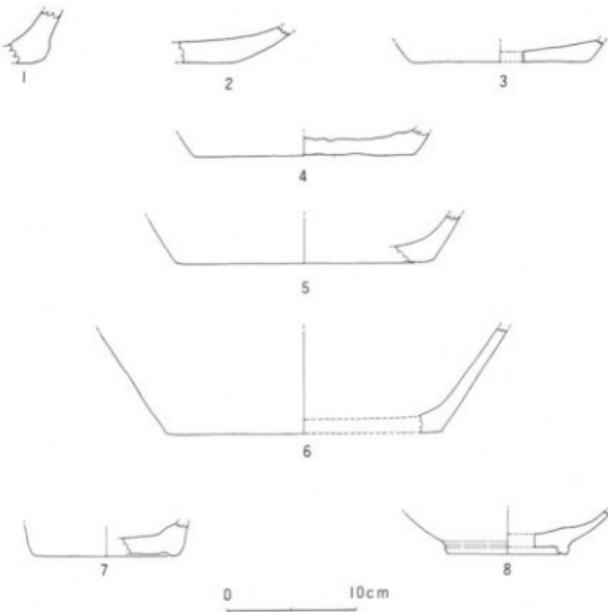
## 底 部

底部資料で図化復元出来たものは、ここにあげた8点である。

1～7までが平底、鉢形の器形で、8の1点が高台を作る碗である。1は口縁部資料に図化したNo.3と同様、胎土中にモミ殻や貝殻の細片を混ぜあわせてある。底部立ち上がりが丸味をもち厚くなっている。外底面は黒色を呈している。底器厚2.0cm。

2は立ち上がりが丸味をもち、外側へ大きく開くタイプである。底器厚は1.8cm。胎土中に石英、貝殻、滑石を混入。焼成は緻密、3は赤色粒や貝殻細片を含む。アバタ痕を残す。立ち上がりからの粘土痕が見られる。底器厚1.0cm。4は底面だけが残った資料で立ち上がりから欠損している。胎土中、細石粒や赤色の粒子を混入してある。底器厚1.3cm。

5も底面からの立ち上がりがゆるやかにのびていく。焼成は緻密、胎土中、石英、赤色粒を含む。底器厚1.5cm。6は外面が窓ナデの成形で、内面は小さなアバタ痕を残している。底器厚1.4cm。7、8は陶質土器である。7は立ち上がり面が厚手。底面が上げ底になる。底面からの立ち上がり部は、ほぼ直線で胴部へのびる。底器厚1.5cm。8は高台をもつ資料で、全体に水磨を受けたように磨減している。底器厚1.0cm。



第32図 土器底部実測図

## ② 船載陶磁器（第33図）

磁器は青磁、白磁を含めて20片足らずの出土であった。出土した資料の全てが客土中からの小破片となっている。図化したのは口縁部と底部だけで胴部においては無文細片であったため図化を省略した。全体の器形は碗と皿の二種であった。

### 青 磁（第33図1～9）

1～9までが青磁資料である。器形は1～6、9が碗で、7、8が皿である。

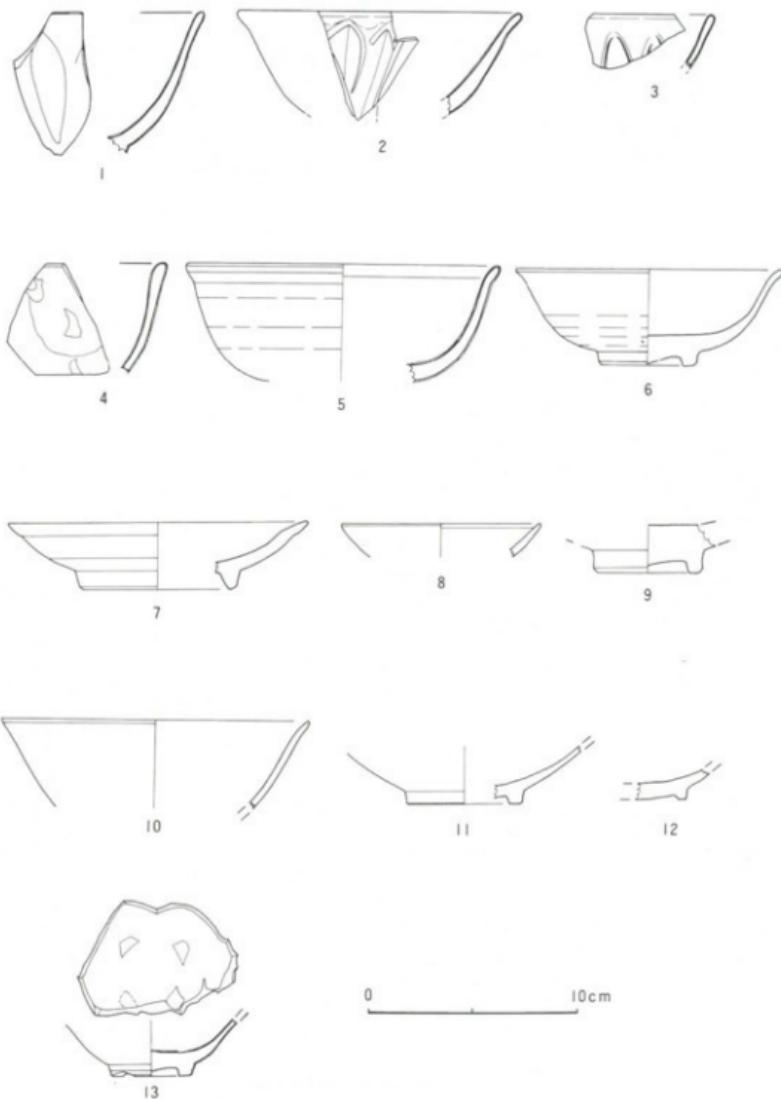
1～6までの口縁部は全て外反する。1、3は外面に幅広の蓮弁文を彫ってある。1、2は蓮弁の刺頭がまだ形をつくっているが、3は刺頭が丸く曲線をなす。1、2の蓮弁から比較するとやや形がくずれたものである。1、2ともに口唇部下に軸たれが残っている。2は口径が13.5cm。5、6は無文碗である。5は口径15.1cmで外面、内面に大きな貫入があり、口唇部が丸く玉縁状をつくる。6は口径が12.7cmの小振りの碗で、内外面に青緑色の釉がかかるが、高台疊付から外底までは無釉の状態である。内底には重ね焼きの跡がある。外面立ち上がりには石粒の付着痕が認められる。轆轤引きの跡がある。9は碗の高台資料で、高台部の残った破片はこの1点だけであった。底径4.8cm。7は小皿で高台が欠損している。内底と高台脇から立ち上がり面にかけては無釉である。底径7.1cm。8は口縁部が無釉になった。いわゆる「口禿」の小皿である。口径9.4cm。

### 白 磁（第33図10～13）

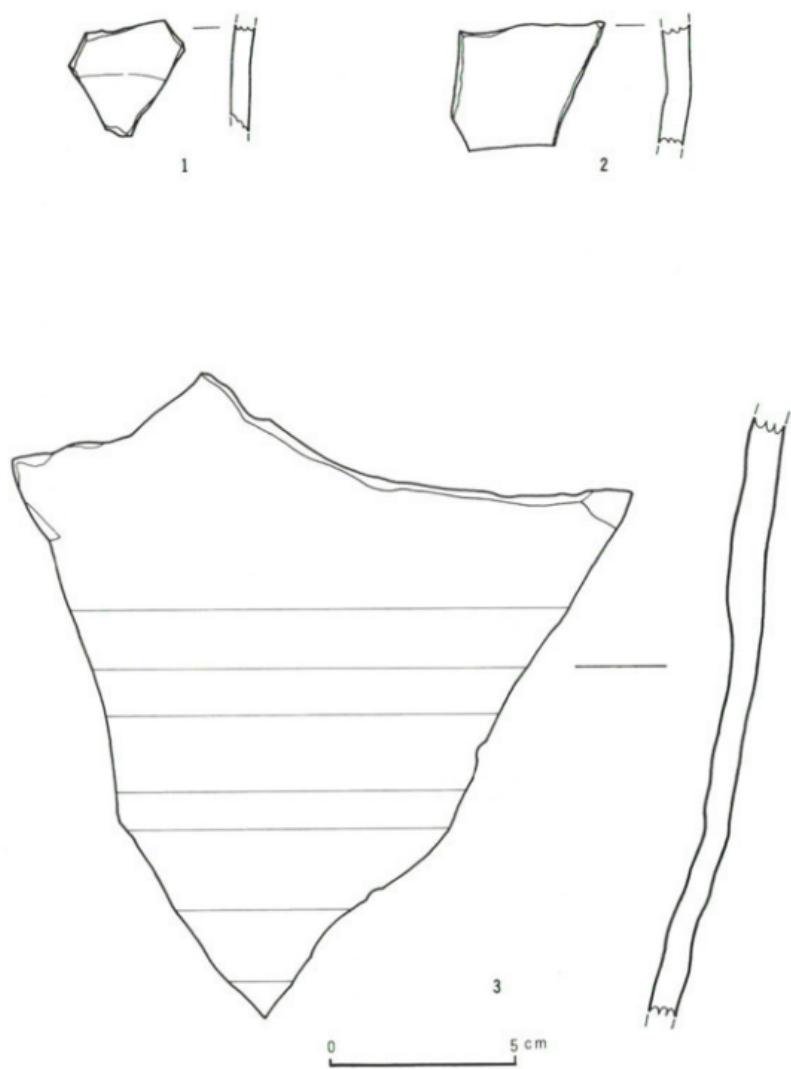
10～13までが白磁の資料である。器形は碗と皿である。10は口縁部が無釉になった「口禿」の碗である。口唇部が細まり小さくなる。全体に薄手となっている。口径14.6cm。11は底部で疊付から外底が無釉の状態である。底径5.3cm。器形は碗である。12、13は皿で、12は内外面ともに釉がかかる。高台は割れ高台となっている。13は内底から高台脇まで釉がかかっているが、疊付から外底にかけて無釉の状態となっている。高台は割れ高台で割れ目が4カ所に残る。内底見込み部に4カ所の目跡が残っている。底器径3.8cm。

## 陶 器（第34図）

陶器は胴部片でわずかに3点のみであった。南蛮系の陶器である。小片であるため器形の復元が出来ない。やや光沢のある茶褐色の釉や緑褐色の釉が内外面に施釉されている。外面にはわずかに不透明な光沢が見られる。粘土紐の輪積み痕が見られる。轆轤成形されている。轆轤引きの回転の際に出来たものか胎土中に混入した石粒の脱痕が表面に残って斑点状になっている。器厚は0.5cmと0.8cmを計測する。



第33図 磁器実測図（青磁・白磁）



第34図 陶器実測図

## 染付（第35図）

今回出土した資料中、図化掲載したものがここにあげた10点で、器形は碗、皿、徳利の3種に分類される。呉須は濃い青色と淡青色、さらにくすんだ感の青色で描いてある。

1～7の資料は概17～18世紀の作品で、明染と判断されるが、8～10は伊万里系の焼きと思われる。1は小破片であるため、文様の構成がつかめないが、内底に青色の呉須を使って花文を描いてある。胎土は灰白色で岩石質の割れ面となっている。高台の一部と内面の器形から、皿に分類出来るものか。2は口縁部の内面に1条の圓線と内底立ち上がり面に2条の圓線が巡っている。外面は、淡青色の呉須で、縦に文様を構成するが、文様帶の構図は分らない。本資料は底部を欠損しているが、この手の資料には高台の外底に「和美」の文字を記したものがある。胎土は灰白色で不純物を含む。3は内底立ち上がり面に薄い呉須色で2本の圓線を描いてあり外面には縦に蓮弁文状の線文を描いてある。高台脇にも2条の圓線が入っている。さらに薄く消えかかった状態ではあるが、外底にも2条の圓線が入っている。

高台の疊付は竹節高台に成形され細く無釉の状態である。胎土は灰青色で、気泡が見られ不純物を含んでいる。4は内底見込みに花文か文字が描かれており、外面には縦に線状の文様を描いてある。高台の脇と外底にも2条ずつの圓線が入り、外底には「和美」の文字が判読出来る。高台疊付は竹節高台と無釉のままである。胎土は灰青色で緻密。

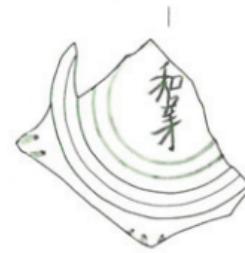
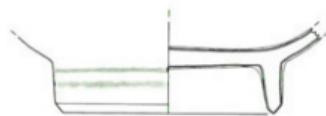
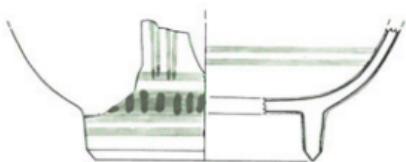
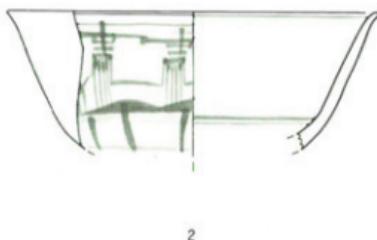
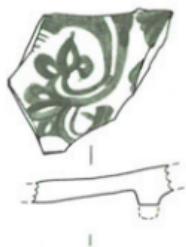
5は外面に芭蕉文と思われる文様が組み合わされて描かれている。高台脇に2本の圓線と外底に1条の圓線が入り、「大明成化年製」の銘入りとなっている。高台は疊付が0.2cm前後と極端に小さく水平に面取り成形されている。高台は無釉、胎土は青白色を呈している。

6は内底にコイと竜文の組み合わせで描かれているが、全体の構図がつかめない。内底からの立ち上がり面においても文様が描かれているがはっきりしない。外底にも2条の圓線が入っている。高台疊付は細く無釉である。高台からの立ち上がり面が、外側に小さくふくらみ、さらにくの字形に外側へ成形されている。器形は皿。

7は内底見込みに5本からなる同心円文を描き、内面全体に草花文を配してある。口縁部の内外面に1条の圓線と高台脇と外底にそれぞれ一条の圓線がある。外面口縁部下と外底中央部に文様が描かれているが、判然としない。胎土は灰青色で、ザラットした面である。疊付は無釉、外面全体に轆轤引きの跡がある。8は内底見込みに花文と内底面立ち上がりのところに2条の圓線が入っている。外面高台脇にも1条の圓線が入り、高台脇は無釉。

9は徳利で口縁部のみの資料。くすんだ感じの青色で頸部に花文を描いてある。小さな貫入が認められる。口縁から頸部内側までは施釉されているが、袋部は無釉のままである。

10は外面に網目文を描き、高台脇に2条の圓線が入っている。内面と高台疊付は無釉となっている。外面には小さな貫入が認められる。9と同様、徳利の器形をもつ。



0 10cm

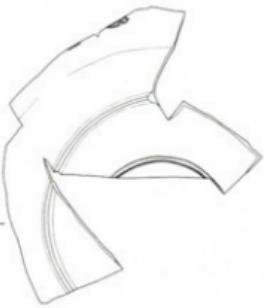
第35図 染付実測図



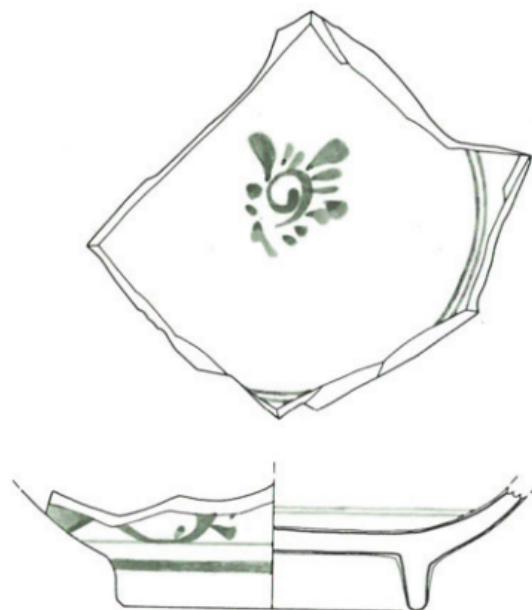
7

10cm  
0

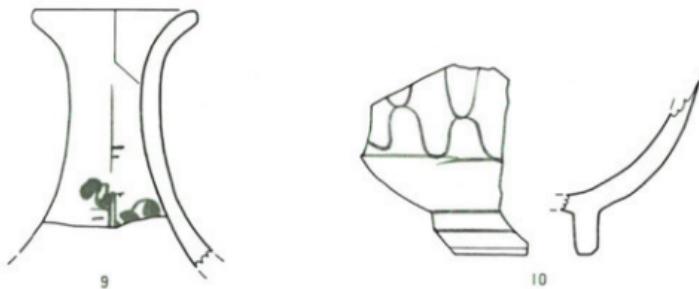
第36圖 染付夷測圖



6



8



9

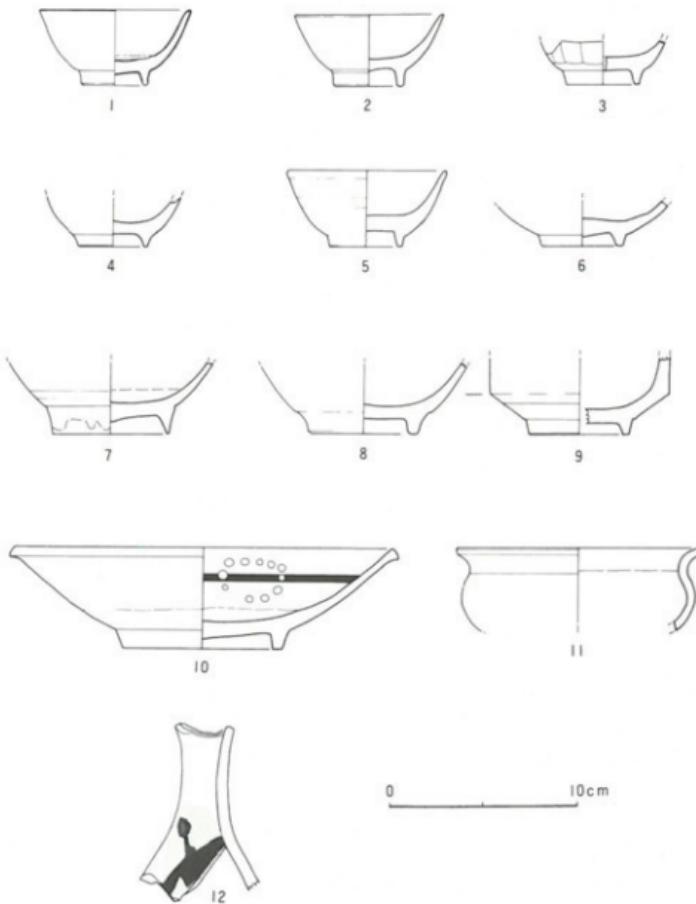
10

0 5 cm

第37図 染付実測図（伊万里系）

### ③ 沖縄製陶器（第38図）

ここに取り上げたものは全て壺屋焼きの上焼の資料で、ごく最近にまで各家庭の中において見られた焼物である。黒釉、褐釉が施釉され碗類の中には内底に重ね焼きの跡が蛇の目に残っている。碗類や香炉、徳利などバラエティーに富んでおり、全て日常の生活品として利用されてきたものである。1～10は碗類で、11が香炉、12が徳利である。



第38図 沖縄製陶器実測

#### ④ 摺 鉢 (第39、40図)

本遺跡出土の摺鉢は、口縁部、底部資料の全ての素材が沖縄製陶器であった。図化復元した口縁部は12点で、口唇の作りからA～Cの概3種に大別された。底部は平底が大部分であるが、1点だけ上げ底の資料が含まれている。以下、口縁部、底部の別に記述する。

##### 口 縁 部 (第39図)

Aは口縁部の張りが平行にはならず、やや外側へ斜めに成形されたグループで1～5までの資料である。①は口径が22.1cm口唇の表に1条の沈線が入り、口唇幅が2.9cmをはかる。内面の櫛描きは、口唇部近くまで描きあげているが、横ナデによって消されている。外面には體轆引きが残っている。②は口径が27.4cm口縁部の張りが外側へ斜めに成形されている。口唇幅2.9cm。1条の沈線が入る。櫛描きは口唇部近くまであげてある。③も口唇部に1条の沈線が入る。口径26.9cm、口唇幅2.6cm。櫛描きはナデによって消され明瞭でない。④も1条の沈線が入り、小さな気泡が生じている。口径28.2cm、口唇幅2.8cm。櫛目はシャープである。口縁部下から胴部にかけては薄手。

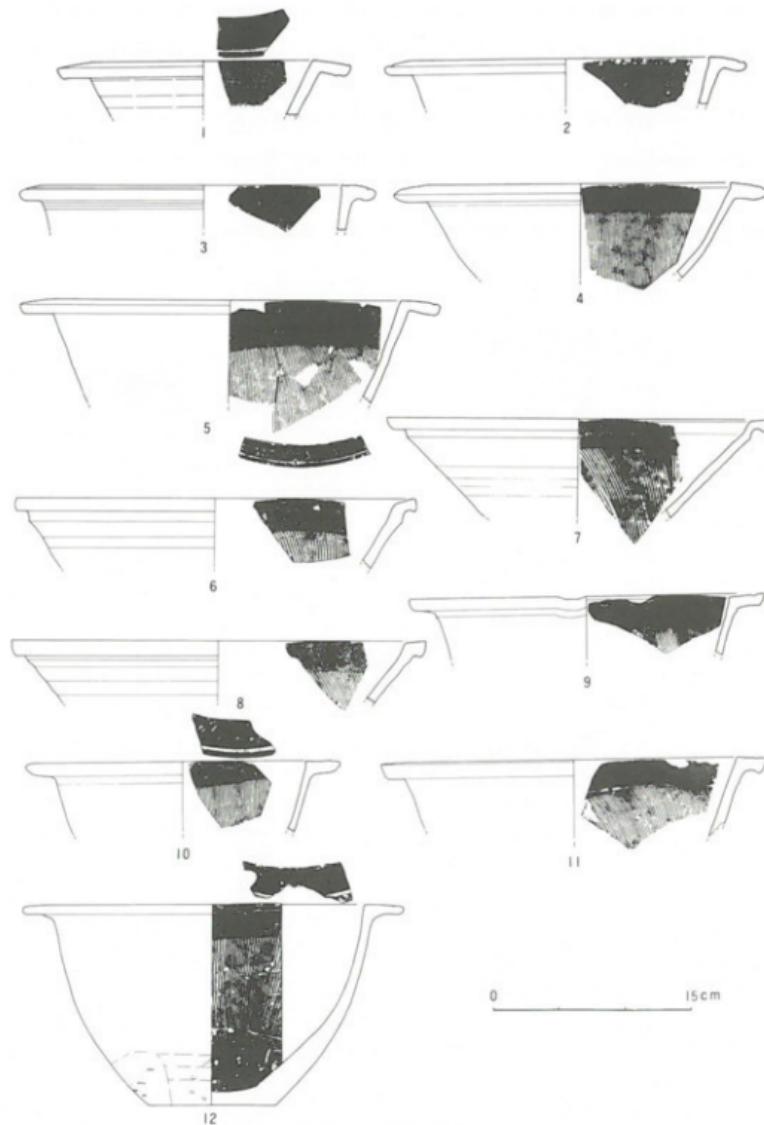
⑤も口唇部に1条の沈線が入る。口縁部まで櫛描きを残すが、ナデ消されており、口縁部下3.4cmまでがシャープに残っている。口径31.8cm。

Bは口縁部が平行に張り出さず、1のグループとは逆に上がり気味に作られたグループで、⑥～⑨の資料である。⑥は口径が30.1cm、口唇部の幅が1.6cm。内面に脱石痕が見られる。外面はやや段状に成形されている。櫛目はやや磨滅している。⑦は口径が29.0cm、口唇幅が1.5cm。10本を1単位としての櫛目を作つて描きあげてあるが、内面口縁部下2.0cmまではナデ消されている。⑧は口径が31.4cm、口縁部幅1.6cm。體轆引きの跡が残っている。外面に黄色の釉がかかる。櫛目はやや磨滅している。⑨は口径が26.9cm、口縁部幅2.6cm。1条の沈線が入る。指痕で凹みを1カ所作つてある。注口の摺鉢であったか。櫛目は10本を1単位として描きあげている。

Cは口縁部の張り出しが、ほぼ平行になるグループで⑩～⑫の資料である。⑩は口径が23.8cm、口縁幅が2.6cm。1条の沈線が入る。櫛目は明瞭。口縁部に小さなツブ状の気泡が出来ている。⑪は口径が29.3cm、口縁幅が3.0cm。胎土中に赤色粒が混入。内面は脱石粒が残っている。櫛目は内底部で、ほとんど磨滅し、なめらかになっている。

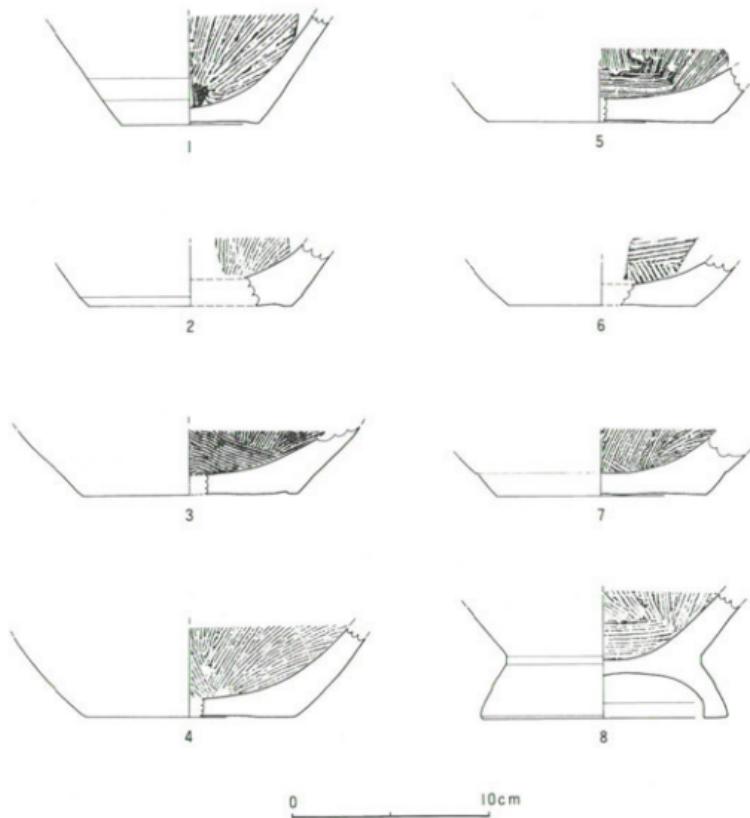
##### 底 部 (第40図)

底部は底面からの立ち上がりが直線的に胴部へ延びるものや、底面からの立ち上がりがやや丸味をもち外側に開いていくタイプがあり、さらに1点だけではあるが、高台を作る上げ底のタイプに分けられる。櫛目は8点ともに明瞭に残り、磨滅痕がほとんど見られない。内底の立



第39図 摺鉢口縁部実測及び拓影図

ち上がり部から縦に櫛目を入れたあとに、その上に横からの櫛描きが入っている。①は立ち上がりが直線的に小さく開いていくタイプで外底が若干上げ底状になっている。櫛目はシャープで底面には櫛轆引きの成形痕が残り面取りされている。底径6.9cm。②～⑦は立ち上がりがやや丸味をもち外側へ開くタイプである。③は櫛目が磨滅している。②底径10.3cm、④底径10.5cm、⑤底径11.5cm、⑦底径10.6cm。⑥は櫛目が0.2cmの幅で、他の摺鉢の櫛目よりも太くなっている。底径9.5cm。⑧は脚台状の摺鉢で、底器厚が上げ底で0.7cmと極端に薄くなっている。外面は櫛轆引きが見られ、内底の櫛目はシャープである。底径12.3cm。



第40図 摺鉢底部実測及拓影図

## ⑤ 陶製品

### イ、陶製・土製キセルの雁首（第41図）

1、2、3が陶製の雁首で、4が土製品である。陶製品は全て同一の器形で製作されている。火皿部を8角形に作り、煙管部の管も8角形に面取り調整されているが、接続部は円形をつくる。火皿部と煙管部への孔径はやや差異が認められる。1は無釉で素焼きのままであるが、2、3は薄く釉がかかっている。火皿部の媒の付着痕はない。5は全体をつり錐状に成形したものである。火皿部と煙管部の接続穴が短くなっている。頭部に小孔が設けられており、細いヒモ通しの穴と思われる。外出時の携帯品として利用したものか。火皿部はわずかに黒色を帯びる。

陶製品は、いずれも火皿部のみの資料で、吸い口部分がなく、他の遺跡においても吸い口部の出土例がない。恐らく火皿部からの接続として竹製の煙管を作つて直接的に吸煙していたものであろうか。

### ロ、円板状製品（第42図）

外形が概、円板状に面取り加工された製品である。素材は陶器や瓦などの破片の一部を二次的に再利用したものである。円形に近い状態に面取りされているが、全体の研磨仕上げは見られず、打割された鋭利な面が残っている。①は甕の破片で、やや小形のもので外形が不整形である。②は瓦片で裏面に布目痕が残っている。③④⑤⑥も甕の破片であるが、打割面が大きい。

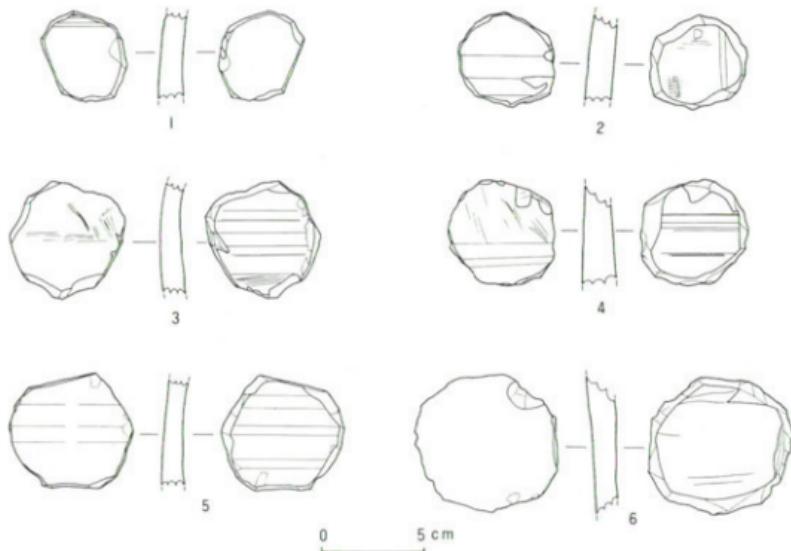


第41図 陶製・土製キセル実測図

図版 番号	出土地点	法量			素材
		(長径(cm))	(短径(cm))	(重量(g))	
1	II地区-	3.7	2.7	30	陶器甕
2	II地区-	3.7	3.5	35	瓦
3	II地区N-32	4.0	3.9	49	陶器甕
4	II地区O-32	4.2	3.9	65.5	"
5	II地区O-33	5.0	4.5	55	"
6	II地区O-31	5.9	5.6	86	"

表10 円板状製品一覧

本資料に共通するものは、他のグスク遺跡や古島の時期においても、これまでに出土しているが、素材としては、甕、壺、櫃、摺鉢などの陶製品が多く、さらに磁器や瓦、土製品などの出土例がある。加工においても、周縁の打割のみにとどまっており、円板状製品としている。しながら、その用途においては、明確な見解がなく不明とする点も多いが、これまでに報告されてきた中では、玩具、遊具とする向きがある。



第42図 円板状製品実測図

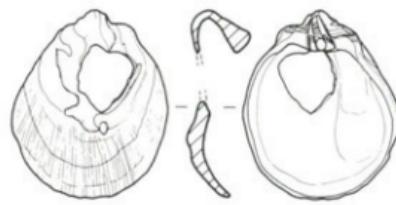
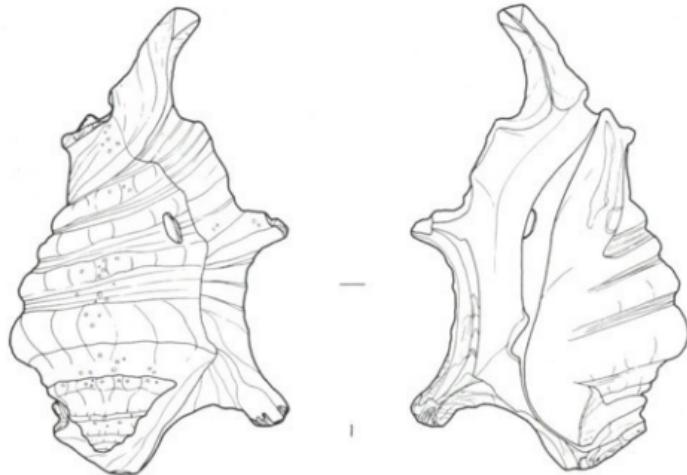
#### ⑥ 貝 製 品（第43図）

II地区から出土した貝製品は3点あるが、いずれも客土下の旧耕作土中よりの出土であった。1はスイジガイ製ヘラ状利器<sup>註</sup>であるが、突起部の残存は1番、5番、6番のみで他は欠失している。その内、5番突起の先端部の表と裏をヘラ状に研磨加工を施してある。体部に小さな粗孔が残されているが、自然孔と思われる。全体には白色風化している。2はメンガイの有孔品であるが、孔径は不整形である。表裏面とともに風化剝離している。3は貝錘で、シラナミを素材とした有孔品である。放射肋は磨滅し、孔径の周縁は不整形である。貝錘はI地区から113点と出土しているが、同一の形状を示す。形状は殻高が64.5mm、殻長92.1mm、孔のたて23.0mm、よこ25.2mm、重量49.0gを計測する。

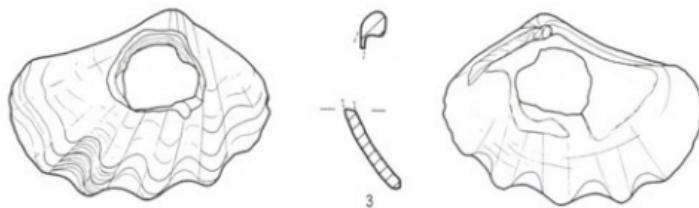
（計測値は第I地区的「二枚貝有孔製品出土一覧」の中にも合わせて掲載してある。）

註 沖縄県文化財調査報告書第32集

『大原』－久米島大原貝塚群発掘調査報告－沖縄県教育委員会 1980年3月



2



3

0 10cm

第43図 有孔貝製品実測図(スイジガイ製利器・メンガイ・シャコガイ)

## ⑦ 鉄 淚

出土した資料は6個で、全て客土攪乱中からの断片的な出土であった。肉眼観察からは外形が、いずれも不整形で軸滴や気泡が生じているために凹凸面が残っているものや、あるいは破碎面を見ると逆に緻密でほとんど気泡が見られないものも含まれている。表面に鈍い光沢があり、大形の涙ではなく、小片である。

鉄涙が生じる中にも、大きく2通りの作業工程が考慮されており、鍛冶作業か製練作業かの、いずれから流出して出来た涙なのか区別されている。さらに鍛冶作業の場合は、大鍛冶、小鍛冶と細分され、いずれも涙の形状によって、その作業形態を類推することが可能となっている。

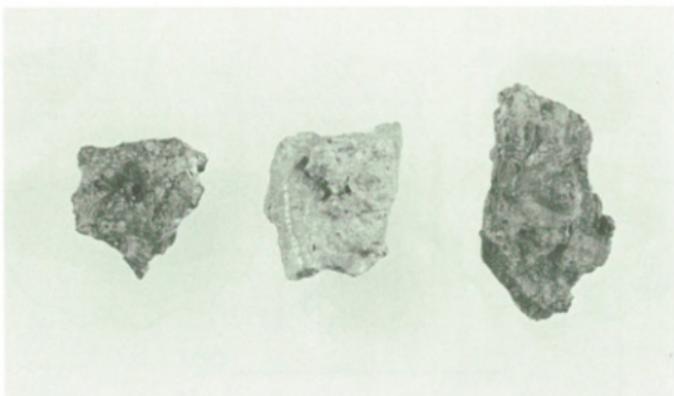
沖縄県下から出土した鉄涙の化学分析を新日鉄・八幡製鉄所の大澤正己氏によって報告<sup>註</sup>されているが、現時点においては、いずれも鍛冶作業の工程の中からの涙で、鍛冶涙と判断されている。鍛冶涙かの製練涙の区別は、肉眼観察からもある程度見分けがつけられているが、すなわち鍛冶涙の場合は、気泡が著しく表面の凹凸が生じている。製練際の場合は軸状に光沢があり緻密である。

本資料の場合も、大澤氏の所見からすると鍛冶涙の可能性が強いとされている。今後、化学分析からのデーター蓄積を増やす必要がある。

註 「渡名喜島の遺跡 I」 沖縄県渡名喜村教育委員会 昭和54年3月

上記報告書所収「渡名喜島遺跡発見の鉄涙について—沖縄県下出土の鉄涙の調査—」

大澤正己



図版 6 鉄 淚

## ⑧ 錢

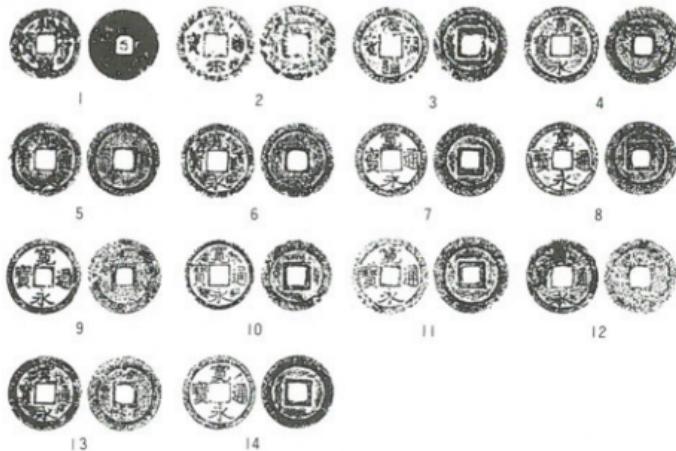
銭の出土はバラツキがあり、攢乱の土壌中よりではあったが、12枚出土している。14枚ともに残りがよく、全て判読することができた。

その内訳は、11枚が和銭の寛永通宝、他の3枚は祥符通宝と皇宋通宝・元祐通宝の北宋銭であった。

II地区では、最近までに葬墓が残されていたことから、出土した銭はこれに伴なう賽銭として利用されていたものではないかと考える。中には現代のお金も数枚出土している。

図版番号	銭種	時代、初鑄年	字体	備考
1	祥符通宝	北宋1008	楷書	—
2	皇宋通宝	北宋1039	楷書	銘跡が著しい、「宋」の右隣りに小孔がある。
3	元祐通宝	北宋1086	篆書	—
4	寛永通宝	#	楷書	「寛」の右隣りに小孔がある。裏面は磨滅。
5	#	#	#	全体に3等手、磨滅。
6	#	#	#	—
7	#	#	#	—
8	#	#	#	裏面は磨滅。
9	#	#	#	寛永通宝の銘が明瞭に残っている。
10	#	#	#	銘が明瞭、少し変形。
11	#	#	#	—
12	#	#	#	諸が著しく付着している。「永」が判読される。
13	#	#	#	—
14	#	#	#	形、銘とともによく整っている。

表II 錢集計一覽



第44図 錢拓影図

## ⑨ 青銅製品（第45図）

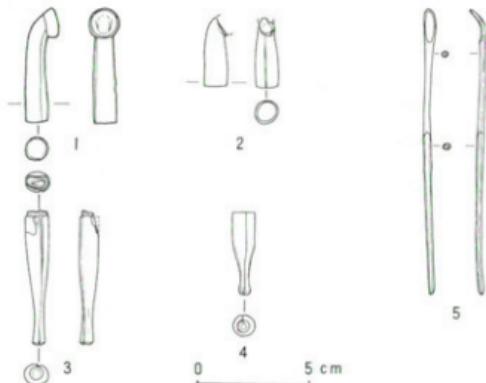
### イ. キセル

1～4は青銅製のキセルの資料である。4点ともに青銅が審しく付着している。1は雁首の部分であるが、火皿部と煙管部との接続目に小さなひび割れが生じている。火皿内への媒の付着痕はない。火皿部は直径1.3cm、火皿から煙管までが4.8cm。煙管の直径1.0cm。2は火皿部が欠失している。1の資料に比らべると煙管部がやや短くなっている。火皿から煙管部の長さ3.0cm、煙管部の直径1.0cm。3、4は吸い口部であるが、1、2に接続する同一個体の資料ではなく、吸い口部だけの出土である。3は青銅が剥げ落ちており、煙管の合せ目に小さなすき間が出来ている。吸い口部の先端には木質の残片が残っていた。恐らく火皿部と吸い口部を竹製のストロー状で接続していたものと思われる。木質片は乾燥した状態にあった。吸い口部の長さ5.6cm、吸い口部の直径0.3cm。

4は外形がよく整った吸い口部である。③に比らべて長さが2.0cm短くなっている。吸い口部の長さ3.6cm。吸い口部の直径0.2cm。これまで、銅製のキセルの場合、火皿と吸い口部の出土は、よく知られていたが、火皿と吸い口部を接続する煙管の形態がつかめなかった。ところが、今資料中において、吸い口部に残された木質の残片から、煙管部の素材の一つに植物質の材料が用いられていたことが確認された。

### ロ. カンザシ

今調査中、1点だけの出土であった5の資料。頭部は楕円形のスプーン状をつくり、ムデイは直径0.3cmの断面が円形で長さは約4.0cm。竿の部分は断面が六角形に成形されている。長さ6.1cm。全長12.6cm。先端は六角錐を作っているが、丸く磨滅している。



第45図 青銅製品実測図（キセル・カンザシ）

## ⑩ 自然 遺 物

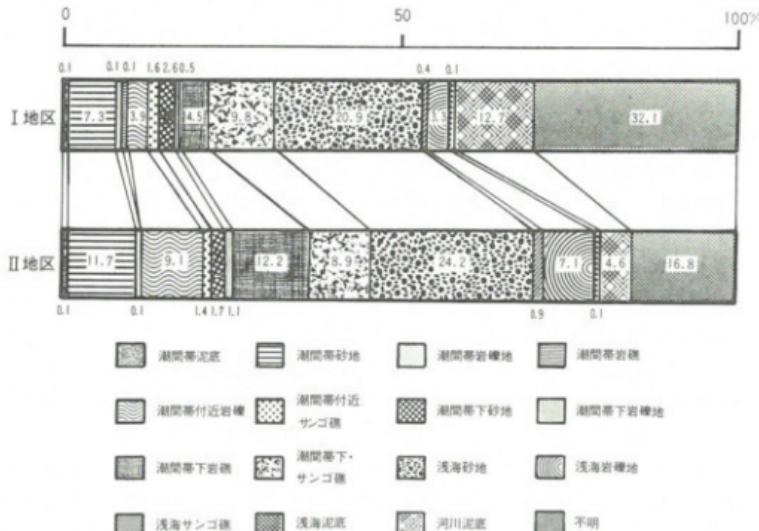
II地区では、オリジナルな包含層の残りが悪く、大半は攪乱されている状況にあったことから、自然遺物の集計においても層別にはまとめられず、II地区から一括としてとりあげてある。I地区同様、最も多く採取された貝種を1~5までに区分してみた。

まずイソハマグリが416個で、11.55%、次にメンガイの403個、11.19%、エガイの329個、9.14%、キクザルの228個、6.33%、ヒメジャコ219個、9.08%となっている。

棲息地別では、潮間帯砂底や、潮間帯下岩礁、潮間帯付近岩礁底、浅海岩礁、潮間帯下サンゴ礁と分けられる。I地区との比較検討は、ここでは必ずしも明確に把握されるものではないが貝種別に見るとI地区と、ほぼ類似する貝種となっている。棲息地の比較からは、I地区が、淡水河川泥底や、潮間帯砂底や浅海の貝種がよく採取されていたが、II地区では、潮間帯の岩礁底や、岩礁などが加わっているのが確認される。特に淡水河川泥底の貝種が少ないので、牧港川上流域からの沖積作用によって土砂堆積の影響によるものか、シジミ類の棲息地に適さない環境の変容があったものか判然としない。

全体を通じて見れば、I、II地区とも内湾性の貝種で占められており、牧港川の周縁から、河口部にかけて浅海砂底の大きな入江が形成されていたと考えられる。

II地区的集計は、I地区的貝類集計表一覧の中に合わせて掲載した。



第46図 牧港貝塚貝類組成図

## 第VII章 調査の成果と課題

今調査を通しての成果を各遺跡ごとに各章において、記述考察を重ねてきたが、牧港貝塚・真久原遺跡の存在した時期が、それぞれの環境の中において重要な位置にあったことは、これらの出土遺物や地理的環境から首肯されることである。

牧港貝塚については、第Ⅰ地区の洞穴部を中心とした後期貝塚形成の時期、あるいは第Ⅱ地区の中心部であったと考えられる岩丘上の旧台地、もしくはその崖下の岩蔭一帯に展開されたグスクの時期など、後期貝塚の時期からグスクの時期に至る新旧の時期が包含された地域の一つである。遺跡の立地形成の問題を考える上で、きわめて注目される地点といえる。

牧港のおかれた環境が、人間生活の営みなみの上に、かなり良好な場所であったことが推察される。また一方においては、いずれの時期においても牧港川を取り込んだ形での歴史が形成されていったことも事実であろう。

出土した遺物からは、全て貴重資料として取り上げられたが、中でも洞穴内からのゴホウラの貝輪や弥生系の土器、あるいは磨製の石鎚品などの出土は、奄美・九州の外界との接触や移入が存在したことを想定させうる資料である。

また砂鉄の問題は、かなり大きく注目されなければならないと考える。現時点において砂鉄は、石灰岩地帯に産出しない鉱物であることから考えれば、今回、洞穴や岩蔭下から多量に採取されたのは不自然である。口承伝承の中では、洞穴を「カンジャーガマ」と呼称され、明治生れの方々の脳裏に、今日までその記憶をとどめている。また遺物の面では、鉄滓の頃でも触れたように、第Ⅱ地区からは鉄滓（スラグ）が出土してくることから、鍛冶作業から砂鉄を利用しての練習作業までの一連の工程作業の存在をも想像させうる。

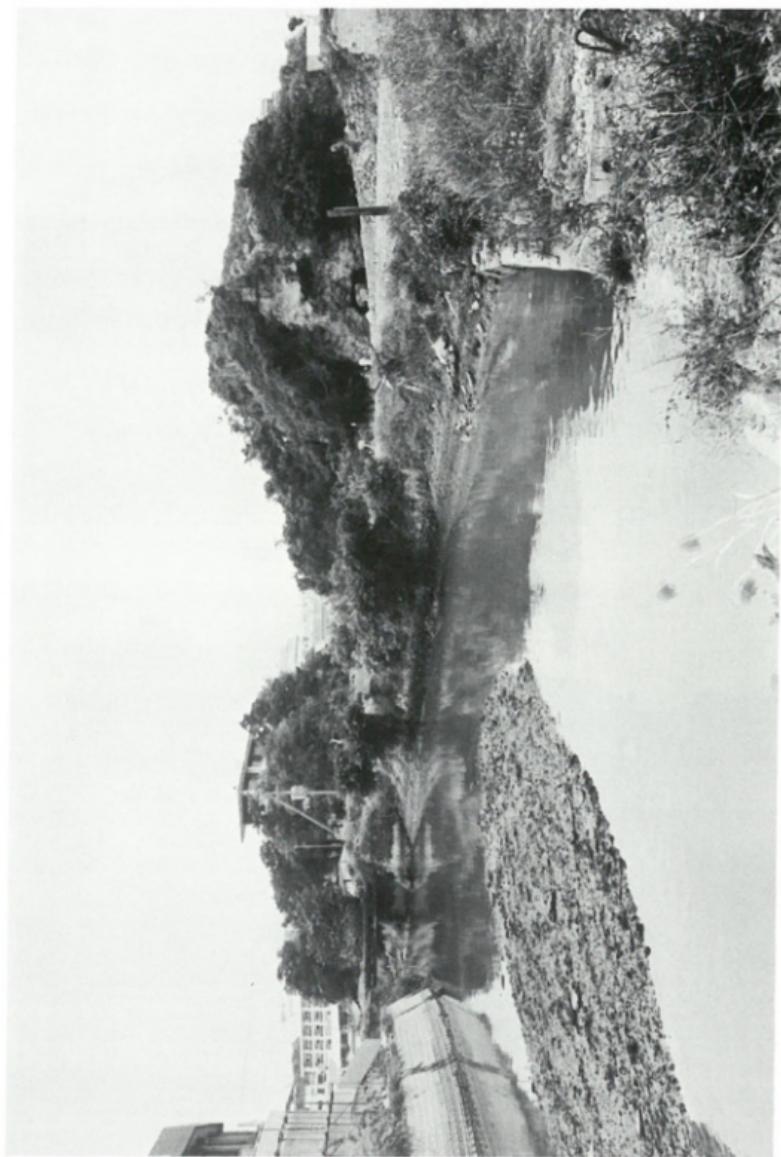
このことだけに注目してみても砂鉄の問題は、今後の沖縄における鉄の研究において、多くの課題を残し、同時に牧港貝塚が複雑な問題を多く含んでいる遺跡ともいえる。スラグや砂鉄の実態は考古学的見地からの遺構調査の急務研究はもちろんであるが、一面においてはそれに含まれされている成分の分析を冶金学的考察からのデータ蓄積をはかる必要がある。それによって鍛冶技術か練習技術か、あるいは同時に両技術が存在していたのか等、一つ一つの問題が処理されてその実態に肉迫することが可能と考える。

また、真久原遺跡においては、沖縄グスク時代と呼ばれる時期において、少なくとも13~14世紀の時期には、すでに形成されていたと考えられる。13~14世紀というのは、ちょうど浦添城跡が栄える時期と符合するが、出土した資料の中にも浦添城跡出土の資料に類似するものがある。真久原のような遺跡が、何んらかの形で関連性をもち、あるいは包括されていたのか、興味ある問題の一つである。この地域は時代の堆積とともに、環境も大きく変遷してきたと言われるが、岩丘と洞穴の周辺のみに、わずかに旧態依然の地形を残してきた。調査終了後は、両遺跡とともに消滅する運命にあり、わずかに残った遺跡を取りまく周辺の地形環境も大きく変貌しようとしている。

図 版



図版7. 通跡の全景 (北東側から望む、左側岩丘I地区、右側岩丘II地区)



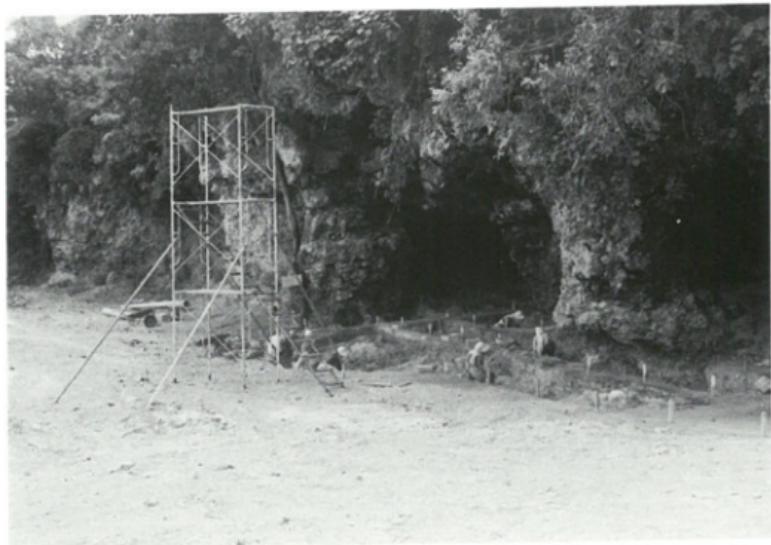
図版 8



上、遺跡の遠景（第Ⅰ地区）北東側から望む



下、遺跡の近景（第Ⅰ地区）東側から望む



上、発掘作業状況（第 I 地区）



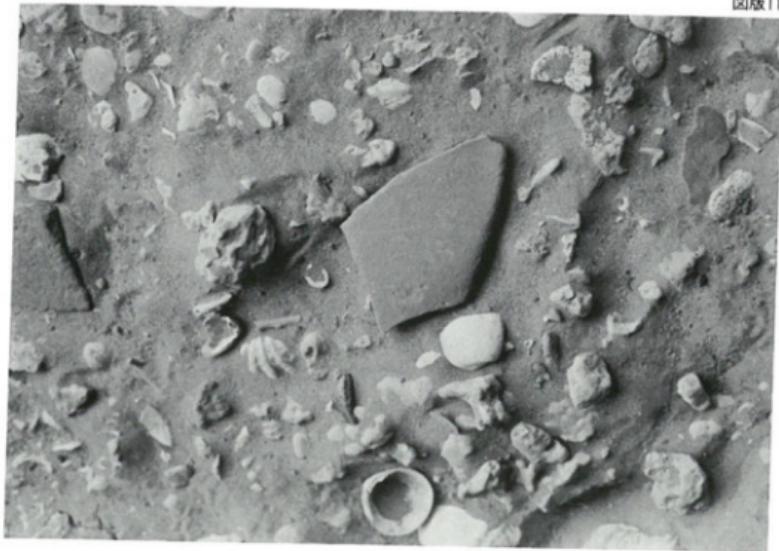
下、発掘作業状況（第 I 地区）



上、発掘作業状況（第Ⅰ地区）



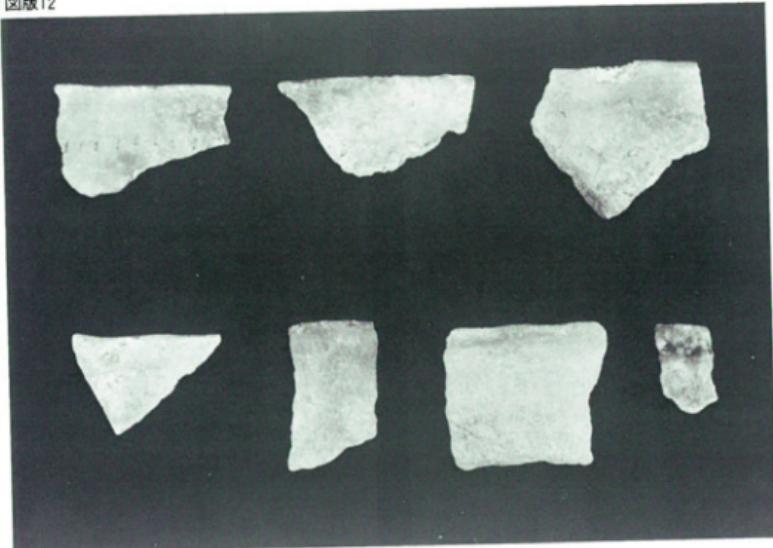
下、発掘作業状況（第Ⅰ地区）



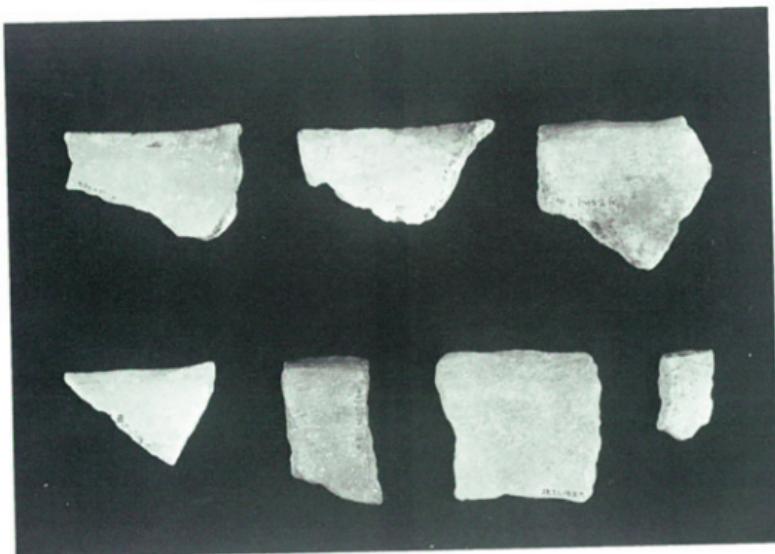
上、遺物の出土状況（第I地区）



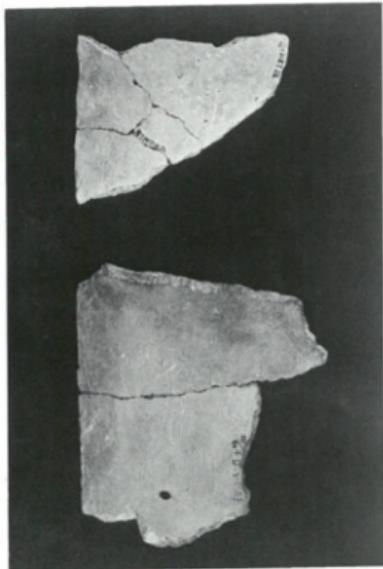
下、遺物の出土状況（第I地区）



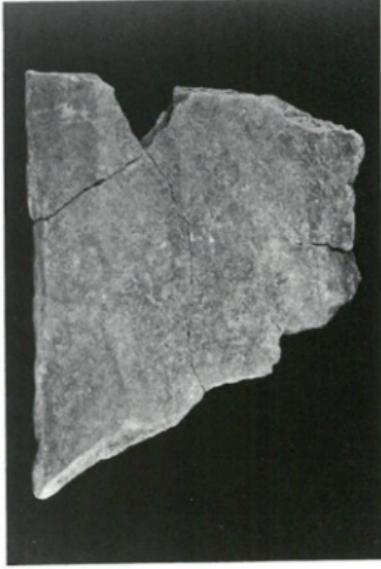
上、土器口縁部（表）（第Ⅰ地区）



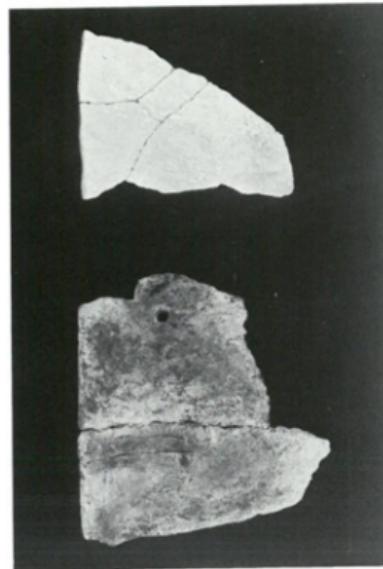
下、同 上（裏）



上段、左、土器口縁部（表）（第Ⅰ地区）

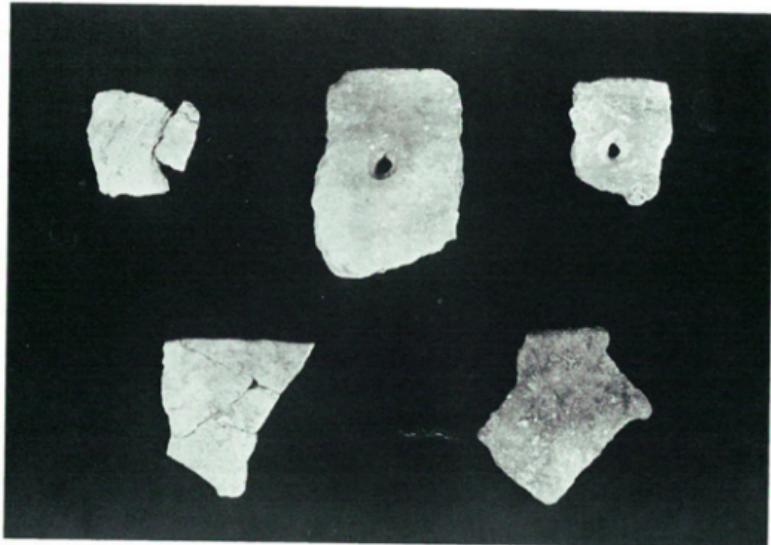


右、同左（裏）



下段、左、土器口縁部（表）（第Ⅰ地区）

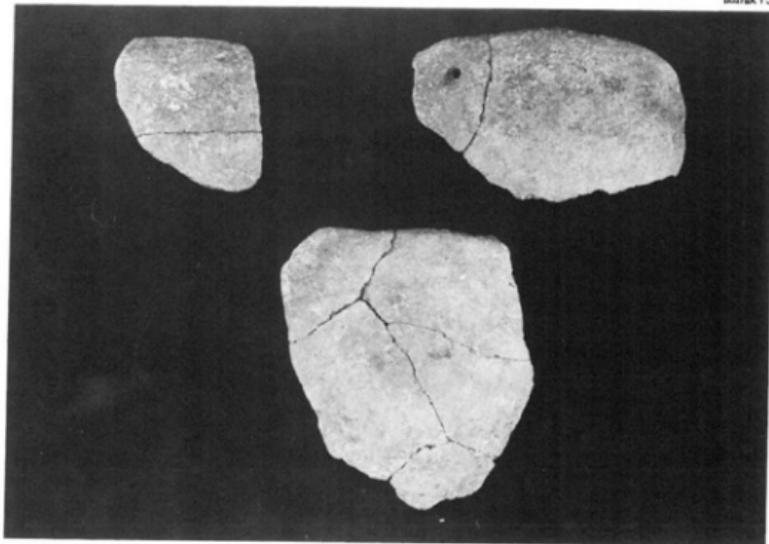
右、同左（裏）



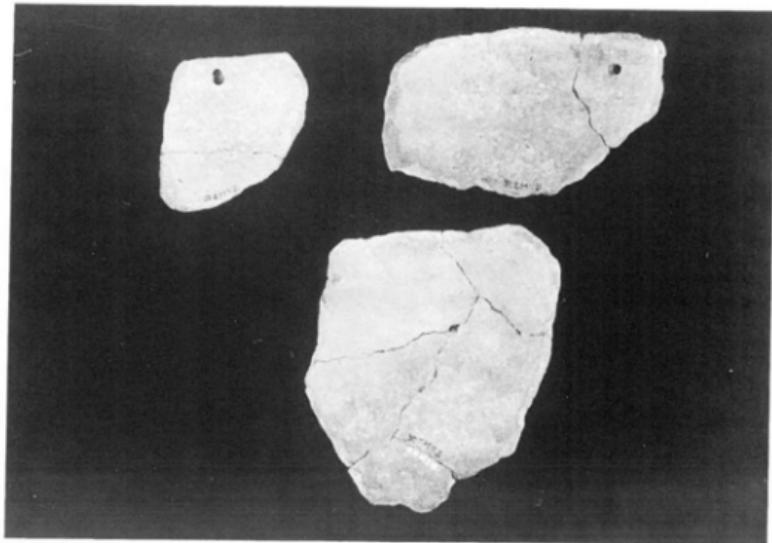
上、土器口縁部 (表) (第Ⅰ地区)



下、同 上 (裏)



上、土器口縁部（表）（第Ⅰ地区）



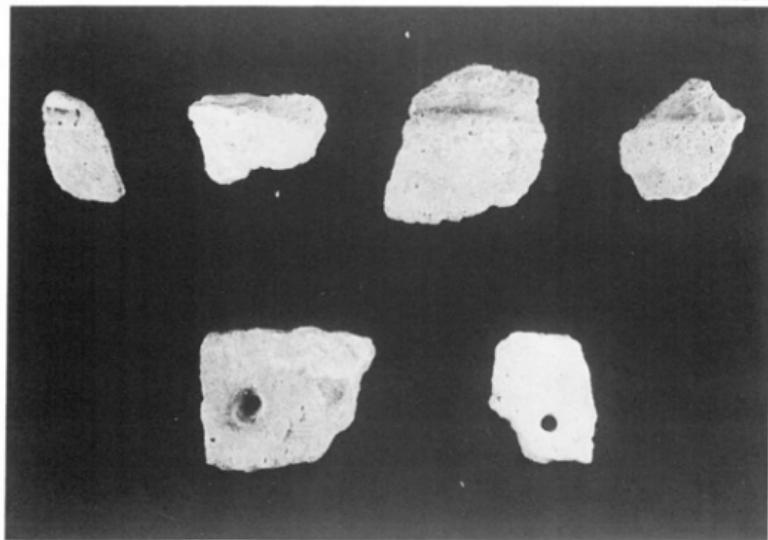
下、同 上（裏）



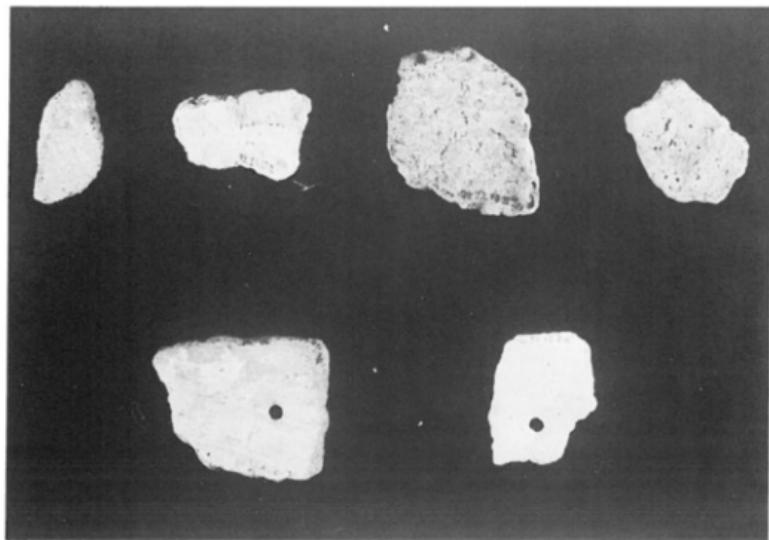
上、土器脚部（表）（第Ⅰ地区）



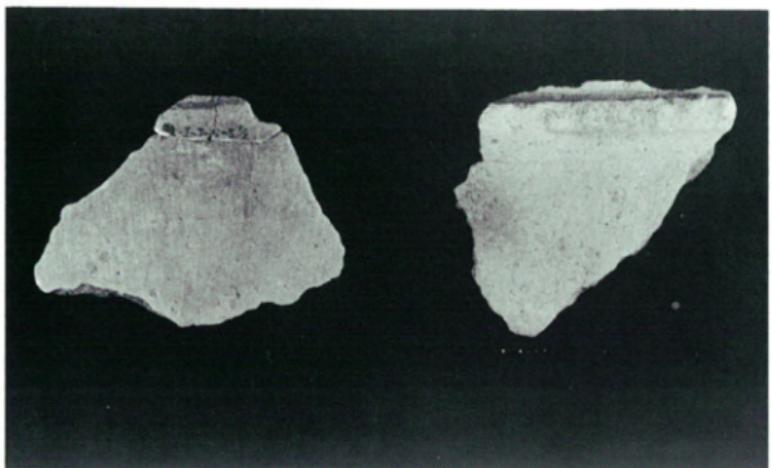
下、同 上（裏）



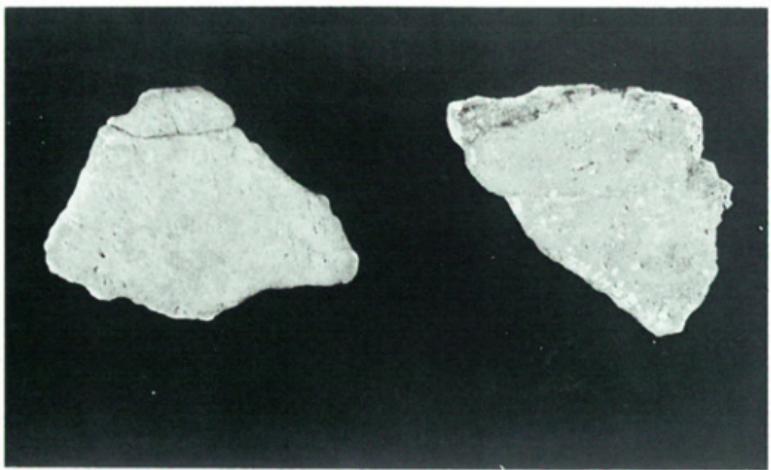
上、土器胸部（表）（第Ⅰ地区）



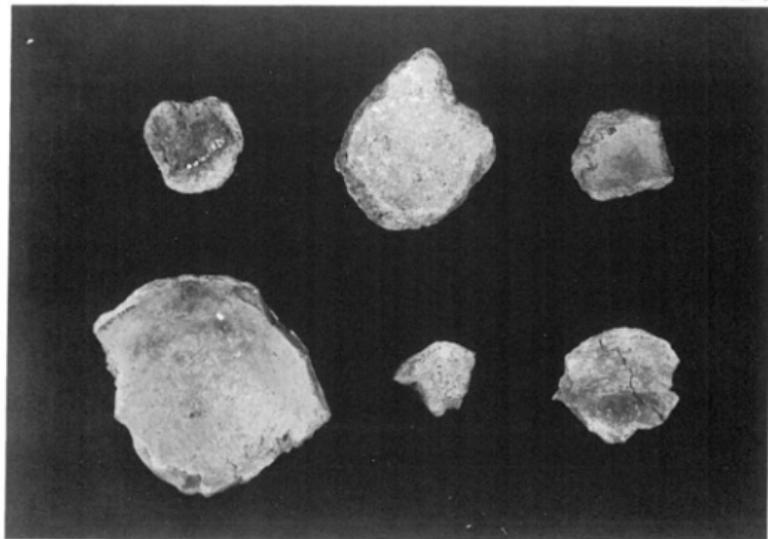
下、同 上（裏）



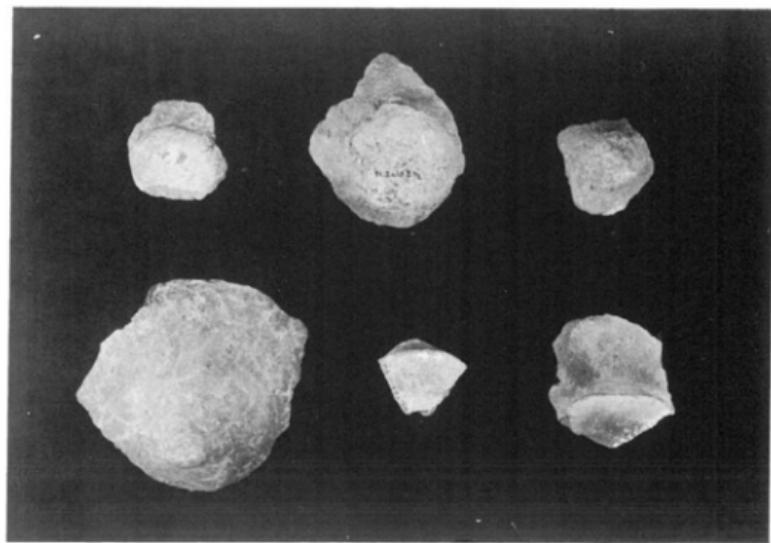
上、土器（弥生系）（表）（第Ⅰ地区）



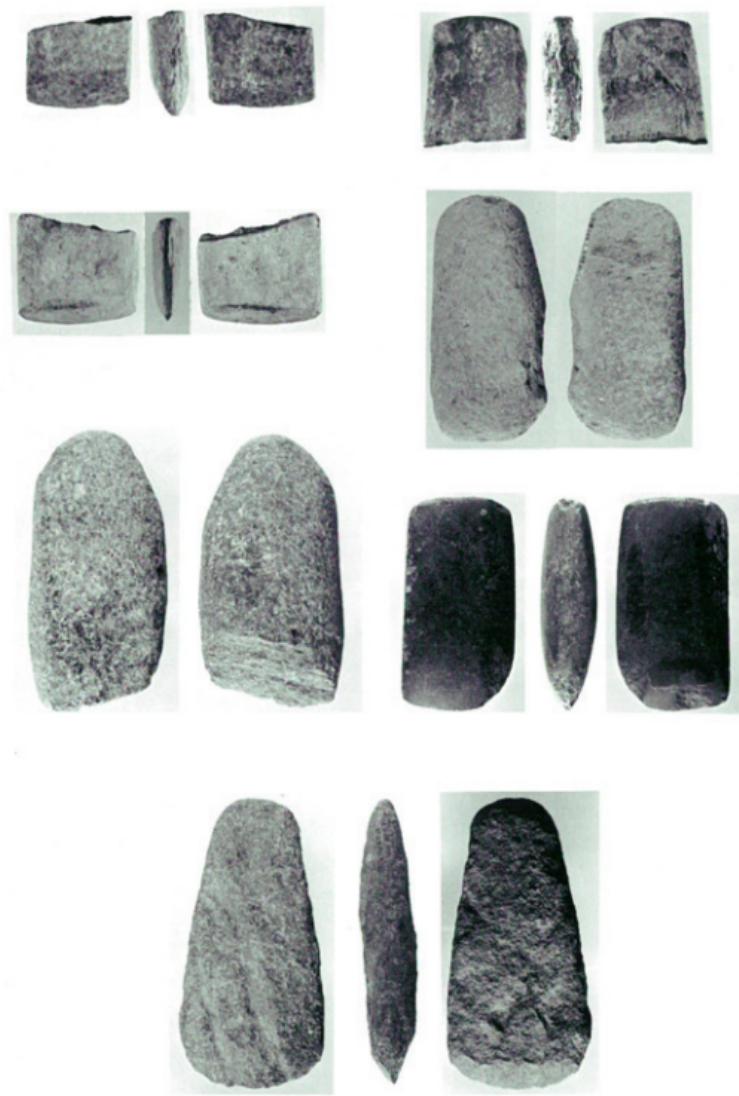
下、同 上（裏）



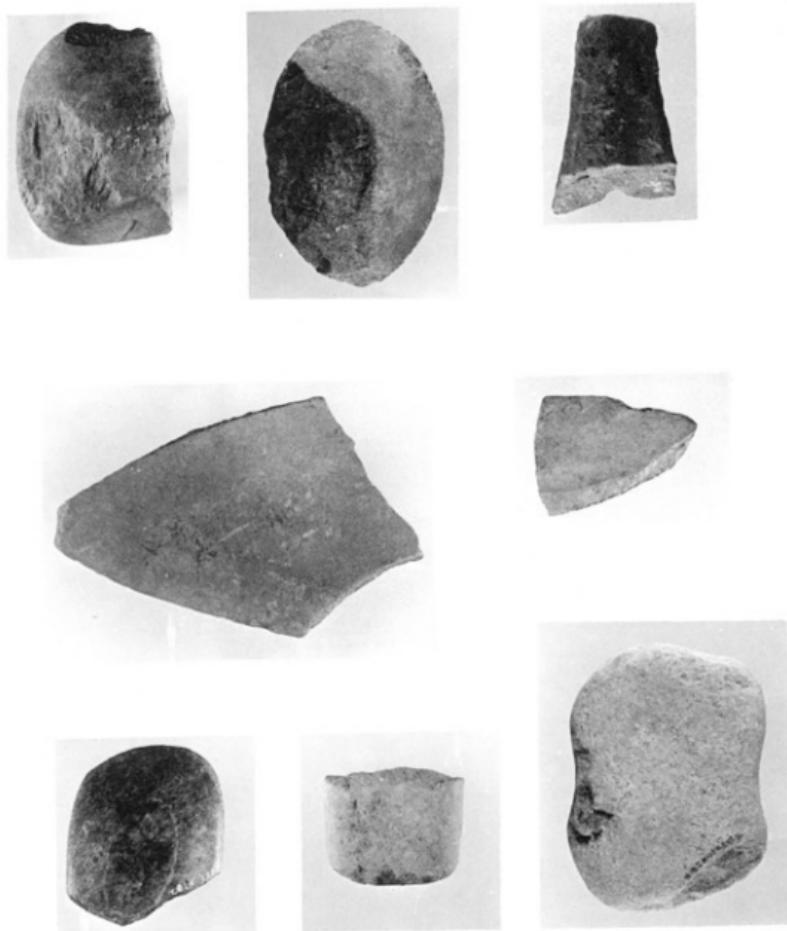
上、土器底部（表）（第Ⅰ地区）



下、同 上（裏）



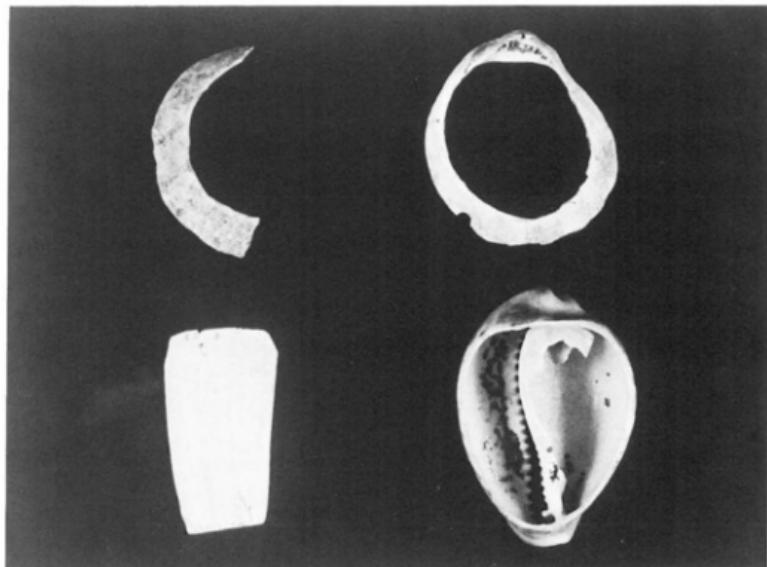
石 器 (石斧) (第 I 地区)



石 器 (磨石・砥石・敲石)(第Ⅰ地区)



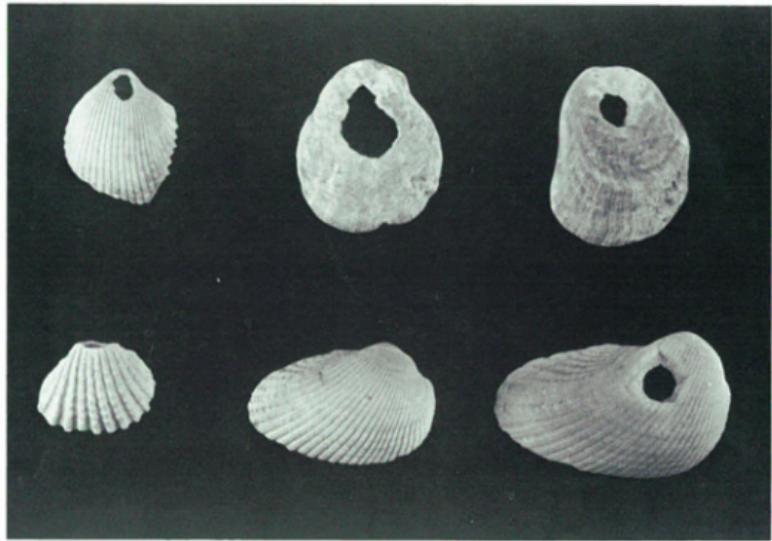
石器 (石皿、用途不明石製品) (第I地区)



上、貝製品（貝輪・貝札・タカラガイ製品）（第Ⅰ地区）



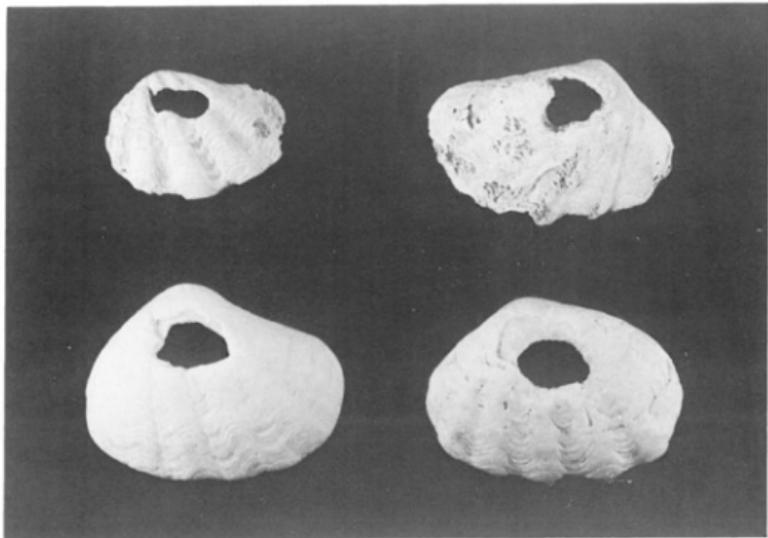
下、貝製品（貝刃）（第Ⅰ地区）



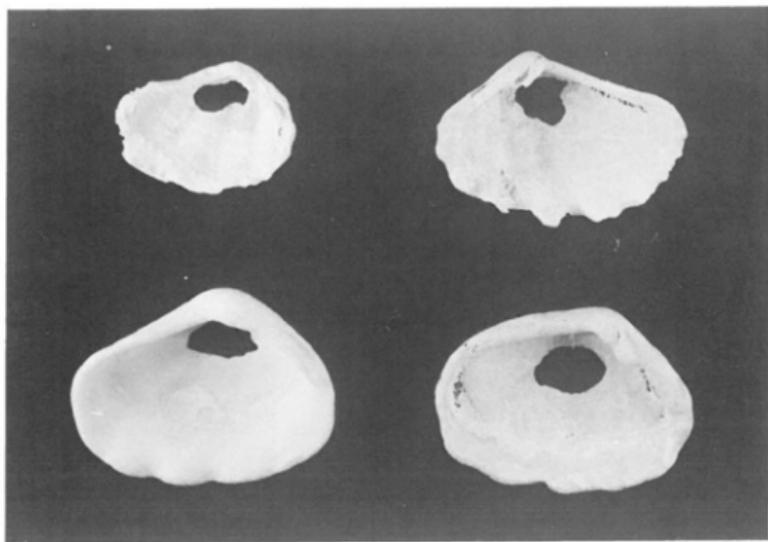
上、有孔貝製品（表）（サルボウ・ハイガイ・メンガイ）（第I地区）



下、同 上（裏）



上、有孔貝製品（表）（シャコガイ）（第Ⅰ地区）



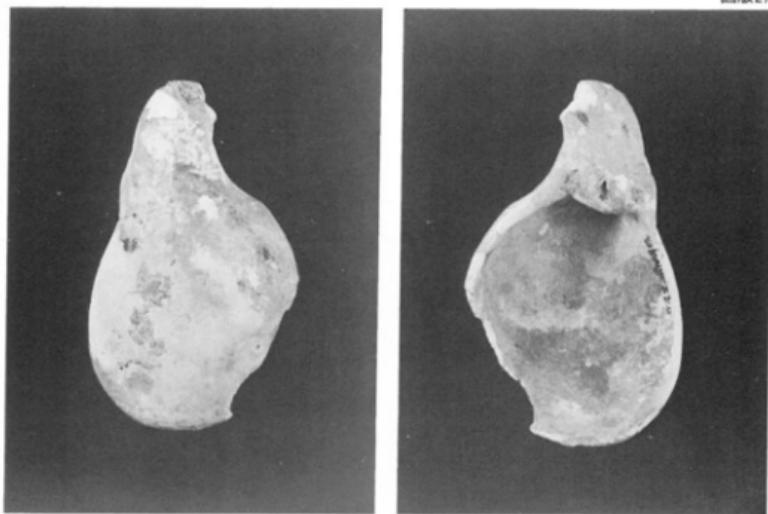
下、同 上（裏）



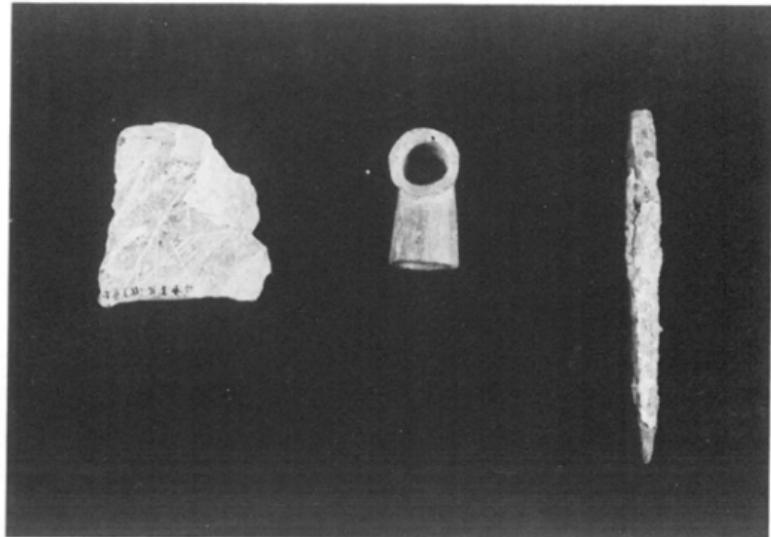
上、有孔貝製品（表）（シャコガイ）（第Ⅰ地区）



下、同 上（裏）



上、貝匙（表・裏）（第I地区）



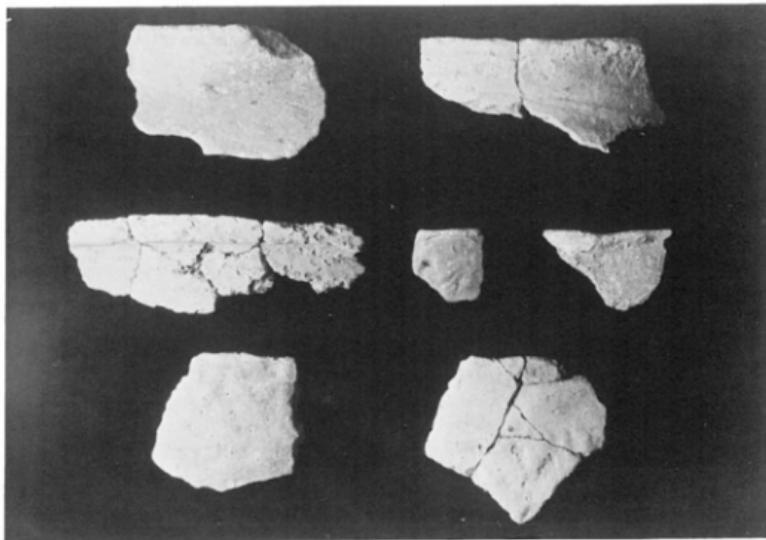
下、滑石・陶製の雁首・鉄釘（第I地区）



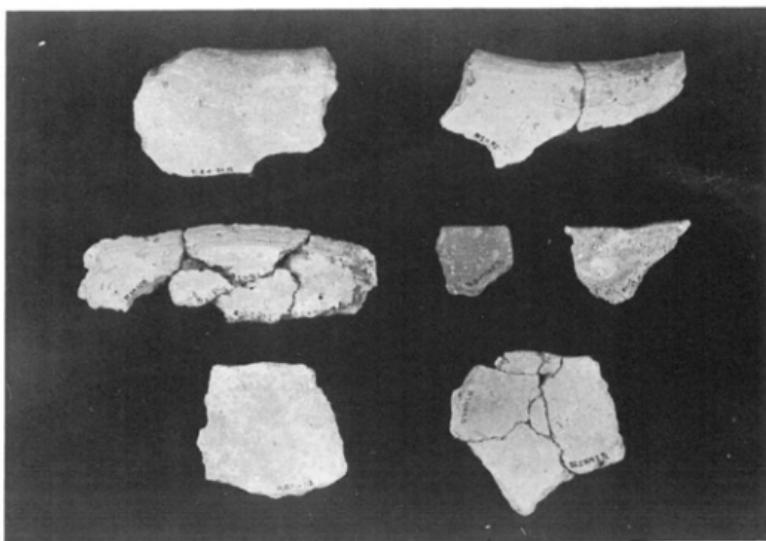
上、遺跡の全景（北東側より）(第Ⅱ地区)



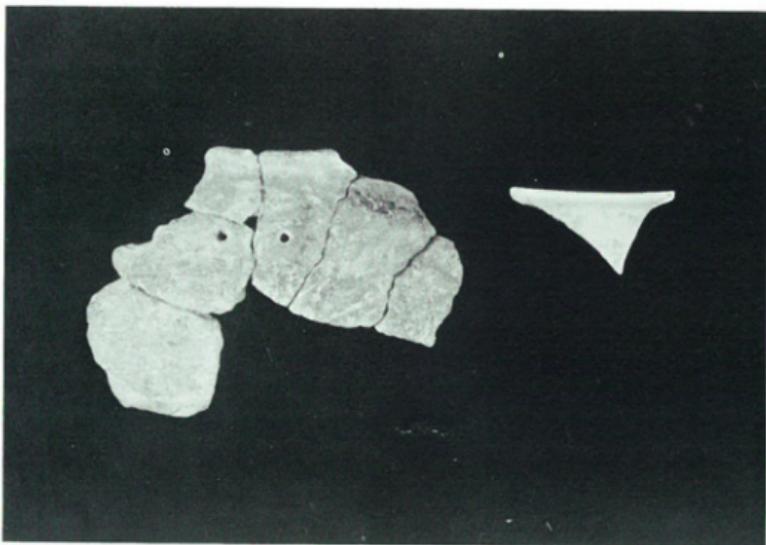
下、遺跡の近景（東側より）(第Ⅱ地区)



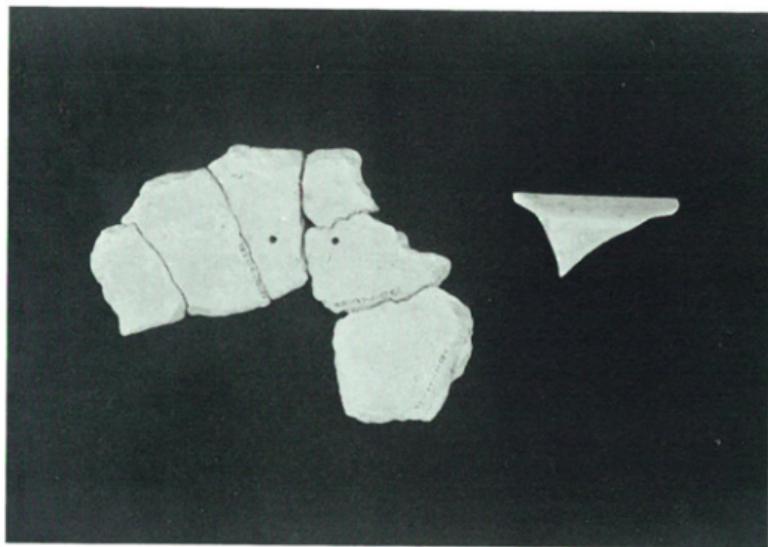
上、土器口縁部（表）（第II地区）



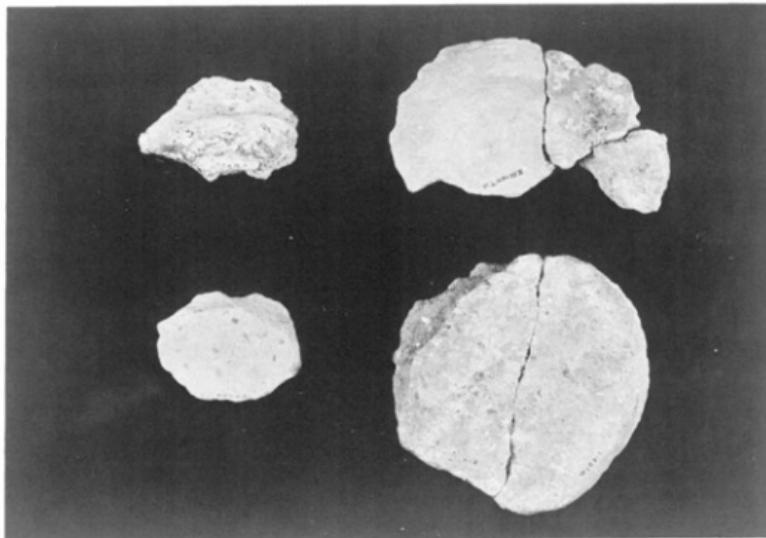
下、同 上（裏）



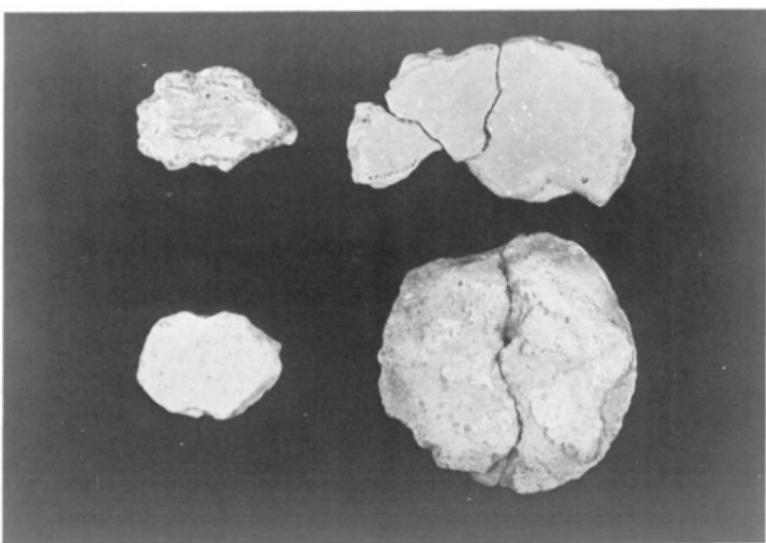
上、土器口縁部（表）（第II地区）



下、同 上（裏）



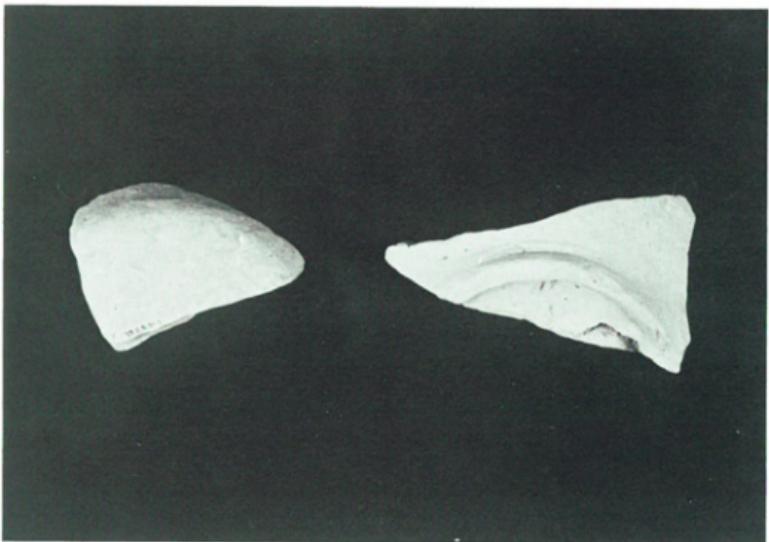
上、土器底部（表）（第II地区）



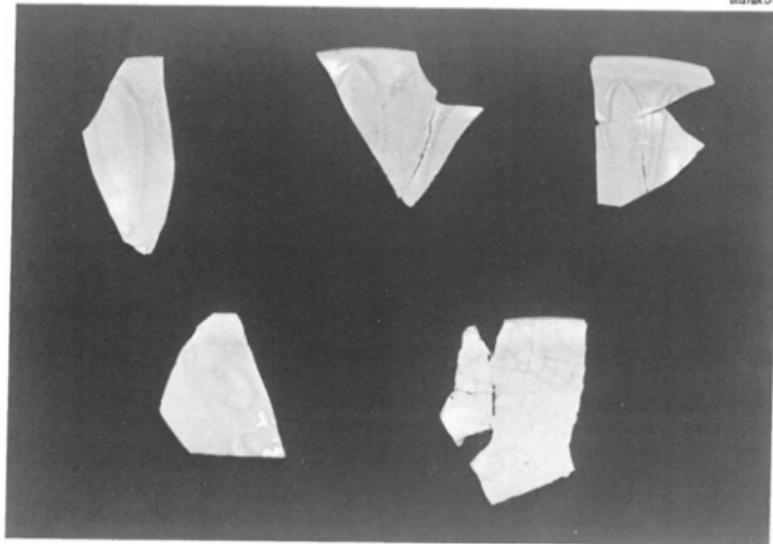
下、同 上（裏）



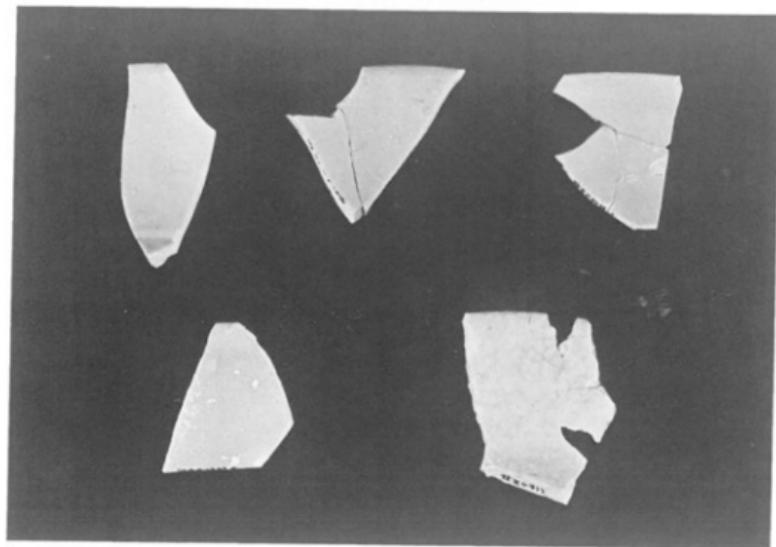
上、土器底部（表）（第Ⅱ地区）



下、土器底部（裏）（第Ⅱ地区）



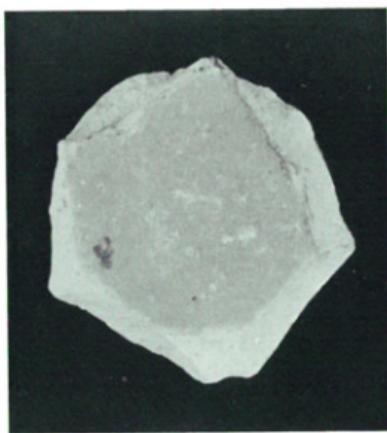
上、磁器口縁部（表）(第II地区)



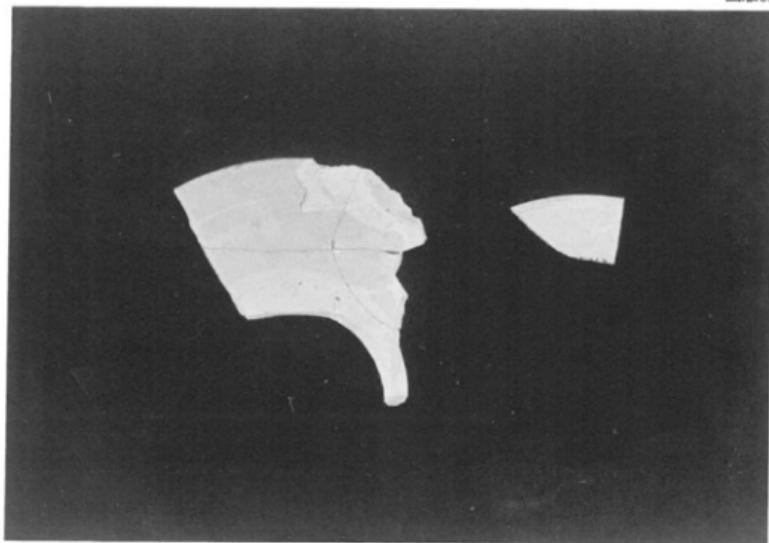
下、同 上（裏）



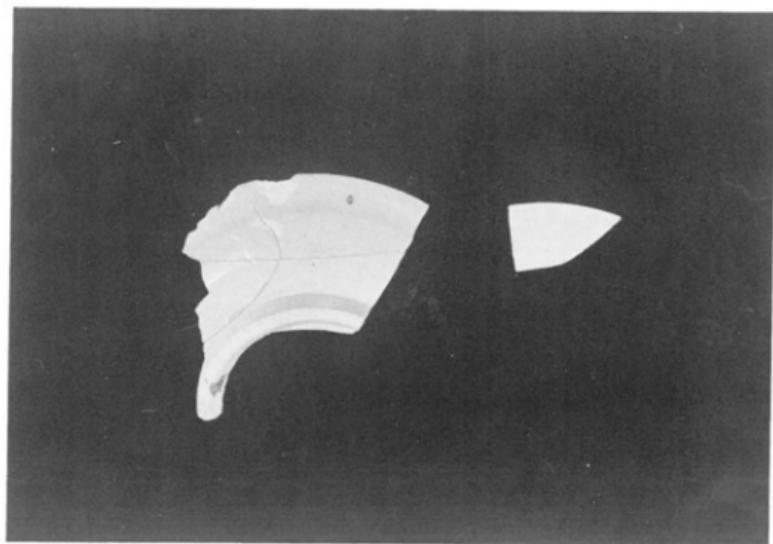
上、磁器（裏・表）（第Ⅱ地区）



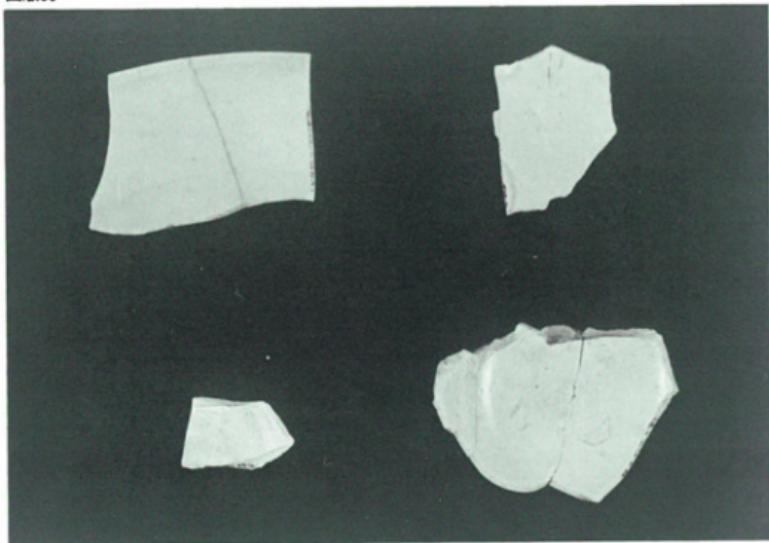
下、磁器底部（表・裏）（第Ⅱ地区）



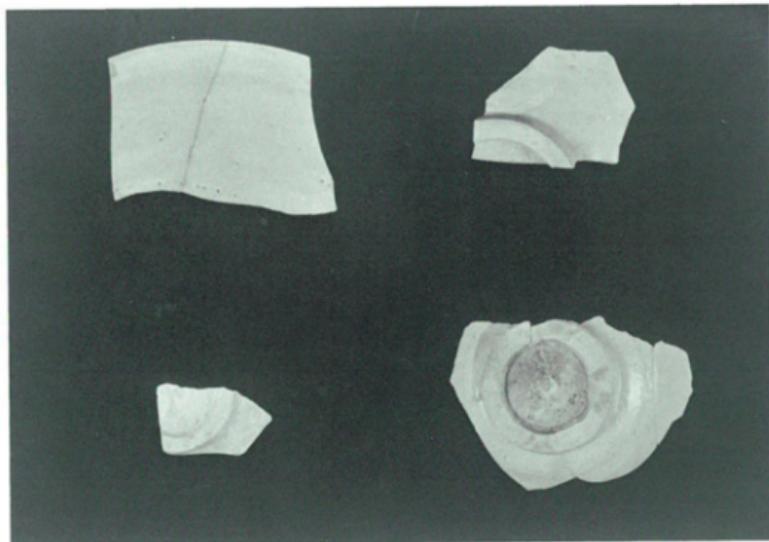
上、磁器皿（裏）（第II地区）



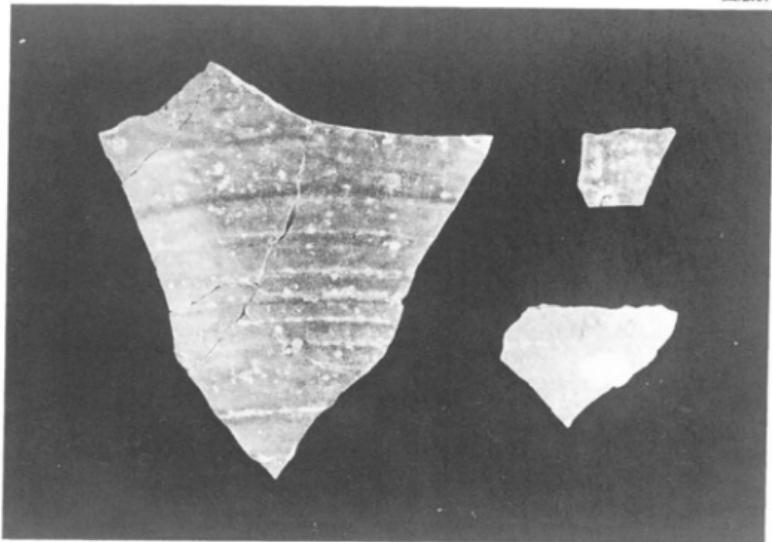
下、同 上（表）



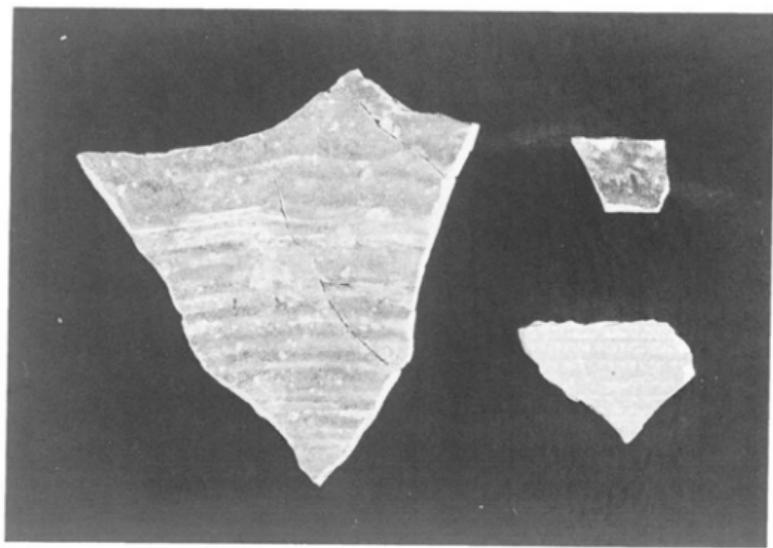
上、磁器（白磁）（表）（第II地区）



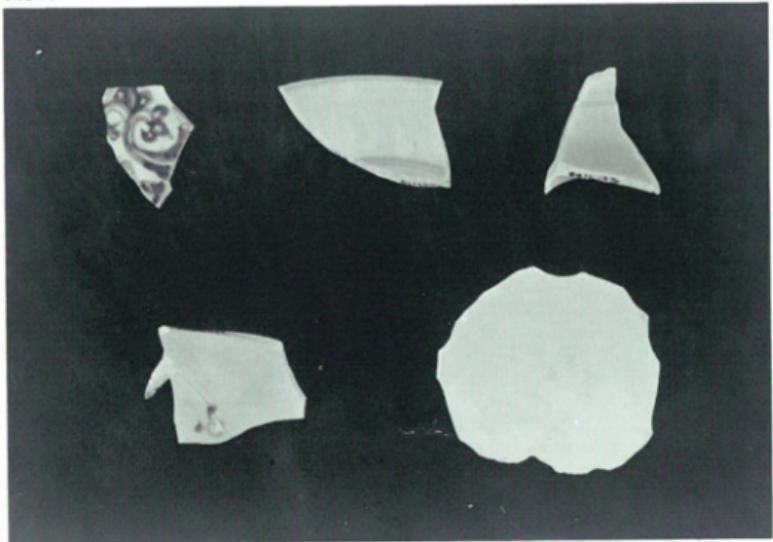
下、同 上（裏）



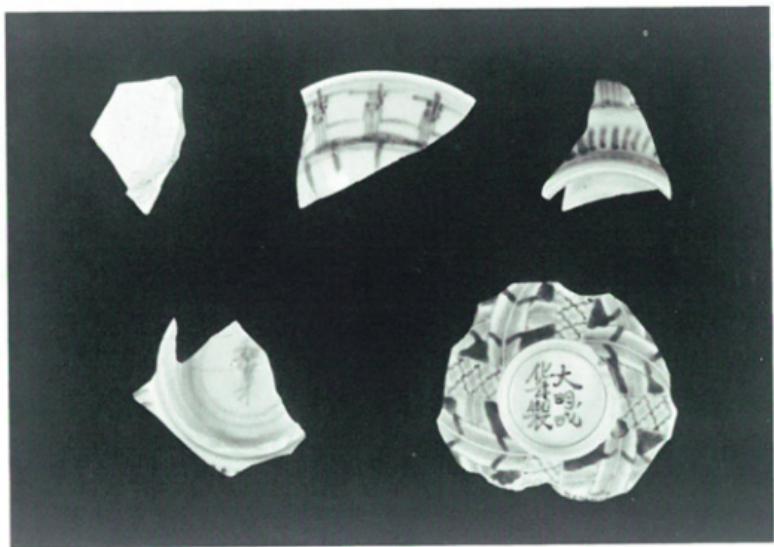
上、陶器胸部（表）（第II地区）



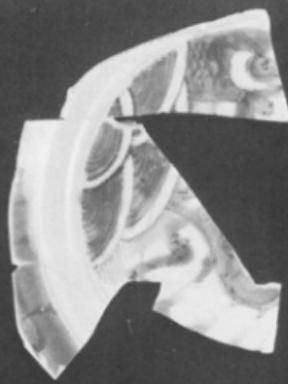
下、同 上（裏）



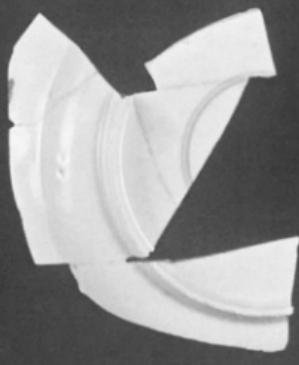
上、染付（裏）（第Ⅱ地区）



下、同 上（表）



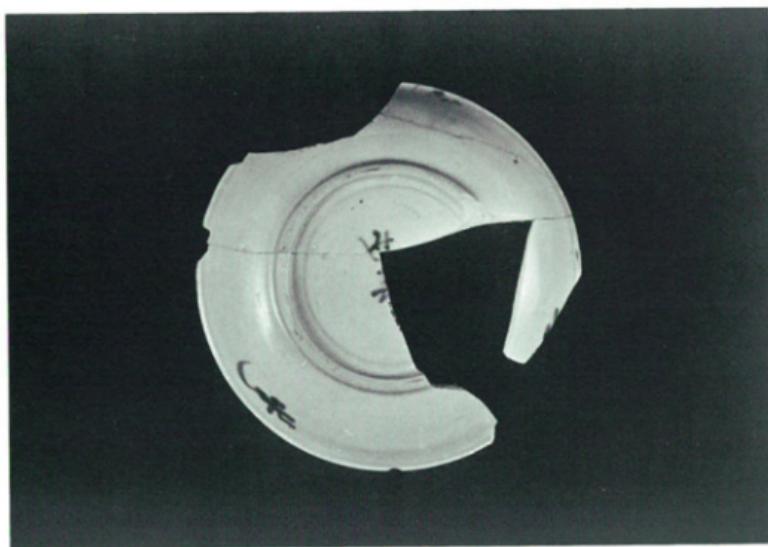
上、染付(裏)(第II地区)



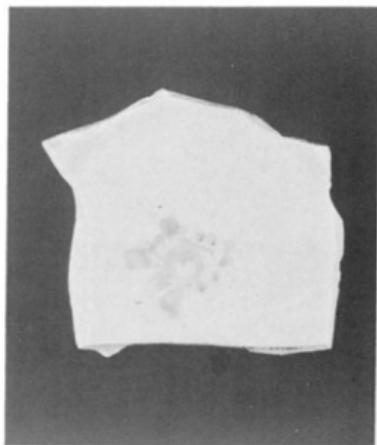
下、同上(表)



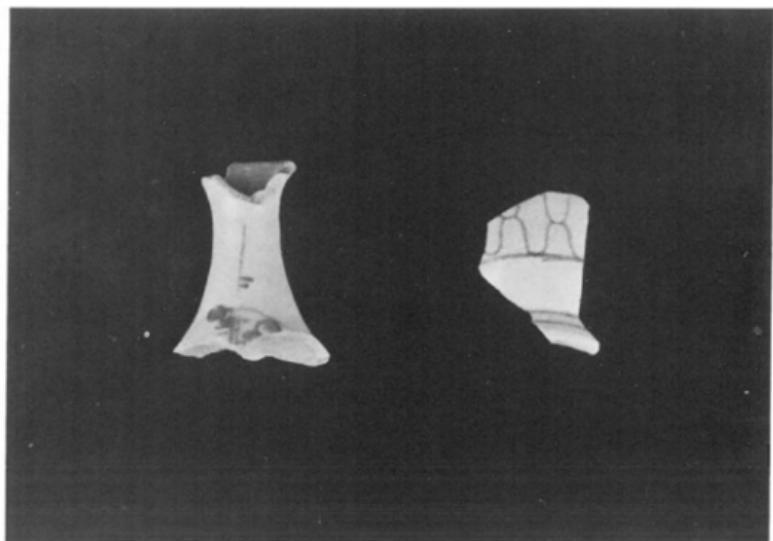
上、染付(裏)(第II地区)



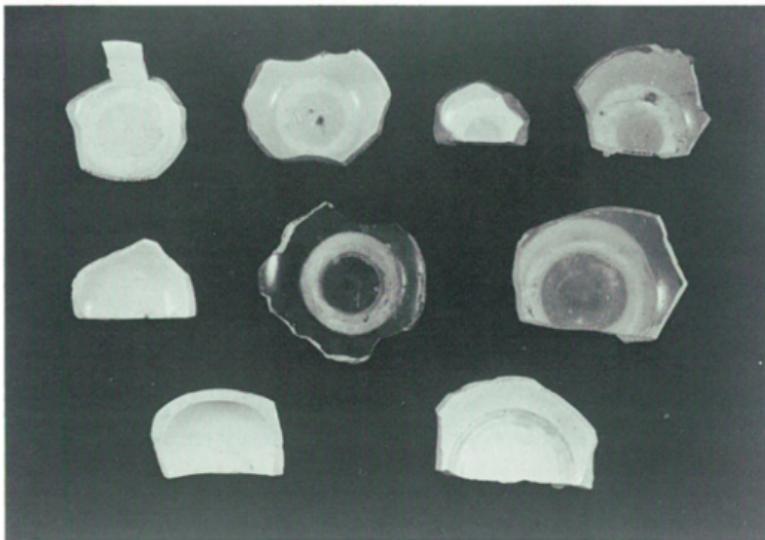
下、同上(表)



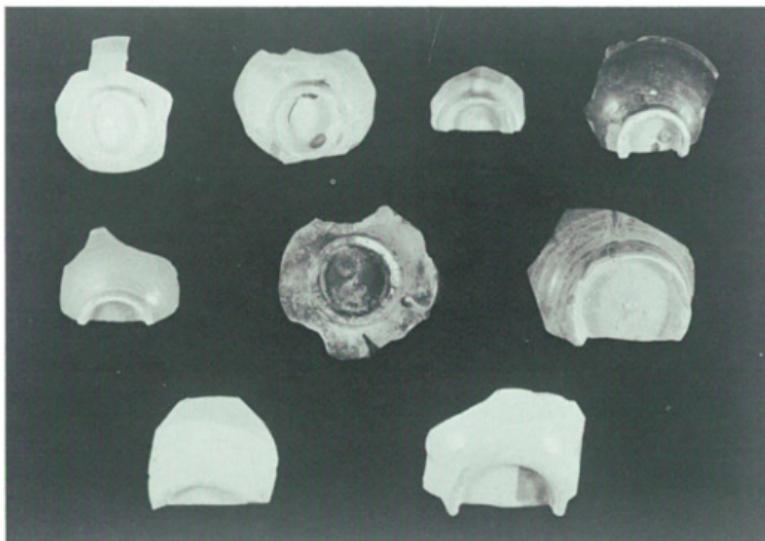
上、染付（伊万里）（裏・表）（第Ⅱ地区）



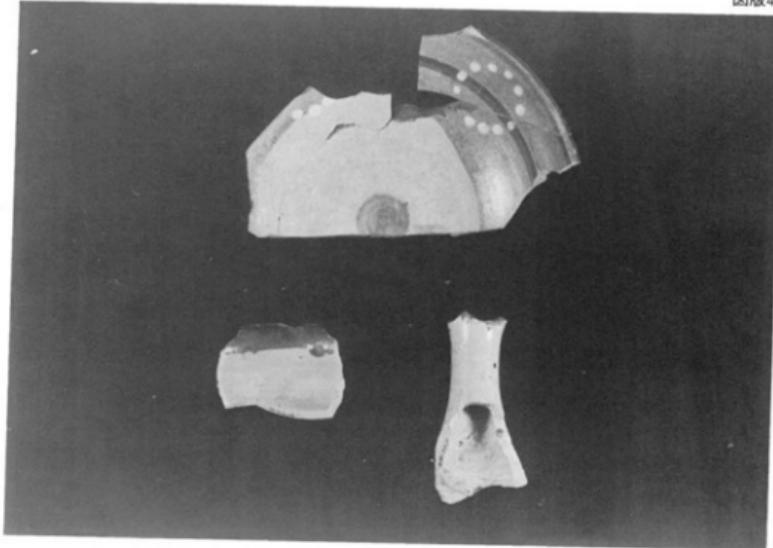
下、染付（伊万里）（第Ⅱ地区）



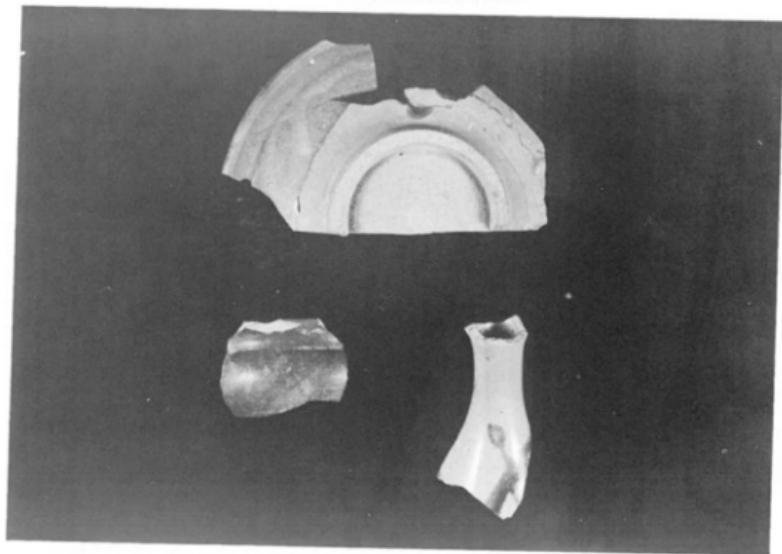
上、沖縄製陶器（裏）（第II地区）



下、同 上（表）



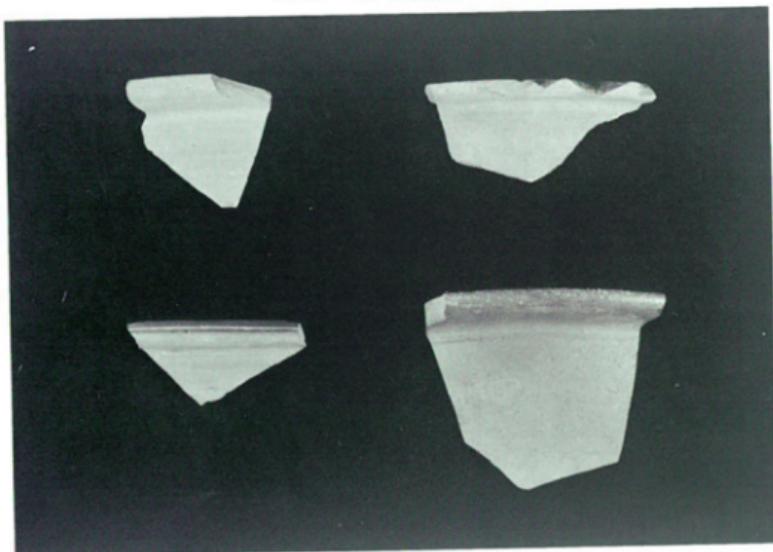
上、沖縄製陶器（裏）（第Ⅱ地区）



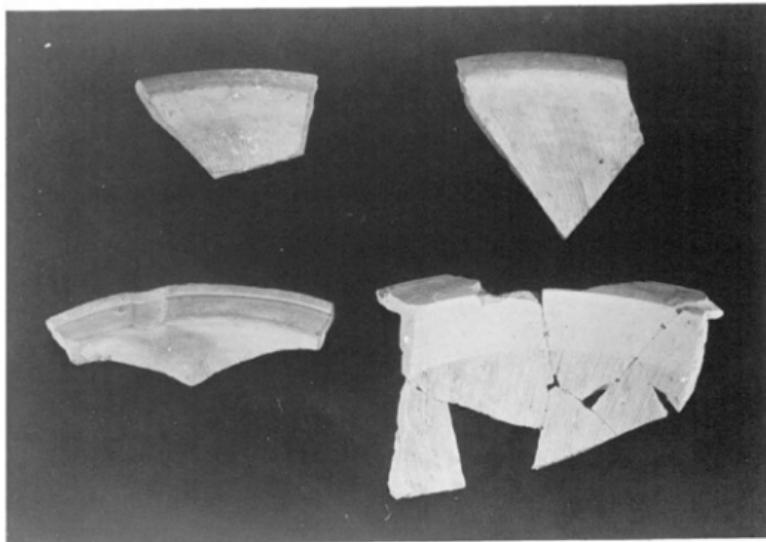
下、同 上（表）



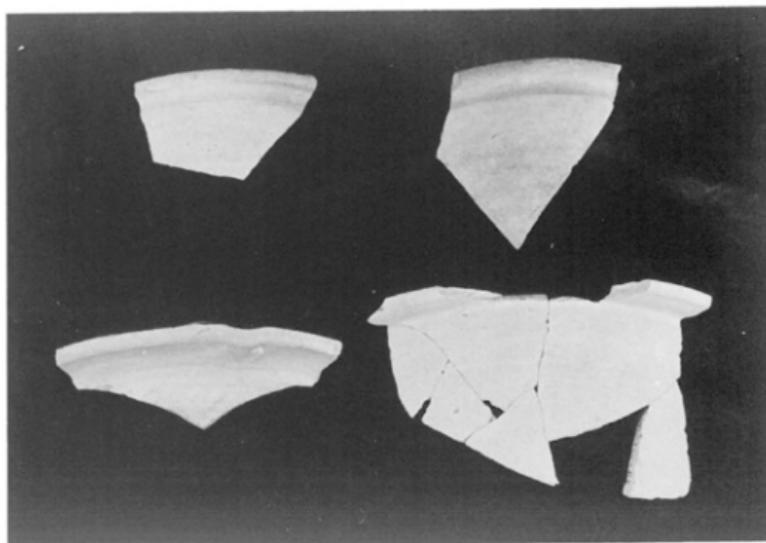
上、摺 鉢（裏）（第II地区）



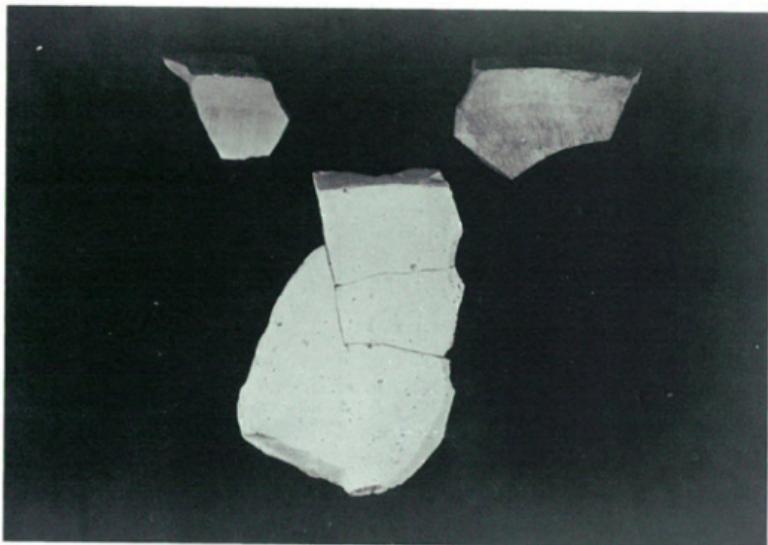
下、同 上（表）



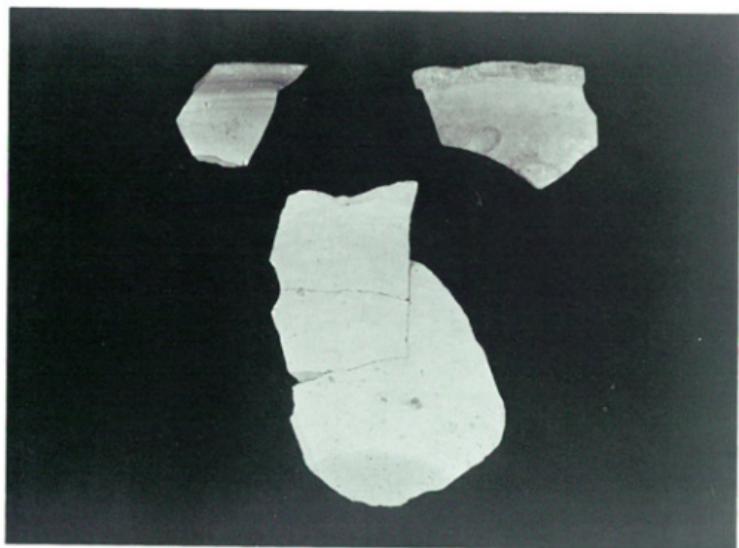
上、摺 鉢（裏）（第II地区）



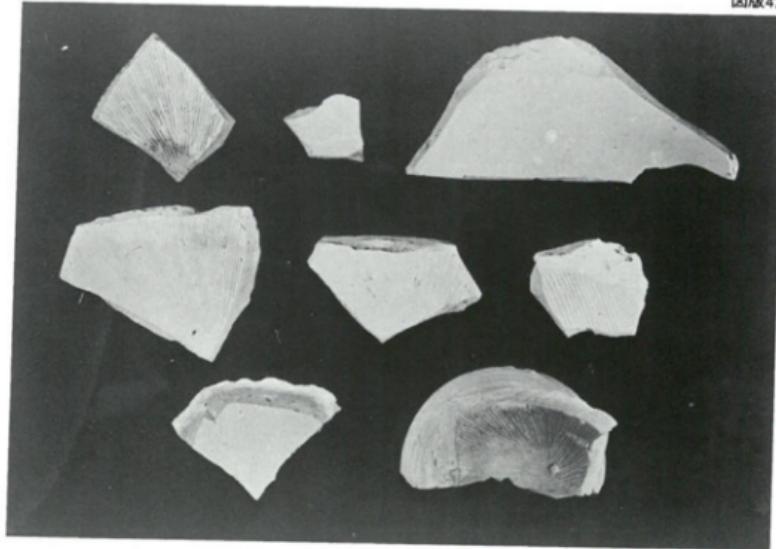
下、同 上（表）



上、摺 鉢（裏）（第II地区）



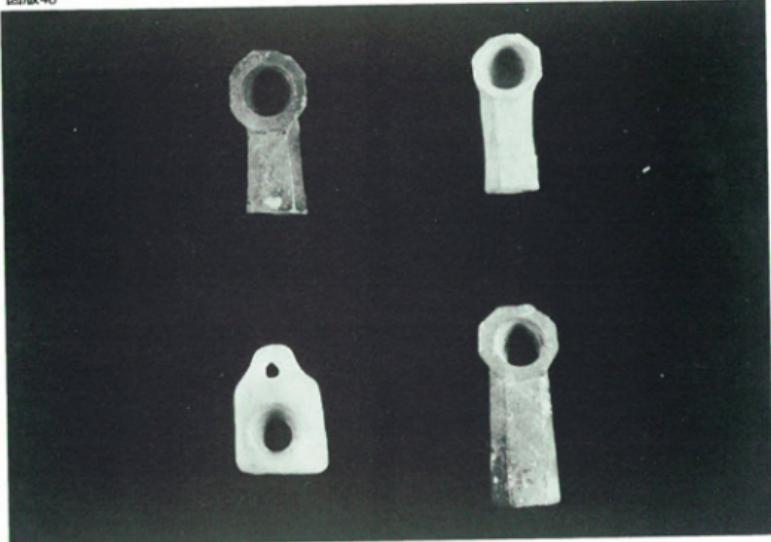
下、同 上（表）



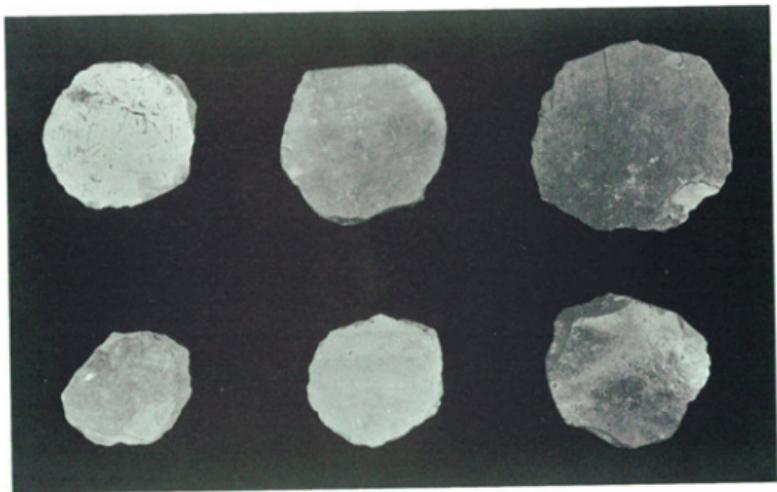
上、摺 鉢（裏）(第II地区)



下、同 上（表）



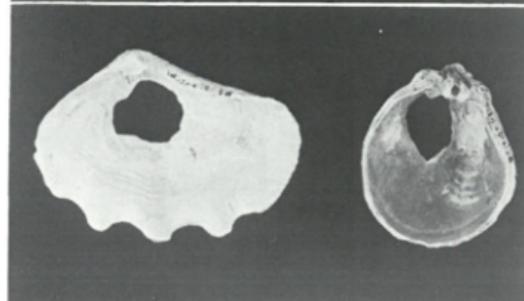
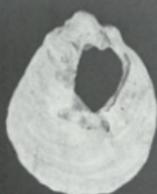
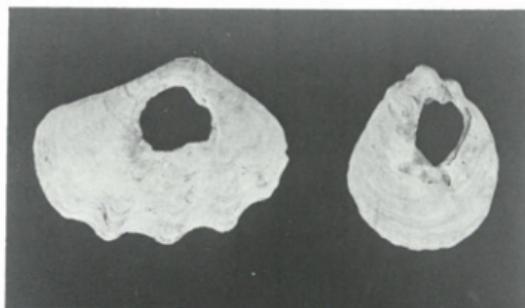
上、陶・土製キセルの雁首（第II地区）



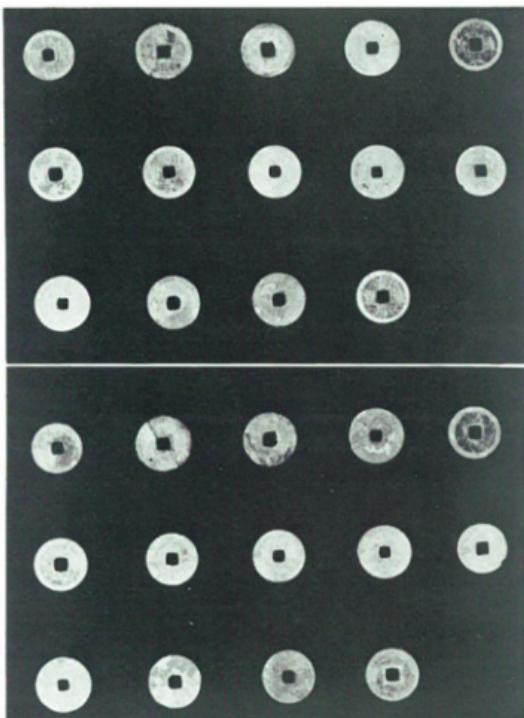
下、円板状製品（第II地区）



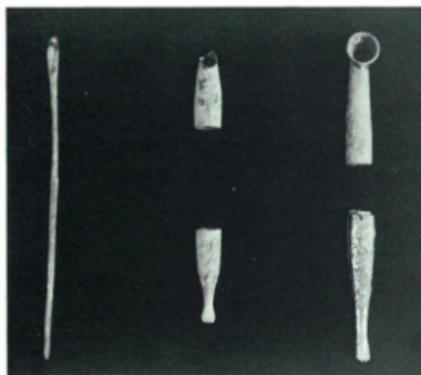
上、スイジガイ製利器（表・裏）(第II地区)



下、有孔貝製品（シャコガイ・メンガイ、表裏）(第II地区)



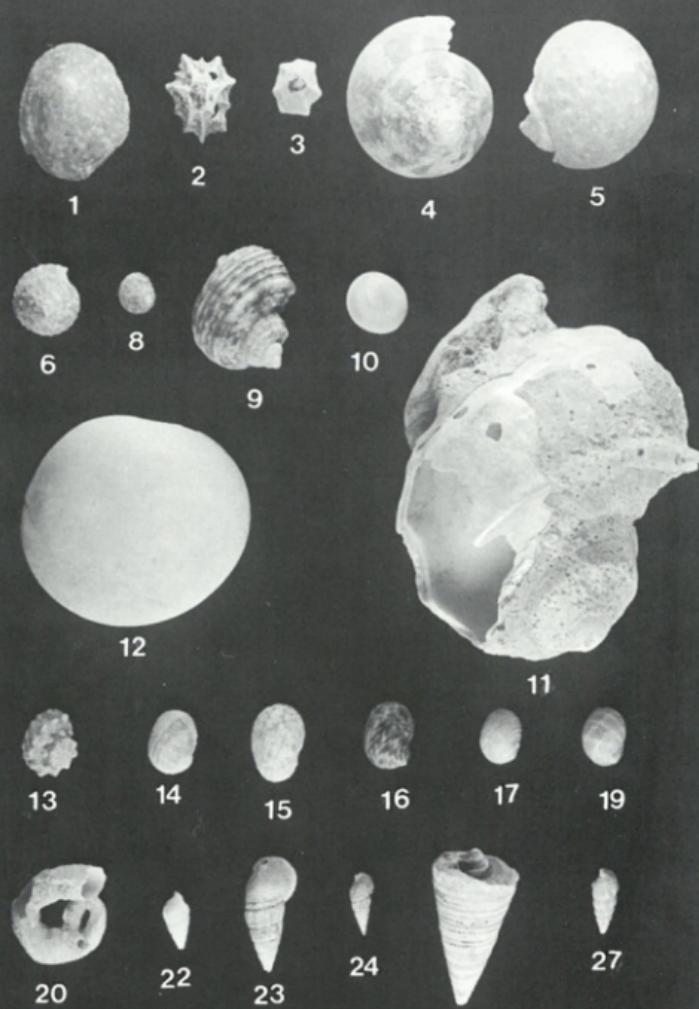
上、銭（表・裏）（第II地区）



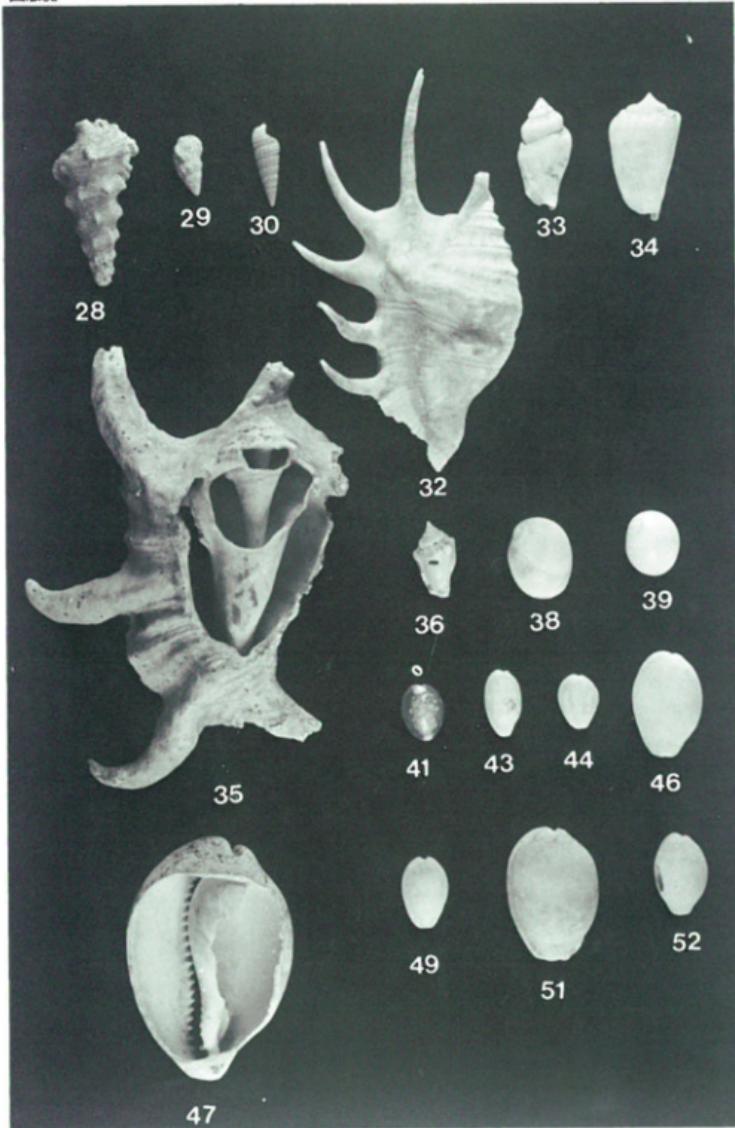
下左、青銅品（キセル・カンザシ）（第II地区）



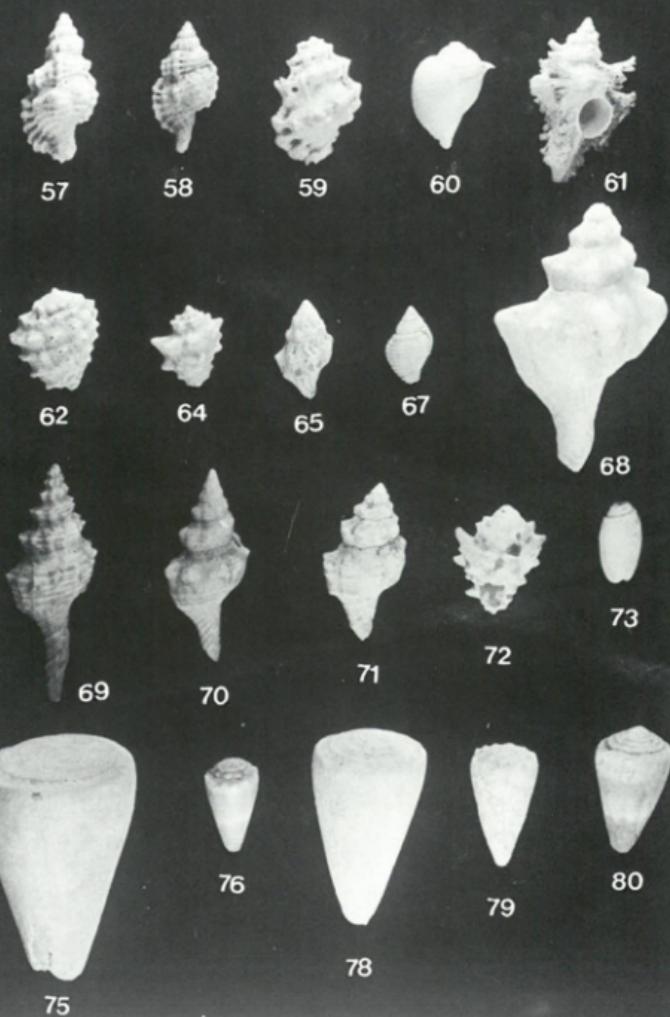
右、鐵 淬（第II地区）



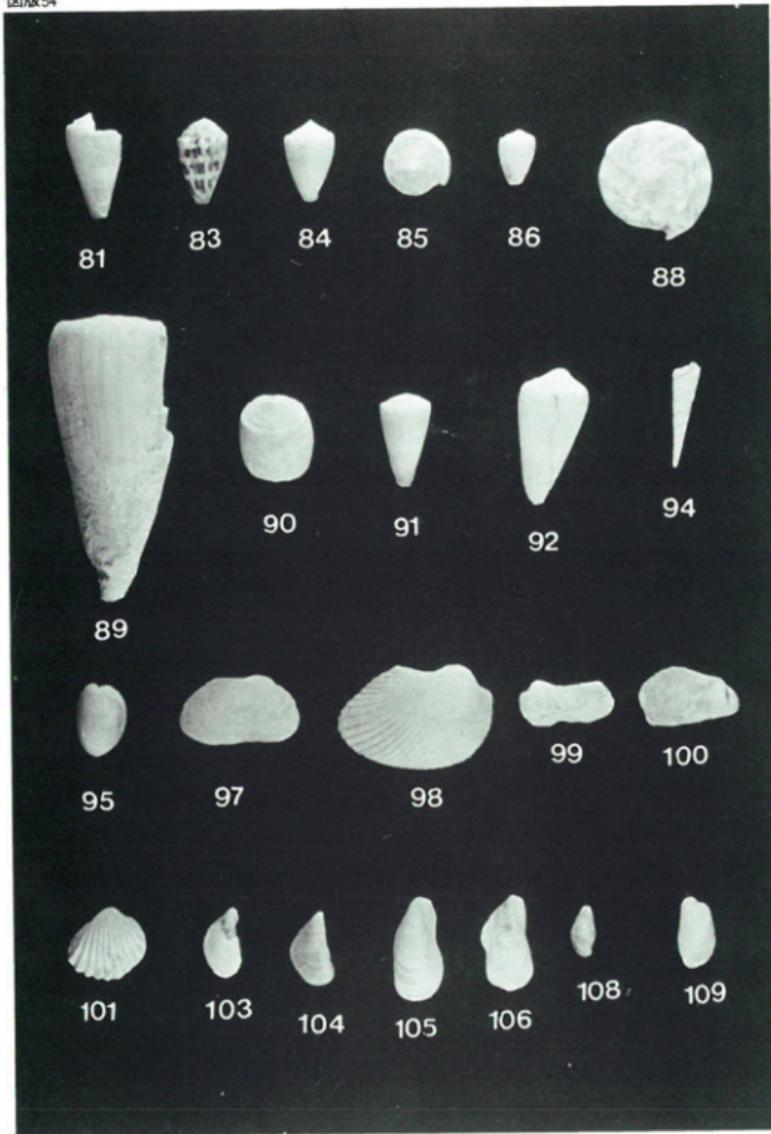
自然遺物 (第 I · II 地區)



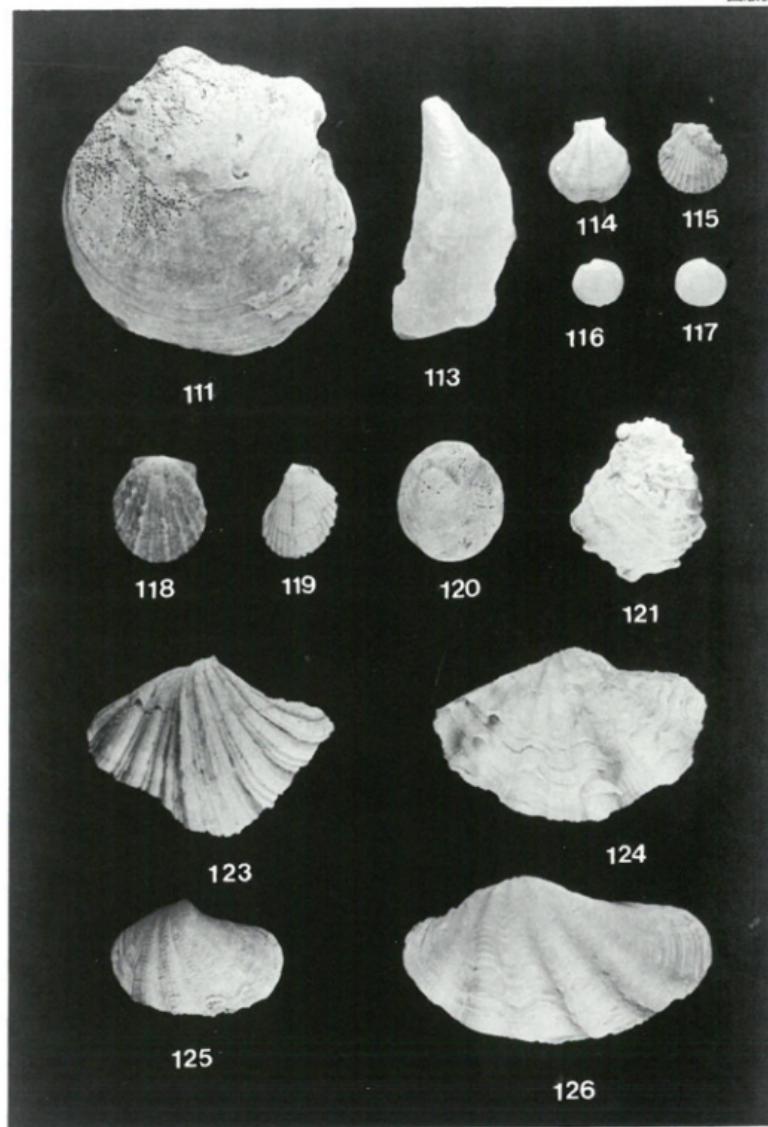
自然遺物 (第Ⅰ・Ⅱ地区)



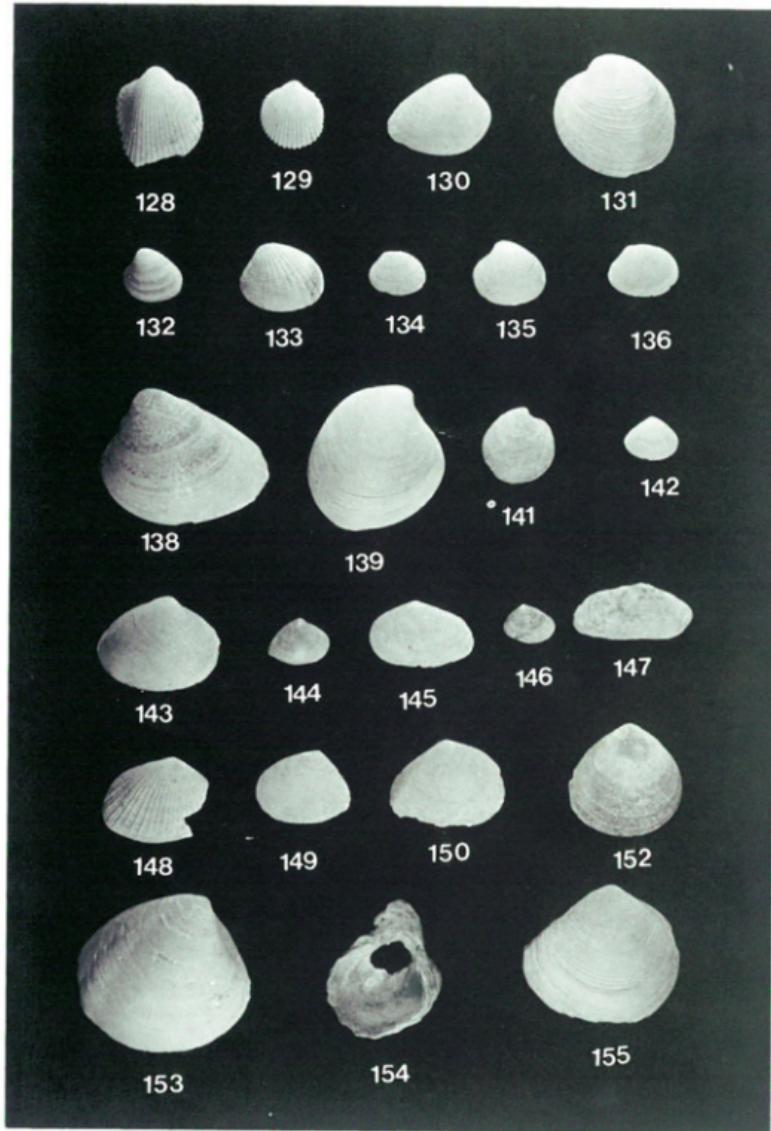
自然遺物 (第 I + II 地區)



自然遺物 (第Ⅰ・Ⅱ地区)

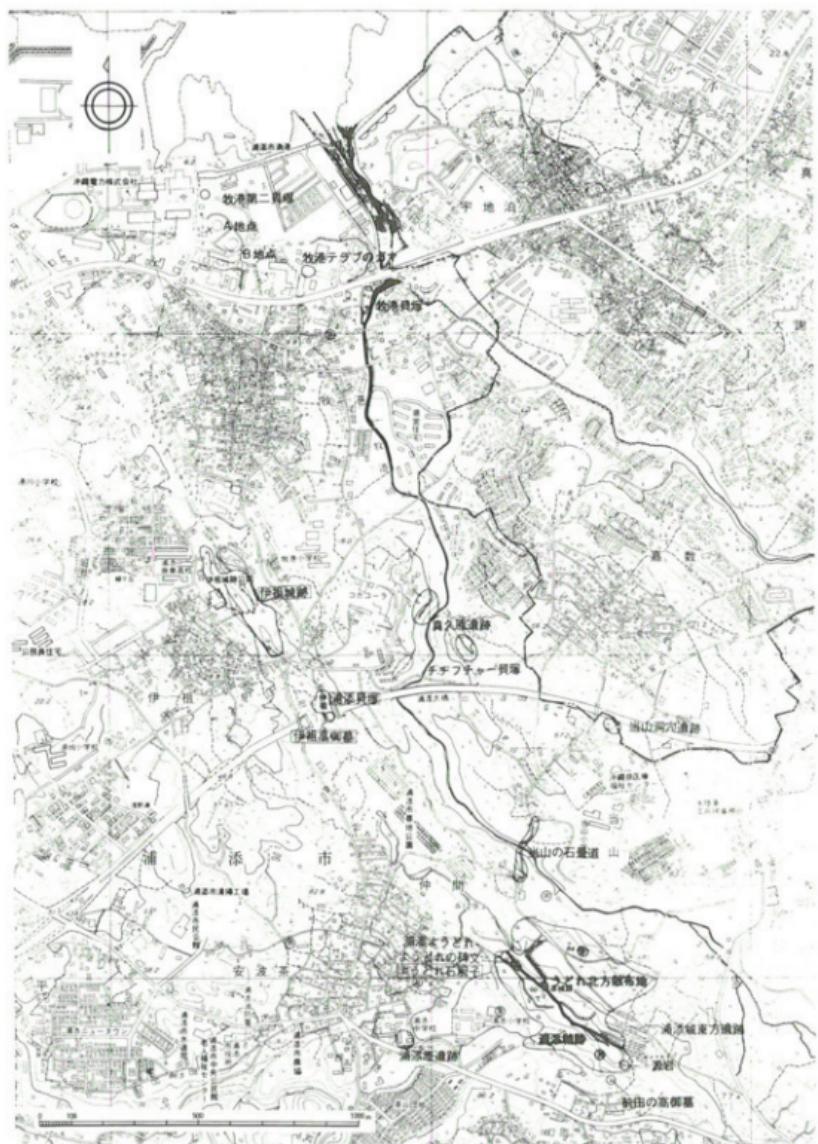


自然遺物 (第Ⅰ・Ⅱ地区)



自然遺物 (第 I · II 地區)

## 真久原遺跡編



第1図 真久原遺跡周辺の遺跡分布図

## 第Ⅰ章 遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡は国道330号線（バイパス浦添大橋）の北側、県指定史跡浦添貝塚<sup>註1</sup>の北側（浦添市字伊祖小字真久原・安川真比原）に所在する。石灰岩丘陵地に立地し、一帯はマーヒバンタヒと呼称されている。遺跡地の崖下には牧港川が流れ、下流には牧港貝塚<sup>註2</sup>が河川沿いに立地する。また、崖下には半洞穴を利用した風葬墓址が点在する。

遺跡の発見は1979年（昭和54年）12月18日～21日に浦添市教育委員会が県道153号バイパス新設工事に伴う分布調査で確認された。分布調査の報告では白磁玉縁口縁・白磁口禿皿・高麗瓦などが検出し、グスク時代の遺跡としてプロットされている<sup>註3</sup>。

本遺跡の周辺には浦添城跡<sup>註4</sup>・浦添ゆうどれ<sup>註5</sup>・高御墓<sup>註6</sup>・浦添貝塚<sup>註7</sup>・伊祖城跡<sup>註8</sup>が所在する。（第1図）。浦添城跡を除く、他は国・県指定史跡となっている。特に本遺跡を含めて、浦添城跡・伊祖城跡は歴史的にも舜天・英祖・察度の各王統<sup>註9</sup>と直接あるいは間接的にも関連するようだ。例えば、本遺跡と浦添城跡出土の高麗瓦などが、前述の歴史的問題や関連を明確にする手懸となる可能性もある。

また、遺跡地の所在する小字からは王府時代に設置された印部土手石（原石）と称される図根石（点）が発見されている<sup>註10</sup>。真久原遺跡の位置図は第2図に示した。

### 〈註〉

註1 「沖縄の文化財」 沖縄県教育委員会 1984年3月。

註2 「牧港貝塚・真久原遺跡調査概報」 沖縄県教育委員会 1984年3月。

註3 「うらそえの文化財」—遺跡分布調査報告一 浦添市教育委員会 1980年3月。

註4 「今姿を見せる古琉球の浦添城跡」 浦添市教育委員会 1983年3月。

「浦添城跡第二次発掘調査概報」 浦添市教育委員会 1984年3月。

註5 註1に同じ。

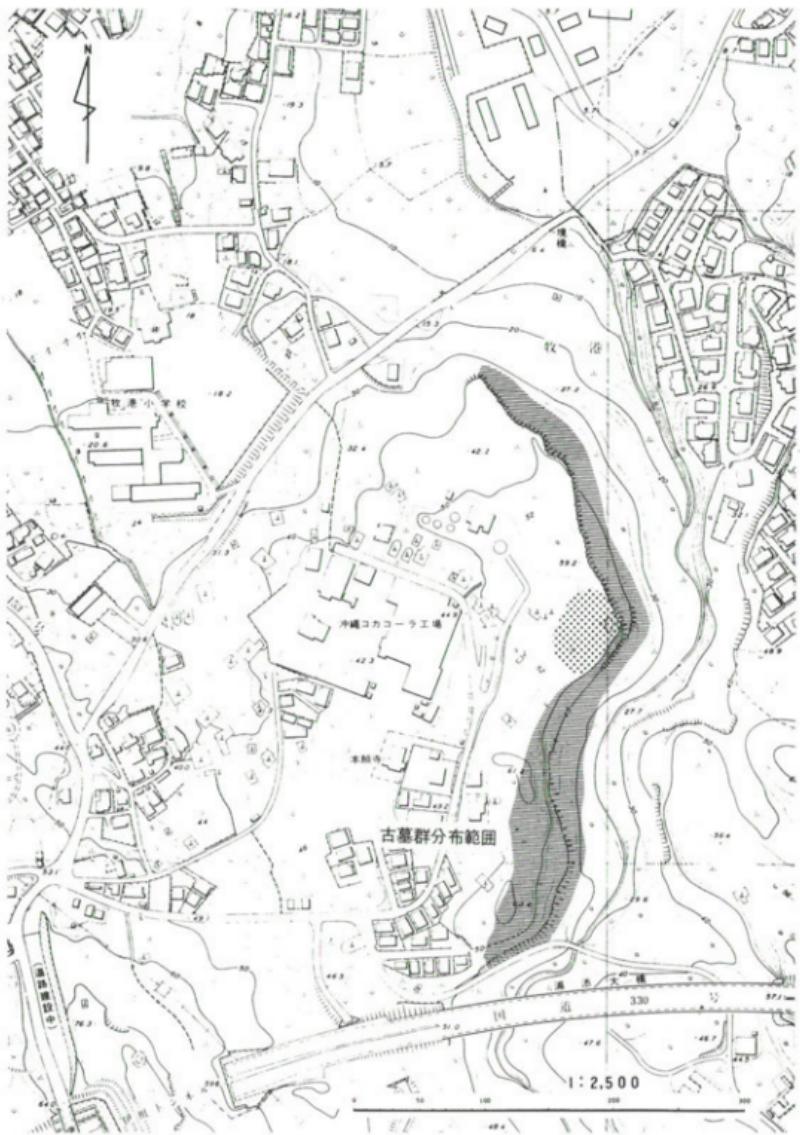
註6 註1に同じ。

註7 註1に同じ。

註8 「ぐすぐ」—グスク分布調査報告（I）— 沖縄県教育委員会 1983年3月。

註9 「浦添市史」第2巻 資料編Ⅰ 浦添の文献資料 浦添市史編集委員会 1981年3月。

註10 「沖縄県地域史協議会ニュース2」 沖縄県地域史協議会 1981年1月15日。



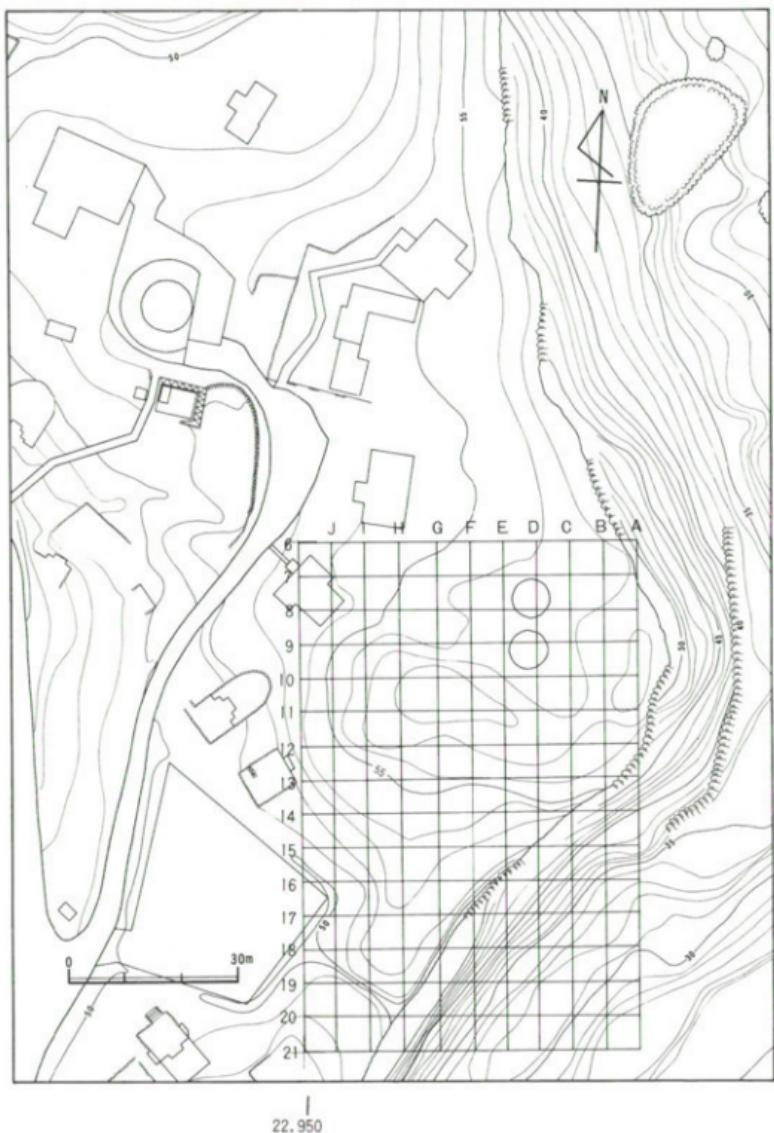
第2図 真久原遺跡位置図（国土地理院作成の図に遺跡等をプロットした。）

## 第Ⅱ章 調査の経過

調査は1983年5月16日から7月2日までの約2ヶ月間を実施した。調査区は第3図に示すように遺跡地に計画されている新設県道153号線の工事予定範囲内に設定した。遺跡の範囲を確認するために5箇所の試掘坑（1×1m）を発掘しながら遺物が多量に出土する地域にグリッドを設定した。試掘坑の5箇所からは遺物包含層は確認できなかった。グリッドは工事計画図面にプロットされた工事用の杭がほぼ真北に近いラインを基準とし、発掘区に6m×6mを単位とした方眼を組んだ。東西ラインは北側から算用数字、南北ラインは東側からアルファベットでそれぞれ表わした。

発掘は、E-10・11から着手した。土層観察用の畦は遺構との関連で、Fライン・12ラインに設けた。G～Iのラインは岩盤が既に露出した部分や石灰岩礫（人頭大）が多く認められたため、岩盤の窪みに堆積した土砂の発掘と礫の除去が主体となった。この地域は高麗瓦片も量的に多く出土したので遺構等の検出に傾注したが確認できなかった。また、本遺跡の崖下や丘陵地には風葬墓址が点在することが判明したため、1984年12月11日から1985年の1月31日までの1ヶ月半を調査期間として実施した。風葬墓址や破風墓はかなり破壊されていた。これは沖縄戦当時の日本軍や住民の避難場所等として利用されたためにその原形を留めていない。

遺跡地には多量の砲弾破片や小銃弾などが検出したため、不発弾等に注意しながら発掘を進めた。



第3図 真久原遺跡トレント設定図

### 第Ⅲ章 遺跡の概要

#### 1. 層序

発掘調査の結果、本遺跡の層序は3枚が認められた。第Ⅲ層（地山の黄褐色土層）で、70近くの柱穴群と炉址が検出されたことは意義深い。

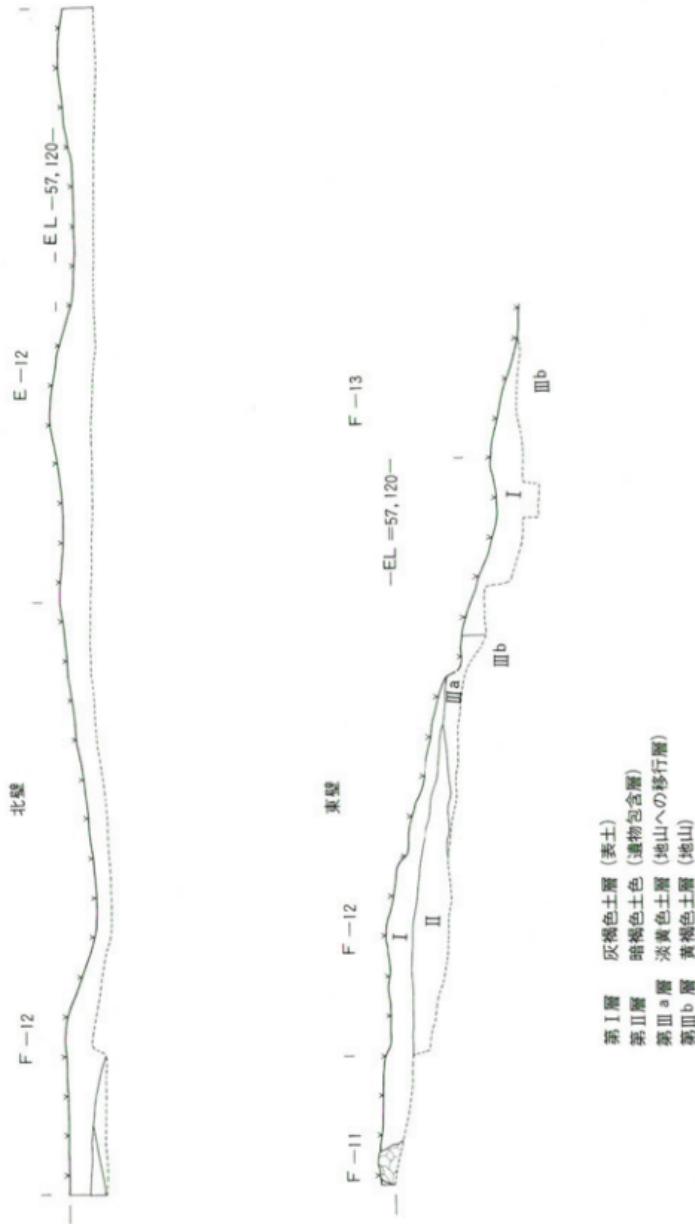
層の断面図は第4図のとおり、前述の柱穴群と炉址を中心としたF-11・12・13の東壁とE-12、F-12の北壁をあらわし、柱穴群や炉址等の構図は各項目の図に示した。

**第Ⅰ層** 本遺跡の表土層を構成するもので、調査地区に広く、分布する灰褐色の土層である。

灰褐色の土層はA・BのラインとG-Iのラインでは10~15cmと薄い。A-Cラインは過去にタンク（Dラインに位置する）撤去の際に表土の一部が削り取られている。同じくF-11~13の層厚は変則的な堆積ではあるが、前記の地域より厚い。陶磁器片・土器片等の他に砲弾破片が出土する。当該層はかなりの攪乱を受けているものの下部では遺物が多くなる。

**第Ⅱ層** 暗褐色土層で、若干の攪乱を受ける遺物包含層である。その堆積はF-12の西側からIラインの方向へ拡がる。層厚は最も厚い箇所で40cmを測る。E-12の南側では薄くなり、その拡がりは認められない。貝類の出土が多くなり、土器・陶磁器等も増加の傾向を示す。

**第Ⅲ層** 黄褐色土層（地山）で、同層直上には淡黄色の土層が部分的に認められた。当初、この層が地山として捉えていたが、発掘終了間際に10cm程度、掘り下げたところ柱穴が数本検出されたので、調査の後半は柱穴群の検出に集中した。前述の淡黄色土層は第Ⅲ層への移行層として把握した。第Ⅲ層をa・bに分けた。第Ⅲa層は淡黄色土層（地山への移行層）とし、第Ⅲb層は黄褐色土層とした。第Ⅲ層は基本的に無遺物層であり、柱穴や炉址は上層（第Ⅱ層）形成段階に掘り込まれたものであろう。



第4図 真久原遺跡の層序

## 2. 遺構と出土遺物

遺構は柱穴群と炉址が主であるが、A-8 グリッドの東側でチャートの欠片が多量に出土した地区が認められたためこれも記載することにした。

### (1) 柱 穴

柱穴群は12・13ラインとD・E・Fラインに限られて、第5図に示すような柱穴が68例検出された。これらの柱穴群は第Ⅲ層（黄褐色土層）上面において露出したことは前項でも触れたとおりである（柱穴群はフラット面から斜面へ移行する緩斜面に集中する傾向が認められる）。柱穴内の層序は明瞭でなく、色調が漸次、灰褐色から暗褐色へ変化していく傾向のものが多かった。また、露頭した石灰岩の窪みを利用した例が認められた。

柱穴群の平面図と断面図は第6図に図示した。また、サイズや出土遺物等については等1表、第2表に示した。柱穴の深さについては任意の地表面から測定した。

柱穴の柱の平均サイズを仮りに推定した場合（柱の横断面をほぼ正円形として捉えた）。柱穴上場の短軸平均は第2表が18.6cm。第1表では15~19cmの範囲が考慮される。また、下場の短軸平均は第2表が11.4cm。第1表からは10~14cmに集中する。以上のことから柱の平均的なサイズは10~15cm内外が考えられる。

柱穴群から推定された遺構は柵列である。第7図に示すように柵は横二列、ほぼ平行に略東西方向へ、柵を設置している。正確な柵列は断定しがたいが第7図2・3・7・8が有力なものとして掲げられる。柱穴群の状況から柱の建て替えが、数回実施されたことが窺える。また柵は露頭した石灰岩（G~Iライン）には礫が集中的に散乱していた状況が認められたことからすると野面積みの石積みが廻されていた可能性は強い（石積みの基礎は検出できなかった）。

第1表 柱穴上場の長軸・短軸比較と下場の短軸平均一覧表

上場長軸 (cm)	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	小計
小計	3	12	21	8	10	4	1	0	1	60

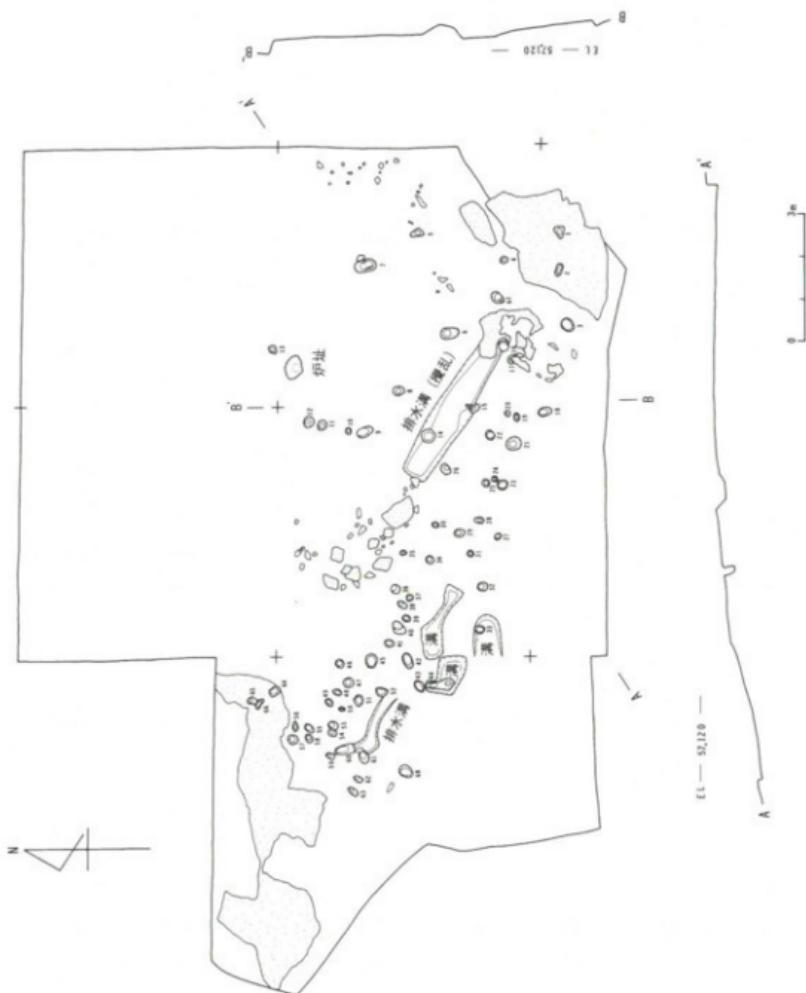
上場短軸 (cm)	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	小計
小計	1	14	21	16	6	2	60

下場短軸 (cm)	5~9	10~14	15~19	20~24	小計
小計	25	27	12	3	67

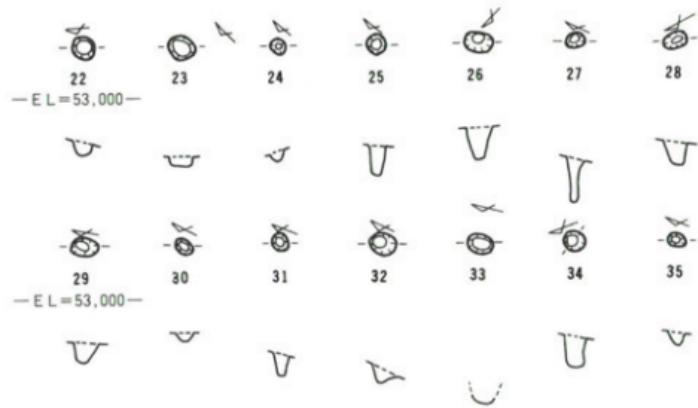
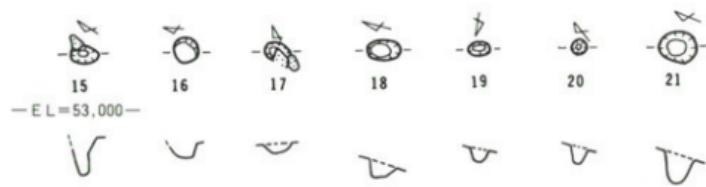
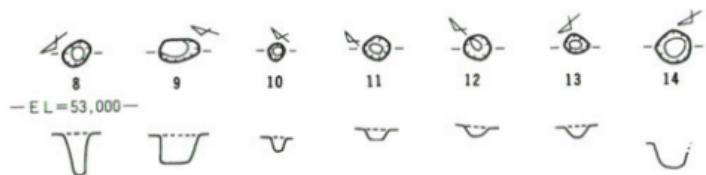
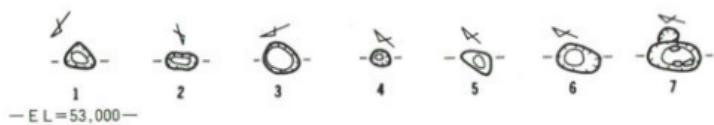
深さ (cm)	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	小計
小計	9	12	14	11	6	5	0	1	1	1	60

第2表 柱穴群のサイズ及び出土遺物一覧表

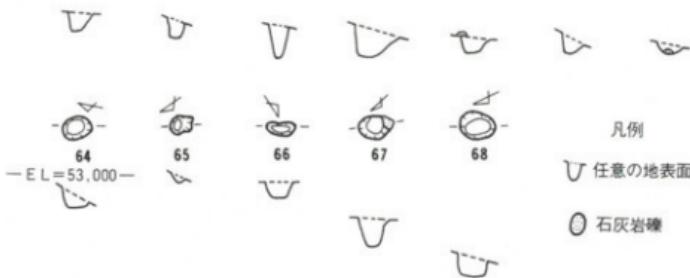
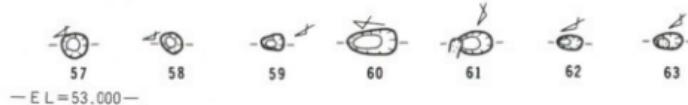
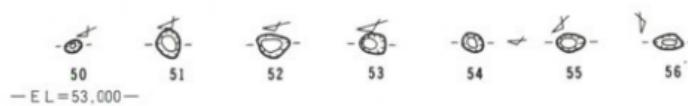
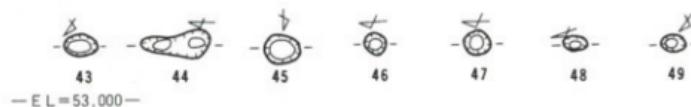
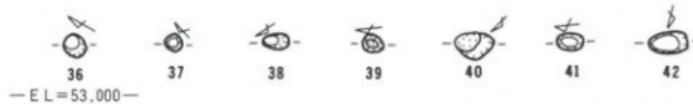
柱穴番号	柱穴上場				柱の表任 深面意 さかの ら地	出土遺物	備考	柱穴上場				柱の表任 深面意 さかの ら地	出土遺物	備考	
	長軸	短軸	短軸下場	長軸				短軸	短軸	短軸下場	長軸				
1	30	21	10	23	青磁 口縁 瓶 部各1点・土 器片30点	青磁 口縁部 第14回4	36	23	21	11	23				
2	33	14	6	13			37	16	15	8	6				
3	34	28	22	24			38	26	16	9	18				
4	18	17	8	14			39	18	15	9	18	土器片1点			
5	32	19	10	16	青磁(口縁)1点 土器片10点・ 甕1点		40	36	25	21	16				
6	43	27	16	53	青磁 口縁部 第14回6		41	23	16	10	10				
7	51	30	20	31	土器片13点 甕1点		42	35	22	16	22	土器片3点			
8	25	20	11	43	土器片2点 甕1点		43	31	19	15	28	土器片2点 鉄片3点			
9	39	23	18	28	土器片3点		44	-	-	16	-	土器片3点 甕1点	排水溝で上 面を削られる		
10	15	13	10	15			45	33	27	14	8				
11	24	21	9	11			46	22	19	10	25	土器片2点			
12	24	22	14	9			47	23	21	12	21	土器片3点			
13	21	17	9	11			48	22	16	11	20	土器片2点			
14	-	-	19	-	土器片1点	排水溝で上 面を削られる	49	19	15	11	11	土器片3点			
15	-	-	8	-	土器片5点	排水溝で一 箇所削られる	50	13	11	6	8				
16	-	-	18	-		排水溝で一部削られる	51	28	21	14	15				
17	24	18	10	8			52	-	-	13	-	土器片3点 灰片1点	排水溝に一 部を削られる		
18	31	19	12	16			53	22	18	10	26	土器片4点			
19	20	13	7	13	土器片2点 甕1点		54	19	16	7	8	土器片1点 灰片1点			
20	15	12	6	16			55	23	16	10	17	土器片1点			
21	35	30	16	29	土器片2点		56	23	10	7	8				
22	23	20	18	12	土器片2点		57	23	20	11	18	土器片1点			
23	27	23	16	10			58	21	16	10	20	土器片1点 鉄製品1点	第20回		
24	14	12	10	11			59	19	14	7	33				
25	19	17	9	29	土器片3点		60	-	-	15	-	土器片43点	排水溝に一 部を削られる		
26	28	17	11	33	土器片2点		61	-	-	11	-		排水溝に一 部を削られる		
27	18	13	9	45	土器片3点		62	24	14	7	19	青磁 口縁1点 土器片6点	青磁 口縁 第14回12		
28	23	14	8	22	土器片5点		63	28	15	12	10				
29	25	20	10	20			64	31	28	9	16				
30	14	13	8	9			65	20	20	6	8				
31	17	14	8	21	土器片1点		66	28	9	6	17	土器片1点 灰片5点			
32	24	20	10	16	土器片1点		67	34	23	14	30	土器片2点			
33	-	-	-	-		排水溝で上 面を削られる	68	34	25	16	22	土器片5点			
34	21	17	8	31	土器片3点										
35	15	12	6	12				平均	26.8	18.6	11.4	19.0			



第5図 柱穴群検出状況



第6図 柱穴群平面図



及び断面図

0 1 2m

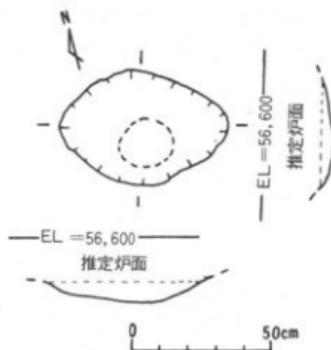


第7図 横列推定図

## (2) 炉 址

D-12の北西隅で検出された。平面観は扁橢円形を呈し、長軸61cm、短軸36cmの範囲にある。第Ⅲ層上面（柱穴群検出面）から確認された。第8図に示すように丸底の皿状の断面をなし、厚さは5~10cmを測る。

焼土の土壤は灰混りの暗褐色土層であった。この土層を洗浄した結果、炭化した米・麦などが検出できた。

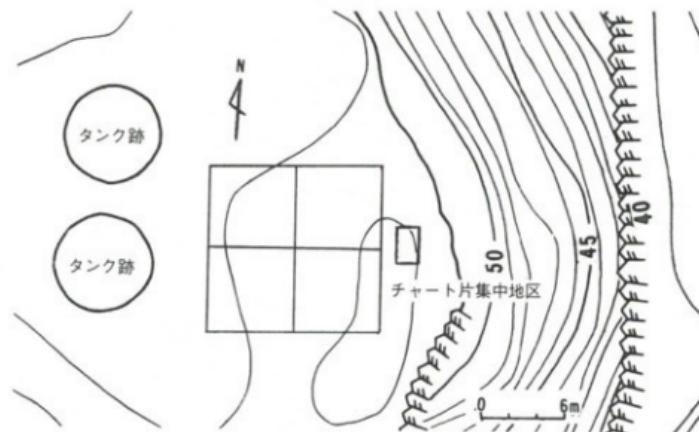


第8図 炉址平面図及び断面図

## (3) チャート片集中地区

チャート片が集中的に検出された地区は、グリット設定をしたトレンチから外れたため第9図に示した。チャート片は表土層を除去した段階から出土した。その数は80点を越えた。

チャート片は露出した石灰岩の溝（凹地）に堆積した暗褐色土層中から検出された。チャ



第9図 チャート片集中地区位置図

ト片が出土した土層の厚さは平均20cmである。チャート片以外に青磁片・土器片が伴出するこ  
とから推察してグスク時代に堆積した包含層である。

チャート片と青磁片・土器片の出土地点は第10図に示した。チャート片の中で、接合できた  
破片資料は図版3・4に呈示した。



第10図 チャート片及び青磁片・土器片分布状況図

(1) 土器（第11図1～第13図47）・（図版5～7）

土器は柱穴出土のものを総数に含めていない。柱穴出土の資料は細分化したものが多く、器形等が窺えない。従って、ここで扱うものは包含層中のものを主体とした。また、土器の全ては広義のフェンサ上層式土器である。土器は総数1483点が出土した。その内訳は口縁部58点・底部98点・胴部1329点であった。層位別にみるとG-12(340点)グリッドが最も多く、逆に最も少ないグリッドはI-12(2点)である。

土器は完形品の出土は一点もない。小破片が多い。器種が推定されたものは壺形・鉢形・碗形の3種が認められた。碗形は底部から得られた資料から推定した。器形の分類は「稻福遺跡発掘調査報告書」<sup>註1</sup>に基づいた（以下、本文では略して稻福遺跡と記す）。参考までに稻福遺跡の壺・鉢・碗の定義を概略する。

### 壺形土器 壺 I (口唇部から頸部の長さが 2 cm を越えるもの)

表II( タイプ2 cmを越えないもの)

### 壹Ⅲ（無類に近いもの）

### 鉢形土器 鉢 I (口唇部から頭部の長さが 2 cm を越えるもの)

鉢 II ( タ 2 cm を越えないもの) については以下に細分で  
きる。

鉢Ⅱ<sub>a</sub>（口縁から胸部に刷毛等を施した後に口縁部へ補強を兼ねた指圧を加える。）

鉢Ⅱ<sub>b</sub>（全体的に蓖削りで調整した後に頸部へ横位・斜位方向の蓖削りを再度施す。）

鉢Ⅱ。(口縁部に貼付けを施すため、擬似肥厚的な感じを受ける。この部分に指圧を加える。頸部にはシャープな稜が観察できる。)

鉢Ⅲ（頸部を有さず口縁部が内傾する鉢形）以下に大別できる。

### 鉢田（口縁部が肥厚するもの）

鉢用：（肥厚しないもの）

### 胸形は鉢皿の分類に従う

### 胸A(口縫部が肥厚するもの)

#### 碗B(肥厚しないもの)

本遺跡では鉢Ⅱ<sub>b</sub>・鉢Ⅱ<sub>c</sub>・鉢Ⅲ<sub>a</sub>・碗Aその他の土器（フェンサ下層式土器・陶質土器）は検出されていない。以下、壺形土器・鉢形土器・不明土器・有文土器・有孔土器・底部（手捏土器の底部片も出土している）の順に記述する。

### 1) 变形土器（第11図1～5）・（図版5）

壺形土器は5点が確認された。壺Ⅰは1~4である。壺Ⅱは5のみであった。

壺Ⅰは次の3タイプがある。直口あるいはそれに近いもの(1)。ゆるく外反するもの(2・3)。きつく外反するもの(4)である。

#### 壺Ⅰ (1~4)

1は推算口径12.9cmを測る。器色は外面が灰褐色、裏面は淡黄色を主体に一部に黒褐色が認められる。内外面は若干、磨耗するがナデ・指圧痕が認められる。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。石灰質微砂粒>石英>ガラス質の鉱物>アズキ色の鉱物を混入する。H-11第Ⅱ層出土。

2は比較的大きい破片であるが、口径を推算することが困難であった。内外面とも橙褐色を呈する。内外面は磨耗するが、残存面から丁寧なナデ仕上かと推定される。胎土は細かい。焼成は悪く脆い。石灰質微砂粒>石英>ガラス質の鉱物>アズキ色の鉱物を混入する。H-11第Ⅱ層出土。

3は内外面とも黄褐色を呈する。外面に箝削りを主体に若干のナデを施す。内面はナデを主体とし、指圧痕を施す。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>石英>アズキ色の鉱物を混入する。H-11第Ⅱ層礫下出土。

4は内外面とも黄褐色を呈する。内外面にナデを施す。外面は内面と比較してナデは丁寧である。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。石英>チャートの細片>アズキ色の鉱物を混入する。H-11第Ⅱ層礫下出土。

#### 壺Ⅱ (5)

壺Ⅱは5の一例のみであった。ゆるく外反するタイプの壺である。

5は推算口径11cmである。内外面の器色は淡黄色を主とし、一部に黒褐色の部分(胴部)が認められる。外面の口頭部に指圧痕とナデを施し、胴部に箝削りを加える。内面はナデが主体で、頭部から胴部の一部に箝削りの痕跡が認められる。胎土は精選される。焼成は堅緻である。ガラス質の鉱物>石英>黒色鉱物>アズキ色の鉱物を含む。G-12第Ⅱ層出土。

#### 2) 鉢形土器 (第11図6~第12図18)・(図版5・6)

鉢形土器は14点出土した。その内13点を図示した。鉢Ⅰは(6~8)、鉢Ⅱ<sub>a</sub>(9)、鉢Ⅲ<sub>b</sub>(10~18)である。

#### 鉢Ⅰ (6~8)

6・7は同一個体の破片であるが、直接は接合できない。外面は黒褐色、内面が淡黄色を呈する。外面は箝削り・指圧痕・ナデを施す。箝削りは顕著である。内面はナデを主体に指圧を施す。胎土は細かい。焼成は堅緻である。ガラス質の鉱物>アズキ色の鉱物>石英>石灰質微砂粒>チャートの細片を混入する。G-12第Ⅱ層出土。

8は外面淡黄色・内面黄褐色を呈する。内外面とも磨耗するため器面調整を知り得ない。胎土は精選され、焼成も堅緻である。黒色鉱物>アズキ色の鉱物>ガラス質の鉱物>石英を混入する。G-12第Ⅱ層出土。

#### 鉢Ⅱ<sub>a</sub>(9)

鉢Ⅱ<sub>a</sub>は一例のみ出土した。口頸部～胴部の縦断面は「く」の字状に屈曲する。

9は推算口径22cmを測る。内外面とも淡黄色を呈する。外面は口頸部に窓削りを施した後に指圧を加える。胴部は刷毛目がナデ消されている。内面はナデを施す。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>アズキ色の鉱物>石灰質微砂粒などを混入する（アバタ状を呈する）。F-12第Ⅱ層出土。

鉢Ⅲ<sub>a</sub>（10~18）

鉢Ⅲ<sub>b</sub>は口縁部が内傾あるいは直口する器形が推定されるものである。

10は内外面とも黒褐色を呈する。外面は窓削り、内面が窓削りを指圧痕・ナデで消す。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色の鉱物>石英>石灰質微砂粒を混入する。H-11第Ⅱ層疊下出土。

11は内外面とも橙褐色を呈し、コブ状の突起部分が欠損するものである。外面はナデを主体とし、コブ状の突起が貼付けられていた周辺に指圧痕を施す。内面は口唇部を内側に折り返している。この部分に指圧痕が認められる。他はナデで仕上げる。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。石灰質微砂粒>ガラス質の鉱物>石英>黒色の鉱物>アズキ色の鉱物を含む（アバタ状を呈する）。I-10第Ⅱ層疊下出土。

12は内外面とも橙褐色を呈する。外面は窓削りをナデ消すが消えきっていない。内面に刷毛目を顕著に残す。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物を含む。E-11第Ⅱ層出土。

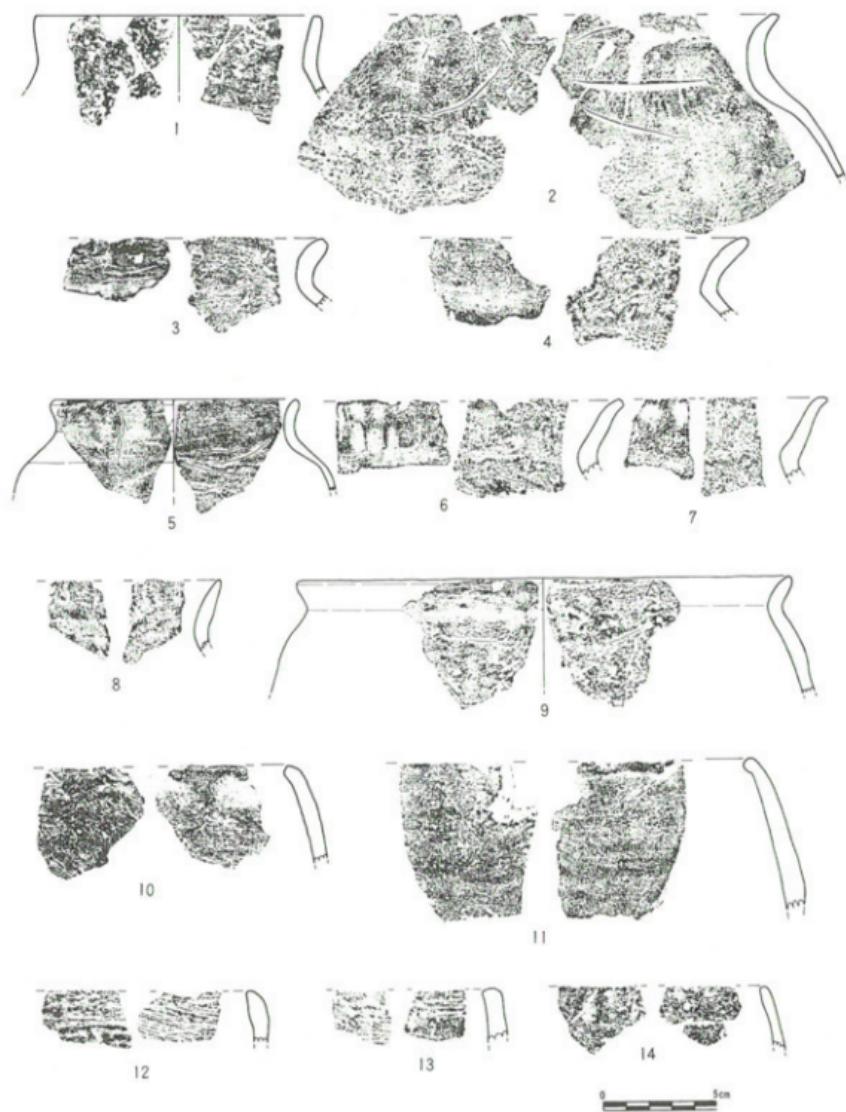
13は外面が淡茶色、内面が褐色を呈する。内外面は窓削り後にナデを施すが消えきっていない。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物>石灰質微砂粒を混入する。G-12第Ⅱ層出土。

14は内外面とも淡黄色を呈する。内外面に指圧痕とナデを施すが、外面の指圧痕は顕著である。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。ガラス質の鉱物>石灰質微砂粒を混入する。I-10第Ⅱ層出土。

15は内外面とも橙色を呈する。器面は磨耗するため調整方法は判然としない。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>石英>石灰質微砂粒を混入する（アバタ状を呈する）。I-10第Ⅰ層出土。

16は外面が橙色。内面は淡黄色を呈する。外面は窓削りとナデを施す。内面には窓削り後にナデを施している。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色の鉱物を含む。H-12第Ⅱ層出土。

17は円形状のコブを貼り付けるものである。外面は橙褐色。内面が淡黄色を呈する。外面はナデで仕上げる。内面は窓削りと指圧痕が認められるがナデで消されている。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。ガラス質の鉱物>石灰質微砂粒>アズキ色の鉱物を混入する。I-10第Ⅰ層出土。



第11図 土器実測図及び拓影図（壺形土器1～5、鉢形土器6～14）

18は扁橢円形のコブを口唇部と水平方向に貼付ける。内外面とも黄褐色を呈する。外面はナデを主体に指圧痕を施す（コブ状の突起とその周辺に指圧痕が集中する）。内面は口縁端部近くを若干、微弱に肥厚させる。この部分に指圧痕を加えているがナデ消されている。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。石英>ガラス質の鉱物>石灰質微砂粒を混入する（アバタ状を呈する）。I-10第Ⅰ層出土。

### 3) 不明土器（第12図19～同図29）・（図版6）

不明土器としたものは18点であった。その中で、11点を図示した。傾きが一定しないため、器種の推定が困難な資料であるため、記載の方法はもっとも可能性が強い器種を前者に弱いものを後者に位置づけた。以下、壺Ⅰまたは鉢Ⅰ（19）・壺Ⅰまたは壺Ⅱ（20・21）・壺Ⅱまたは鉢Ⅱ（22・23）・壺Ⅲまたは鉢Ⅲ（24）・鉢Ⅰまたは壺Ⅰ（25・26）・鉢Ⅱまたは壺Ⅱ（27～29）の順に記する。また、30の一点は稻福遺跡で検出されていないタイプの土器で、鉢形になるのか、あるいは新しく甕形として設定するか今後、検討をする資料である。ここではとりあえず、鉢形または甕形として取り扱った。

#### 壺Ⅰまたは鉢Ⅰ（19）

19は外面が淡茶色・内面が淡黄色を呈する。内外面ともナデを施すものである。ナデは内面よりも外面が丁寧である。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。石英>アズキ色の鉱物を混入する（アバタ状を呈する）。G-12第Ⅱ層出土。

#### 壺Ⅰまたは壺Ⅱ（20・21）

20は内外面とも淡黄色を呈する。内外面に指圧痕を施した後にナデで仕上げる。内面よりも外面のナデは丁寧である。胎土は細かく、焼成は堅緻である。ガラス質の鉱物>黒色の鉱物>石英を混入する。H-11第Ⅱ層疊下出土。

21は器色・胎土・焼成・混入物などが20と一致する。内外面にナデを施すが、内面に比べ外面は丁寧である。H-11第Ⅱ層出土。

#### 壺Ⅱまたは鉢Ⅱ（22・23）

22は内外面とも淡黄色を呈する。内外面に指圧痕を施した後にナデで仕上げるものである。内面よりも外面は丁寧にナデを施す。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>石英>アズキ色の鉱物を混入する（アバタ状を呈する）。G-12第Ⅱ層出土。

23は内外面とも淡黄色を呈する。内外面ともナデを施す。内面よりも外面は丁寧に仕上げる。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。アズキ色の鉱物>ガラス色の鉱物>黒色の鉱物>石英を混入する。H-12第Ⅱ層疊下出土。

#### 壺Ⅲまたは鉢Ⅲ（24）

24は内外面とも淡黄色を呈する。器面は磨耗等によって保持が悪く、調整方法を知り得ない。胎土は粗い。焼成は脆弱である。ガラス質の鉱物>石英>茶色の鉱物>チャートの細片を混入する（アバタ状を呈する）。G-12第Ⅱ層出土。

### 鉢Ⅰまたは壺Ⅰ (25・26)

25は内外面とも淡黄色を呈する。器面の保持は悪いが、外面に指圧痕とナデを施す。内面はナデ仕上げである。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。石英>ガラス質の鉱物>アズキ色の鉱物>黒色の鉱物>石灰質微砂粒を混入する(アバタ状を呈する)。E-13第Ⅱ層出土。

26は外面橙色、内面淡黄色を呈する。内外面に窓削りを施した後にナデで仕上げるものである。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。石英>アズキ色の鉱物>石灰質微砂粒を混入する(アバタ状を呈する)。G-12第Ⅱ層出土。

### 鉢Ⅱまたは壺Ⅱ (27~29)

27は内外面とも淡黄色を呈する。器面の保持がかなり悪く、調整の状況が判然としない。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。アズキ色の鉱物>ガラス質の鉱物>黒色の鉱物>石英を混入する(アバタ状を呈する)。G-12第Ⅱ層出土。

28は外面茶色・内面淡黄色を呈する。外面に指圧痕とナデを施す。内面は窓削り後にナデを施すが雑である。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色の鉱物>石灰質砂粒を混入する。G-12等Ⅱ層出土。

29は外面淡茶色、内面淡黄色を呈する。内外面とも窓削り後にナデを施すが雑である。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>アズキ色の鉱物>石英>石灰質微砂粒を混入する。H-11第Ⅰ層出土。

### 鉢形または甕形 (30)

30は外面淡茶色・内面淡黄色を呈する。外面は頸部へ指圧を主に施し、他は窓削りと雑なナデを施す。内面は窓削り後にナデを施す。胎土は粗く、焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>石灰質微砂粒>黒色の鉱物を混入する(アバタ状を呈する)。G-12第Ⅱ層出土。

## 4 ) 有文土器 (第12図31) ・ (図版6)

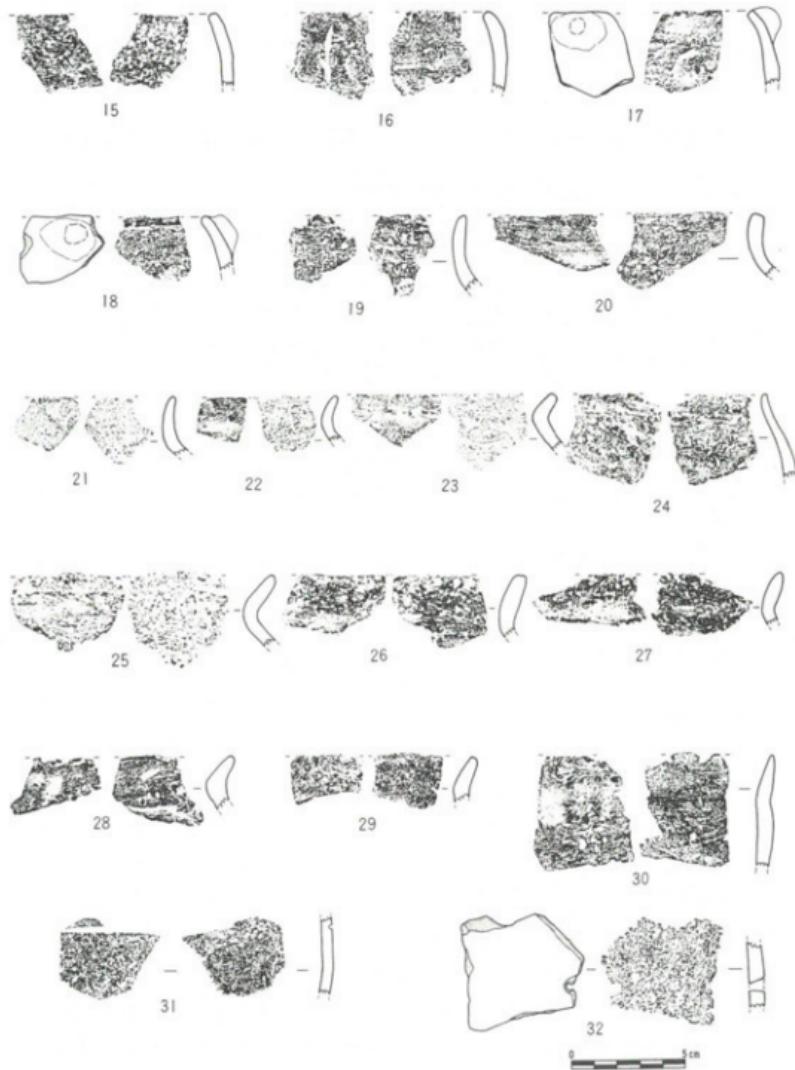
有文土器は1点のみ得られた。

31は幅2mmの棒状工具で、横位方向に一条の沈線を施す。外面淡黄色・内面橙色を呈する。内外面は器面の保持が悪いため器面の調整方法を知り得ない。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物>アズキ色の鉱物>石英>チャートの細片を混入する。H-11第Ⅱ層疊下出土。

## 5 ) 有孔の土器 (第12図32) ・ (図版6)

有孔の土器は胸部資料で、土器の破損部分を補修するために穿った孔かどうかは判別できない。

32は外面から孔を穿ったもので、孔のサイズは外面で直径7mm、内面は4.5mmを測る。内外面とも橙色を呈する。外面に窓削りとナデを施すが、両者とも雑である。内面は丁寧なナデである。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>石英>黒色鉱物>アズキ色の鉱物>チャートの細片を混入する(アバタ状を呈する)。F-12表土層出土。



第12図 土器実測図及び拓影図

(鉢形土器15~18、不明土器19~30、有文及び有孔の土器31・32)

## 6) 底部 (第13図33~47) • (図版7)

底部は1,329点得られた。その内、分類が可能な資料は49点のみであった。分類に際しては稲福遺跡の形態模式図を使用した。本遺跡で検出されていないタイプは省略した。また、模式図の中に数量を追加した。以下、模式図の分類に従って、記述する。

形態	模式図	主な特徴	数量
I	a	底面からの立ち上がりは外側に大きく開いた状態で、ほぼ直線的に胸部へ伸びるもの。	16
	b	底面からの立ち上がりは内側に小さくとじた状態で、ほぼ直線的に胸部へ伸びるもの以外に、内傾の極端なものも含めた。また、手捏土器もその範囲とした。	11
II	a	底面からの立ち上がりはIaと同様にひらくが、次の点で区別した。立ち上がりの部分から丸味を保持しながら胸部へ伸びるもの。	12
	b	底面からの立ち上がりはIbと同様にとじるが、立ち上がり部からほぼ丸味を保持する状態で胸部へ伸びるもの。また手捏土器もその範囲に含めた。	1
III	a	底面の立ち上がり部が僅かにくびれ、ほぼ直線的に胸部へ伸びるもの。	5
	b	底面の立ち上がり部がIIIaと同様にくびれるが、ほぼ丸味を保持する状態で胸部へのびるもの。	3
IV		陶磁器にみられる高台を貼付けするもの。	1
V	不 明	底面および立ち上がり部の破片で、特に葉痕・刷毛目を残す資料を取り上げた。	1280

\* 模式図は特徴的な部位を強調した。

### I<sub>a</sub> (第13図33・34)

I<sub>a</sub>に属するものは16点得られた。典型的な2点を図示した。

33は内面が淡黄色・外面及び底面が橙色を呈する。器面調整をみると立ち上がりの部分に窪割りを施す。他はナデである。内面はナデを主体とし、指圧痕を施す。胎土は細かく、焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物>石灰質微砂粒>アズキ色の鉱物を混入する。H-12第Ⅱ層礫下出土。

34は底面にクワズイモ科の葉痕を残す資料である。外面は黒褐色、底面も同様であるが一部分は内面と同じ様に淡黄色を呈する。器面調整をみると底面は葉痕のみ認められ、立ち上がりの部分に窪割りを施す。内面はナデを主体とする。一部に指圧痕が認められる。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>アズキ色の鉱物>黒色鉱物>石灰質砂粒を混入する(アバタを呈する)。H-11第Ⅰ層出土。

### I<sub>b</sub> (第13図35~36)

I<sub>b</sub>に属するものは11点出土した。典型的な資料を2点図示した。

35は外面及び底面が淡灰色・内面は灰色を呈する。器面調整をみると底面は磨耗のため不明である。立ち上がり部分は範削りを施す。内面はナデを主体とし、一部に指圧痕を残す。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物を混入する（アバタ状を呈する）。H-11第Ⅰ層出土。

36は外面および底面が黄褐色、内面は淡黄色を呈する。器面調整は内外面、底面も磨耗するが、ナデ仕上げが推定される。胎土は粗く、焼成も脆弱である。ガラス質の鉱物>石英>チャートの細片>アズキ色の鉱物を混入する。H-11第Ⅱ層出土。

#### II<sub>a</sub>（第13図37～39）

II<sub>a</sub>は12点出土した。代表的な3点を図示した。

37は内外面とも淡黄色を呈する。内外面ともナデで仕上げる。底面に葉痕を残す。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物>石灰質微砂粒>アズキ色の鉱物を混入する。H-11第Ⅱ層疊下出土。

38は外面は淡茶色で内面は灰褐色を呈する。外面は範削りを施す。底面と内面はナデ仕上げである。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物>石英>アズキ色の鉱物を混入する（アバタ状を呈する）。G-12第Ⅱ層出土。

39は底面が淡橙色・外面は暗褐色・内面は灰褐色を呈する。外面及び底面は欠損する。内面はナデ仕上げ。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物>石英>アズキ色の鉱物>石灰質微砂粒を混入する。H-11第Ⅱ層疊下出土。

#### II<sub>b</sub>（第13図40）

II<sub>b</sub>は1点のみ得られた。

40は外面および底面が淡黄色を呈し、内面は灰褐色である。外面はナデを主体とする。一部に指圧痕を施す。内面と底面はナデで仕上げる。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物>石英>アズキ色の鉱物を混入する。I-10第Ⅰ層出土。

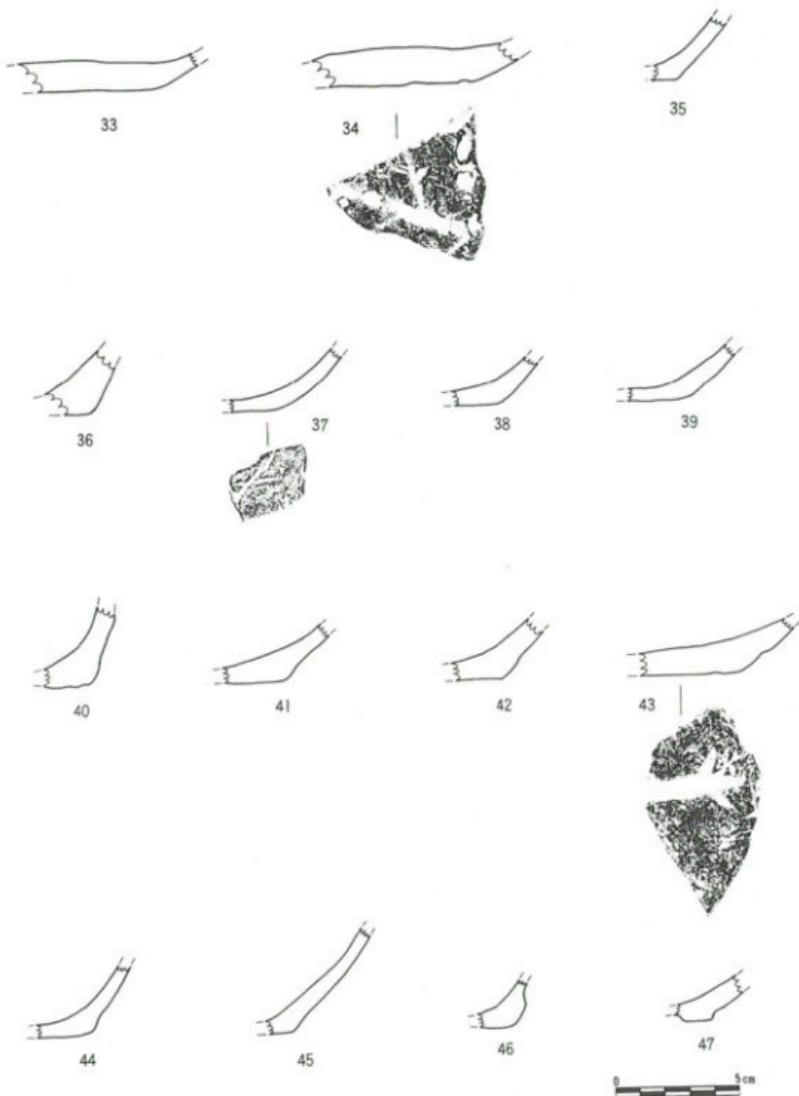
#### III<sub>a</sub>（第13図41～43）

III<sub>a</sub>は5点得られ、3点を図示した。

41は内外面、底面とも淡黄色を呈する。底面の立ち上りの部分に範削りを施す。底面と内面はナデ仕上げ。外面は範削りがナデ消されている。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>石英>黒色鉱物>アズキ色の鉱物>チャートの細片>石灰質微砂粒を混入する。G-12第Ⅱ層出土。

42は外面灰褐色・内面と底面は淡黄色を呈する。底面の立ち上がりの部分に範削りを施す。外面と底面はナデで仕上げる。内面は範削りがナデ消される。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>石英>黒色鉱物>アズキ色の鉱物を混入する。H-11第Ⅰ層出土。

43は内外面・底面とも淡橙色を呈する。部分的な淡灰色を帯びる。底面にクワズイモ科の葉痕を残す。外面は範削りを主体に指圧痕を残す。内面はナデを主体とし、指圧痕・範削りをナ



第13図 土器実測図及び拓影図 (底部 I a 33・34、I b 35・36、II a 37~39、  
II b 40、III a 41~43、III b 44~46、IV 47)

テ消す。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物>チャートの細片>アズキ色の鉱物>石灰質微砂粒を混入する。H-12第Ⅱ層疊下出土。

### Ⅲ<sub>b</sub> (第13図44~46)

Ⅲ<sub>b</sub>は3点のみ出土した。内1点は手捏土器の底部である。

44は内外面・底面とも淡黄色を呈する。底面の立ち上がりの部分を箆で削り取っている。内外面・底面はナデを施す。底面は他面に比べ丁寧である。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>黒色鉱物>石英>アズキ色の鉱物>チャートの細片を混入する。G-12第Ⅱ層出土。

45は外面と底面が灰褐色を呈する。内面は茶色である。底面の立ち上がりの部分から胴下部の箇所に箆削りを施す。他はナデで仕上げる。胎土は細かい。焼成は悪く、脆い。石英>ガラス質の鉱物>石灰質微砂粒を混入する(アバタ状を呈する)。H-11第Ⅱ層疊下出土。

46は手捏土器の底部破片で、外面、底面は淡黄色を呈し、内面は灰褐色を帯びる。内外面・底面とも指圧痕とナデを施す。ナデは内面が丁寧である。胎土は細かい。焼成は良く、硬い。ガラス質の鉱物>石英>黒色鉱物を混入する。H-12第Ⅱ層疊下出土。

### Ⅳ (第13図47)

Ⅳは1点のみ出土した。舶載陶磁器の底部を模したものである。近世の陶質土器とは異なる。

47は高台跡と外底を箆で削り出して、幅の広い高台を造形する。内外面・底面とも淡黄色を呈する。外面箆削り、内面ナデ仕上げである。胎土は精選され、焼成も堅緻である。ガラス質の鉱物>黒色鉱物を混入する。F-12第Ⅱ層出土。

## 小 結

本遺跡出土の土器で不明土器として分類した、鉢形あるいは壺形としたものは将来、分類が可能かと考えられる。本遺跡出土のものを稻福遺跡<sup>註2</sup>と比較した場合、鉢Ⅱ<sub>b</sub>・鉢Ⅱ<sub>c</sub>・鉢Ⅲ<sub>a</sub>・碗A・その他の土器(フェンサ下層式土器)・蓋・把手等の資料が出土していない。

両遺跡(真久原と稻福)の胎土・焼成・混入物を比較すると胎土においては類似性が認められるものの、焼成において堅緻なものが少ない結果が得られた。これは土器製作過程においての技術的な差からくるのかあるいは地域差からくるのかは判然としない所である。

混入物においてはチャートの細片を含む例を除いては、ほぼ共通する。これも遺跡の立地する地域で岩石(石灰岩・微粒砂岩等)の入手しやすい(交流・遺跡地周辺に分布するなど)という条件にあったものかと推定される。また、チャートは本部半島・伊江島などの北部に分布する岩石であることから、北部地域も本遺跡と何らかの関係があったことは事実であろう。同じ様に滑石を混入する胴部片が2・3片出土している。九州地方との関連も十分に窺えるところであろう。

註1 「稻福遺跡発掘調査報告書」(上御願地区) 沖縄県教育委員会 1983年3月

註 2 1に同じ

※第11図9の鉱物同定結果（大城逸朗氏のメモから）「輝石・石英が多い、それに雲母と若干の赤土塊や異質な岩片を含む。」

#### □ 陶磁器（第14図1～第15図32）・（図版8・9）

今回出土した陶磁器類は第14図1～第15図32に図示した。青磁・白磁・天目茶碗・不明陶器・染付・陶器の順に記載する。なお、船載陶磁器は総数でも100点余（口縁・胴部・底部の破片を含む）の出土量である。

##### A 青磁

青磁は碗・皿・盤の3種類が検出できた。碗の出土が最も多く、次に皿・盤の順に減少する。盤は一例のみ出土した。以下、碗・皿・盤の順に記載するが、底部は各項で取り扱った。

###### ①青磁碗（第14図1～13）・（図版8）

碗は次のように分類した。割花文碗・鎬蓮弁文碗・外反口縁碗・直口口縁碗である。

###### a 割花文碗（1・2）

割花文碗は2例（1・2）のみ出土した。1は内面に割花文とみられる文様が片影りで施されている。素地は灰色を呈し、堅緻である。釉は緑褐色を帯びる。F-13第Ⅱ層出土。2は口径14.5cmである。内面に沈線文を2条施す。素地は灰白色を呈し、堅緻である。釉はガラス質で、黄褐色を帯びる。H-11第Ⅱ層疊下出土。

###### b 鎬蓮弁文碗（3～6）

鎬蓮弁文碗は4例（3～6）が出土した。3は口径15.3cmである。鎬蓮弁は細く丁寧に仕上げている。素地は灰色を呈し、堅緻である。釉はガラス質で黄褐色を帯びる。G-12第Ⅱ層出土。4は鎬蓮弁を丁寧に施し、内面に一条の沈線を加えている。素地は灰白色を呈し、堅緻である。釉は透明な淡緑色を帯びる。柱穴No.1より出土。5は釉が他と比較して厚い。鎬蓮弁は不鮮明である。素地は灰白色を呈し、堅緻である。釉は濃緑色を帯びる。G-12第Ⅱ層出土。6は弁先が僅に残在する資料である。素地は灰色を呈し、硬く、粗い。釉は透明な淡緑色を帯びる。柱穴No.6より出土。

###### c 蓮弁文碗（7）

蓮弁文碗は1例のみ出土した。7は弁先のみ残在するが、蓮弁は鎬を持たない。素地は灰色を呈し、硬く、粗い。釉は淡緑色を帯びる。チャート片集中地区より出土。

###### d 外反口縁碗（8・9）

外反口縁碗は3例のみ得られた。8は内面に片影りの草花文を施す。素地は灰色を呈し、堅緻である。釉は緑色を帯びる。G-12第Ⅱ層出土。9は口径12.4cmである。素地は青灰色を呈し、堅緻である。釉は淡青色を帯びる。I-10第Ⅰ層出土。

###### e 直口口縁碗（10～12）

直口口縁碗は6例出土した。代表的なものを3例抜きだした。10は素地が灰白色を呈し、堅

織である。釉は淡緑色を帯びる。チャート片集中地区より出土。11は口径13.2cmを測る。素地は灰白色を呈し、堅織である。釉は灰緑色を帯びる。I-10第II層疊下より出土。12は内外面が若干、破損する。素地は濃灰色を呈し、堅織である。釉は淡黄色を帯びる。柱穴No.62より出土。

#### 青磁底部 (13~15)

底部資料は5例のみ出土した。破片の大きいものを図示した。13は高台径6.4cmである。高台脇はヘラ削りで仕上げる。見込みと疊付に重ね焼きによる目跡が残存する。釉は淡緑色で、外底まで施す。素地は灰白色で、堅織である。G-11第I層出土。14は高台径6cmを測る。見込みに印花文を施す。釉は淡青色を帯び、高台外端部まで施すが、一部外底に及ぶ。外底は螺旋状に搔き取っている。素地は濃灰色を呈し、堅織である。H-11第I層出土。15は高台径6.2cmを測る。見込みに印花文を施し、この部分は露胎する(重ね焼きによる)。釉は青緑色を帯び、高台際まで施す。高台および外底は露胎する。素地は酸化焰のため黄褐色を呈する。堅織である。I-10第II層疊下出土。

#### ②青磁皿 (第14図16~第15図19)・(図版8・9)

青磁皿は5例認められた。特徴的なものや口径の判明したものを図示した。皿は概して、次の特徴がある。口折皿・腰が若干、折れるものなどである。16は口折皿の破片資料で、2叉線による蓮弁文を施し、弁先は尖っている。内面から銚上面へ折れる部分は稜が明確である。また、銚上面はわずかに窪む。素地は灰白色を呈し、堅織である。釉は透明な淡青色を帯びる。F-12第II層出土。17は口径10.5cmである。腰部が若干折れ、直線的に口唇部へ移行する。素地は灰色を呈し、堅織である。釉は淡緑色を帯びる。I-10第II層疊下出土。18は口径9.9cm、器高は1.6cm、底径7.2cmと推算できる。内底に一条の園線を廻らす。釉はガラス質の灰青色を帯び、底部まで達しない。素地は灰白色を呈し、堅織である。H-11第II層疊下出土。19は口径9.3cm、器高1.9cm、底径6.7cmが推算できた。18と同様に内底に一条の園線を廻らす。釉はガラス質の淡緑色を帯びる。また、釉は底部まで達していない。素地は灰色を帯びる。F-12第II層出土。

#### ③青磁盤 (第15図20)・(図版9)

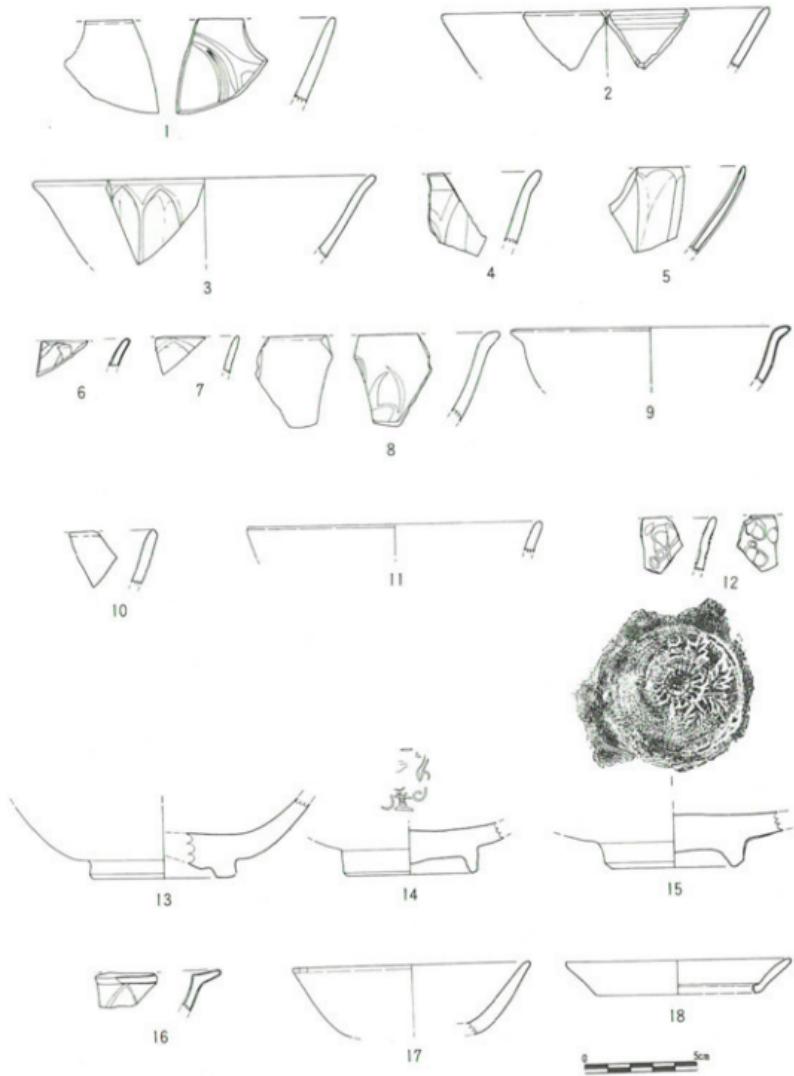
盤は一例のみ得られた。20は内面の蓮弁文の構成が判然としないため、内面の図化を省略した。高台径10.4cmである。釉は濃黄緑色で、外面まで及ぶ。外底の釉は蛇の目状に搔き取っている。素地は白色を呈し、焼成は比較的に悪く、脆い。H-12第II層疊下出土。

### B 白磁

白磁は7例得られた。この内で特徴的なものを図示した。白磁は碗・皿の2種類が認められた。以下、底部も含めて記す。

#### ①白磁碗 (第15図21)・(図版9)

いわゆるビロースクタイプの碗である<sup>註1</sup>。このタイプは3例が認められた。21は同一個体



第14図 青磁実測図

の破片とみられるもので、直接接合はできない。推定復元を試みたところ口径16.4cm、器高6.7cm、高台径5.3cmを測る。口唇部は内側から範によって削り取られているため内面の口唇部の稜はシャープである。外面には灰白色の釉を腰部まで施す。高台は幅が広く、豊付の断面は四角形に近い。内底は窪み、外底が錐に削り出されている。素地は灰白色を呈し、堅緻である。F-13第Ⅱ層とG-12第Ⅱ層から出土。

註1 「ピロースク遺跡発掘調査写真集」 石垣市教育委員会 1983年3月。(調査者の金武正紀氏に本標品についての御教示を頂いた。)

②白磁皿(第15図22~24)・(図版9)

白磁皿は3例得られた。このタイプは3例とも口禿皿である。22は口径10.3cmを測る。素地は灰白色を呈し、堅緻である。釉は灰白色を帯びる。H-11第Ⅱ層疊下より出土。23は口径11.2cm、器高2.0cm、底径7.8cmである。素地は灰白色を呈し、22よりも脆い。釉は灰白色を帯びる。H-11第Ⅱ層疊下出土。24は口径10.8cm、器高2.9cm、底径6.0cmを測る。底面に一条の輪線を廻らす。素地は灰白色を呈し、堅緻である。釉は灰青色を帯びる。施釉は腰部まで施す。外底は輪状に削り出している。D-12第Ⅱ層出土。

B 白磁底部(第15図25・26)

白磁底部は2例得られた。25は高台径7.5cmである。外面は腰部から下は露胎する。内底は灰白色的釉を輪状に搔き取っている。豊付は幅広で内外の端を斜めに削り出している。素地は灰白色を呈し、硬い。H-11第Ⅰ層出土。26は高台径6.3cmが推算できる。釉は灰白色を帯び、高台際まで施す。外底の削り出しが浅い。素地は白色で、25よりも硬い。H-12第Ⅰ層出土。

C 天目茶碗(第15図27)・(図版9)

天目茶碗は2例のみ出土した。27は口径12cmである。口縁部のひねり返しが認められる。素地は灰色を呈し、堅緻である。釉色は黒色で、褐錆斑が認められる。腰部まで施釉を施す。A-8第Ⅰ層出土。

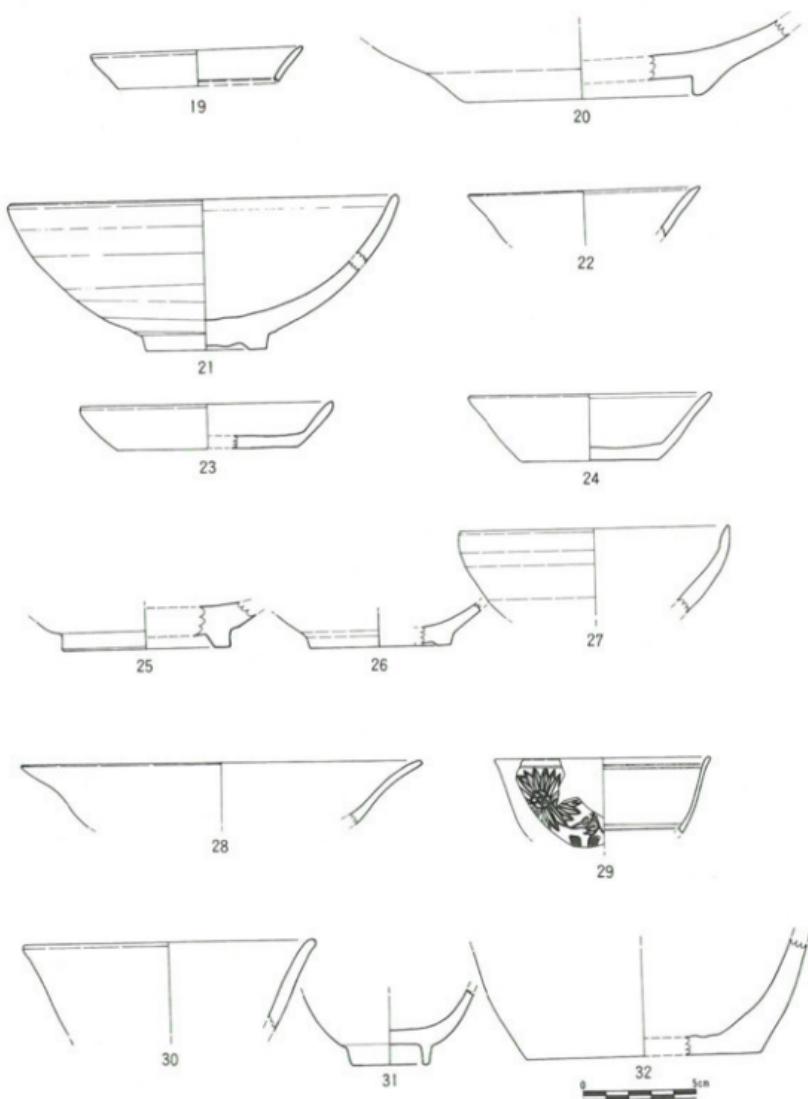
D 不明陶器(第15図28)・(図版9)

不明陶器としたものは舶載陶磁器または沖繩製の陶器か判別しがたいものである。1例のみ出土した。28は口径17.8cmである。釉は淡黄色で、内外面に施す。素地は白色を呈し、脆弱である。H-11第Ⅰ層出土。

E 染付(第15図29)・(図版9)

染付は1例のみ出土した。29は碗になるもので、外面に草花文(唐草文)・界線・梵字文(?)で構成される。内面は口縁と内底に界線を施す。貝須は界線部分が薄く、他は濃い。素地は白色を呈し、堅緻である。釉は淡青白色を帯び、内外面に施す。E-13第Ⅱ層出土。

F 陶器(第15図30~32)・(図版9)



第15図 青磁・白磁・天目茶碗・不明陶器・染付・陶器実測図

陶器は褐釉陶器（南蛮）と沖縄製陶器の2種類がある。褐釉陶器は口縁資料ではなく、大半が胸部・底部の小破片であった。したがって図示を略した。ここでは沖縄製陶器を取り扱った。

沖縄製陶器は比較的多く、出土した。碗・甕・油壺等が得られた。30は碗（方名あらまかい）である。口径は13cmを測る。外反の度合いは微弱である。釉はガラス質の淡灰色である。素地は灰白色を呈し、堅緻である。B-11第I層出土。31は甕で、高台径3.6cmを測る。釉は外面が黒色を呈し、内面は淡灰色を帯びる。内底の釉は輪状に搔き取り、この部分と疊付に重ね焼きによる目跡が残る。外面の釉は外底まで及び、輪状に搔き取っている。素地は灰白色を呈して、堅緻である表採資料。32は甕の底部と考えられるものである。底径は10.4cmを測る。釉は灰色を帯び、底面の一部まで釉の重ねが及ぶ。劈開面の芯部は赤い。底部も同様である。素地は灰色で、焼成が悪い。G-13第I層出土。

### 小 結

本遺跡で出土した資料の中で、柱穴内から鍋蓮弁文碗の破片が、2・3得られたことは本遺跡の形成時期を示す上で重要と考える。また、白磁碗のピロースクタイプも貴重といえる（前回の浦添市教育委員会による分布調査で、白磁玉縁口縁碗が確認されている）。その他の資料として、天目茶碗が出土した。不明陶器として取り扱ったものは、将来、解明されるであろう。因に、ピロースクタイプは浦添城跡<sup>註1</sup>・今帰仁城跡<sup>註2</sup>・佐敷グスクなどで出土している。

#### 〔註〕

註1 「浦添城跡第二次発掘調査概報」浦添市教育委員会 1984年3月。

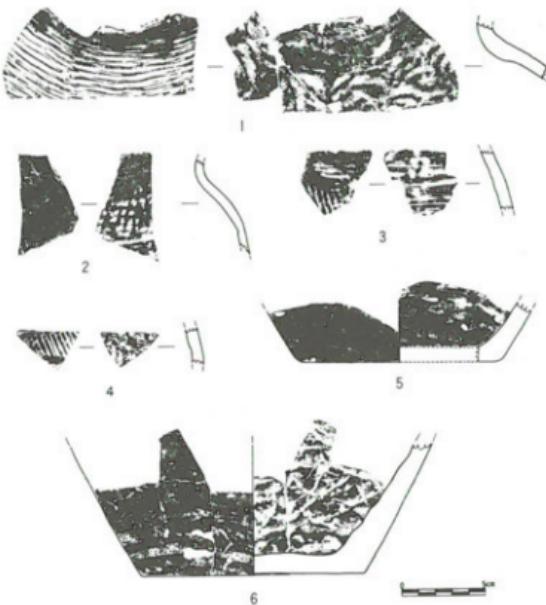
註2 「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ」今帰仁村教育委員会 1983年3月。

註3 「佐敷グスク」佐敷町教育委員会 1980年3月。

### （八）須恵器（第16図1～6）・（図版10）

須恵器は完形品や復元できた資料は1点もない。また、口縁破片も出土していない。有文（波状文・沈線文）を施す例も得られていない。従って、頸部・胸部・底部の図版となっている。以下、個々の特徴を記す。

1は外面は淡茶色で、内面は茶色を呈する。外面は平行線文の叩き目を胸部上部まで施す。頸部近くは叩き目がナデ消されている。内面には同心円状の叩きを施す。指圧痕（胸部）とナデ（頸部）が認められる。素地は細かい。焼成は良く、硬い。石英>ガラス質の鉱物>雲母の細片などを混入する。H-12第II層出土。



第16図 須恵器実測図及び拓影図

2は内外面とも灰褐色を呈する。外面の叩き目はナデ消される。内面は格子目状の当て具を利用した後にナデを施して仕上げる。素地は精選され、焼成も堅緻である。石灰質微砂粒>ガラス質の鉱物などを混入する。I-10第Ⅰ層出土。

3は外面が暗褐色、内面が灰色を呈する。外面に平行線文の叩き目を施す。一部は平行線文の叩きが交差し、擬格子目状となっている。内面には格子目状（当て具が格子目状）の当てを施した後に回転窓削りで消される。素地は精選され、焼成も堅緻である。石灰質微砂粒>ガラス質の鉱物を混入する。G-12第Ⅱ層出土。

4は外面灰褐色、内面茶褐色を呈する。外面に平行線文の叩き目を明瞭に残す。内面の格子目状の当てを施した後に窓削りで消すが徹底されていない。素地は細かい。焼成も良く、硬い。石灰質微砂粒>ガラス質の鉱物を混入する。G-12第Ⅱ層出土。

5は底径11.5cmを測る。内外面とも灰褐色を呈する。外面は回転窓削りと回転擦痕を施す。内面は回転擦痕で調整されている。素地は精選され、焼成は堅緻である。石灰質微砂粒>ガラス質の鉱物などを混入する。G-12第Ⅱ層出土。

6は底径13.2cmを測る。外面灰褐色、内面茶褐色を呈する。外面に平行線文の叩き目を施した後に回転窓削りを施すが叩き目は消え字っていない。底面（外面）は窓削りが認められる。内

面の底は回転の遅い時期に生じた指圧やナデが観察できる。内面立ち上りの箇所は回転範削りが認められ、他は半円状（当て具として円形状または橢円形状のものが考えられる）の当ての痕が残る。素地は細かい。焼成は悪く、脆い。石灰質微砂粒・ガラス質の鉱物などを混入する。G-12第Ⅱ層出土。

以上が本遺跡の特徴的な資料である。須恵器は量的にも少ない。本遺跡出土の須恵器の叩き目は外面に平行線文を施し、内面に同心円状・格子目状・円形状の当て具を利用している。混入物は観察が困難なため、粒土分析の必要性が急務となっている。また、須恵器の窯について1983年に徳之島<sup>註1</sup>で発見されていることから、今後の研究にかなり期待が懸けられている。

註1 「亀焼古窯」 義憲和・西本延宏 鹿児島考古 第18号 鹿児島県考古学会 1984年6月。

## (二) 瓦 (第17図1～第18図14)・(図版11・12)

瓦は高麗瓦系のものが14点出土した (第17図1～第18図14)。「癸酉年高麗瓦匠造」・「大天」の銘入り瓦の中で前者の「癸酉年高麗瓦匠造」在名瓦になるものが得られた。後者の「大天」の在銘瓦はない。また、近世の赤瓦が2点得られたが、ここでは割愛した。

1は平瓦の上部破片である。凸面に羽状の叩き目を右から左方向へ施している。上縁部は範削りを施した感じを受ける。凹面は無文である。一側面には割り痕が残っている。色調は凸面で淡黄色を呈し、凹面は灰褐色である。I-10第Ⅱ層疊下出土。

2も平瓦の上部破片である。凸面に羽状の叩き目を施すが磨耗のため先後関係は不詳。凹面は無文である。一側面も磨耗するが割り痕が推定される。色調は淡黄色を呈する。H-11第Ⅰ層出土。

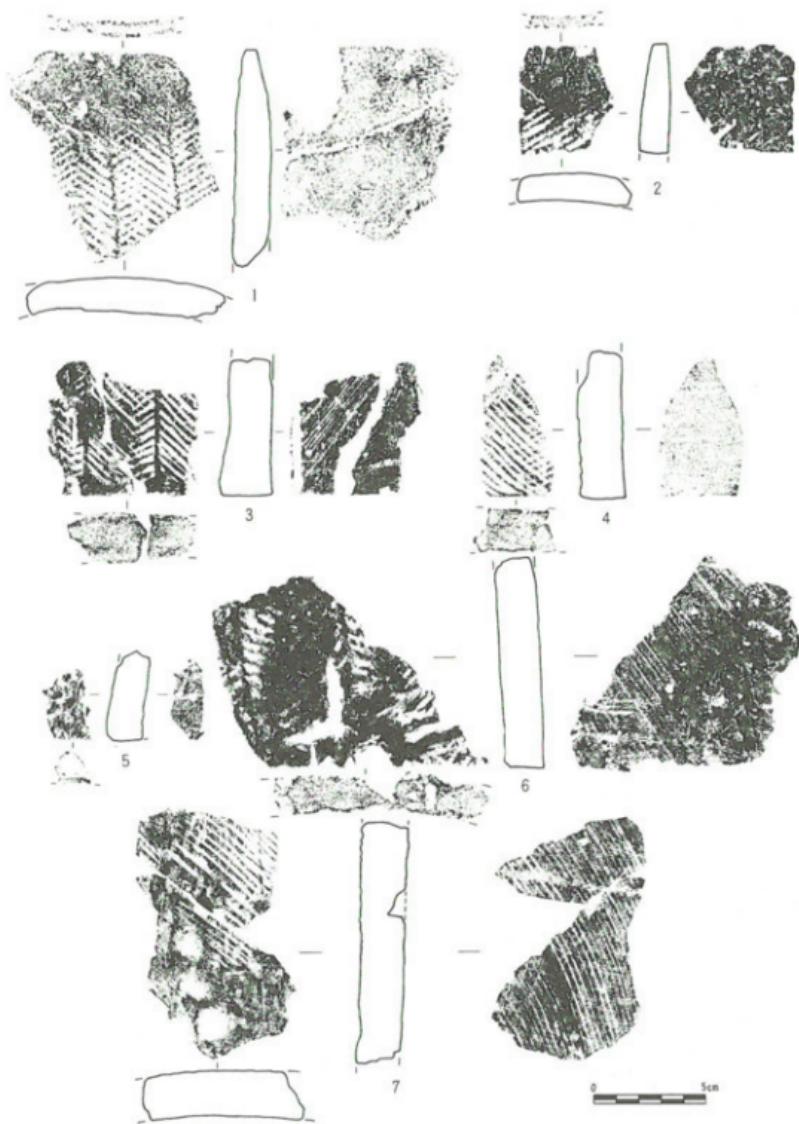
3は平瓦の下部破片である。凸面にはシャープな羽状の叩き目を右から左方向へ叩いている。凹面には布目・模骨から突出した細板(幅2mm・深さ1.5mm)の痕・斜位の線条痕が認められる。側面には割り痕を残す。色調は淡灰色を呈する。E-11第Ⅱ層疊下出土。

4は平瓦の下部破片である。凸面にシャープな羽状の叩き目を右から左方向へ施す。凹面には布目・模骨に結ばれた縄痕が顕著に認められる。色調は灰褐色を呈する。G-11表土層出土。

5は平瓦の上部あるいは下部の破片資料かと考えられるのである。凸面はナデで仕上げる。凹面は粘土板のつなぎ痕などが認められる。側面はシャープに仕上げている。色調は灰褐色を呈する。E-11第Ⅰ層出土。

6は平瓦の下部破片である。凸面には羽状の叩き目を施すが、範で削り消されている。凹面には布目・粘土板のつなぎ痕・斜位の線状痕などが認められる。色調は凸面で淡黄色を呈し、凹面は淡茶色である。F-11第Ⅰ層出土。

7は平瓦の軒先近くで、破損する資料である。凸面に叩き目を左から右方向へ施す。下部には指圧痕などを施す。凹面には布目・粘土板のつなぎ痕・斜位方向に弧状の線状痕を残す。色



第17図 瓦実測図及び拓影図

調は灰褐色を呈する。H-11第Ⅱ層疊下出土。

8は平瓦の破片である。凸面に羽状の叩き目を右から左方向へ施す。凹面は線状痕・模骨から突出した細板（幅2.2mm・深さ1mm）が観察できる。色調は凸面が淡黄色を呈する。凹面は全体的に黒褐色を呈するが、部分的に茶褐色を帯びる箇所もある。A-8第Ⅰ層出土。

9は平瓦の破片である。凸面の羽状の叩き目は交差する。右から左方向に施される。叩き目の上端には、銘入りの叩き具にみられる枠の界線が僅かに残存し、界線の上部に文字の一部分と推定されるものがある。「造」の字の逆スタンプで「造」の一部分「レ」とみられる。凹面は布目・粘土板のつぎ痕・模骨から突出した細板（幅3mm・深さ1.5mm）が認められる。側面には割り痕が残存する。色調は灰色を呈する。I-11第Ⅰ層出土。

10は平瓦の破片である。前記9と同じ様に凸面に銘入りの叩き具がみられる枠の界線と羽状ら残存するが、文字の痕跡は判然としない。凹面には布目・模骨の板を結ぶ縫痕・斜位方向に走る線状痕が認められる。色調は全体的に黄褐色を呈するが、一部分に黒褐色を呈する箇所もある。H-11第Ⅱ層出土。

11は平瓦の破片である。凸面は磨耗のため、判然としない。凹面には線状痕が残存する。色調は淡黄色を呈する。I-10第Ⅰ層出土。

12・13は平瓦と推定された破片で、両者とも凸面を欠落する。凹面には布目・線状痕が観察できる。色調は灰褐色を呈する。同一破片の可能性が強い。12はI-11第Ⅰ層、13はG-11第Ⅰ層の出土である。

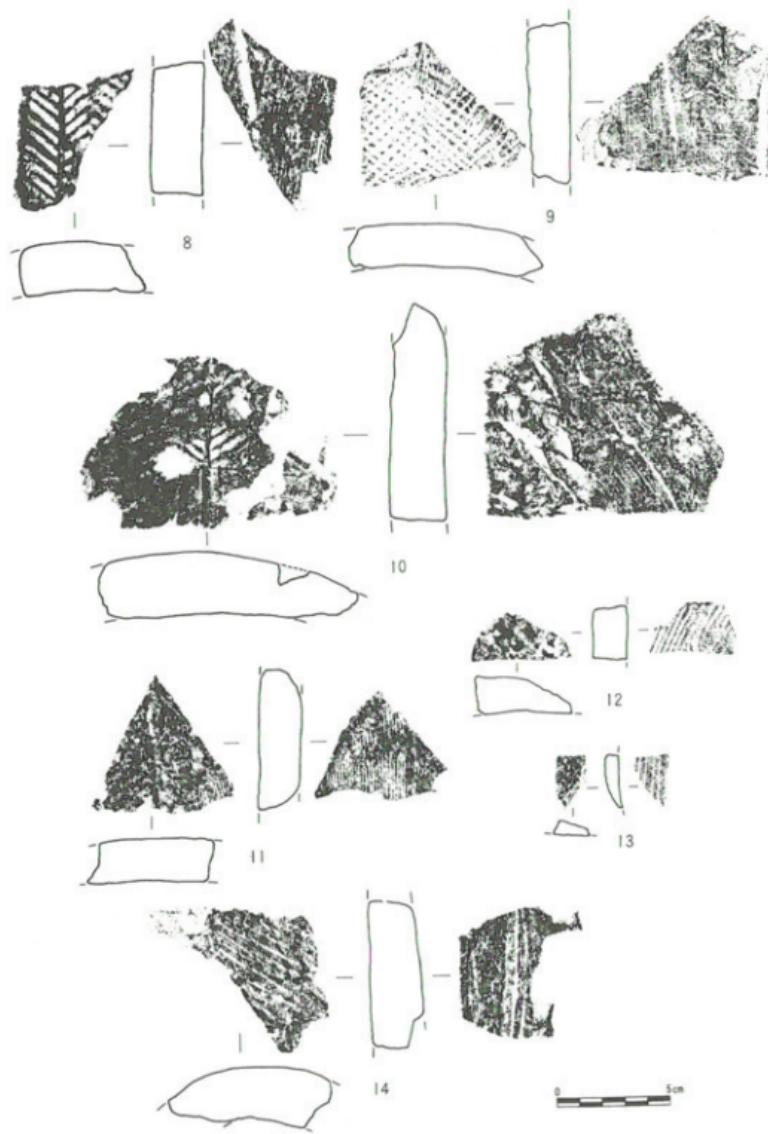
14は丸瓦の破片である。凸面に叩き目を残す。凹面は磨耗するため、布目は残存しないが模骨に突出させたいと考えられる細板（幅5mm・深さ0.5mm）が認められる。色調は灰褐色を呈する。I-10第Ⅱ層疊下出土。

以下が本遺跡から出土した高麗瓦系である。瓦は平瓦（推定も含めて）13点が出土した。丸瓦は1点のみ検出された。また、9・10は平瓦は在銘瓦によく、みられる枠の界線が認められた。特に9で観認された「レ」は「癸酉年高麗瓦匠造」の「造」の字が反転された「レ」の部位かと推定された。浦添城跡出土の「癸酉年高麗瓦匠造」の瓦と比較するの必要がある。

最後に「癸酉年高麗瓦匠造」の銘入瓦についての年代は大川清氏は英祖王（癸酉年=1273年）の治世に製作されたものとして推定されている<sup>註1</sup>。舶載陶磁器の時期からみれば、英祖王の治世より新しくなることも十分に考えられる。

註1 「琉球古瓦調査抄報」 大川 清 琉球政府文化財保護委員会『文化財要覧』1956年。

※第17図6の鉱物同定結果（大城通郎氏のメモ）によると「大型の石英粒が多く、その次に少量の雲母と長石、そして、輝石、赤土片あり」。



第18図 瓦実測図及び拓影図

(b) 石 器 (第19図1~4)・(図版13)

石器として明確なものは10点得られた。砥石8点・用途不明の2点であった。他は磨面を有する破片資料であった。破片の中からは磨石の存在が推定された。ここでは砥石と用途不明を取り上げた。その他に石材片は第3表に示した。

a 砥石 (第19図1・2)

1は上・下の端部および一側面・裏面を欠く。残存部の平面觀は不定の梯形状に近い。縦断面は楔状の三角形を呈する。表面は工具の研磨作業の際に生じた使用面で、一部に深さ1~2mm程度の線状痕を2本残す。線状痕の断面の一部は「V」字状を呈し、シャープである。側面に敲打痕が認められる。裏面は破損する(節理面を残す)。残存長9.8cm。残存部の幅3.4cm。残存重量74g。H-11第II層疊下出土。素材は砂岩。

2は上・下の端部と裏面を欠く。残存部の平面觀は長方形状に近い。表面および両側面には工具の研磨作業時に生じた砥面が認められる。また、表面は両側面に比べ、使用が著しい。残存長5.2cm。残存幅4cm。残存重量156g。H-12第II層疊下出土。素材は輝緑岩。

b 用途不明 (第19図3・4)

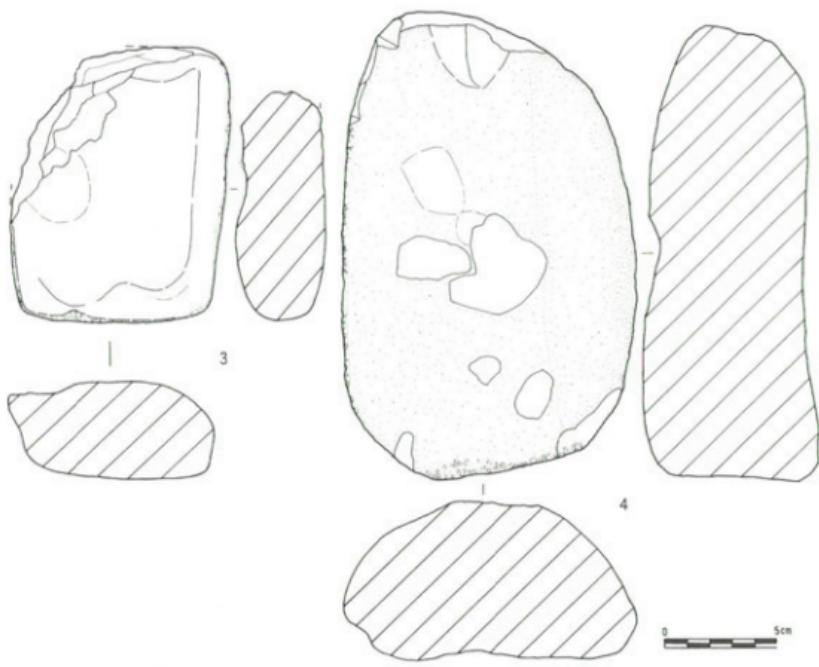
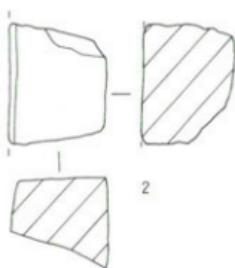
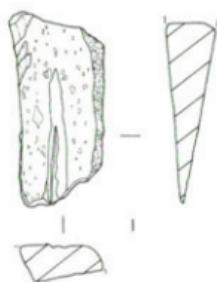
3は側面、上端部の一部を欠損する資料である。平面觀は不定の長方形状を呈する。表裏面は磨耗(面の破損を含む)のため使用の痕跡が観察できない。上・下の端部と両側面に敲打痕がみとめられる。残存長12cm。幅9cm。残存重量845g。H-11第I層出土。素材は砂岩。

4は完形品で隅丸の長方形状を呈する。全体的に各面は素材が脆いため、面の保持が悪い。表面の中央には凹みがみとめられる。裏面は自然面である。下端と一側面には敲打痕が観察できる。長さ21cm。幅13cm。重量3,000g。H-11第II層疊下出土。素材は細粒砂岩。

以上が本遺跡の石器の概文である。砥石の中で、表面に線状痕(工具の研磨作業過程において生じた使用痕)を残す例として今帰仁城跡<sup>註1</sup>・稻福遺跡<sup>註2</sup>で出土している。

註1 「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ」今帰仁村教育委員会 1983年3月。

註2 「稻福遺跡発掘調査報告」(上御願地区)沖縄教育委員会 1983年3月。



第19図 石器（砥石 1・2、用途不明 3・4）

第3表 石材片集計表

D-13		E-13		F-12		G-11		G-12		G-13	
自然端	磨	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
石材 片	$\frac{1}{50\text{g}}$	$\frac{2}{130\text{g}}$	$\frac{5}{2,200\text{g}}$			$\frac{1}{50\text{g}}$	$\frac{6}{50\text{g}}$	$\frac{7}{60\text{g}}$	$\frac{11}{800\text{g}}$	$\frac{1}{30\text{g}}$	$\frac{8}{730\text{g}}$
二 — L'								$\frac{17}{3,360\text{kg}}$		$\frac{1}{70\text{g}}$	

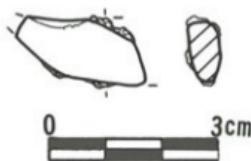
H-9		H-10		H-11		H-11·12		I-11		I-10	
自然端	磨	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II
石材 片	$\frac{2}{810\text{g}}$	$\frac{4}{2,140\text{g}}$		$\frac{5}{1,190\text{kg}}$	$\frac{21}{2,700\text{kg}}$	$\frac{1}{170\text{g}}$		$\frac{1}{100\text{g}}$	$\frac{21}{1,250\text{kg}}$	$\frac{8}{230\text{g}}$	$\frac{11}{1,690\text{kg}}$
二 — L'	$\frac{1}{500\text{g}}$			$\frac{12}{6,540\text{kg}}$	$\frac{12}{7,600\text{kg}}$	$\frac{4}{980\text{g}}$		$\frac{6}{1,680\text{kg}}$	$\frac{10}{1,000\text{kg}}$	$\frac{8}{870\text{g}}$	$\frac{17}{3,835\text{kg}}$
絆 石										$\frac{1}{0.05\text{g}}$	

F-12		E-10		H-12	
自然端	磨	I	II	I	II
石材 片	$\frac{1}{220\text{g}}$	$\frac{1}{30\text{g}}$		$\frac{1}{20\text{g}}$	$\frac{7}{2,120\text{kg}}$
二 — L'	$\frac{2}{800\text{g}}$			$\frac{1}{2,200\text{kg}}$	

(イ) 鉄製品（第20図）・（図版13）

鉄製品は刀子片（第20図）と釘片が各1点づつ出土した。釘片は図示を省略した。

刀子は切先部の破片で、鏽ぶくれが認められる。残存部の先端近くで外反りになる。縦断面は凸レンズ状を呈する。残存長2.4cm、残存身幅1.1cm、厚さ6.5mm。残存重量4g。柱穴No.58の出土。同製品に類似するものは勝連城跡<sup>註1</sup>・今帰仁城跡<sup>註2</sup>などで出土している。



第20図 鉄製品（刀子）

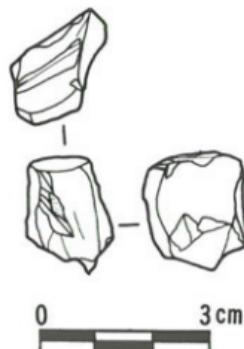
註1 「勝連城跡」－南貝塚およびこの丸北地点の発掘－ 勝連町教育委員会 1984年3月。

註2 「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ」 今帰仁村教育委員会 1983年3月。

(ハ) 滑石製品（第21図）・（図版13）

滑石製品としたものは1点得られた（第21図）。同品は平面観及び側面観が不定の方形に近い。平面・両側面・上下の面に削りや傷が観察できる。重量15g。G-12第II層出土。

同品は石鍋の残片を土器の混入物として利用するため削りを加えるという行為の結果として解した。



第21図 滑石製品

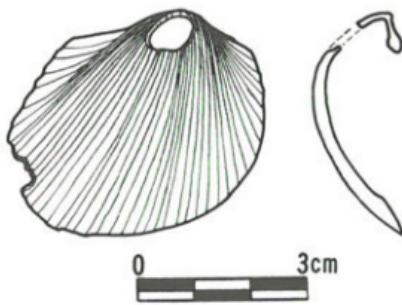
(チ) 貝製品

（第22図）・（図版13）

貝製品は一例のみ得られた（第22図）。

貝鍼としての可能性が考えられるものである。

同品はリュウキュウザルボウを素材とする。風化の作用で、脆くなっている。殻頂部附近を内側より孔を穿つ。研磨加工の痕跡は認められない。孔の



第22図 貝製品

サイズは長軸9.4mm、短軸6.1mmを測る。残存重量9g。I-10表土層の出土。

(イ) 炭化物(図版1)

D-12グリッドで確認された炉址

内の土砂から検出された。炭化米

6粒と炭化麦9粒が確認された。

他は細粒の炭片であった。



図版1 炭化物

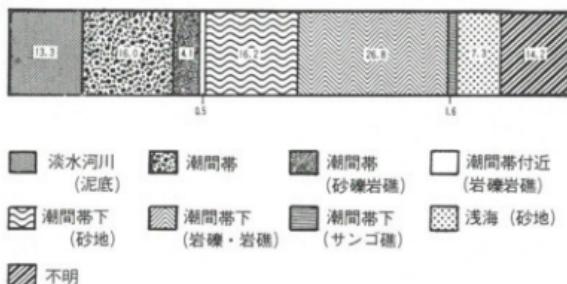
(ウ) 自然遺物

自然遺物では貝殻、獸骨等に大別される。獸骨は牛の骨片とみられるものが少量出土した。

ここでは主に貝殻類の出土状況等を概略する(第4表)・(第23図)。

貝殻

貝殻の出土量で、最も多いものは潮間帯下岩レキ底・岩礁に棲息するオニノッコガイ科のクワノミカニモリである。同種の出土量が多い。次に多いものは潮間帯砂レキ底に棲息するソデガイ科マガキガイである。他の貝種・棲息地・出土量等について詳細は表を作成されたい。



第23図 真久原遺跡 貝類組成

第4表 真久原遺跡貝類出土状況

No.	貝種	地区	表採	G-11			H-11			H-12/H1-12			I-10			合計	棲息地
				表土	I層	II層	小計	II層	II層	表土	I層	II層	小計	II層	II層		
1	ニシキオカラサバタイ				1								2	2	2	5	Cf
2	ワカシラカシギタ							13								13	Ae
3	アマオブネ												1	1	1	1	Ad
4	ウミコイボウミニナ								17				34	34	51	51	Eg
5	ノガノイガイ				3	3	6	2	1			2	3	3	14	Ca	
6	タクノミカニキリ							5		1		106	107	112	112	Cdc	
7	オハグロモドキ							4				5	5	5	9	a	
8	マガキガイ			1	9	10	25	4	5	1	26	32	71	71	Ac		
9	タカラハナビラデカラ				2	2									2	Bde	
10	キイロダカラ							1							1	Ae	
11	アツカレイシガイ											1	1	1	1	Ad	
12	フノレイシ							1							1	Cf	
13	シラクモガイ											1	1	1	1	Ae	
14	イセガメイガシマイモ						1	1	1						2	Cd	
15	リュウキュウサウルボウ	1	1		1	1	1	2	5	1	2	13	14	14	19	22	Ca
16	リュウキンガイ							1							1	Cd	
17	ヒメジャコ											1		1	1	Cde	
18	シラナミ						1								1	Cde	
19	ヒレジャコ										1				1	Cf	
20	リュウキュウザウルガイ							1							1	Ca	
21	スダレハママグリ							1	2	1	1	4	6	5	7	6	9
22	メオニアサリ		1	3	1	3	12	15	1	1	1	2	13	7	14	9	30
23	エウカゲハママグリ									4	7	6	7	10	14	14	Ca
24	アラスジケマンガイ							1	4	1	1	1	3	2	3	4	7
25	ホソスジイナシガイ							1	1	1		2	3	3	4	4	Da
26	ヌメタガ							4				4	3	4	3	8	3
27	マスオガイ								1			2	6	2	6	2	Ca
28	リュウキュウシラトリ								5	2		6	4	6	4	11	6
29	シラレナシジミ				1	2	1	3	1	2	3	1		1	5	5	Eg
30	龜貝不明						1		2		1	3			7		
31	二枚貝不明						1		1		2	6					
32	カキの一種						1							1			

1. 棲息地の記号は下記のとおりである。(複数地については主に、白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』を参考にして他から補充した。)

A. 潮間帶 a. 砂底 f. サンゴ礁

B. 潮間帶付近 b. 細砂底 g. 泥底

C. 潮間帶下 c. 砂礫底

D. 浅海 d. 岩礁

E. 深水・河川 e. 岩礁

2. 最少個体数の算出は下記のように行なった。

① 二枚貝は左殻と右殻に分け多い方を最少個体数とした。

② 卷貝は殻頂有するものを最少個体数とした。

③ 卷貝の中で、チャウセンサザエ、ヤコウガイ、カンギクについては殻と蓋に分け、多い方を最少個体数とした。

3. 貝の種の同定は、当教育委員会報告の各遺跡のサンプルを比較しながら下記の図鑑を参考にした。

① 白井祥平著『原色沖縄海中動物生態図鑑』1977年新星出版社

② 波部忠重・小菅貞男共著『標準原色図鑑全集3 『貝』』1977年保育社

③ 吉良哲明著『増補改訂版『原色日本貝類図鑑』』1964年保育社

④ 波部忠重著『続原色日本貝類図鑑』1962年保育社

## 第Ⅳ章 おわりに

本遺跡で検出された柵列についての時期的位置づけは、13世紀後半～14世紀前半と考えられる。類例として勝連城跡の三の丸より昨年検出されている<sup>註1</sup>。從来、グスクと称されている城的遺構は主に石垣（野積み・切石積み）で、グスクの縄張りとして把握しがちであるが、今後、柵列や掘り切り・土塁等にも留意すべきところかと考えている。

炉址は礫等による石組みではなく、単に掘り込んでつくった簡素なものである。当初、屋内の炉として捉えていたが、住居址等のプランを検討した結果、屋外の炉という結論に達した。

チャート片が集中的に出土した例は、浦添城跡で、グスク時代の遺物包含層中で検出されている<sup>註2</sup>。グスク期におけるチャートが、いかなる目的をもって加工され、利用されたかは今後の課題とするところであろう。

他に出土遺物からの成果等について試みると以下のようになるが、検討すべき点も十分にある。

まずは土器の面から、検討する。本遺跡出土の資料を福富遺跡<sup>註3</sup>と比較して考えると、稻福遺跡で、量的に多く出土した鉢形土器の鉢Ⅱ<sub>b</sub>・鉢Ⅱ<sub>c</sub>の出土例はなかった。また、出土量が少なかった鉢Ⅱ<sub>a</sub>も検出されていない。これは、技術的な差によるところからくるのか、地域的な差からくるかはその他の出土遺物等を含めて考える必要がある。その他に胎土にチャート片を混入する例が認められたことは、本遺跡のひとつ特徴として捉えられるものかと考えている。このチャートの細片が意味するものは、チャートの産出地（本部半島・伊江島等）との接触や交流を裏付けるものであろう。

陶磁器の面からは、鍋蓮弁碗片（柱穴出土）が出土したことは、本遺跡の時期を考慮した場合に重要である。また、ビロースクタイプ<sup>註4</sup>が検出されたことは意義あるものと解している。ビロースクタイプの時期的位置づけや森田勉氏は15世紀前後として一応、把握している<sup>註5</sup>。また、金武正紀氏は、今帰仁城跡の出土例から14世紀前半として位置づけがなされている<sup>註6</sup>ところである。本遺跡では雷文帯を有する碗は得られていないので、幅を持たせても13世紀後半～14世紀前半に収まるものかと考えている。

染付は1点のみ得られた。これは沖縄製陶器（壺屋焼が主体）に伴う時期のものかと考えられる。

須恵器は完形品や口縁資料を欠くため、器種は判然としないところではあるが、胴部や底部から推定すると壺形が多いものかとみられる。また、沈線文や波状文は認められない。

瓦は高麗瓦系の「癸酉年高麗瓦匠造」銘入瓦片のものが推定できたことは、浦添城跡との関係を強く、浮き出させるものかと考えられた。但し、伊祖城跡の関係も可能性としては十分に有りうる。また、瓦の検出されたグリッドはH・Iに集中することから同地区に住居址が立地していた可能性もある。

砥石の線状痕については稲福遺跡<sup>註7</sup>や今帰仁城跡<sup>註8</sup>などで検出されている。

以上の状況から本遺跡の時期は二時期（グスク時代と近世）からなり、グスク時代は、古く、過って13世紀後半から始まり14世紀前半までに形成されたと考えられる。浦添城跡の発掘成果が、重要な鍵かとみられる。

本遺跡の特徴は柵列と石積み（推定）が組み合わされ、グスクの要素が強く、感じられた。また、遺跡の立地状況（特に牧港川の上流にある）から浦添城跡の支城を兼ね備えた倉庫（一時的な荷揚げ場所）であった可能性が強く、考えられるところである。しかしながら、伊祖城跡の文化内容も気になるところである。

#### 註

註1 沖縄タイムス 1984年11月1日 朝刊。

註2 浦添市教育委員会の下地安広氏より御教示を頂いた。記して感謝する。

註3 「稲福遺跡発掘調査報告書」（上御願地区）沖縄県教育委員会 1983年3月。

註4 「ピロースク遺跡発掘調査写真集」石垣市教育委員会 1983年3月。

註5 「貿易陶磁研究No. 2」 日本貿易陶磁研究会 1982年8月。

註6 「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ」今帰仁村教育委員会 1983年3月。

註7 註3に同じ。

註8 註6に同じ。



第24図 真久原遺跡柵列推定図

## 第V章 真久原遺跡周辺に分布する古墓群の概要

今回の調査は県道153号線（新設）工事計画に係るもので、計画範囲内には風葬墓（風葬址）が20基、破風墓1基、石灰岩の岩陰や半洞穴に野面積みなどを利用した墓口のもの7基が確認できた。墓の位置図は第26図に示すとおりである。図版は14~19に示した。

調査期間は昭和59年12月11日~昭和60年1月31日までの約1カ月半であった。

風葬墓は完全なものはなく、大部分が墓口を失なわれた状況であった。出土遺物は無文の青磁碗・褐釉陶器・厨子甕・近世~近代の碗や皿・炭化した大豆・人骨などが出土した。

破風墓も一部、破損する（第27図・第28図）。墓内部より手榴片・陶器片（碗・厨子甕）などが出土した。また、墓内部で厨子甕の配置ヶ所を痕跡から推定したところ、壺形厨子甕17~18基・御殿形厨子甕6基が考えられた。

石灰岩の岩陰や半洞穴に野面積みなどを利用した墓口のもの（第29図・第30図）は典型的なものを見た例を図示した。第29図は第1群3号墓として仮称したもので、墓口の上半部を欠落する。雑な切り石積と野面積みを併用する。墓内には壺形厨子甕片が左隅（墓口より入って）に雜に積み重なった状態で、露出していた。骨片なども出土した。

第30図は第1群5号墓として仮称したものである。ほぼ、完全な形をなす。墓口には野面積みの石積みと半円状の切り石（軟質のサンゴ石灰岩）。そして、雑な切り石を利用したものである。墓内部からは陶器（厨子甕）・木片・釘・薬品の瓶・砲弾破片・小銃弾片・貝・十円玉（昭和54年鋳造のものなど）・人骨片などが得られた。

以上が古墓群の主な概略である。

時期的には近世~近代に限られているようだ。また、戦時中の遺物が認められた状況から住民や日本軍が避難などのため利用していたことは事実であろう。

最後に、風葬址の前庭部（崖面）より採集された青磁無文碗について記述して、結びとした。

第25図は推算口径12.9cm・器高5.9cm・高台径5.5cmを測る資料である。口縁部は僅に外反する。素地は灰色を呈し、堅緻

である。軸は青灰色を帯び、

外面には焼成時に生じた氣

泡が認められる。内面は外

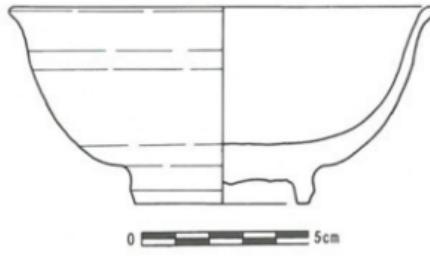
面に比べ、気泡は少ない。

軸は疊付の外端まで施すか、

一部軸垂れの状態で、疊付

けまで及ぶ。外底は輪状に

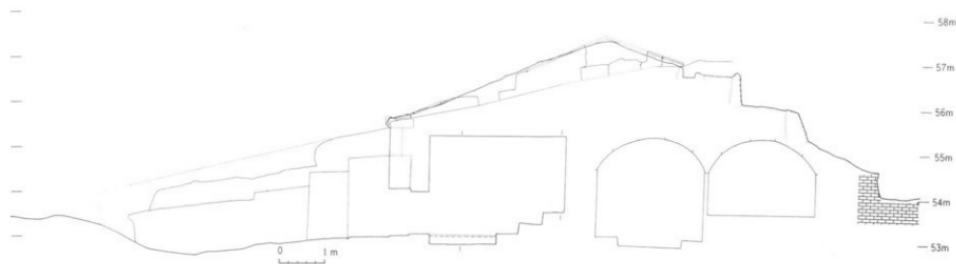
搔きとるが、雜である。



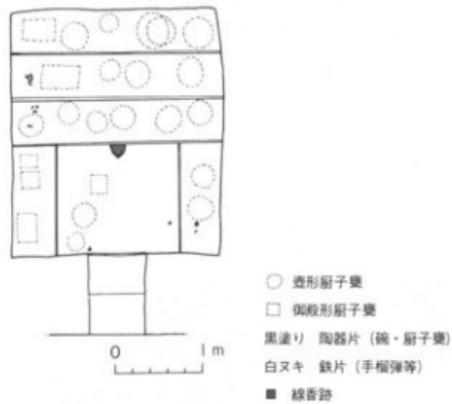
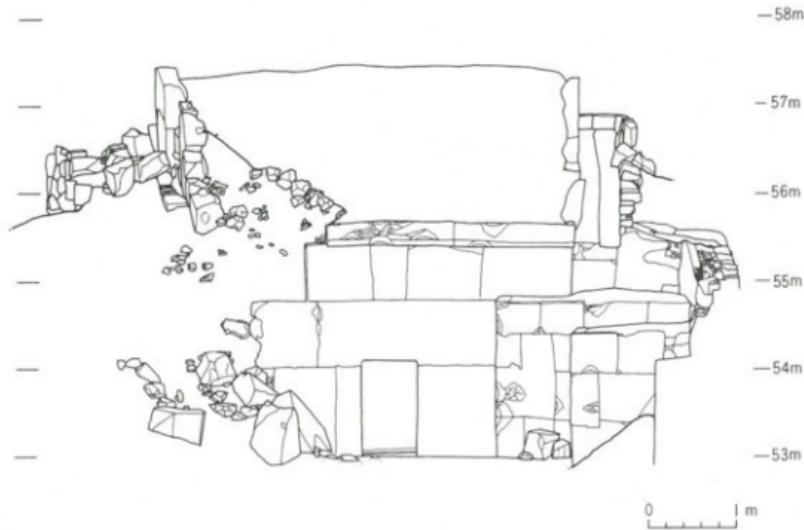
第25図 風葬址前庭部崖下採集の青磁碗



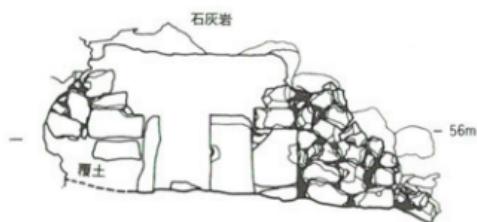
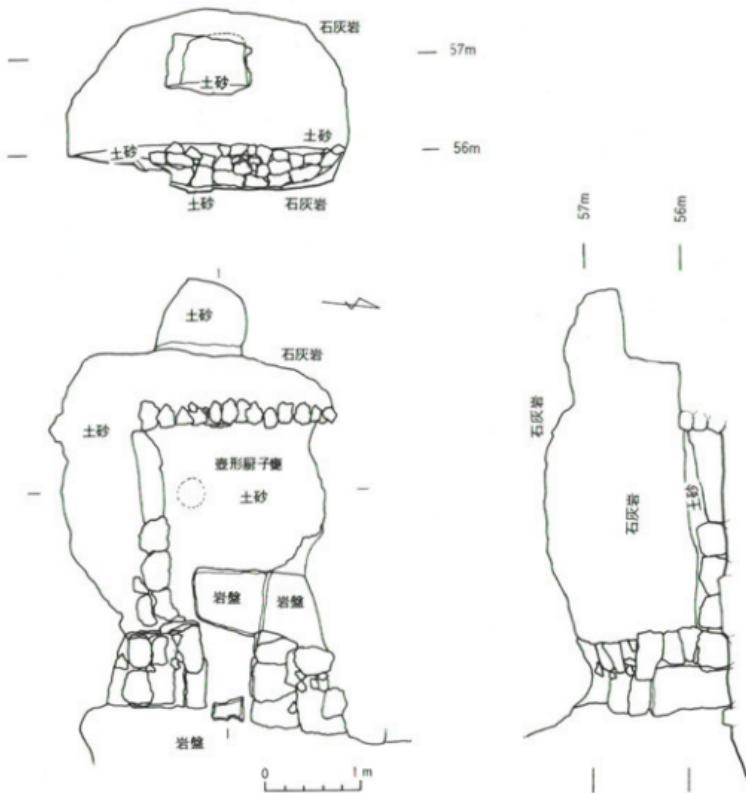
第26図 新設県道153号線に係る古墓群の分布図  
(沖縄県中部土木事務所調整の工事計画図面 S=1 / 1,000 より地形のみをトレースした。)



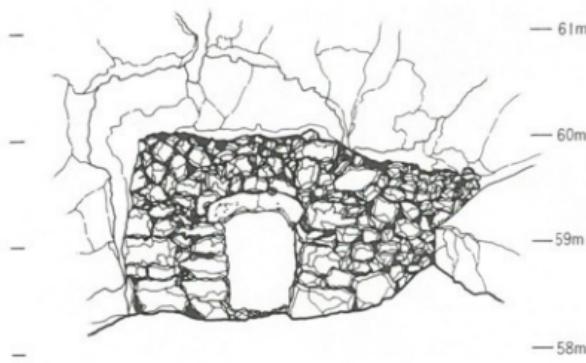
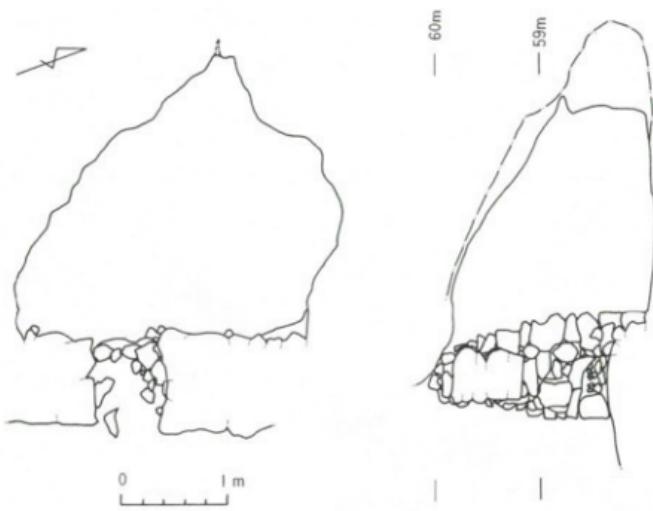
第27図 破風墓 (平面図・断面図)



第28図 破風墓（正面図・墓内平面図）



第29図 第1群 3号墓



第30図 第1群 5号墓

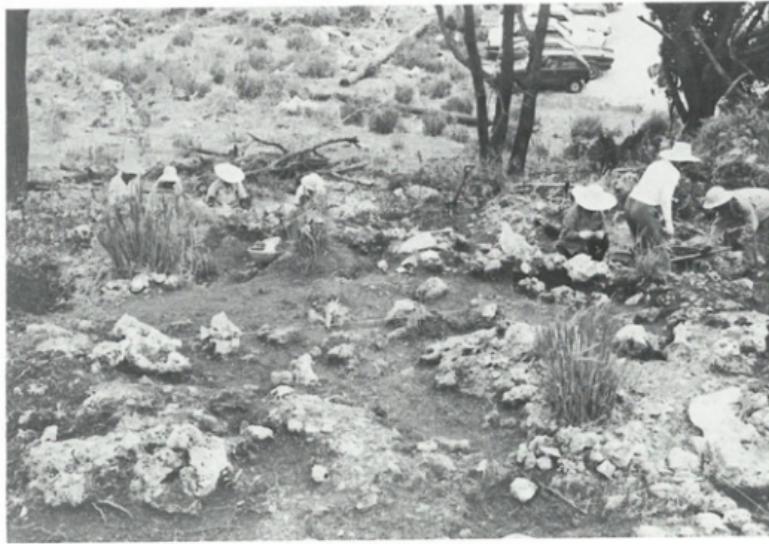


第31図 1945年当時の地形図（牧港・伊祖周辺）

図 版



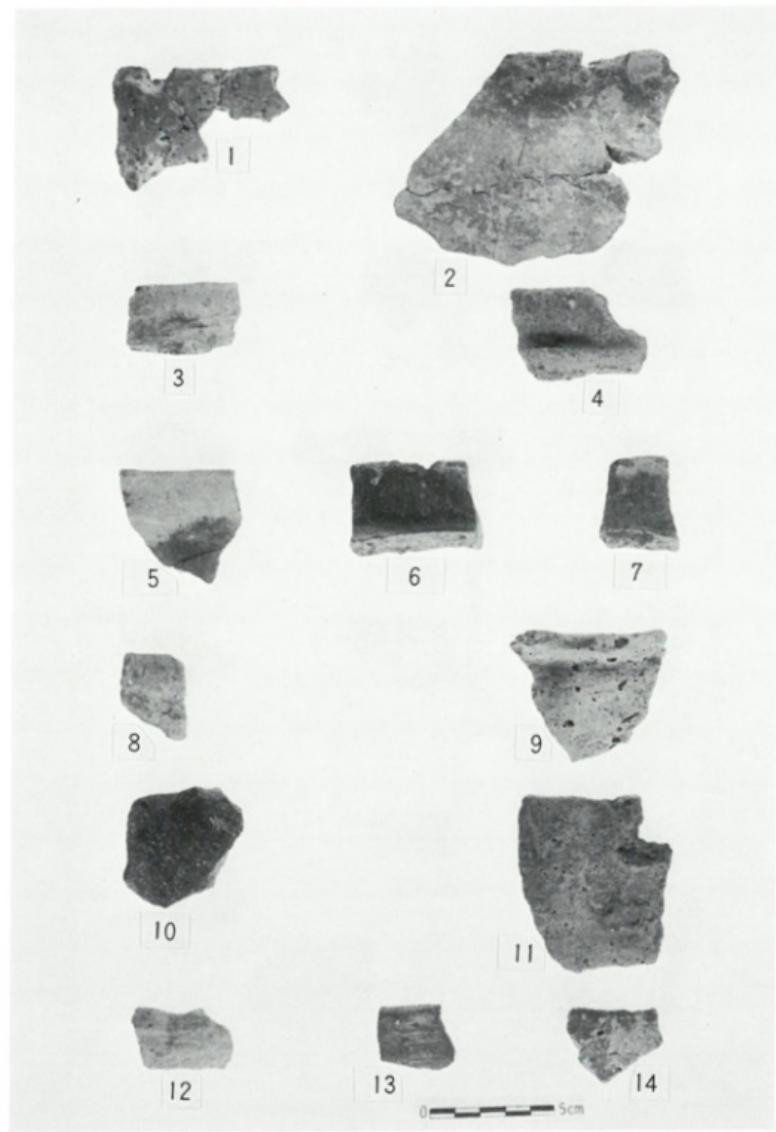
図版2. 真久原遺跡遠景（上段）・近景（下段）



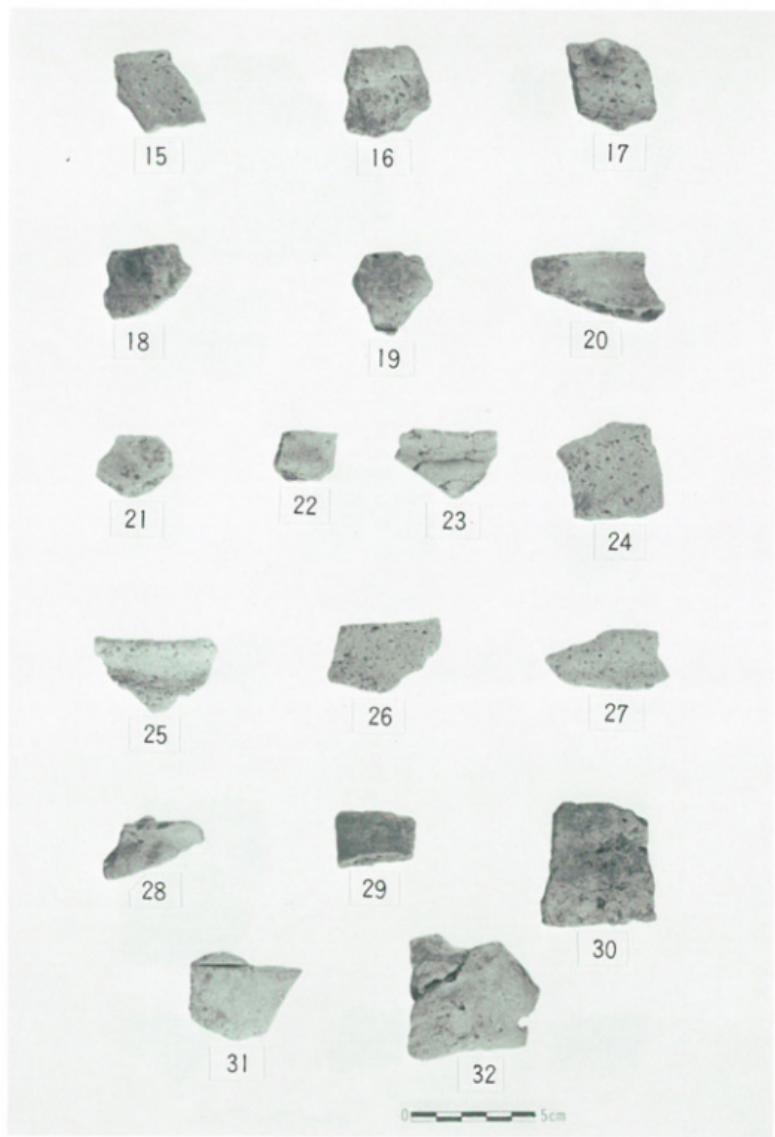
図版3. 発掘調査状況（上段）・接合チャート片（下段）



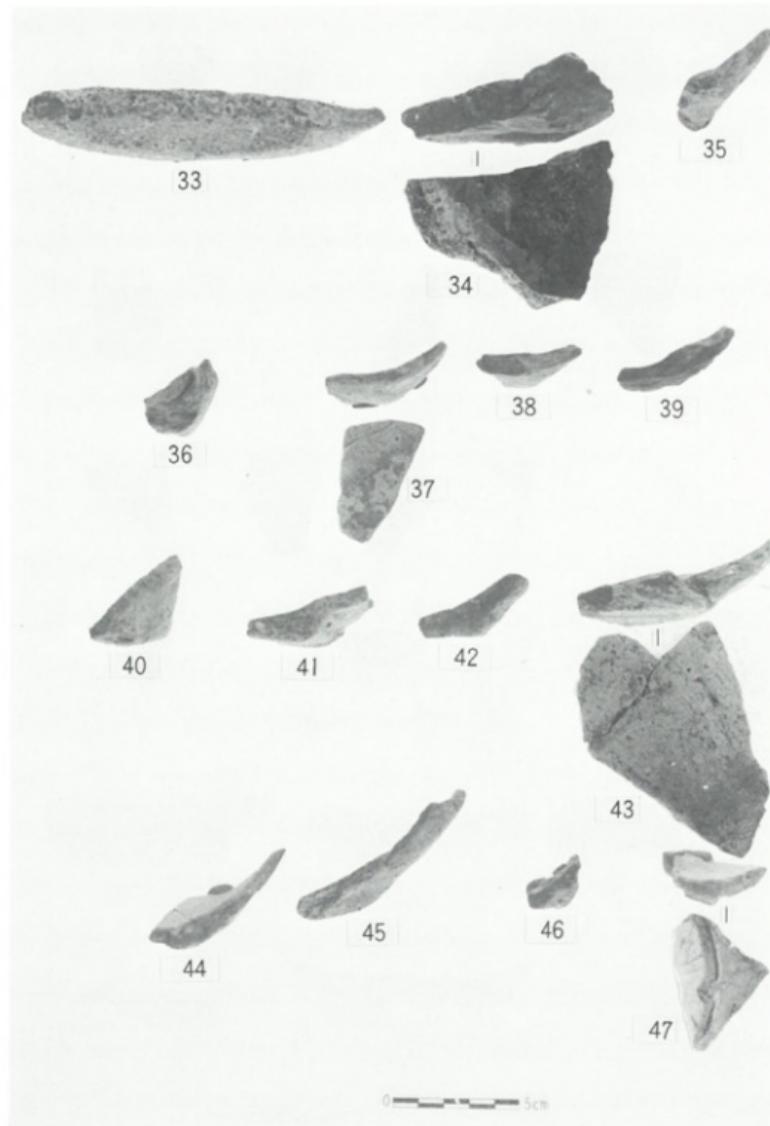
図版4. チャート片



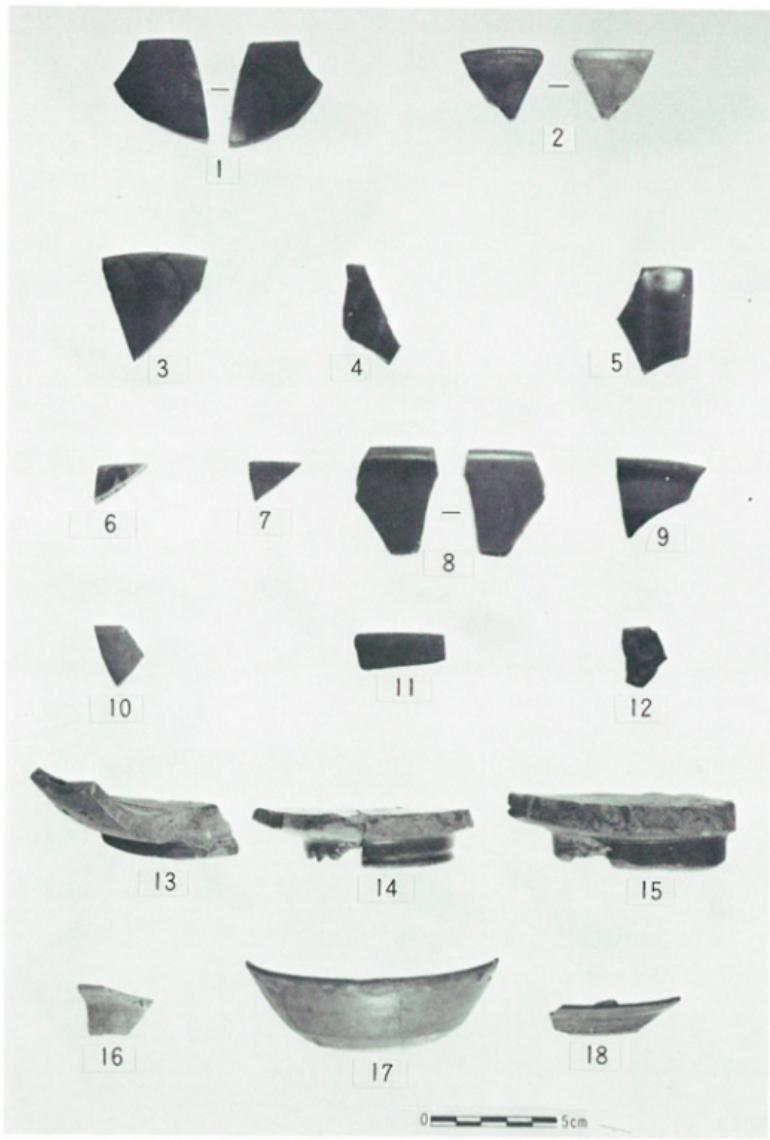
図版5. 土 器



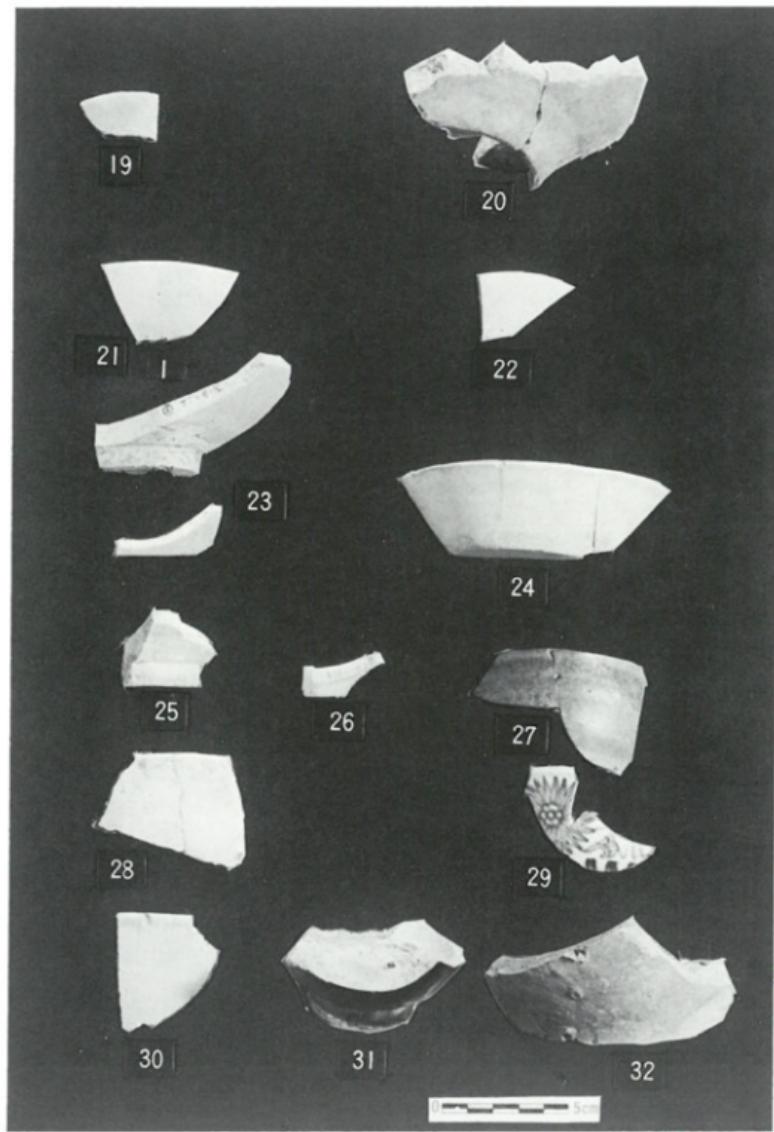
図版6. 土 器



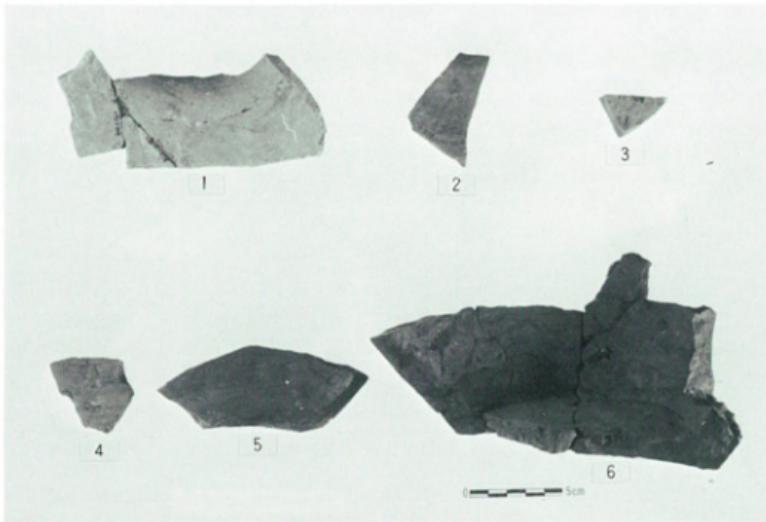
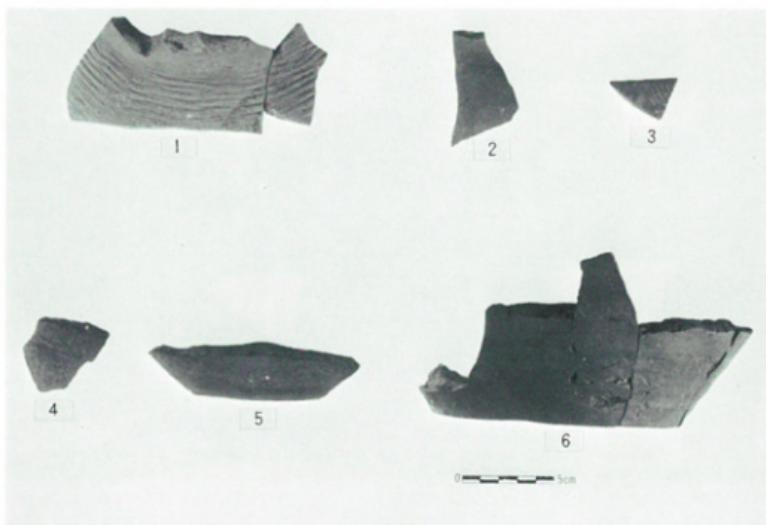
图版7. 土器底部



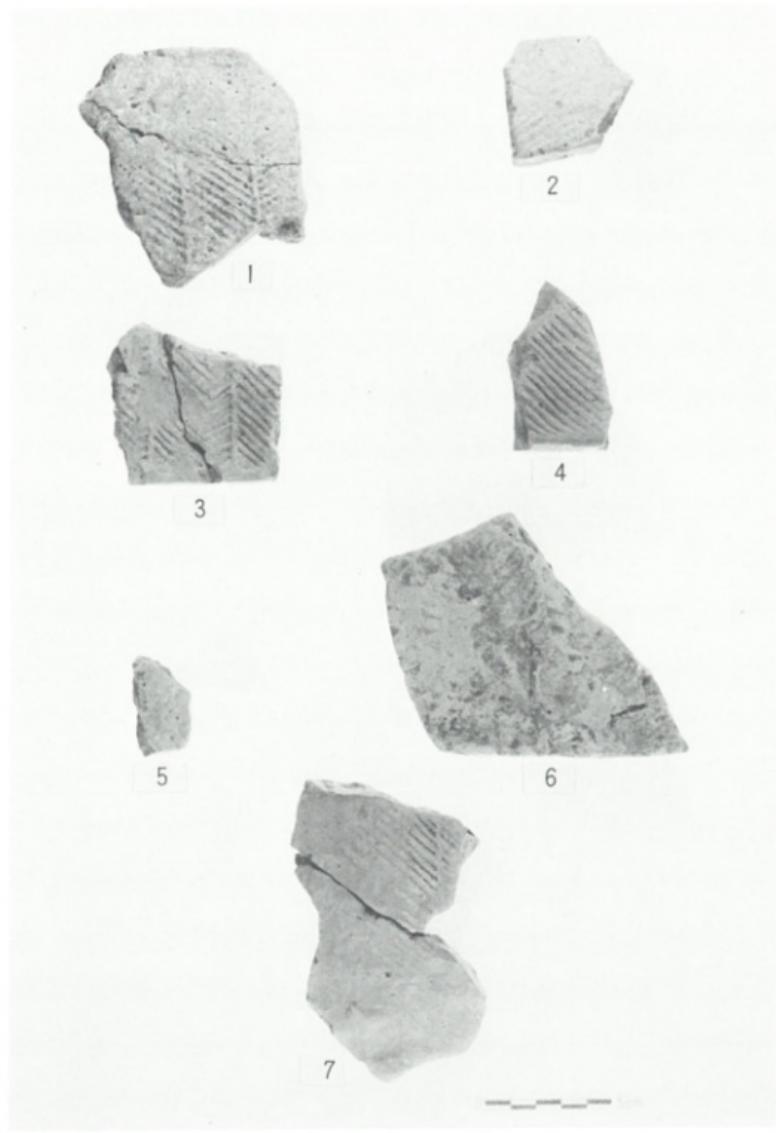
図版8. 青 磁



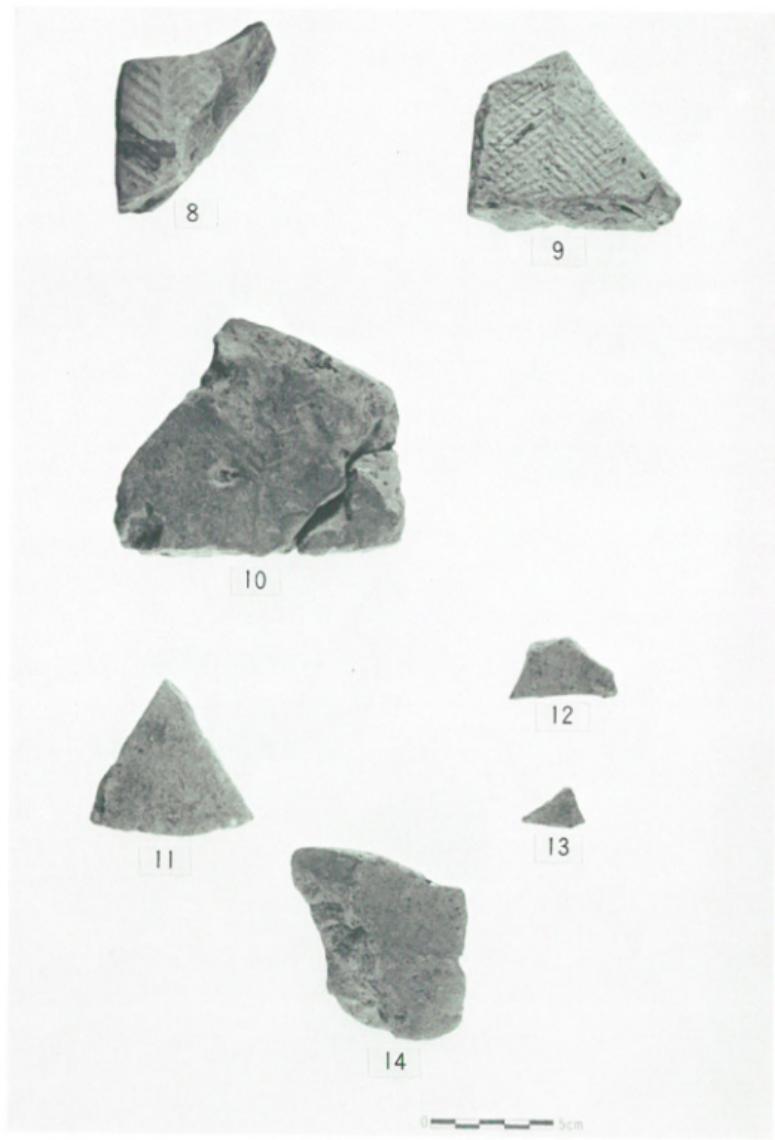
図版9. 青磁・白磁・天目茶碗・不明陶器・染付・陶器



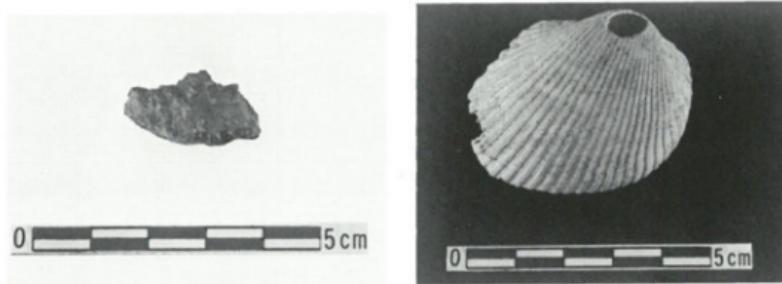
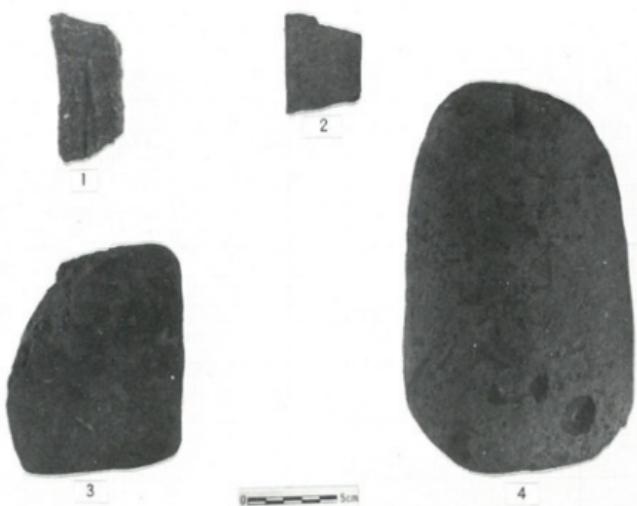
図版 10. 須恵器 (上段表) • (下段裏)



圖版11. 瓦



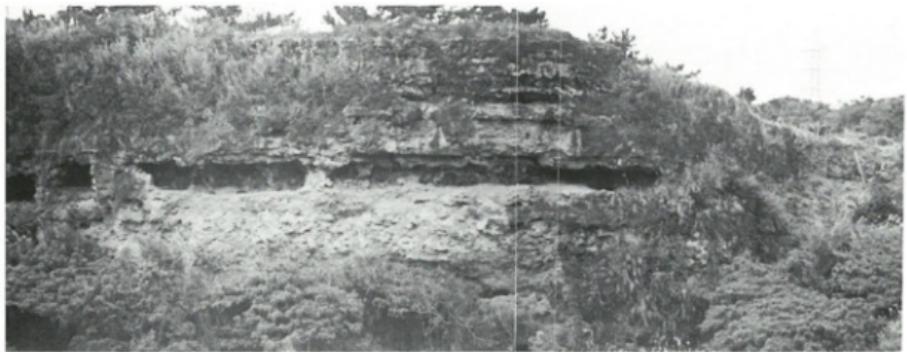
圖版12. 瓦

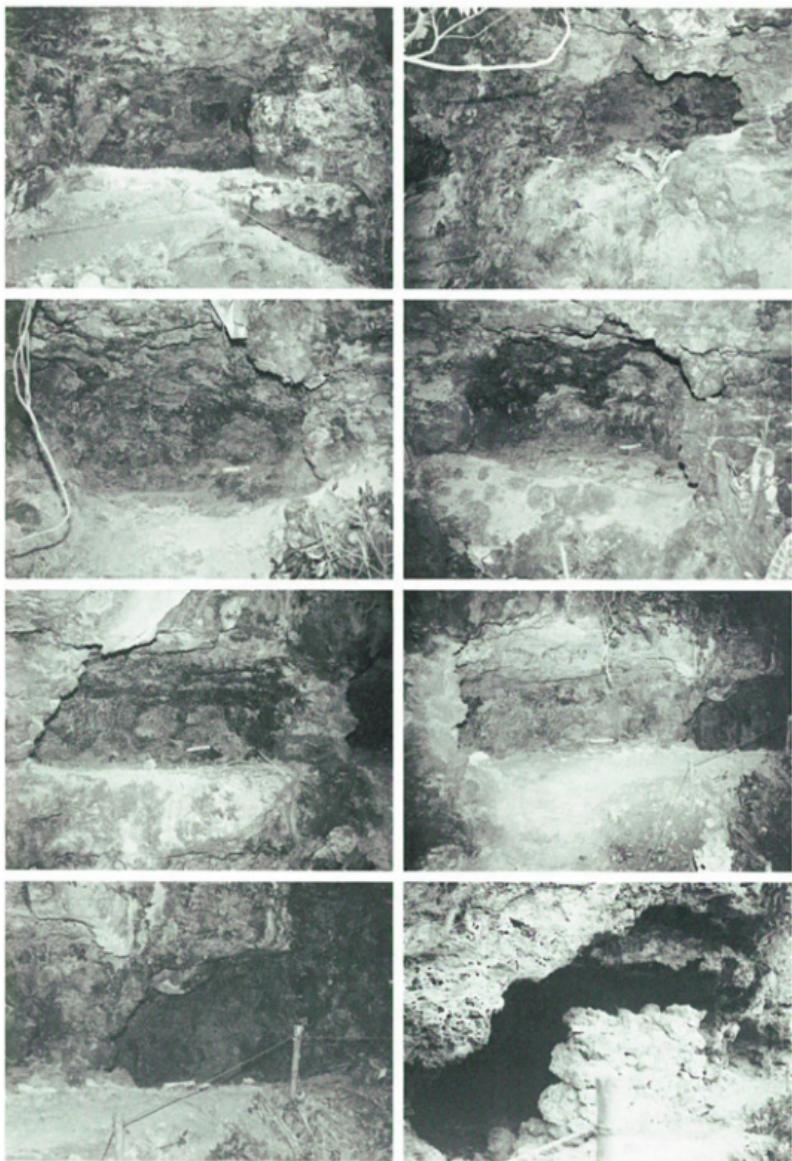


図版13. 石器（上段）・鉄製品（中段左側）・貝製品（中段右側）・滑石製品（下段）

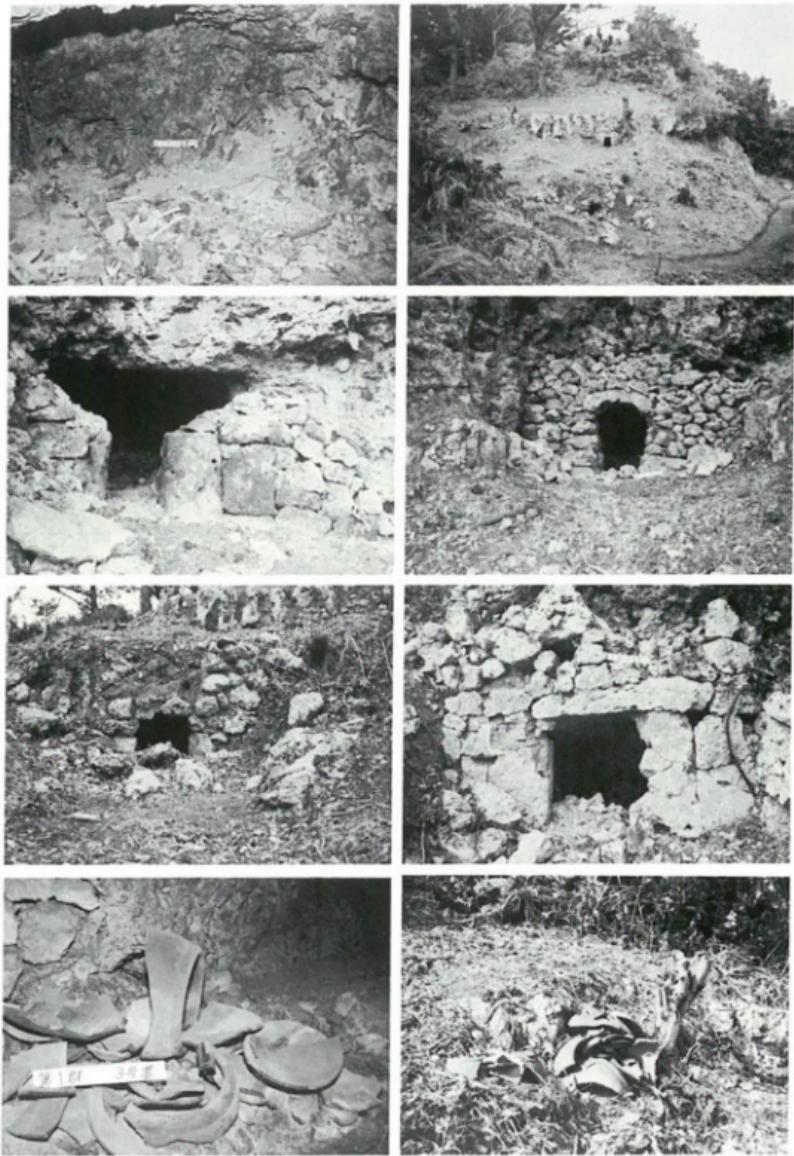


図版 14. 古墓群（上段・中段左側・下段左側）・遺跡遠景（中段右側・下段右側）

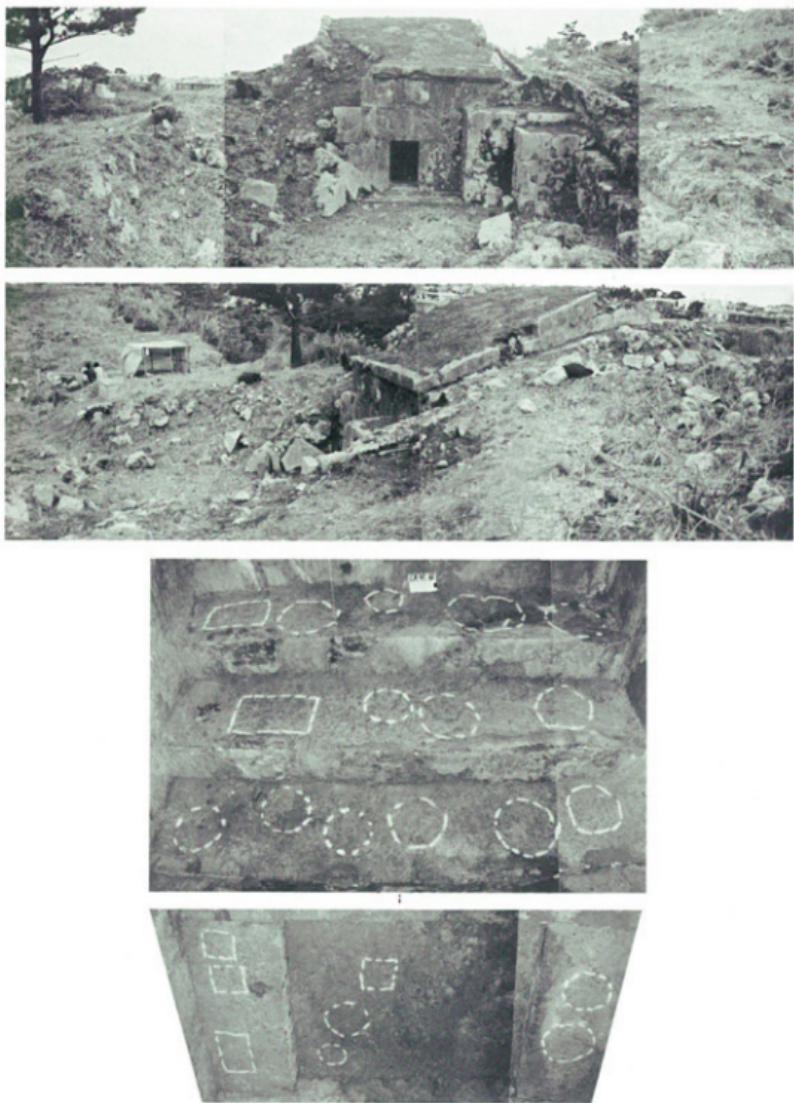




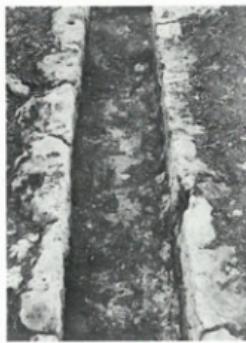
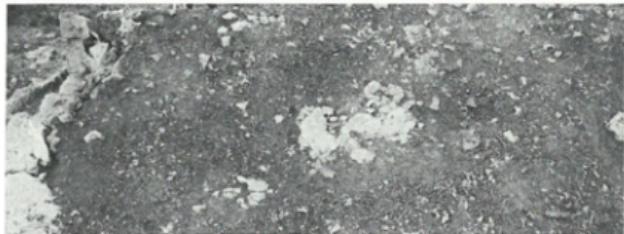
図版 15. 風葬址



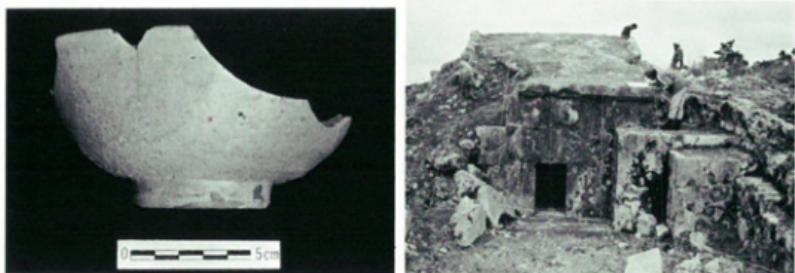
圖版 16. 風葬址・古墓・扇子甕



図版17. 破風基正面（上段）・側面（中段）・内部（下段）



図版18. 破風基側面及び石積みの状況（上段・中段上・下段）・検出された漆喰（中段下）



図版19. 風葬址前庭部崖下採集の青磁碗（左側）・調査状況（右側）。

#### 調査スタッフ

##### 調査責任者および事務局

比嘉賀幸（県文化課 課長）・城間茂松（前文化課 課長）

西平守勝（県文化課 課長補佐）・糸数兼治（県文化課 課長補佐）

山根義治（県文化課 文化振興係々長）

大村光仁（県文化課 主事）・当間 勉（県文化課 主事）

新垣政子（県文化課 主事）・仲村とも子（県文化課 主事補）

##### 調査指導・協力

沖縄コカ・コーラボトリング株式会社・浦添市教育委員会・下地安広（市文化課）・前津政

廣（市文化課）・中村 慎（北谷町教育委員会）・銘苅嘉市（伊祖区々長）・比嘉賀盛（宜野湾市教育委員会考古学専門員）・宮里 修（宜野湾市民）

##### 調査総括者および調査員

安里嗣淳（県文化課埋蔵文化財係々長）

大城 慶（県文化課専門員）・金城龟信（県文化課専門員）

大田宏好（県文化課専門員）・松川 章（県文化課専門員）

##### 調査作業員

宮城清子・銘苅幸江・銘苅三郎・銘苅盛仁・比嘉カマ・比嘉ヨシ子・銘苅ヨシ子

銘苅輔助・渡名喜トミ・銘苅嘉市・棚原弘助・仲嶺盛昌・宮城信忠・親富祖永仁

親富祖良盛・銘苅盛栄・安里博明・銘苅永信・銘苅良徳・宮里 徹・與那嶺 豊

廣山洋一・山城保勝・玉城安明・山岸伯安・金城 透・宮城奈々子・棚原 齊

比嘉 宏

##### 資料整理（実測・トレース・集計等）

比嘉春美・盛本明子・島袋聖子・上地千賀子・当真須賀子・瑞慶覧尚美・大城ますみ・渡

慶次純子・高良三千代・田畠利枝子・平良利江・城間千栄子・比嘉優子・知念千恵子

##### 石質等の同定

大城逸朗（沖縄県立教育センター）

付 編



# 沖縄・牧港貝塚・渡口洞穴遺跡採取砂鉄・鉄滓及び具志原貝塚出土赤鉄鉱の金属学的調査

大澤正己

## 1. はじめに

牧港貝塚は沖縄県浦添市に所在し、沖縄貝塚時代（貝塚時代後期）からグスク時代（15～16世紀）にかけての複合遺跡である。

この貝塚の第Ⅰ地区洞穴内および前庭部付近において砂鉄が確認され、第Ⅱ地区では鉄滓が出土したとの事で沖縄県教育委員会より調査依頼の要請を受けた。さっそく現地に赴き、サンプルを採取して鉱物組成と化学組成を調査した結果について報告する。

なお、現在のところ沖縄県内では石灰岩地帯で砂鉄はほとんど賦存しない地域と云われていて、砂鉄が人為的に搬入されておれば鉄製鍊原料の可能性も生ずるので鉄滓とのからみで大変興味深い試料となる。また、参考調査試料として渡口洞穴遺跡（中頭郡）で採取した少量砂鉄および具志原遺跡（国頭郡）出土鉄鉱石の調査結果についても概略触れておく。

（牧港貝塚第Ⅱ地点出土の鉄滓2点についてもS60. 1. 26に追加試料として提供されたのでとり急ぎ調査した。）

## 2. 調査試料

供試試料の履歴をTabl. 1に示す。各遺跡の砂鉄は磁着サンプルを供試材とした。また牧港貝塚出土鉄滓は6個出土したうち2個を調査した。伊江村具志原貝塚出土鉱石は、伊江村教育委員会より、県文化課経由で入手したものである。

Table. I 供試試料の履歴

符 号	遺跡名	所 在 地	出 土 位 置	種 别	推 定 年 代
A-841	牧港貝塚	浦添市牧港	第Ⅰ地区J12～K12 第Ⅱ層灰白砂	砂 鉄	沖縄貝塚時代後期
A-842	牧港貝塚	浦添市牧港	第Ⅰ地区 白砂中	砂 鉄	沖縄貝塚時代後期
D-851	牧港貝塚	浦添市牧港	第Ⅱ地区岩底部O-33 第Ⅲ層耕上中	鍛鍊鐵 治 淨	グスク時代
D-852	牧港貝塚	浦添市牧港	第Ⅱ地区岩底部O-33 第Ⅲ層耕上中	鍛鍊鐵 治 淨	グスク時代
B-84	渡口洞穴	中頭郡北中城村	表面採取	砂 鉄	沖縄貝塚時代 後期後半
2D-841	具志原	国頭郡伊江村川平	G-6グリット、第7層 落ち込み内	*鉄鉱石	沖縄貝塚時代後期の レベル(弥生相当期)

(2D-841: サイズ 34×34×17mm, 30g) \*鉄鉱石は8個出土、2個調査

### 3. 調査方法

#### (1) 光学顕微鏡組織

検査試料は、ベーカライト樹脂に埋込んだ後、エメリー研磨紙で#150～#1,000と順を追つて研磨し、ダイヤモンド仕立て被研面を得ている。

#### (2) 化学組成

重量法……二酸化硅素 ( $\text{SiO}_2$ )、重クロム酸使用の重量法……酸化第1鉄 ( $\text{FeO}$ )

赤外吸収法……炭素 (C)、硫黄 (S)

原子吸光法……全鉄分 (Total Fe)、酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )、酸化カルシウム ( $\text{CaO}$ )、

酸化マグネシウム ( $\text{MgO}$ )、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ )、

バナジウム (V)、銅 (Cu)

中和滴定法……五酸化磷 ( $\text{P}_2\text{O}_5$ )

### 4. 調査結果及び考察

#### 4-1、牧港貝塚採取砂鉄 (A-841、A-842)

当遺跡採取砂鉄は、A-841、A-842共にはば同一品位なので両者をまとめて述べる。

顕微鏡組織：Photo. 1 の最上段と 2 段目に示す。砂鉄は直径100～300ミクロン ( $\mu$ ) の粒子で平均的には200ミクロン前後のものが多い。この砂鉄粒子の中には格子状組織を呈するものが存在する。チタン鉄鉱で代表的なワイドマンステッテン (Widmannstätten) 構成をなしている。この種の組織を多く含有する砂鉄はチタン (Ti) 分が高目傾向となる。列島内に産する多くの砂鉄の一般的組織である。なお、砂鉄粒子の形状は角がとれて丸味を帯びたものと、そうでないものが混在する。粒子形態からみて浜砂鉄もしくは海底砂鉄の可能性が考えられる。なお粒子内は、不純物である輝石、角閃石、斜長石等の脈石鉱物は少なく純度の高い砂鉄である。

化学組成：Table. 2 に示す。砂鉄成分の特徴は、まず二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) とバナジウム (V) を含有する事である。牧港貝塚採取砂鉄は二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) が10.11～10.98%、バナジウム (V) 0.24～0.25%を含有する。これらの成分は、各地域の母岩成分の相違に起因する。次に全鉄分 (Total, Fe) が56.2～56.8%で砂鉄品位としてそん色ないレベルである。しかし、チタン含有率を  $\text{TiO}_2/\text{Total Fe}$  の比でみると0.178～0.195と大きく、塩基性砂鉄に分類できる。これに対して酸性砂鉄は含チタン含有率が低く  $\text{TiO}_2/\text{Total Fe} \leq \frac{1}{10}$  で整理できる。(例えば福岡市大原海岸砂鉄や糸島半島砂鉄は0.015と低目)

チタン (Ti) は融点が1690℃と高く、鉄 (Fe) の1535℃に比べると165℃と高く、鉄 (Fe) の1535℃に比べると165℃差をもつ。またチタンは高温で活性な金属であり、他元素と結合しやすい性質から製鉄原料の砂鉄にチタンを多く含有すれば鉄製錬は難しくなる。

砂鉄中の不純物で有害元素の硫黄 (S) 0.016~0.056、五酸化磷 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) 0.19~0.20%であり、これらも左程多くない。顕微鏡組織で観察した様に二酸化硅素 (SiO<sub>2</sub>)、酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO) らも合計で6.83~8.42%と少ない。

牧港貝塚採取砂鉄成分を他地域砂鉄と比較してみる。Table. 2 の参考値に示す鹿児島県の垂水坂元地区の新城寺田、谷山、生見地区的谷山産、また種子島産砂鉄らは、前述した全鉄分 (Total Fe)、二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>)、バナジウム (V)、硫黄 (S)、五酸化磷 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) ら以外の酸化マンガン (MnO) も近似する。こうしてみると、鹿児島や種子島の砂鉄埋蔵量の多い地域の海底砂鉄が北西季節風などの影響で海流または波浪にのり、沖縄方面にも打上げられた可能性が考えられる。

#### 4-2 牧港貝塚出土鉄滓 (D-851, D-852)

6個出土したうちの2個中調査した。

肉眼観察：D-841から述べる。表皮は灰黒色を呈し、やや粗鬆な肌に木炭痕を残す。裏面は表皮と同色であるが局部的に金属鉄が酸化して茶褐色錆を発し、滴下寸前の凹凸を有している。破面は表皮側の上部が淡褐色、裏面側の下部が濃褐色、裏面側の下部が濃褐色に二分され、気泡なく緻密質である。該品は鍛冶炉の炉底部に堆積した楕円形鍛冶滓の一部を欠くもので、大きさは140×90×60mm、重量は815gであった。

D-842は18×18×16mm、重量が15gの小破片である。緻密質でD-851と同質の鉄滓であった。

顕微鏡組織：Photo. 2 に示す。D-851、D-852ともに鉱物組成は白色粒状のヴスタイト (Wüstite:FeO) と、灰色盤状結晶のフェアライト (Fayalite:2FeO SiO<sub>2</sub>) が晶出し、これらの結晶の間隙に暗黒色ガラス質スラグが存在する。鍛冶滓特有の晶癖である。

化学組成：D-851についてTable. 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) が47.4%と高く、そのうち酸化第1鉄 (FeO) が46.6%、酸化第2鉄が15.98%である。また造滓成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO) はやや高目の36.17%、バナジウム (V) Nil、他の随伴微量元素らもおしなべて低目傾向である。

この様に鉄分が高目で、造滓成分は別として随伴微量元素が低目傾向を示す成分系は、鉄器鍛造加工時に排出される鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）に分類される。

#### 4-3 渡口洞穴遺跡採取砂鉄 (B-84)

当遺跡採取砂鉄は、当真嗣一、大城慧両氏と筆者で昭和59年1月8日にサンプリングした試料である（前庭部よりの採取品）。砂鉄分量が少なかったので検鏡と化学組成は二酸化チタン

( $TiO_2$ ) の調査にとどめた。

顕微鏡組織：Photo 1 の3段目に示す。砂鉄粒子の大きさは100~250ミクロンで牧港砂鉄粒子に準じた形態である。

化学組成：二酸化チタン ( $TiO_2$ ) は9.45%を含有する。品位は牧港貝塚出土砂鉄に近似するものと考えられる。

#### 4-4 具志原貝塚出土鉱石 (2D-841)

貝塚後期の層位から検出された試料である。当初鉄滓の可能性を期待されて搬入されたが結果は赤鉄鉱であった。

肉眼観察：外皮は赤褐色を呈し、やや緻密性に欠けた比重の軽い塊である。新破面はにぶい金属光沢を発して弱磁性であった。

顕微鏡組織：Photo 1 の最下段に示す。組織は酸化鉄の白色部分と脈石部分の黒色斑点部分に分けられる。

化学組成：Table 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) が65.6%で、このうち酸化第2鉄 ( $Fe_2O_3$ ) が93.3%を占めて赤鉄鉱成分を示す。また、赤鉄鉱は概して硫黄 (S) や燐 (P) が少ないことを特徴とするが、該品もその傾向を示して硫黄 (S) 0.032%、五酸化燐 ( $P_2O_5$ ) 0.22%であった。

ちなみに渡名喜島採取磁鉄鉱成分と比較してみると両者の違いがよく判る。全鉄分 (Total Fe) は63.55%で大差なしとして、酸化第1鉄 ( $FeO$ ) が16.11%と高目で、酸化第2鉄 ( $Fe_2O_3$ ) は69.72%と低目となり、硫黄 (S) 0.531%、五酸化燐 ( $P_2O_5$ ) 1.59%とこの二成分が著しく高目である。また二酸化チタン ( $TiO_2$ ) も赤鉄鉱に比べて磁鉄鉱は高目で0.29%とあるのも特徴的である。

### 5.まとめと今後の課題

- (1) 牧港貝塚採取砂鉄は塩基性砂鉄で、海底砂鉄の打上げにもとづく堆積品ではないかと推定される。この砂鉄の鉱床賦存地は鹿児島や種子島に比定してもおかしくない成分系である。しかし結論は後日に期したい。本来、沖縄県は石灰岩地帯で砂鉄は存在しないとみられていた<sup>①</sup>しかし、今回の牧港貝塚で確認された灰白砂や白砂中に砂鉄が混在し、かつ渡口洞穴前庭部において微量ながら牧港貝塚と同系砂鉄が採取された。
- (2) 牧港貝塚第Ⅱ地区出土鉄滓は、鉄器鍛造加工時に排出される鍛錬鍛冶滓であった。その特徴は(i)外観が鍛冶炉の炉底部に堆積した形状を呈す。(ii)鉱物組成はヴスタイト ( $Wustite:FeO$ ) + フェアライト ( $Fayalite:2FeO \cdot SiO_2$ ) の晶癖。(iii)化学組成は全鉄分 (Total Fe) が高目の47.4%、造渣成分 ( $SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO$ ) 36.17%、二酸化チタン ( $TiO_2$ )

Table 2 砂鉄・鉱石・鉄滓の化学組成

符 号	遺跡名	試料分類	出 土 位 置	推定年代	全金分 Total Fe	酸 化 第 1 鉄 Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸 化 第 2 鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化 けい素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化アル ミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カル シウム (CaO)	酸化マグ ネシウム (MgO)	酸化マン ガン (MnO)	二酸化 チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化 クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫 黄 (S)	五酸化 磷 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭 素 (C)	バナジ ウム (V)	銅 (Cu)	造 洋 成 分	造 洋 分 Total Fe / Total Fe	注
A-841	牧港貝塚	砂 鉄	第Ⅰ地区J12～K12 第Ⅱ層白砂	沖縄貝塚時代 後 期	56.8	18.14	61.0	2.32	2.61	1.68	1.81	0.50	10.11	0.047	0.056	0.20	0.24	0.24	0.003	—	—	0.178 I
A-842	〃	〃	第Ⅰ地区J12 白砂	〃	56.2	12.79	66.2	1.42	2.42	1.12	1.87	0.52	10.98	0.053	0.016	0.19	0.15	0.25	0.003	—	—	0.195 〃
D-851	〃	鍛錬場治津	第Ⅱ地区岩陰部0～ 33 第Ⅱ層耕土中	グスク時代	47.4	46.6	15.98	24.76	4.35	6.51	0.55	0.17	0.27	Ni i	0.010	0.29	0.04	Ni i	Ni i	36.17	0.763	0.0057 〃
B-84	渡 口	砂 鉄	表面採取	沖縄貝塚時代 後 期	—	—	—	—	—	—	—	9.45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃
2D-841	具 志 原	赤 鉄 鉱 石	G-6グリット、 第7層打ち込み内 層の層	沖縄貝塚時代後 期の層	65.6	0.43	93.3	2.71	0.94	0.84	0.39	0.085	0.018	Ni i	0.032	0.22	0.22	0.010	Ni i	—	—	0.0003 〃
G-90	渡 名 喜 島	磁 鉄 磁 石	現 代	63.55	16.11	69.72	5.38	2.38	0.78	0.24	0.27	0.29	0.005	0.531	1.590	0.17	0.010	0.0039	—	—	0.0046 2	
F-842	勝 連 城 跡	鍛錬場治津	KC-1078	グスク時代	42.9	47.3	8.77	35.4	3.59	2.80	0.49	0.19	0.24	Ni i	0.008	0.15	Ni i	0.003	0.004	42.28	0.986	0.0056 3
D-841	漢 那	〃	表面採取	不 詳	56.4	59.5	14.51	18.00	2.88	3.60	0.41	0.055	0.15	Ni i	0.019	0.53	0.14	0.004	0.013	24.89	0.441	0.0027 〃
B-901	宮 国 元 島	〃	仲子盛拝所西側	15～16C	55.36	52.53	20.36	12.2	3.1	4.3	1.4	0.1	0.1	0.017	0.041	0.95	0.159	0.014	0.0076	21.00	0.379	0.0018 4
C-901	〃	〃	17 地 区	15～16C	67.42	39.29	52.73	3.35	0.78	1.79	0.46	Trace	0.07	0.004	0.037	0.322	0.78	0.006	0.0072	6.38	0.095	0.0010 〃
E-901	伊 原	〃		14～15C	51.45	56.79	10.45	20.1	4.1	2.9	1.1	0.2	0.2	0.061	0.023	0.19	0.192	0.174	0.0042	28.20	0.548	0.0038 5
F-90	内閣グスク	〃		15～16C	45.73	49.56	9.11	10.1	3.4	8.6	6.9	8.7	0.2	1.257	0.078	0.16	0.088	0.033	0.0220	29.00	0.634	0.0044 〃
—	新城寺田	砂 鉄	鹿児島垂水坂元地区	現 代	51.10	27.66	—	12.52	2.10	0.53	4.40	0.43	9.14	—	—	0.27	—	0.33	—	—	—	0.179 6
—	谷 山	〃	谷山生見地区	〃	51.62	28.12	—	10.20	0.68	0.90	4.16	0.65	9.14	—	—	0.20	—	0.29	—	—	—	0.177 〃
2E-840	頌 娃 町	〃	指宿郡	〃	57.76	22.57	57.5	3.04	2.93	1.54	2.12	0.73	7.63	Ni i	0.017	0.997	0.06	0.30	Ni i	—	—	0.132 7
—	種 子 島	〃	東邦金属KK普通砂 鉄	〃	58.54	33.01	43.18	1.16	2.98	0.15	2.87	0.65	12.26	—	0.018	0.24	—	—	—	—	—	0.209 8
Z-91	野路小野山	鉄 鉱 石	滋 賀 県	7C未～8C前半	69.93	26.15	70.60	0.25	1.01	Trace	0.32	0.18	0.68	0.31	0.010	0.048	0.28	0.02	0.03	—	—	0.0097 9
8M-812	平 津	〃		平安・鎌倉	67.7	25.43	68.5	2.70	0.71	1.54	0.31	0.17	0.046	Ni i	0.019	0.12	0.07	Ni i	0.007	—	—	0.0007 〃
U-829	狐 塚	〃	岡 山 県	6C未～7C初	59.8	19.1	64.1	5.14	0.28	5.39	0.075	1.45	0.032	0.015	<0.001	2.05	0.03	Ni i	0.005	—	—	0.0005 10
2E-831	明 神 山	褐 鉄 鉱 石	熊 本 県	現 代	55.8	0.43	79.3	4.64	9.79	3.14	0.058	0.059	0.007	0.018	0.175	0.34	0.71	Ni i	0.002	—	—	0.0001 11
2E-841	上 加 世 田	砂鉄製鍊滓	鹿児島県(13-H区)	室町後期	52.0	54.9	13.33	7.37	3.50	3.18	2.04	0.94	13.26	Ni i	0.036	0.37	0.04	0.21	Ni i	16.09	0.309	0.255 12
2E-842	〃	精鍊場治津	(3-C区)	〃	57.9	56.7	19.78	9.60	3.35	3.15	1.84	0.29	4.50	Ni i	0.036	0.29	0.10	0.12	Ni i	17.94	0.310	0.0777 〃
2E-843	〃	鍛錬場治津	(3-C区)	〃	61.0	59.0	21.64	11.76	2.46	2.03	0.91	0.12	1.39	0.009	0.097	0.19	0.11	0.044	Ni i	17.16	0.281	0.0228 〃
2E-846	〃	鍛 打 潤	〃	〃	69.7	46.2	48.3	2.94	0.44	0.57	0.19	0.032	0.12	0.001	0.13	0.071	0.14	0.005	Ni i	4.14	0.059	0.0017 〃

参考  
価値

0.27%、ハナジウム (V) Nil と低目傾向にある。(i)(ii)(iii)は鍛治滓の特徴を如実に現わしている。

鉄生産は次に示す工程の流れとなる。①原料採掘選鉱→②予備処理→③製錬→④精錬鍛治 (大鍛治) →⑤鍛錬鍛治 (小鍛治) →⑥鉄製品

以上から牧港貝塚第Ⅱ地区出土の鉄滓と第Ⅰ地区採取の砂鉄とは直接つながらないと考える。

- (3) 具志原貝塚では後期の層位から赤鉄鉱が8点検出（2点調査）された。砂鉄と鉱石は製鉄原料としての可能性を秘めた重要な試料である。しかし、今回の赤鉄鉱が製鉄原料としての役割を担うものかどうかは今後の検討課題となる。
- (4) 沖縄県で最近散見された砂鉄や鉱石が製鉄（製錬）に結びつくか否かは大きな問題である。製鉄原料として砂鉄や鉱石の4倍以上も消費する還元剤の木炭がある。この木炭の供給窯や搬入ルートの解明なしには製錬は語れない。
- (5) 沖縄県で出土調査された鉄滓は、前に報告した里遺跡をはじめとする12遺跡<sup>②</sup>および今回Table 2に示した6遺跡を加えて28個である。いずれも鉱物組成と化学組成の結果からみて鍛錬鍛治滓（小鍛治滓）であった。

砂鉄を原料とする鉄滓は、例えば鹿児島県上世田遺跡出土鉄滓<sup>③</sup>（Table 2参照）でみられる様に、製錬滓は二酸化チタン ( $TiO_2$ ) が13.26%と高く、大鍛治の精錬鍛治滓になると4.50%、小鍛治滓の鍛錬鍛治滓になると1.39%と分析値は漸次減少傾向を示す。また今回は鉄滓の鉱物組成を示す顕微鏡組織を示していないが、製錬滓には必ずマグネタイト ( $Magnetite:Fe_3O_4$ ) や鉄-チタン酸化物のイルミナイト ( $Ilmenite:FeO\ TiO_2$ ) やウルボスピネル ( $Ulvöspinel:2FeO\ TiO_2$ ) が晶出するが、鍛治滓の組織はヴスタイト ( $Wüstite:FeO$ ) + フェアライト ( $Fayalite:2FeO\ SiO_2$ ) のみである。沖縄県出土鉄滓は現在迄のところ、後者のヴスタイト+フェアライトしか確認されていない。

次に鉱石製錬滓である。鉱石には二酸化チタン ( $TiO_2$ ) が含有されない（1%以下）ので砂鉄製錬滓よりは区別がつけ難い懸念はある。しかし、Table. 2の参考値に示した滋賀県の野路小野山遺跡の鉱石、同じく滋賀県の平津遺跡の鉱石<sup>④</sup>、ならびに岡山県津山市の孤塚遺跡の鉱石<sup>⑤</sup>、これらは鉱石製錬滓と共に伴して、鉱物組成を調査すると、フェアライト ( $Fayalite:2FeO\ SiO_2$ ) が主体で、化学組成は全鉄分 (Total Fe) が30~40%台、造滓成分 ( $SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$ ) が高目で30~50%台となり、鉱物組成と化学組成の突き合せから識別可能である（勿論外観形状も手引きとなる）。以上の観点にたつとき、沖縄県出土の鉄滓には鉱石製錬滓は検出されず、製錬の痕跡は認められていない。

- (6) 今後に検出される遺跡の鉄滓に期待をかけるにしても、今までの既存データからは、沖縄の鉄生産は鉄素材を大陸側もしくは列島内から搬入して、これを鍛治加工する作業が主体であったと考えざるを得ない。

ここに鉄素材の一つとして各遺跡から検出される鉄鍋破片が挙げられる。今までに勝連城跡<sup>⑤</sup>をはじめとして多くの遺跡から鉄鍋破片が検出されている<sup>⑦</sup>。この破片は鍛冶炉で加熱脱炭し、これを鍛造可能な鍛鉄として鉄器製作に転用したと推定される。この問題については又後日執筆したいと考えている。

### 注

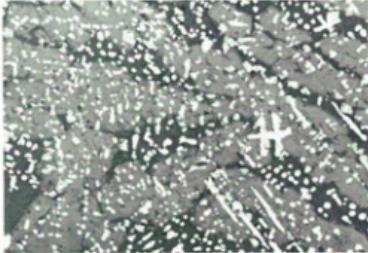
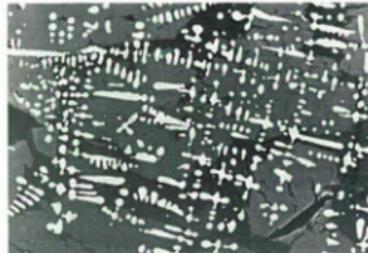
- ① 大城慧『牧港貝塚・真久原遺跡調査概報』沖縄県教育委員会 1984. 3
- ② 大澤正己「渡名喜島遺跡発見の鉄滓について『渡名喜島の遺跡』I 沖縄県渡名喜村教育委員会 1979. 3
- ③ 大澤正己「上加世田遺跡製鉄一貫体制遺物と銅銅遺物の金属学的調査」『上加世田遺跡一』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（3号）鹿児島県加世田市教育委員会 1985.3
- ④ 大澤正己「野路小野山遺跡出土の製鉄関係遺物調査」『野路小野山遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会・草津市教育委員会 1984
- ⑤ 大澤正己「狐塚出土の鉄滓と鉄塊について」『狐塚遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集）津山市教育委員会 1984
- ⑥ 大澤正己「考古遺跡に対する金属学的調査手法について」『埋蔵文化財研究会第16回研究集会発表要旨』1984. 8. 25
- ⑦ 沖縄県で鉄鍋破片を出土する遺跡は次の6個所があり、他県では5個所が確認されている。

鉄鍋破片・鍛冶滓共伴出土地名表

No	遺 跡 名	所 在 地	推定年代	報告書
1	宮国元島	宮古上野村	15~16C	1980. 3
2	橋福	大里村	13~14C	1983
3	我謝	西原町	々	1984
4	勝連城跡	勝連町	14~15C	1983
5	カンドウ原	八重山石垣市	15~17C	1984
6	フルスト原	八重山石垣市	15~16C	1983. 3
7	金石城	長崎県対馬	近世	1977
8	花尾城	福岡県北九州市	中世	1979
9	中ノ坊	。	中世	1976
10	札前	北海道松前町	平安	1985
11	上之国勝山館	。 桧山郡	中世	1985

<p>A-841</p> <p><b>牧港貝塚</b></p> <p>(第Ⅰ地区J12～K12 第Ⅱ層灰白砂採取)</p> <p>鉄 砂 ×100</p>	
<p>A-842</p> <p><b>牧港貝塚</b></p> <p>(第Ⅰ地区J12 白砂 中採取)</p> <p>鉄 砂 ×100</p>	
<p>B-84</p> <p><b>渡口遺跡</b></p> <p>(表面採取)</p> <p>砂 鉄 ×100</p>	
<p>2D-841</p> <p><b>具志原貝塚</b></p> <p>(F-6 第7層土坑)</p> <p>鉄 鉱 石 ×100</p> <p>外観写真 1 / 2.6</p>	

Photo. 1 砂鉄および鉄鉱石の顕微鏡組織

D-851 <b>牧港貝塚</b> (第II地区岩藻部0-33 第II層耕土中出土) 鍛錬鍛治津 ×100 外観写真 1 / 2.6		
D-852 <b>牧港貝塚</b> (第II地区岩藻部0-33 第II層耕土中出土) 鍛錬鍛治津 ×100 外観写真 1 / 2.6		
D-841 <b>漢那遺跡</b> (国頭郡宜野座村 表面採取：拝所) 鍛錬鍛治津 ×100 外観写真		
F-842 <b>勝連城跡</b> (本丸出土KC-1078) 鍛錬鍛治津 ×100 外観写真 1 / 2.6		

鉄滓はいずれも鍛冶炉の炉底に堆積した椀形鍛治滓である。鉱物組織は白色粒状に晶出したWüstit ( $FeO$ )と淡灰色盤状結晶のFayalite ( $2FeO \cdot SiO_2$ )で鍛治滓特有の晶癖である。

Photo. 2 鉄滓の顕微鏡組織

沖縄県文化財調査報告書 第65集

牧港貝塚・真久原遺跡  
—県道153号バイパス工事に伴う発掘調査報告書—

発行 沖縄県教育委員会  
〒900 那覇市旭町1番地  
(沖配ビル内)  
℡ 0988(66)2731~2733(文化課)

発行年月日 1985年3月31日

印 刷 沖縄県厚生事業協会  
沖縄コロニー印刷所  
浦添市宮城728番地  
℡ 0988(77)3344㈹

